彼女のカ・タ・チ☆

キンギョ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女のカ・タ・チ☆

【Ｎコード】
Ｎ７０４８Ｐ

【作者名】
キンギョ

【あらすじ】
主人公の彼女が二人に分離してしまったお話です。

学園っぽい。
コメディーといえば、コメディーか？
空飛ぶ犬耳少年が出てきたら、ファンタジーですよね。
とりあえず……後半は賑やかです。

オリジナル小説、「～世界の枠組みを越えて～　『漫画小説？』」

と連鎖しています。

自慢の彼女

俺の名前は斎藤信也（さいとうしんや）。学力は人並み以下で、運動能力も大して高くない。一般的な高校男子だ。しかし、こんな俺だが、一つ自慢できることがある。いくら勉強ができても、いくらスポーツ万能でも。恋人がいなけりゃ、ただの負け組だ。そう、俺には彼女がいる！

彼女の名前は安曇恵梨香（あずみえりか）。頭も良く、運動神経も良い。俺の自慢の彼女だ。少し気持ちの変動が激しく、優柔不断な部分が痛々しいが。それでも、可愛く愛らしい性格をしている。何と言っても、自慢の彼女だ。

俺のマイナスを全てフォローしてくれる恵梨香。勉強をおろそかにして、遊び呆ける俺。そんな俺達が繰り返しの日々を楽しく過ごしていたら。ある日、事態が訪れる。まさか……あんな事が起きるなんて。

ぬいぐるみ

普段となんら変わらぬ平日。もちろん、学校があるわけだが。もちろん、遅刻寸前なわけで。時間がないにも関わらず、鞄の中身を整理していたら。こんな事になってしまった。

やばい、やばいと言いながら。猛ダッシュで学校へと向かう。走れば間に合うかもしれない。一途の望みを抱きながら、全速力で走り抜ける。

少しずつ見えてくる校舎。正門が見えてきて、チャイムの音が聞こえてくる。結構、ヤバいかもしれない。というのも、俺達の学校は学園の中に存在する。

青鶯学園（せいおうがくえん）。高中に大学も揃っている、かなり規模のでかい学園だ。その中の高校だから、教室へ向かうまでに多少なりとも時間が掛る。

俺が全速力で走っていたら、俺の真横を新幹線が通り抜ける。何事かと思えば、俺の前を一人の女子が走っている。あれは確か……北原雫（きたはらしずく）。恵梨香の友達で、クラスは別だ。

それにしても、速い。北原の奴……俺を無視して、超真顔で飛んで行ってしまう。俺もあれくらい速く走れたなら、遅刻しなくて済みそうなのだが……。

教室に辿り着くと、ヤバいオーラが……。先生は既に教室の中。もう出席は取った後か？　教室の後ろのドアから、おずおずと侵入

する俺。もちろん、先生が口を開く。

「おい、斎藤」

「はいぃ！　すみませんでした！」

「えらく物わかりがいいな。しかし、お前はついてるぞ。丁度、今から出席を取るところだ。ギリギリセーフという奴だな」

「え？　そうなんッスか？」

「あぁ、後一秒でも遅れていたらアウトだったぞ。明日からはもう少し早めに来るんだな。ほら、席に付け。出席を取るぞ」

「はい！　ありがとうございます！」

先生に頭を下げて、そそくさと自分の席に着く。ラッキー、今日はついている。

出席を取り、授業が始まるまで少しの自由時間。俺が安堵のため息をついていたら、前の席に座る女子が振り返る。俺を見ながら、不満そうに囁きだす。

「ちょっと信也。恥ずかしくないの？　毎度、毎度、遅刻寸前で。今日なんて、ほぼアウトじゃない」

「アウトっぽいけど、セーフだし。先生が言ってたじゃん」

「だけど、もう少しくらい早めに来たら？　家だって、近いんだし」

「別にいいじゃん。間に合ってるんだから」

二人で言い争う俺達。ちなみに、この女子が安曇恵梨香（あずみえりか）。俺の彼女だ。もちろん、俺のように遅刻をするわけがない。完璧、理想の彼女。俺達が小声で口喧嘩をしていたら、首を突っ込んでくるのは男子の一人。そいつが俺達に話しかけてくる。

「恵梨香ちゃん。もしも、斎藤が遅刻したら。斎藤を振って、俺に

チェンジしない？　そうすりゃ、斎藤も少しはヤル気を出すかもしれないし」

「おいおい、松元。勘弁してくれよ。大体、お前は彼女いるだろ？」

「フッ、そんなこともあったなぁ～」

「おい、まさか……」

「振られたんじゃないぞ。振ったんだ。初めは良かったんだけど、どんどん調子乗りだしてさぁ～。あれ買え、これ買えって。お前はお姫様かって、怒鳴りたくなってよ。まぁ、もう振ったから関係ないけどな」

それだけ言って、カッコつけながら彼女なしが去っていく。まぁ、松元の事だ。すぐに新しい彼女を作って、自慢してくるだろう。多分、一週間も必要ない。あいつは顔もいいし、バスケが非常に得意だから。結構なファンが付いている。

立ち去る松元から目を離し、恵梨香が俺に顔を向ける。もじもじと切り出しにくそうに、指遊びをする恵梨香。ちらりと上目遣いで、俺の様子を確認しながら口を開く。

「それはそうと、信也。今日は暇？」

「あぁ、暇だけど」

「買い物……付き合ってほしいな……」

「別にいいけど……」

「本当？　ありがとう！」

俺が言うと、恵梨香が笑顔になる。こういう恵梨香を見ていると、あまりの可愛さに惚れぼれとしてしまう。やっぱり恵梨香が一番だよな。

授業が終わり、帰宅時間。恵梨香と一緒に帰る俺。恵梨香が寄ってほしいというので、百貨店に立ち寄ることに。百貨店の中を詮索し、ぬいぐるみ売り場にて恵梨香が立ち止まる。

「あ～ん、これ可愛いなぁ～。でも、こっちもいいなぁ～」

恵梨香が迷っているのは、犬のぬいぐるみ。黒い犬か白い犬。要するに、ただの色違いだ。俺ならどちらでも構わないと思うが、恵梨香にとっては大切な事らしい。ぬいぐるみ一つ買うだけで、真剣な顔つきになっている。

恵梨香が迷いだして、数分が経過。苛立ちを感じ始める俺。まだ決まらないらしい。恵梨香は迷いだしたら優柔不断に陥る癖がある。最後は自分で判断できずに、俺に尋ねてくるのは目に見えている。そんな恵梨香が可愛く思える時もあるのだが、今はそういう気分じゃない。そう思っていたら、案の定……。恵梨香が俺に近づいてきて、口を開く。

「ねぇ、信也はどっちがいいと思う?」
「どっちでもいいじゃん。っていうか、たかがぬいぐるみだろ?」
「た、たかがぬいぐるみって……。私……真剣に考えてるんだよ?」

俺の言葉に反応して、恵梨香の声が小さくなる。そんな恵梨香に話しかける俺。

「じゃあ、両方買えばいいだろ?」
「お金ないし……。信也……奢ってくれる?」
「俺の方が金ねーし」

ぼそぼそと呟く恵梨香にキッパリといいのける。金がないというのは嘘になるが、来週に新発売のゲームが出る。あれを買うには結構な大金がいるから、余裕のある金の残高はゼロ。恵梨香にプレゼントできるような金はない。仕方がないので、俺が恵梨香に提案を持ち出す。

「じゃあ、目を瞑って取った方にするとか」
「そんな決め方……嫌だよ……」
「じゃあ、両方諦めるとか。金が溜まってから買うとか」
「そんなの嫌！　今、欲しいの！」

急に恵梨香が怒鳴りだす。その声を聞いて、俺の心臓は破裂寸前だ。俺が胸を押さえながら、恵梨香に不満をぶつける。

「お前さぁ……前々から言いたかったんだけど」

完璧である彼女の唯一の欠点、それは強気な時と弱気な時のギャップが激しい点。大抵は安定しているが。不安定になると、対応に困る。恵梨香に指を差しながら、日頃の気持ちを口にする。悪い事じゃない、理解し合う為に必要な事だ。

「お前って、強気なのか弱気なのか、よくわからないんだよ。小声で小さくなりながら喋っていたかと思えば、いきなり怒鳴りだしたり……。ハッキリしろよな。対応に困るつーの」
「そんな言い方ないじゃない！　私はこういう性格なんだから！」
「こっちは迷惑なんだよ。お前の気楽に振り回されるのは」
「そんなつもり……ないよ……」
「もういいじゃん。ぬいぐるみは今度にしようぜ。俺は帰って見たいテレビあるし」
「……」

黙り込む恵梨香を放って、売り場から離れる。しばらくすればついてくるだろう。そう思っていたけど、なかなかやってこない。数分が経過して、俺が引き返す事に。

先程の場所に戻ると、恵梨香を発見。ぬいぐるみ売り場の前で座り込んでいる。諦めが悪い奴だな。俺が恵梨香に近づいて、声を掛ける。

「おい、帰ろうぜ。どうしても買いたいのなら、早く選べよ」
「……」
「おい、恵梨香！」
「……」

恵梨香の反応がなく、不安になる俺。恵梨香の前に座りこんで、恵梨香の顔を覗き込む。俺の目に映るのは、恵梨香の青白い顔。どうしたのか？　俺が恵梨香に問いかける。

「おい、どうした？　気分が悪いのか？」

俺の質問に、恵梨香が小さく頷いた。こりゃあ……もう帰る方がいいな。恵梨香をなんとか立ち上がらせて。手を引っ張り、百貨店を後にする。

百貨店の外に出て、道路を歩いていると。恵梨香の気分もマシになったのか、顔色が少し良くなる。ちょっと大人しげな表情を浮かべながら、恵梨香が言う。

「もう……大丈夫だから。今日は……ごめんね」
「いや、別にいいけど」
「じゃあ、私はこっちだから……」

恵梨香がそう言って、立ち去っていく。元気のない恵梨香の後ろ姿を眺めながら、罪悪感を覚える俺。少し言い過ぎたかもしれないな。明日会ったら、謝るか……。

後ろめたい気分になりながらも、自宅に帰る。いつも通りに時を過ごし、寝床につく。頭の中をよぎるのは恵梨香の青白い顔。明日は……学校に来るだろうか？　メールを打とうか止めようか、考えていたら眠気が増してきて……。

二人に増えて？

早朝、珍しく早起きだ。今は六時……。早過ぎるくらいだな。これもそれも昨日の出来事のおかげだろう。結局は、恵梨香の病状が気になって寝付けなかった。あいつ……昨日は青い顔をしていたな……。今日は大丈夫なのだろうか？

時間があるので、メールを送る。朝食を食べて、学校へ行く準備をしていたら。返ってくるのは、恵梨香からの返事。メールの内容は以下の通り。

『もう大丈夫。心配かけてごめんね。それにしても、珍しく早起きだね。せっかくだから、一緒に登校しない？』

内容を読んで、一安心。了解の返信をして、時間を決める。向こうからも、了解の返事が来て。一緒に登校する事に。恵梨香に会ったら、すぐに謝らないとな……。

今日は遅刻をする事もなく、安心しながら登校だ。急ぎ足で待ち合わせ場所に向かう。小さな本屋の前で、呆ける恵梨香を発見。近づいて行って、声を掛ける。

「おはよう、恵梨香」
「おはよう……信也。今日は……早起きだね……」
「体調は大丈夫か？」
「うん……。今日は……元気……」

恵梨香が小さくなりながら答える。朝から弱気バージョンか。珍しいな……本当に体調不良は良くなったのか？　むしろ、悪そうに見えるのは弱気だからだろうか？　俺が恵梨香の様子を窺いながら、口を開く。

「本当に大丈夫か？　何だか、えらく大人しいぞ」

「え……？　そ、そうかな……？　そんなこと……ないと思うよ」

俺から目を逸らしながら、恥ずかしそうに返事をする恵梨香。何と言うか……。こういう姿を見ていると、やっぱり可愛いと再確認してしまうな。

時間があるから、二人で立ち話。喋っていると、どんどん話が盛り上がってくる。テレビの話と漫画の話と、次いで世間話。そんなことをしていたら、昨日の出来事を謝るタイミングを逃してしまった。まぁ、恵梨香も元気そうだからよしとしよう。

俺達が楽しくお喋りをしていたら、不意に肩を叩かれる。そして、聞こえてくるのはそいつの声……。

「ごめん、信也。遅れちゃった。ちょっと道を尋ねられてさぁ～」

はぁ？　一瞬、頭が停止する。ゆっくり振りかえる先には恵梨香の姿。蒼白する俺を見て、恵梨香が口を開く。

「どうしたの、青い顔をして？　それより、そっちの子は誰……？」

恵梨香が顔を覗かせて、その先にいるのは恵梨香の姿……。目を丸くするのは二人の恵梨香と俺自身。何が起きたのか理解できずに、棒立ちだ。誰ひとり何も喋らずに、時間が刻々と過ぎていく。ヤバ

い……今日は遅刻するかもしれない。

状況を理解できない俺が、二人の恵梨香に問いかける。

「えーっと……恵梨香って、双子だったのか？」

「そんなわけないじゃない！」

「信也だって……知っているよね……？」

二人の恵梨香が返事をする。俺が頷き、口を開く。

「よし……。じゃあ、どっちが俺の知ってる恵梨香だ？」

「私よ」

「私……だよ」

「……」

二人共に自分を恵梨香だと言い張るか……。しかし、現実的に考えるなら。二人のうち、どちらかが偽者であるはずだよな？　腕を組む俺を見ながら、一人の恵梨香が話しだす。

「じゃあ、証拠があればいいのね。私と信也だけが知っている事を洗いざらい言ってあげるから。信也、耳を貸して」

「いだだだ！　耳を引っ張んなよー！」

恵梨香が手荒く俺の耳を引っ張って、耳元で話し出す。俺と恵梨香しか知らない過去の出来事を洗いざらいだ。うん、確かに……恵梨香の言っている事は全てが正しい。じゃあ、こっちの恵梨香が本物か？　そう思い始めたくらいに、もう一人の恵梨香が話しだす。

「私だって……色々知っているもの……」
「そうか。じゃあ、話してもらうか」

俺が頷くと、大人しそうな恵梨香が俺の耳元で囁きだす。これもまた真実ばかり。先程の恵梨香が言った事と同じ事を語ってくれる。まさか、先程の恵梨香の声が聞こえていたわけではないだろう。とすると、何がどうなっているのか？

俺が二人の恵梨香に口を開く。

「二人共に……本物だとしか思えない」
「どういう事……かな？」
「もしかして、ドッペルゲンガー！？　私、死んじゃうの！？」

蒼白しながら、騒ぎ出すのは一人の恵梨香。もう一人は不安げな顔色を浮かべながら、俺に目を向ける。そんな目で見られても、俺にどうしろというのか？　考えた末に、出した結論。俺が二人に口を開く。

「よし、とりあえずだ……。ややこしいから、お前を恵梨（えり）。お前を梨香（りか）と呼ぶ事にしたいんだが……それでいいか？」
「仕方ないよね……」
「別にいいけど。私が梨香だよね。何だか間違えそう」

俺の方が間違えそうだよ。言ってみようかと思うけど、止めておく。梨香は気が荒いようだから、文句を言ったら怒り出しそうだ。その分、恵梨は大人しそうだな……。まるで、恵梨香の二重性格が二つに別れたみたいに……。

とりあえず、登校

三人で話しあっても解決する事はなく、時間だけが過ぎていく。そろそろ登校しないとな……。そんな気配が漂い、梨香が口を開く。

「このままじゃあ、遅刻しちゃうから。とりあえず、授業が終わってから考えよ。ただ、この事は誰にも言わないでね。後でゴタゴタするのは面倒だし」

「そうだよね……」と恵梨。

「あぁ、わかった。で……」

俺が一呼吸置いてから、続きを話し出す。

「どっちが登校するんだ？　二人で行くとマズイよな？」

「うーん、そうだね。じゃあ、私が行くから。恵梨はその間、学園のどこかに隠れていて。わかった？」

「え……。あ……うん」

恵梨が戸惑いながら、小さく頷く。梨香の話に理解を示してはいるが、どこか納得がいかないようだ。うつむきながら、不満げな表情を浮かべている。

しかし、どちらかが残らなければ。二人して授業を受けるわけにはいかない。そんな事をすりゃ、大問題だ。この異常な出来事でパニックが起きるだろう。

結局、恵梨には学園内の、人の目に付かない場所に居てもらい。俺と梨香が登校する事になった。授業が終わり次第に、集合する事を約束して。

いつものように、教室に入る俺達。今日は、遅刻はしていない。昨日のようにギリギリになる事もなく、余裕を持ちながら席に着く。先生が来るまでのわずかな間、梨香が振り返り俺に囁く。

「ねぇ、信也はどう思う？」
「何が？」
「何がって、あの子の事だよ。私にそっくりだけど……。もしかして、宇宙人？」
「さぁ……？」
「だけど、それ以外に思い付かないよ。私に変装するなんて、何考えてるんだろ？」

梨香がぶつぶつ文句を言いながら、黒板の方に顔を向ける。どうも梨香は恵梨を信用していないみたいだ。まぁ、そうだよな。普通に考えれば、ただのそっくりさんが悪戯しているとしか思えない。が、果たしてそうだろうか？

事実、恵梨も梨香も恵梨香そのものだ。二人の話にも間違いはなく。異なる点と言えば、性格くらいだろうか？　どう考えても、二人が分離したとしか思えない。もしかしたら、本当に恵梨香が分離して……。

どうしてこうなったのかはわからないが、とにかく恵梨香が二人に増えた。謎解きは放っておいても。この先、どうすればいいのだろう？　警察に連絡するのか？　そんな事をしたら、話がややこしくなりそうだな。できれば、騒動は起こしたくない。恵梨香分裂の件は極秘にしておきたい。

珍しく真面目な顔で俺が考えごとをしていたら、先生がやってくる。点呼を済ませて、去っていく。そして、空いた自由時間。悩む俺の前では、同様に悩む梨香。この先、どうするつもりだろう？何か考えがあるのだろうか？

不可思議な出来事も普段通りの生活をしていれば、忘れてしまいそうになる。授業が始まり。謎解きを放棄した俺が、呆けながら廊下を眺めていたら。妙なものが目に入る。

廊下の窓からひょっこりと顔を出すのは恵梨だ。俺と目が合い、笑顔で手を振ってくる。もちろん、俺は蒼白して焦りを覚える。何てことだ。恵梨の奴……暇を持て余して、俺達の様子を見に来たらしい。

前を向くと、梨香は気づいていないらしい。真剣に授業を受けている。さぁ、どうしようか？　冷や汗を掻きながら、考える俺を見て、先生が勘違いだ。

「どうかしましたか、斎藤君？　顔色が思わしくありませんよ」
「あ……。いえ、ちょっと気分が……」
「体調が悪いのなら、保健室に行きますか？」
「はい……そうします」

そう言って、立ち上がり。教室の外へと向かう。一瞬、梨香と目が合うが説明している暇はない。静かに教室を後にして、廊下に出たら恵梨が笑顔で待っていた。すぐに恵梨の手を取って、教室から離れる。お願いだから、人目につくなよ……。

教室から離れて、人気のない校舎裏。安堵のため息をつきながら、俺が恵梨に顔を向ける。

「おい、どうして来たんだよ。皆に見つかるじゃないか」
「だって……私だけ一人なんて嫌だったから……」
「約束しただろ？　後で迎えに行くって」
「だけど……本当に迎えに来てくれるか……。あの……梨香って子は、自分の事を恵梨香だと思っているでしょ？　だから、私……」
「安心しろって。そんな、見捨てたりはしないから」
「本当に……？」
「当たり前だろ？」

俺の言葉を聞いて、恵梨が胸を撫で下ろす。安心したような顔つきで、俺に口を開く。

「ねぇ、信也……。このまま体調不良って事で……。授業を受けずに、お喋りしようよ……」
「あー、んー。まぁ、いいぜ。どうせ授業なんて受けてもわからねーし」
「えへへ」

恵梨が悪戯っ子のように微笑む。うーん、何とも可愛らしい姿。梨香には悪いが、今日の授業は放棄するとしよう。決意をして、恵梨とお喋りを始める。

授業を真面目に受けていたら、永遠に感じる時間も。ただのお喋りなら、一瞬だ。気がつけばチャイムの音が聞こえてくる。流石に二時限目まで放棄するわけにはいかないので。恵梨と再度約束をしてから、教室に戻る事に。

俺が廊下を歩いていたら、ちょうど梨香を発見する。向こうも俺に気が付いて、こちらに近づいてくる。梨香が不安げに口を開く。

「大丈夫？　信也？　気分が悪かったの？」
「え……あぁ、ちょっと恵梨がな」
「あの子が？」
「いや、さっき廊下まで来ていたから。俺も動揺して」
「そっか……」

梨香が頷き、理解を示してくれる。不満げに眉をしかめているが、文句を言うつもりはないらしい。黙って、教室へと戻りだす。俺も梨香の後に続いて、二時限目の授業を受ける。

昼食

そうこうしているうちに、気が付けば昼休み。財布を持って、購買へ向かう俺。教室から出ようとしたら、誰かに声を掛けられる。振りかえると、梨香の姿だ。梨香が俺に口を開く。

「信也も買いに行くの？　今日は私も手持ちがないから、買いに行くんだけど。せっかくだから、一緒に行こうよ」
「え？　あぁ、いいぜ」
「よーし。じゃあ、信也に奢ってもらわなくちゃ」
「マジかよ！？　それは勘弁してくれ！」
「冗談だよ、冗談。そんな事をしたら、信也の昼食がなくなっちゃうものね」
「冗談かよ。笑えないぜ～」

呆れる俺を見ながら、クスクスと笑う梨香。冗談を言う姿も可愛いよな。そんな事を考えていたら、梨香が俺に顔を近付け出す。

あまりの急な展開に心臓が張り裂けそうになる俺。思わず後ずさりしたら、梨香が手を伸ばしてくる。俺の前髪を緩く掴んで、髪をすくように手を引いていく。そして、その手を開きながら俺に言う。

「信也、前髪に毛玉がついてるよ。これはファッションかな？」
「ち、ちげーよ！」
「あれ？　顔が赤くなってるけど。もしかして、キスされるとでも思ったの？」
「んなわけないだろ！」

まさに、そうなる事を妄想していた俺だ。恥ずかしさで顔を赤ら

めながらも、ギャーギャーと否定する。否定すればするほどに、梨香が余計な事を言ってくるのはわかっているが。否定しなきゃあ、梨香の言った事を認めた事になる。

騒ぐだけ騒いで、購買へと向かう俺達。購買にて、俺が会計を済ませていたら。梨香が隣にやってくる。その手には、おにぎりが四つとジュースが二つ。それを見て、俺が梨香に問いかける。

「何？　もしかして、俺の分も買ってくれるのか？」
「違うよ～。恵梨の分。ずっと、放ったらかしにしていたから。お昼くらいは買ってあげないとね」
「へ～」

意外だな……。梨香が恵梨の分の昼食を買うとは思っていなかった。文句を言いつつも、どこか気になるのだろうか？　本当に嫌いなら、完全無視すると思うのだが……。まぁ、自分と余りにも似ているから。気にならないわけないよな……。

昼食を手に持ち、校舎裏へと向かう。行った先には、恵梨の姿が。しかも、膝の上にはビニール袋。もしやと思い、俺が口を開こうとした瞬間に、梨香が恵梨に声を掛ける。

「もしかして、買った！？」
「え……買ったよ。暇だったし……。もしかして……そっちも？」
「買っちゃった……。どうしよう？」
「ちなみに……何を買ったの？」
「おにぎり……。鮭とおかかを二つずつ。後、お茶も。私と恵梨の分」

「私も……同じの買った……。しかも……私と梨香の分。どうしよう……？」
「ということは、二人分も余るのね」
「そういう事だよね……」

不意に二人が俺に目を向ける。おい、ちょい待ってくれ……。俺が口を開くまでもなく。二人が不適な笑みを浮かべながら、ビニール袋からおにぎりを取り出す。それを俺に無理矢理手渡して、満足げに口を開く。

「信也にあげる。金欠の足しにしてね」
「何で意気投合してるんだよ……？」
「えへへ」

恵梨と梨香が二人揃って、ヘラヘラと笑う。俺の手には自分で買った弁当にプラスおにぎりが四つ……。昼に食べきれなかったら、夕食に回さないとな。

お喋りをしながら、昼食を食べる俺達。初めは警戒していた二人も今や仲良し。何せ自分自身だ。趣味も合えば、話も合う。親友同士のようにはしゃぎながら、お喋りを続けている。

昨日のテレビの話で盛り上がる二人を眺めていたら、不意に肩を叩かれる。驚き余って、振り返る先には松元だ。松元が両手を合わせて、俺に頼み出す。

「なぁ、斎藤。わりぃんだけど、金貸してくんない？　財布を忘れちまってな」
「昼食を買うのか？　じゃあ、これをやるよ」
「何だよ、これ？　くれるのか？　おにぎり四つと茶が二本？　ど

ういう組み合わせだよ？」
「二人の買い物がかぶったんだ。俺は弁当を買ったし。丁度、処分に困っていたところだから。プレゼントしてやるよ。もちろん、誕プレな」

笑顔で言ってやる。ちなみに、今月の末が松元の誕生日。丁度手頃な誕プレだろう。満足げな俺に対して、松元が文句を言う。

「おい、これが誕プレって酷くないか？」
「まだマシじゃん。食えるんだし」
「いや、食える物だったら。せめて、もう少しプレゼントっぽい物がよかったんだけど」
「俺が買えるのは五円チョコくらいだぞ。今は金欠だし」
「じゃあ、これで我慢するわ。仕方ないよな～」

松元が諦めて、俺の隣に座る。おにぎりを食いながら、今更の如く、例の双子に指を差す。

「で、俺は知らなかったんだけど。恵梨香ちゃんって双子だったの？」
「いや、実はな……」

隠していても仕方がないだろうから、本音を言う俺。バカにされるだろうと思っていたが、松元の反応は意外なものだ。真面目に話を聞き、真顔で返答してくる。

「おいおい。それって、ミステリーじゃん。恵梨香ちゃんが二人に分裂したなんて。皆が知ったら、大騒ぎだな。警察になんて行けないだろ？　どうするんだよ、斎藤？」
「何だよ、信じてくれるのか？　らしくないな」

「そりゃあ、話だけじゃあ、信じられないけど。現実を目にしているんだから、信じるっきゃないだろ？」
「そりゃそうか……」
「それで、どっちが恵梨ちゃんで、どっちが梨香ちゃんなんだ？」
「あっちが恵梨で、あっちが梨香だ」

恵梨と梨香に指を差して説明をする俺。それを聞いて、松元が頷き理解を示す。

「成る程な……。まったく見分けがつかない。お前はどうやって区別しているんだ？」
「雰囲気と言葉遣いだよ……。気の弱そうなのが恵梨で、気の強そうなのが梨香だ」
「ほぅ～。流石だな。やっぱり付き合っている奴は違うなぁ～」
「何が言いたいんだよ？　彼女なし」
「なぁ、どっちかを俺に紹介してくれない」
「バーカ、なめんな」
「お前って欲張りだよなぁ～。二人も彼女を作ってさぁ。これって浮気じゃないのか？」
「元は一人じゃないか。だけど、こんな異常事態……。俺はどうすりゃいいんだ？」
「さぁな？　大事にしたくなけりゃあ、黙っているしかないだろ？」
「だよなぁ～」

俺と松元が駄弁っていたら、恵梨と梨香が乱入だ。梨香が松元に向いて、口を開く。

「松元君、どうしたらいいと思う？　私達、二人になっちゃったの」
「二人で話しあってみたんだけど……。本当にまったく同じなの……。昨日の記憶も、それ以前の記憶も……。好きな事も、苦手な事

も……。どちらかが偽者だなんて思えないんだけど……」

遠慮気味に恵梨が呟く。二人の話を聞いて、松元が意見を述べだす。

「要は、現代の科学じゃあ証明できないって事だろ？　それなら、簡単じゃん。考える必要なし。考えたって、無駄だからな。学校は交互に通えば問題ないし。教室にカメラでも仕掛けておけば、ある程度の授業はしのげるよな。後は家の問題だけど……。二人で帰ると、ご両親が発狂するかもしれないから。まぁ、残る一人は俺の家に泊まるとか……」

最後の言葉以外はそれらしい松元の言葉に頷きながら、梨香が俺に顔を向ける。

「ねぇ、信也の家は駄目？」

「ちょっと厳しいな……。一日や二日くらいならいいけど、毎日となると。妹や弟も居るし、親がうるさいから……」

「そっか……。じゃあ、友達の家にでも……泊まろうかな……」

恵梨が言って、梨香が頷く。松元を無視する二人の横で、松元が独り言だ。

「あ～、俺って一人暮らしだからなぁ～。誰もいないと寂しいなぁ～」

「お前はペットでも飼ってろ」と俺。

「おいおい、そりゃないだろ？」

「どうしようもなくなったら、松元君にお願いするから。その時はよろしくね」

梨香が笑顔で、松元に言う。要するに、緊急事態の時だけ松元に頼るという作戦らしい。気に入らないが仕方ないよな……。ちょっと不満げな俺の前では、大きく頷いて胸を張る松元。そんな松元の姿を見ていると、殴ってやりたい気分になる。

四人で駄弁った後に、午後の授業。恵梨を一人残して、授業に向かう俺達。これといって、驚くような事もなく。刻々と時間が過ぎていく。

いつも通りの授業を終えて、非日常に足を踏み入れる。梨香と話をしながら、恵梨の元へと向かう。松元も同行したがるが、掃除当番なので放っておく。

学校の外にて、恵梨と合流。すぐに、俺が梨香に問いかける。

「それで……これから、どうするんだ？」

「友達に聞いてみたら。二日間くらいなら、お泊まりしてもいいって。だから、二日間は大丈夫。後の事は、明日にでも考えるよ」

「そうだね……」

恵梨が頷く。まぁ、なんとかなりそうだな……。俺が安心していると、恵梨と梨香が同時に話し出す。

「じゃあ、せっかくだし。三人でカラオケに行こうよ」

「え？　あぁ……」

いきなりの話に逆らえず、二人に連行される。二人がお喋りをしている間に、財布の中身を確認だ。とりあえず、カラオケ代くらいは……あるだろう。まぁ、長居はできないが……。

カラオケに行った後、二人と別れて家に帰る。普段通りに過ごして、寝床につく。恵梨と梨香……今頃、どうしているのだろう？

でも、まぁ……俺と違って、元がしっかりしているから。どんな問題でも何とかして乗り越えていそうだ。

得手不得手

翌日になる。俺が爆睡していたら、急に携帯が震えだす。突然の出来事に驚いて、飛び起きる俺。寝ぼける頭で携帯を手に取り、着信相手を見ると恵梨香から……。こんな朝っぱらから何なんだよ……。苛立ちを感じながら、携帯のボタンを押す。

「何だよ、恵梨香。朝から電話なんて止めてくれよなー」
「恵梨香じゃないよ。梨香ですー」
「梨香？　恵梨香だろ？」
「もしかして、信也……寝ぼけてるの？　昨日の出来事は夢じゃないよ」
「昨日の……あ！」

梨香に言われて、ようやく思い出した。そうだ……昨日は恵梨香が二人になって。俺が梨香に問いかける。

「恵梨の方はどうなったんだ？」
「恵梨は学校だよ。今日は私がお休み。松元君が言うように、交代制にしたの。私は暇だから、信也を迎えに来たわけ。ほら、信也。早くしないと遅刻するよ」
「え……？」

遅刻と聞いて、時計に目を向ける。点呼が始まる十五分前……。ヤバい！　遅刻寸前だ！

大慌てになりながら、素早く着替えて。鞄を手に持ち、外に出る。そんな俺の前に現れたのは、制服姿の梨香だ。俺が急ぎ口で梨香に言う。

「何でもっと早く連絡してくれなかったんだよ？」
「朝っぱらから電話は止めてほしいって、さっきは言っていたのに。そんな事を言うの？」
「そりゃそうだけど、これは別だろ？　こういう時は、蹴りを入れてでも起こしてくれないと。マジで遅刻するかも……」
「走れば間に合うよ。ほら、競走だね」
「ちょっと待てよ。俺はお前みたいに速く走れな……」

俺が言い終わる前に、梨香が走り去っていく。おい、待てよー！　文句を言っている暇はない。泣きながらでもいいから。今はとにかく走るしかない。

消え去る梨香を追いかけて、走り出す。どうせ追いつかないだろう。恵梨香は運動も得意だから、梨香もきっと……。そう思いながら、走っていたら意外な出来事が。

数分も経たぬうちに見えてくるのは梨香の後ろ姿。どうしたのだろう？　梨香に近づいて声を掛ける。

「どうしたんだよ？　気分でも悪いのか？」
「はぁ……はぁ……違うけど。何だか凄く息があがっちゃって……。信也……先に行っててくれる？　私には……恵梨がいるから、大丈夫」
「あぁ、悪いな。無理すんなよ」

梨香に言って、先に行かせてもらう。それにしても、あの恵梨香の分身である梨香が、こんなにも早く息が上がるなんて……。普段の恵梨香なら余裕をかましながら、ゴールしていそうなのに。

どうにか教室に辿り着き、ギリギリアウトで注意を受ける。教室に入った途端に、先生と目が合い注意を受けた。くそっ……こんなことなら走らずに歩いて来ればよかった……。何か損した気分だな……。

先生が出て行って、憂鬱気分の俺が恵梨の元へと向かったら。俺以上に憂鬱そうな顔をしながら、恵梨が教科書を眺めていた。それを見て、言葉に詰まる俺。声を掛けてもいいのだろうか？　俺が躊躇していたら、恵梨が顔を上げて俺を見る。今にも泣きそうな顔で口を開く。

「どうしよう……？」
「どうしたんだよ？」
「わからないの……」
「わからないって……何が？」
「これ……」

恵梨が指差すのは数学の教科書だ。昨日習った範囲……。恵梨は授業を受けていなかったから、わからなくても当然だよな。俺が恵梨に口を開く。

「んじゃあ、俺が教えてやるよ」
「ううん……そうじゃないの」
「だけど、わからないんだろ？」
「わからないんだけど……そうじゃなくて。さっきね……。友達に教えてもらったの……。それなのに、五分も経たないうちに忘れちゃって。それで、今度は松元君にも教えてもらったの……。なのにもうわからないの……」

「ど忘れか？　そんなのよくある話だろ？」
「こんなの変だよ……。だって、これって基礎問題でしょ？　私が……わからないわけないもの。大体、数学とかは得意だし……。普段なら、教えてもらう必要なんてないのに……。独学でも理解できるのに……」
「そんな事を言っても、忘れちまったもんは仕方ないだろ？　もう一回、チャレンジしてみようぜ」
「……うん」

恵梨が頷き、俺が説明しだす。頭の悪い俺でもわかる問題だ。本当に基礎の基礎。これなら、俺でも教えられる。まさか、恵梨に勉強を教えるなんて。きっとこれが最初で最後だ。

いい気になりながら、説明を終える俺。恵梨が頷き、納得してくれる。その後、ほんの一分足らず。恵梨が蒼白しながら、俺を見上げる。

「これ……何だったっけ？」
「おい……マジかよ？」
「冗談抜きで、忘れちゃった」
「……」

流石の俺も蒼白だ。もしや、恵梨香が二人に分身して、後遺症のような症状が現れたのか？　俺の目の前には泣きそうな恵梨。俺達が真顔で悩んでいたら、やってきたのが松元だ。松元が恵梨に向いて、声を掛ける。

「どう？　さっきの説明で意味わかった？」
「一時的に……わかったけれど。もう……忘れちゃった。それで、今度は信也に聞いてみたの……。だけど、それも……忘れちゃった」

「う〜ん、これは重症だな」
「私……何かの病気かな？」

恵梨の声がかすれ気味だ。このままじゃあ、泣き出してしまいそうだな。まぁ、そりゃあ……物忘れがここまで酷いと泣きたくもなるか。松元が腕を組みながら考えだす。不意に一つの質問を口にする。

「それなら、梨香ちゃんの方は？　梨香ちゃんも勉強できなくなったのか？」
「え……。ううん、そんなことは……ないと思うよ。梨香は何も言わなかったから……。もしも、勉強ができなかったら……。絶対に誰かに言うと思うから……」
「あ、そういえば……」

今朝の出来事を思い出して、俺が話に口を挟む。俺に振り向く二人を見ながら、今朝の話を口にする。

「今朝、俺が寝坊していたら。梨香の奴が俺ん家の前までやってきてな。それで、学校まで競争するとか言いだして。梨香の奴が俺の前を走って行ったんだ。普段なら……恵梨香なら俺が追いつくわけないんだけど。梨香の奴……途中で息を切らして、バテてたんだよ。俺は遅刻寸前だったから、先に行かせてもらったけど」
「成る程、これで合点いったな」

松元が頷き、勝手に納得しやがる。恵梨は首を傾げており、よくわかっていないみたいだ。俺達が口を開くまでもなく、松元が一人語りだす。

「要するに、こういうことだ。恵梨香ちゃんが二人に別れた時に。

何かのきっかけで、偏っちまったんだよ。梨香ちゃんは、勉強はできるけど運動音痴に。恵梨ちゃんは、勉強音痴だけど……きっと運動神経はいいと思うぜ」

「えぇー！？　私……バカになったの！？」

「でも、ほら……バカで運動音痴な斎藤よりもマシだって」

「どういう意味だよ！？」

俺が松元に突っ込みだ。恵梨が頭を大きく横に振りながら、泣き言を言う。

「信也よりもバカなんて、絶対に嫌だよ……！」

「それ、どういう意味だよ？」

突っ込みを入れる俺を無視して、恵梨が教室から飛び出していく。しかも、凄い高速だ。電光石火の如く、走り去ってしまった。取り残された俺と松元。不意に松元が俺の肩を叩く。

「まぁ、バカな運動音痴でも。生きてりゃいいことあるって」

「お前、説得力なさすぎ」

適材適所

一時限目が始まるが恵梨の姿は見えず、代わりに梨香が来るものかと思っていたけど。そちらも顔を見せなかった。長い授業が終わり、忙しなく教室を後にする。きっと校舎裏にいるのだろう。

俺の予想通り。校舎裏にて、二人を発見だ。どんよりと落ち込みながら、死霊のようなオーラを出している。俺が二人に近づいて、ためらいがちに声を掛ける。

「なぁ、二人共……。そんなに落ち込むことじゃないと思うぜ。何にも出来ない俺よりもマシだって」

「でも……信也よりも……私、バカになった……」と恵梨。

「私なんて信也よりも運動音痴だよ……」

続いて梨香が答える。そんなに俺よりも劣るのが嫌なのか？　じゃあ、俺は何なんだよ？　不満を覚える俺だが、ここで争っても仕方がない。何とか二人を元気づけないと……。俺が二人に話しかける。

「きっと元の恵梨香に戻れば、頭脳も運動神経も元通りになるって」

「どうしたら元に戻れるの！？」

「私……バカだから、わかんない……」

ヒステリックに叫ぶ梨香に対して、恵梨は拗ね気味だ。そっぽを向きながら膨れている。どしたらって……そんなの俺にもわかんねーよ。

不穏な空気が漂い、黙る俺達。いくら俺が諭したところで、二対

一じゃあ勝ち目がない。どうしたもんかな？　ふと気がつくと、そろそろ授業が始まる時間だ。教室に戻らないと……。

教室に戻って、次の授業が開始される。恵梨は行きたくないと言い張るので、代わりに梨香がやってきた。あたふたと慌てることなく勉強をする梨香を見ていると、恵梨香にしか見えやしない。こいつはこれでも……運動音痴なのか。

俺がぼんやりと考えごとをしていたら、先生に頭を小突かれる。注意を受けた上に、当てられる。えーっと、どの問題を解けばいいんだ？　まずはそこからわからない。停止する俺を見て、先生が諦め。代わりに、梨香を当てると。梨香は余裕で答えを口にする。

平凡な時間が刻々と過ぎてゆき、チャイムが鳴り響く。二時限目が終了した。さて……次は三時限目であるが。科目は体育。ということは……。梨香が立ち上がり、教室を後にする。もちろん、俺も梨香に続く。

向かう先は恵梨の居場所。校舎裏に辿り着くと、そこには恵梨の姿が……。なぜか肉まんを食いながら和んでやがる。おい……落ち込んでいたんじゃなかったのかよ？　呆れる俺の隣で、梨香が恵梨の肉まんを奪う。

「ほら、次は恵梨の番だよ。肉まんなんて食べてないで、授業を受けてきてよ」

「んー。私は……バカだもん……」

「次は体育なの。私じゃ力不足だから、恵梨が行ってよ」
「えー……」

不満げな恵梨。授業を放棄し過ぎて、怠け癖が付いたようだ。梨香に肉まんを奪われて、恵梨がどうにか動きだす。ぶつぶつと未だに文句を言っている。そんな恵梨の様子を見て、梨香が恵梨の肉まんを食いながら言う。

「私の方が授業時間長いんだからね。少しくらいは休憩させてよ」
「だけど、私は動くし……。凄く体力がいるの……」と恵梨が言い訳。
「私は頭を使うから、疲労度は同じだもの」

梨香が言い返し、恵梨が適当に相槌を打つ。まぁ、一言で言って。俺が一番つらいけどな。勉強も運動も全部出席しないといけないしな。俺も二人に分身したいと本気で思う。

そんなこんなで三時限目も難なく終わり、残りの授業も何とか乗り越える。一日が終了して、帰宅時間。学校から離れた場所で、恵梨と待ち合わせだ。俺と梨香が歩いていたら恵梨と出会う。俺達を見て、恵梨が楽しげに話し出す。

「初めはバカになって嫌だなって思っていたけど……案外にいいかもね……」
「よくないよ。何だか私は損した気分」

梨香が納得いかなさそうに返答する。梨香の反応を見て、恵梨が首を傾げる。

「そう……？」
「だって、私の方が授業時間長いもの。恵梨は一日一時間あるか、ないか。それくらいでしょ？」
「でも、選択授業は体育を選んでいるから……。もう少し……授業あるよ」
「だけど、しれてるじゃん。勉強よりも楽そう」
「ん～。楽って言えば……楽かな？　何も考えなくていいし……。ただ疲れるけどね……」
「まぁ、運動だと着替えるのは面倒くさいし。汗でベトベトになるのは嫌だから。そういう意味ではいいかな？」

二人の話し合いが数分間続き、いつしか話が変わりだす。テレビの話や雑誌の話になり、最後は二人が俺に振り向く。

「信也、これから暇？　本屋に行かない？」

二人にせがまれて俺も同行する事に。近所にある古本屋にて、恵梨と梨香が大量買いだ。「安いから」、「これ面白そう」、などなど。色々な理由をこじつけて、本をたくさん買占める。蒼白していく俺の前では、山のように増えていく本。

最後は紙袋が二つになり、もちろん荷物持ちは俺になる。恵梨香の時は、紙袋が一つほどで済んだのに。今やあの頃の倍はある……。これ……持てるのか？　マジで重いんだけど……。

俺の前には、はしゃぎ回る二人の恵梨香。可愛らしい笑顔を振る舞いながら、二人でお喋りをしているのだが。今の俺にとってはど

うでもいい。どうでもいいから、これを少し……持ってくれよ。

ため息をつきながら、足を進める。しばらくすれば、恵梨と梨香にこの荷物を渡して。俺は俺の家に帰る。家の方向が違うからな。わざわざ恵梨香の家にまで持って行ってやる必要はないだろう。二人もいるのだから、何とか解決してくれ。

俺が本の事に気を取られていたら、不意に誰かとすれ違う。聞こえてくるのはそいつの独り言……。

「分離したのか……。こういうのは良くない傾向だね……」

「分離」と聞いて、思わず振り返ってしまう。俺の目に留まるのは知らない男の後ろ姿。まさか……恵梨香の事を言っているわけじゃないよな。

お嬢様の試験〈その1〉

恵梨香が分離した日の週末。土曜日もどうにか乗り越えて、やっとのことで日曜日だ。気が張りつめた一週間だったので、今日は無気力。一日中ごろつこう。そう思っていたら、携帯に着信。

携帯を手に取り確認すると、メールが一件。恵梨香からだが、件名に恵梨とあるので、そうなのだろう。メールを開くと以下の内容。

『今日は暇？　もし良かったら、付き合ってほしいな』

メールの内容に目を通し、どうにも乗り気になれない俺。ここ一週間は二人の事で頑張って来たのだから、今日くらいはのんびりさせてほしい。腕を組みながら考える。しばらく後に返信する。

『今日は少し忙しいから、明日にしようぜ』

罪はないよな？　罪はないはずだ。だって、俺の日曜日。いくら相手が彼女とはいえ、俺にだって自由がほしい。ちょっとした罪悪感を持ちながらも、面倒事から逃げ切れた安心感を抱える。そんな俺の耳に聞こえてくるのは、母親の声。

「信也―！　恵梨香ちゃんが来てるわよー！」
「おいー！」

既に来てるのかよ！　これじゃあ、忙しいで誤魔化せないじゃないかよ！　突っ込みを入れて、階段を下りる。流石に……家の前まで来ているのなら、会うしかないよな。断る事もできるけど、後で何かと言われるのは嫌だし。

外に出ると、恵梨の姿が……。見た目は梨香と同じだが、雰囲気が少し違う。微妙に異なる雰囲気だけで、恵梨と梨香を判断できるのは、普段から一緒に居る証だろう。これって、少し自慢できる事じゃないか？

俺が恵梨に問いかける。

「それで、どうしたんだ？」

「ごめんね……。急に呼び出して……怒ってる？」

「怒ってはないけど……」

不満げな俺の声で理解したのか、恵梨が申し訳なさそうに口を開く。

「ごめん……。いきなり日曜日に呼び出したら、誰でも怒るよね……。あの……やっぱり明日にするから」

「お前なぁ……。ここまで来て、それはないだろ？　そんな事より、梨香はどうしたんだ？」

「えっと……梨香は家族と出かけちゃったみたい。私……一人で行く所なくて」

「……」

そうだよな……。一人が増えたら、一人が余る。当たり前だ。まるで捨て犬を見ているような気分。ここでサヨウナラなんて言える奴は大した奴だ。流石の俺も、見ていられなくなって、恵梨に言う。

「しゃーねーな。言っておくけど、俺は金がないから、遊園地に連れて行けとか。そういう事は言うなよ」

「もちろんだよ……。そんな贅沢は言わないから……」

「よーし。じゃあ、何するよ？　公園にでも行くか？」
「うん、何でも……。何でもいいよ……」

恵梨がはしゃぎながら、俺の腕に手を回す。うーん、なかなかいい気分。無理して断らなくて良かったかもな。心底から浮かれる俺を見て、恵梨が微笑む。

「信也……鼻の下が伸びてるよ」
「なっ！？　んなわけねーだろ！」
「違ったの……？」
「ほ、ほら。早くいくぞ」
「えへへ……」

顔を綻ばせながら、俺の腕にきつく抱きつく恵梨。やべーな……この可愛さは尋常じゃない。平静を装いながら、歩きだす。すぐに恵梨が俺に言う。

「公園は……反対側だよ」

のんびりと歩き、駄弁り、公園へと向かう俺達。しばらくすると、公園が見えてくる。公園に近づき目にする光景。わんさと賑わう人々に、聞こえてくるのはハードな音楽。何かライブでもしているのか？

近づいて、様子を窺おうとするが。あまりの人の多さに、手も足もでない。俺が恵梨に振り返り口を開く。

「駄目だ。近づけそうにないな」

「何か……並んでいるみたいだね。見物だけなら、向こうから見えるかも……」
「その手で行くか」

恵梨の手を取って、人混みの隙間を縫っていく。何とか顔をのぞかせると、公園の中心に知らない女子。王座のような椅子に座りながら、つまらなそうに目の前の人物を眺めている。女子の前には、三人の人物が。何かのバンドメンバーだろう。かなり本気で一曲を奏でている。

この光景は何を意味するのか？　俺が首を傾げていたら、不意に肩を叩かれる。振りかえる先には、松元の姿……。何でお前がここにいるんだよ？　ギターを手に持つ松元に向いて、恵梨が話しかける。

「松元君……どうしたの？」
「いや、俺もチャレンジしようと思ってな」
「チャレンジ……？」
「お嬢様の試験を受けに来たんだよ」
「お嬢様って、王座に座っているあの女の子か？」

俺が問いかけると、松元が驚き顔で俺に振り向く。

「もしかして、あのお嬢様が誰なのか知らないのか？　音楽会じゃあ有名だぜ」
「それで、誰なんだよ？」と俺。
「音楽だけじゃなくて……。ほら、よくニュースで登場するじゃん」
「えー、俺はニュースなんて見ないし」
「菊池瑠菜（きくちるな）さん……？　え？　嘘？　本物？」

恵梨が口を開き、頷く松元。松元の様子を確認して、恵梨が戸惑いだす。だから、一体誰なんだよ？　俺が眉をしかめていたら、やっとのことで松元が説明してくれる。

「日本一の金持ち。菊池財閥の一人娘だよ」
「日本一……って、すげーじゃん！」

目を丸くする俺を見て、松元が大きく頷く。

「そりゃすげーよ。まさかこんな寂れた公園で、試験をしてくれるなんて思ってなかったからな。いつも唐突に始めるから、駆け付けた頃には終わっているのが当たり前だし。試験中に間に合ったのだって、今回が初めてなんだ。絶対に受かってやるぞ」
「その……試験って言うのは……見てわかると思うけど。お嬢様の前で演奏して、もし受かったら。お嬢様からの特別支援を受けられる。ミュージシャンを目指す者にとっては、ビッグチャンスなんだよ。受かった時点で、ＣＤを出せるし、テレビでは報道されるし。一流ミュージシャンの仲間入りだな」
「つーか、お前……ミュージシャンなんて目指してたのか？」

俺が飽きれ顔で松元を見ると、松元が楽しげに口を開く。

「夢は大きく持たないとな。まぁ、俺のは所詮趣味だけど。チャレンジくらいはしてみたいだろ？」
「まぁ、わからなくもないか……」
「それじゃあ、俺は行ってくるから。お二人さん、俺のデビュー戦を遠くから見守っていてくれよ」
「はいはい」
「頑張ってね……。松元君……」

適当に受け流す俺の隣で恵梨が応援する。松元はいつも以上に元気よく、長蛇の列へと並びに行った。俺と恵梨は棒立ちしながら、お嬢様へと目を向ける。聞こえてくるのは、お嬢様の冷たい一言。

「五点……。あなたには才能がないわ。諦めなさい」

お嬢様の試験〈その2〉

長い試験。試験を受ける側はえらく真剣だ。列に並びながらも、メンバーと打ち合わせをしたりして、時間を無駄にしていない。傍から見ていると面白いが、試験を受ける者にとっては笑っていられないだろうな。俺だって、試験の日には真顔になる。

それにしても、お嬢様の採点は厳しい。今の所、五十点どころか三十点以上を見た事がない。二十七点が最高記録。松元の出番はまだだが、早めに諦めろと言ってやりたい気分になる。少しずつ飽きてきて、俺が恵梨に問いかける。

「ちなみに、合格点って何点なんだ？」
「あそこの看板に書いてあるよ……。とりあえず、五十点で人並みだって……」
「ひでーな。こんなの合格する奴いるのかよ？」
「さぁ……？」

苦笑いする恵梨。いないと思っているのだろう。俺だって、そう思う。色々な音楽が流れる中、ぼんやりする俺と恵梨。する事がなくて、菊池瑠奈なる人物を目で追ってしまう。

それにしても、このお嬢様は可愛い顔をしているな。背はちっちゃくて、顔は整っているし。遠くから見ると、まるで人形だ。外国とかで売っていそうな人形。可愛いって言うか、美人って言うか……。そんな事を考えていたら、恵梨が小声で呟きだす。

「菊池さん……可愛いよね。ハーフかな？」
「えっ？　あぁ、そうなんじゃね？」

一瞬、ギクリとしてしまう。まさか……俺の心を読んだわけではないだろう。俺がドキドキしていたら、いつの間にやら松元の出番。松元が一人ギターを引きながら歌いだす。それなりに上手い。まぁ、松元らしいな……。

オリジナル曲であろう。なかなかいいテンポで曲が進み、サビの部分が終わる頃にお嬢様が口を開く。

「二十点……。もう疲れたわ。帰りましょ」

そう言って、立ち上がるお嬢様。お嬢様の一言に、幻滅する松元。お前は頑張った方だと思うぞ……。近づいて、肩に手を置いてやりたい。中途半端に終わろうとするお嬢様を見て、まだ試験を受けていない奴らが騒ぎ出す。一人の男が口を開く。

「まだ、俺達は終わっていないのですけど」

「もう飽きたわ。今日はこれまでね」とお嬢様。

「せめて、次はどこで試験をするのか教えていただけませんか？」

と人混みから女性の声。

「決めていないわ。私の……気分よ」さっぱりといいのけるお嬢様。

気が付けば、お嬢様の王座を黒スーツの男達が片付けている。どこから現れたのだろう？　きっと物陰から、お嬢様の様子を窺っていたんだろうな……。そんな中、唐突に松元が騒ぎ出す。

「俺の歌のどこが悪かったんだよ!?　完璧じゃないか！　俺の歌が駄目なのなら、せめて百点がどんなものなのか聞かせろよな！」

少しの静寂。不意にお嬢様が冷たく微笑む。

「フフッ……私の前で騒ぐなんて、面白い人」

そんなお嬢様の様子を見て、ビビりだす松元。黒スーツの男達が今にも松元に飛びかからんとする中、お嬢様が話し出す。

「いいわ。せっかくだから、聞かせてあげる。私が満点をつけた歌声を……」

「え……マジで？」と松元。

「……玲（れい）、あれを」

お嬢様が誰かに呼び掛ける。すると、木の上から降ってくるのは別の女子。黒いスーツを着込んでいて、何と言うかカッコいい。漫画のようなキャラを目にして、驚く観衆。玲という奴が、お嬢様に何かを手渡す。小型の録音機のようだ。

お嬢様がボタンを押すと、流れ出すのは録音された音。誰かが歌を歌っている……男の声だろう。聞いた事のない声に、聞いた事のない曲。切ないメロディー。物哀しげな歌声。涙が出てきそうな曲を耳にして、観衆が黙り込む。

それにしても、この曲を歌っている人物……。もの凄く歌が上手い。有名なグループのボーカルか？　と思うが、本当に知らない声だ。少し癖のある声だから、聞いていれば覚えているだろうに。

途中で歌が途切れて、歌っていた奴が話し出す。

「えーっと……。何だったっけ？　あー、また歌詞忘れた。確か、明日だよね？　いや、無理でしょ？　間に合うわけないじゃない。何でカンペありじゃ駄目なの？　もうー、わけわかんない！」

歌が終わり、続くのは愚痴の嵐。

「大体さぁ、皆して化け物なんだよ……。それに……冷静になって考えてみたら。僕は無関係じゃない。所詮は『仮(かり)』なんだから、立場も仮にしてほしいし。なーんて、言ったら、逆切れされるんだろうな……」

歌声だけを聞くならば、すげー奴だと思うが……。まだまだ続く録音の音声。

「あー、もう、面倒くさい！　皆、死ねばいいのにー！」

よくわからないけど……吹っ切れたのか？　歌声以外は、その辺りに歩いている一般人レベルだな。ガチャガチャという音が聞こえて、無音になる。

ふとお嬢様に目を向けると、うっとりしながら録音機を眺めている。よほどこの声に惚れこんでいるのだろうな。このお嬢様は声フェチか……。

誰もが静まり返る公園。急に誰かの声が聞こえてくる。

「その歌声は……誰が？」
「……さぁ？　誰かしら？」

お嬢様が首を傾げる。きっとわざとだ。本当は知っているのだろうが、教える気はさらさらないらしい。素知らぬ顔をしながら、公園の外へと向かいだす。いつの間にやら、待機していた高級車に乗り、去って行った。

妙に静かな空気になる中、松元が俺達の元へとやってくる。俺が口を開く前に、松元が笑顔で突拍子もない事をほざきだす。

「俺、ミュージシャン諦めるわ～」

「お前、そのノリは軽すぎるだろ!?」

「ありゃあ、無理だって。勝てやしないし。諦めも肝心って言うからな。まぁ、趣味としては続けるつもりだけど」

ケラケラと笑う松元に対して、暗くなるのは本気でミュージシャンを目指していた人々。神とのレベルの差を知り、手も足も出ない事を知ったのか。黙って、深刻に悩んでいる。

それにしても、さっきの声……。どこかで聞いた事のあるような……。気のせいだろうか？　もやもやと胸の中に溢れる疑問。思い出せそうで、思い出せない……。確か、かなり最近の事だったと思うのだけど……。

転入！　〈その1〉

翌日になり、月曜日。学校中はお嬢様の話で持ち切りだ。昨日の出来事を梨香に話したら、ビックリ驚いていた。

松元なんて、自分の点数を四十五点にまで引き上げて。「おしかったなぁ～」なんて言っているから。俺が真実を述べようとすると、思いっきりに俺の背中を叩きやがる。まったくもって不愉快な奴だ。

休み時間、俺と梨香がお嬢様について話をしている。そこへ乱入してくるのは、北原だ。別クラスの癖に、わざわざこのクラスにやってきたのは、お嬢様の話を入手するため。梨香に向かって、テンション高く話しかけてくる。

「ねぇねぇ、恵梨香ちゃんもその場に居たんでしょ？　お嬢様って、どうだった!?　可愛かった？　それで、お嬢様が満点をつけた歌声ってどんなの!?　凄かった？　それでそれで、お嬢様って、やっぱりクール系？　テレビではちょっと冷たそうな顔していたけど……」

「えーっと……う～ん、そうだね……」

梨香がちらりと俺を横目で見る。実際に居たのは恵梨なので、梨香にはわからない話ばかりだ。しかし、それを北原なんかに説明したら。それこそお嬢様どころではなくなってしまう。梨香の代わりに、俺が返答だ。

「うーん、そうだな……。お嬢様はまるで外国製の人形みたいだった。背がちっちゃくて……。結構、ドライな性格だな。多分、テレビのまんまだと思うぜ。それで、お嬢様が満点をつけた歌声は凄か

ったな。歌声を聞いて、泣いている奴が普通にいた。でも、歌っている奴はその辺りにいそうな奴だったな。まぁ、歌の後に話し声があって……。めっちゃ普通に独りで呟いてた。ほぼ世の中の愚痴だったけどな。それだけ聞いていたら、ただの一般人にしか思えない。後……松元の点数は、正確には二十点だった」

「へ～、そうなんだ。見たかったなぁ～。めっちゃ楽しそうだよね～」

「う～ん、そうだな……。まぁ、いろんな音楽を無料で聞けて。ちょっと得した気分になったな」

「そうだよね。楽しかったね」

梨香が俺の話に合わせる。北原が羨ましそうに目を輝かせる中、松元が俺達に近づいてくる。

「本当にな。昨日の出来事は良い思い出だよ」

「松元君は二十点だったんだね～。全然、駄目じゃ～ん」

ケラケラと笑いだす北原。北原の言葉を聞いて、俺を睨む松元。言い訳がましく松元が北原に言う。

「二十点って言っても。ほとんどの奴が五点なんだ。五点の山の中に、二十点がいりゃあ。それはかなりの価値だろ？」

「でも、二十点は二十点だよね～」

悪気のない北原の笑顔、それを見ながら不満げな松元。松元と北原が口争いをしていたら、不意に誰かの声が聞こえてくる。

「どれも不合格に変わりないわ」

声を聞いて、凍りつくのは俺と松元。バッと振り返る先……まさ

かのお嬢様……菊池瑠奈が立っていた。これは夢か？　目を擦るけど、消えない幻。気が付けば、教室に静寂が訪れ。誰もが黙って、お嬢様に目を向ける。

お嬢様は何か話すわけでもなく、スタスタと歩いて行って。廊下側の一番後ろの椅子に着席しだす。そこは確か……松元の席のはずだが。もちろん、松元は文句が言えるわけもなく、黙ってお嬢様に目を向けている。そして、お嬢様が満足そうに口を開く。

「ここにするわ。日が当たるのは嫌だから」

え？　何が？　思った直後、現れるのは黒スーツの男達。勝手に松元の机を移動させて、別の机を持ってくる。しかも新品。同様に椅子も新品を持ってきて、お嬢様が一度立ち上がると。その隙に椅子まで新品にチェンジする。

状況を理解できない俺達の前に登場するのは先生だ。慌しく教室に入ってきて、お嬢様に頭を下げながら。まるで、下僕のように小さく丸まり、お嬢様に小声で何かを告げる。お嬢様に反応はないが、理解したとみたのだろう。先生が頭を下げた後に、そそくさと教卓に向かう。

生徒達に席に着くよう注意をし、余所のクラスの者は廊下へ向かう。松元はいつもの場所と違う場所に椅子を移動させ、不満そうに席に着く。皆が席に着いたのを確認した後に、先生が話し出す。

「今日から青鶯高校に転入することになりました。菊池瑠奈さんです……。皆さん、仲良くしてくださいね……。それでは、菊池さん……あの……一言だけ挨拶をお願いできますか？」

「興味ないわ……」

お嬢様が先生を見ずに、廊下を見ながら言い放つ。先生は文句を言えるわけもなく、頭を下げ気味に、お嬢様の代理だ。先生が代わりに挨拶をする。

「皆さんもご存じの通り……よくテレビで見かける菊池さんです。テレビ局の者が尋ねてきても、あまり菊池さんの話はしないようにお願いします。個人の情報など、なるべく妙な事は言わないように。お願いしますね」

きっと……妙な噂が出回ったら、先生の首が飛ぶのだろう。リストラって意味じゃなくて、リアルに首が飛びそうだ。何せ相手は超財閥のお嬢様だもんな……。爆弾よりも、こえーよ。

先生が出て行って、しばらくの余暇。その間、お嬢様に話しかけるような勇気のある奴はいなかった。俺と松元に梨香を含んだ三人は小さな声でお嬢様について喋っていたが。余所の奴らも同じようにグループを作って喋っていたから、何か言われる事もないだろう。

授業中も硬い空気は相変わらずで、一番緊張しているのは俺達よりも先生だ。チョークを持つ手が震えている。それでも授業は進み続け、端から順に当てられていく生徒達。お嬢様の前にいる生徒が当てられて、答えを書くために黒板へと向かう。

次に当てられるのはお嬢様だが、先生が躊躇して戸惑いだす。当てていいのか……悪いのか。迷いに迷って、先生が口を開く。

「菊池さん……次の問題をお願いします」

「……」

黙るお嬢様。先生がお嬢様を飛ばそうかと考え始めた頃に、お嬢様が口を開く。

「玲……これを」

お嬢様の声を聞き取ったのか、扉を開けて入ってくるのが黒スーツを着たカッコいい女子。昨日……木の上から降って来た奴だ。

玲がお嬢様の差し出すノートを手に取り、黒板へと向かう。そのままノートの言葉を黒板に書き写す。玲の字を見て、皆が感嘆だ。かなりの達筆。おぉ～、すげ～。

黒板に書かれた答えも完璧で。難しい問題にも係わらず、事細かい式まで書かれている。まるで解答用紙その物だ。流石は超財閥のお嬢様。これくらいは余裕らしい。

一時間目が終わりを告げ、休み時間に入る。そろそろ皆の緊張感もほぐれて、お嬢様に近づきだす奴も現れる。お嬢様に向いて、一人の女子が話しかける。

「ねぇ、菊池さんって……以前は何て言う学校に通っていたの？」

「……」

「それはお教えできません」

黙るお嬢様の隣で、お嬢様の代理を務める玲。他の女子が口を開く。

「じゃあ、どうしてこの学校へ？」

「さぁ……？　どうしてかしら？」

お嬢様が返答する。今度は男子達がいらぬ事を言う。

「前の学校に飽きたのか？」

「以前に通っていた学校の方が、生徒に教養があったわね。この学校はだらしないわ……」とお嬢様。

「じゃあ、家の都合？」

「それは関係ないわ……」

「もしかして、気になる奴がいるとか？」

最後の奴はおふざけで言ったつもりだろう。それなのに、お嬢様の反応に変化が。ほんの一瞬、お嬢様が微笑む。めちゃくちゃ可愛い一瞬の笑顔。これを見逃した男子は哀れな奴だ。すぐに冷ややかな顔に戻り、お嬢様が口を開く。

「フフッ……近いから」

それだけ言うと、お嬢様が首を振って周りの奴らに目を向ける。

「疲れたわ。もういいでしょ……？」

威圧的な言葉に、生徒達がおずおずとお嬢様から離れていく。そして、またもや個別グループで会議。ヒソヒソと今の話について、議論を始める。

転入！　〈その2〉

昼休みになり、校舎裏に集まるのはいつものメンバー。俺に恵梨と梨香、それと松元だ。松元が腕を組みながら、話し出す。

「あの時のお嬢様の笑顔を見たかよ？」

「ヤバかったよな」と俺。

「ありゃあ、罪だね。普通の男なら、一瞬にして、そそのかされちまう。まぁ、俺は余裕だけどな。それにしても、お嬢様の気になる奴って誰だろうな？」

「さぁな？」

首を傾げる俺に、黙り込む松元。しかし、考えている事は同じだろう。俺達はこう考えている……。『もしかして、俺？』。ただの一人妄想ではない。可能性が非常に高いから、そう考えているんだ。

昨日、あの場に居た青鷺学園の生徒なんて限られているだろう。確実なのは、俺と恵梨に松元……。他に居たとしても、数人だと思われる。だとしたら、お嬢様の気になる相手が自分である可能性も否定できないのだ。

お嬢様と直接に係わっていた松元が一番にあげられるが、お嬢様が最後に言った言葉……『近い』とはどういう意味か？　家が近いから？　松元は確か電車で来ているはず。俺の家は歩き……確かに近い！

まさか、お嬢様……瑠奈は俺を遠くから見て惚れたのか？　松元には興味がなさそうな顔をしていた……。やっぱり俺じゃねーの？

俺が一つの思いに駆られていたら、急に梨香の怒鳴り声が耳に入る。

「信也！　聞こえてる！？」
「え？　あぁ？　何？」
「ぼ～っとしちゃって。もしかして、お嬢様の好きな相手が自分だなんて思ってるんじゃないでしょうね？」
「ち、ちげーよ」
「鼻の下……延びてたよ」

恵梨が横から口を挟む。信用のない目つき。間違いでない分、否定できない。続いて、梨香が口を開く。

「超財閥のお嬢様が信也に惚れるわけないじゃない」
「そ、そんなのわからねーぜ」と俺。
「浮気好きは……嫌い……」恵梨の怖い視線。
「そうだぜ、斎藤。お前には恵梨ちゃんと梨香ちゃんが居て、それでもまだ足らないのかよ？　今でも贅沢三昧なんだから、少しは自重しろよな」と松元。
「鼻血を垂らしながら、気取るな。松元。お前の頭は何を妄想しているんだ？」

リアルに鼻血を垂らす松元に指を差して、俺が言う。妄想お嬢様といちゃついて、勝手に興奮してやがる。俺に注意できる状況じゃないだろ、お前？　まずはその鼻血を拭けよ。

そんなやり取りがあって、午後の授業に入る。授業は体育。男女別れて。女子はバレーで、男子はバスケ。もちろん、注目の的はお

嬢様だ。

体育などの授業は棄権するのかと思っていたが、そんなことはなくお嬢様も出席している。体操着は特注のスポーツウェアだ。皆とは違い、センスのある服。そういえば、学校の制服も違ったな。お嬢様の着ていた服は……お高そうな私服だった。

背の低いお嬢様にバレーはきつくないか？　そう思いながら、ちらちらと様子を窺う男子一同。もちろん、俺も含まれる。別にお嬢様に好意があるわけではなく、単に興味があるだけだ。

恵梨のメンバーにお嬢様が加わって、試合が始まる。開始序盤は、恵梨がリーダーを取りながら。上手い具合に、得点を獲得だ。次も点数を入れ、調子がいいかと思ったら。相手の逆襲にあう。

相手にポイントを入れられて、サーブ権を持っていかれる。相手がサーブをして、飛んでくるボール。恵梨が受け止め、ボールが高く飛ぶ。そのボールを近くにいた別の女子がアタックだ。

相手側のコートに飛んで行くボール。しかし、スピードが緩やかなために、綺麗に弾き返される。ボールが恵梨達のいるコートに飛び込んでくる間際、ここでお嬢様が覚醒する。

背が低いお嬢様。見た目一つで、バレーには不向きだ。そう思っていたのだが、思わぬ出来事。お嬢様が大きくしゃがんでから、勢いをつけてジャンプする。それが凄いジャンプ力。お前は猫か？と問いかけたいくらいに高い。

そして、ボールをブロック。相手のコートに落ちるボール。予想外の出来事に、相手もたじたじだ。手も足もでなかったらしい。そ

の後もお嬢様の勢いは止まることなく、むしろ勢いが増していく。

初めは目立っていた恵梨を押し抜くかの如く、お嬢様の勢いは止まらない。最終的には、ほとんど恵梨とお嬢様で相手チームをブッ倒してしまう。不意に恵梨がお嬢様に話しかける。

「菊池さん……凄いね。バレーとか……よくするの？」

「たまに……身体を動かすくらいね」

「私も……たまに。バレーって……楽しいよね」

「別に……」

「あはは……そうかな？　面白いと思うけど……」

ヘラヘラ笑う恵梨を無視して、お嬢様が定位置につく。恵梨の話に興味がないらしい。恵梨はちょっと気まずそうだ。仲良くなろうと、必死になる姿が哀れに見える。後で褒めてやらないとな。放っておいたら、一人で落ち込みそうだ。

俺が恵梨の様子を窺っていたら、後頭部に何かがぶち当たる。激痛の後に、誰かの大声。

「おい、斎藤！　何をボーっとしているんだよ！　試合は始まってるんだぞ！」

「す、すまーん！　ボールは！？」

「お前にパスしたのに、相手に取られてるぞ。バカ！」

文句を言われて、不満な気持ち。ふと女子のバレーに目を向けると、恵梨が俺を見て苦笑している。あーあ、何で俺ばかりがこんな目に……。

こうして終わる今日の授業。恵梨とお喋りをしながら、帰宅しようとしたら。何だが校門が騒がしい事になっている。テレビの取材だろうか？　カメラとマイクの渦にのまれるのは学校の先生達。『お引き取り下さい』という声が辺りに響いている。

生徒は小さくなりながら、人混みの隙間を縫って帰っているが。記者達に引きとめられて、路頭に迷う姿がちらほら。そんな生徒を助けてくれるのは先生達。しかし、本当に手に余る話だ。

どうしようか？　梨香は先に外に出たのか？　俺と恵梨が立ち止まっていたら、俺達の隣を通り過ぎる人。

「騒がしいわね……。くだらない」

よく見るとお嬢様と玲の姿。お嬢様を目にして、記者達が興奮する。先生達を押しのけて、お嬢様に集り始める。お嬢様にマイクを突き付け、話し出す一人。

「菊池財閥のお嬢様がどうしてこのような学校に転入されたのですか！？」

「さぁ？　ただの気分よ」

「ただの気分で転入されたのですか？　では、また気分が変われば別の学校へ移動することもありえるのですか？」

「今の所……予定はないわね」

「学校にはお車で通学ですか？　本家からは遠いですが、マンションなどをお借りなさっているのですか？」

「フフッ……個人的な事には答えないわ。ほら、邪魔よ。もう向こうへ行って」

お嬢様が一瞥すると、記者達が後ずさる。しかし、退散することはない。流石、記者だ。肝が据わってやがる。未だにマイクを押し付けて、質問を続けている。鬱陶しそうな顔をするお嬢様の前に出るのは玲。有名人も大変だな……。

何だかえらい事になっている間に、俺達はそそくさと学校を後にする。外に出て歩いていたら、梨香と出くわす。三人で話し出すのはさっきの騒動。テレビ取材って、すげーよな。という話をしながら、家に帰る。今日は持ちネタがいっぱいだ。これは是非とも家族に教えてやろう。

祝日〈その1〉（前書き）

相変わらず、どこにでも出現する未来とシバル。
おい、未来。お前は仕事……大丈夫か？
おい、シバル。お前はタックン……大丈夫か？
つーか、お前ら……こんなところで何をしているんだ？

祝日〈その1〉

お嬢様が転入してきて、数日後。学校に落ち着きの戻らない中、祝日がやってくる。休みだ、休み！　今日は休み！　今日の予定は少し遠くにある大きな公園。入場料四百円で、朝から晩まで遊んでやる！　金がない俺にはうってつけの遊び場だ。

俺と同行するのは、恵梨と梨香。二人も予定がないらしい。電車の駅で待ち合わせして、線路に沿って歩いていく。え？　何？　電車に乗れって？　だから、言ってるだろ。金がねーんだよ！

そういうわけで、駄弁りながら歩いていたら。目的地が近付いてくる。公園までは一駅くらいだ。これなら帰りも歩きで十分だろう。

公園に辿り着き、入場料を払い、中に入る。はしゃぎ回る恵梨と梨香を連れて、園内マップに目を向ける。う～ん……無料で遊べるところはどこだろう？　俺が園内マップに目を向けていたら、急に横から指が伸びてくる。聞こえてくるのは梨香の声。

「ここに行こう！　迷路だって。凄く面白そうだよ」
「迷路……？　いいね……。凄く楽しそう」と恵梨。
「じゃあ、そこにするか」

頷く俺の左腕に抱きつくのは恵梨。恵梨の様子を見て、梨香が対抗してくる。俺の右腕に抱きついて、騒ぎ出す。

「せっかくのデートなのに、何で三人なのかな？」
「信也も二人に増えたら……ダブルデートなのにな……」と恵梨。
「んなこと言われても、困るっつーの。俺だって、分身できるもん

ならしてみてーよ」

俺が言ったら、二人して不満そうな顔をする。『それで困ってるんだから』という話をぐだぐだと聞かされながらも、迷路のある場所へと移動だ。

見えてくるのは、ちょっとしたお遊び広場。迷路の他にもアスレチックなどがあり、子どもの遊び場になっている。小さな子どもは楽しんでいるが、俺達みたいな年の人間が遊んでいる風景はない。

そんなことなど気にもせずに、恵梨と梨香が駆けて行く。二人の姿を見て、喜び出す子ども達。双子が珍しいのか。「同じ顔！」と言いながら、恵梨と梨香に指を差す。二人が子ども達と戯れながら遊んでいるのを眺めていたら、不意に隣から声が聞こえてくる。

「えらい楽しそうやなぁ～。やっぱ何でも楽しまなあかんよな。よっしゃ！　わいも参加しよう！」

はぁ？　と思いながら、横を振り向くと。知らない男が立っていた。髪を金髪に染めていて、ちゃらちゃらした雰囲気。しかも、サングラスを掛けてやがる。お前が行ったら、子どもが泣くぞ。俺の気持ちは伝わらず、チャラ男が遊び場へ向かって走り出す。

チャラ男の出現にビビりだす子ども達。もちろんの如く、親元へと駆けて行く。恵梨と梨香も疑わしい目つきでチャラ男を見ながら、俺の元へと駆け戻る。

残されたチャラ男は周りの事など気にもしないで、一人で迷路に

入って行った。今のうちに、出入り口を塞いでしまえばチャラ男を封印できるのになぁ～。ああいう空気を読めない格好をしている奴って、俺よりもバカなんじゃねーの？　って、たまに思う。

呆れながら迷路に目を向ける俺に向いて、梨香が口を開く。

「何か、あの人。気持ち悪いよね」

「別の所に……行こうよ……。何だか、遊ぶ気になれないし……」

恵梨が言う。

「そうだな。じゃあ、迷路は諦めて。あっちに行くか」

俺が適当に指を差して、三人で迷路から離れる。けったい事には近づかないのが一番だろう。何かあってからじゃあ、遅いもんな。

そういうわけで、公園の中をほっつき歩く俺達。と言っても、歩くだけで何か特別な事をするわけでもない。何せ何かするたびに金が掛るんだ。世の中、何でも金銭主義か。本当に無一文には厳しいよなぁ～。

歩きまわって、話をしたり、駆けっこしたり。そんな事をしていたら、目の前に土産物屋が見えてくる。買い物をするわけでもなく、土産物屋に入る俺達。要するに、ウインドウショッピングって奴だ。

店の中は花の香りで充満していた。香水や芳香剤に、鉢植えや切り花など。パッと見る限り、草花の商品が多い。公園なだけに、そういう物が多いのだろうな。恵梨と梨香がキャイキャイと騒ぎながら、商品を見て回る中。俺の目に止まるのは、奇妙な人物。

とある植木の前にて、腕を組みながら独り言をつぶやいている男が一人。黒いコートを着ていて、マジで怪しい。さっきのチャラ男の怪しさを一とするなら、こいつは百くらいだろう。格好以上に、独り言がこえーよ。

黒コートが一人で駄弁る。

「だけどさぁ、どうしようもないじゃん。今更どうにかなる事でもないし。そりゃあ、悪いのは向こうだよ。でも、相手にはこっちの声が聞こえないでしょ？　文句だって言えやしないよ。かといって、俺が言いに行ったら。危ない奴だと思われるだけだもん。え？　何？　一緒に連れて行ってくれって？　いや、気持ちはわかるけど……。俺はお金ないし、今は人が多いの。これ以上、追加は無理だよ。え？　そこをなんとかって？　そんな事を言われても……」

もしかして、こいつ……植木とお喋りしているつもりか？　あー、成る程。きっとそういう病気なんだろうな……。

俺が可哀そうな物を見る目で、黒コートを眺めていたら。黒コートに近づいてくる子どもが一人。こいつも黒い服を着ていて、フードをかぶっている。黒コートに続く怪しさだ。黒フードの子どもが黒コートに声を掛ける。

「未来さん。傍から見ると、変人ですよ。お願いですから。こういう所で、そういう事をするのは止めてくれませんか？　いくら僕でも介護ヘルパーにはなりたくありませんから」

「超失礼じゃん！　シバ君、何様のつもり！？」

「神様です」

ヘラヘラと笑いながら、冗談を言う子ども。しかしながら、しっ

かりした子どもだなぁ……。言葉遣いだけ聞いていると、まるで大人のようだ。俺が思わず見入っていたら、子どもがちらりと横見する。そして、視線が合い、すぐに俺が目を逸らす。

あまり凝視するのは良くないよな……。それでも何だか気になって。品物を見る振りをしながら、二人の話を耳に入れる。聞こえてくるのは子どもの声。

「やっぱり変な目で見られていますよ。変人だと思われたくなかったら、さっさとここから離れましょう」
「離れたいのは山々なんだけど、この子が連れてけってうるさくてさぁ～。シバ君、買ってあげてくれない？」
「買うのは構いませんが、持っていくとなると……」
「狭間を通って、とりあえず家に持って帰るよ。それから、すぐに戻ってくるから。ねぇ、いいでしょ？」
「もちろん、お金は返していただけ……」
「いや、無理」
「……」

ちらりと視線を向けると、白い目で黒コートを見る子どもの姿が目に入る。何て言うか……大変だな。黒コートはこの子どもの兄貴なのだろうか？　とにかく、こんな兄貴がいたら大変だろうな。

俺が同情していると、誰かに肩を叩かれる。振りかえると、梨香だ。俺の鼻先に右手を近付けて、口を開く。

「ねぇ、この香り。凄くいいと思わない？」
「何か……甘ったるいな」
「いい香りでしょ？」
「ん～、微妙」

「え～、微妙？　いい香りだと思ったのにな……」

梨香が右手を自分の鼻先に近付けて、考え込む。ふと気がつくと、あの兄弟が消えていた。もう立ち去ったらしい。きっと弟が兄貴を引き連れて行ったんだろう。

それにしても、今日は変な奴らとよく会うよな。という俺達だって、変な奴らか。恵梨と梨香はこれでも元は一人だったんだからな……。

祝日〈その2〉

土産物屋で時間を潰した後、目的もなく放浪だ。盆栽館や文化館、庭園などに寄っていたら、難なく時間が過ぎて行く。

気が付けば昼過ぎ。歩いていたら、湖が見えてくる。湖の上にはボートがちらほら。ボート乗り場で借りられるのだろうが、乗るほどでもないよな……。そう思いながらも、湖へと近づく俺達。

それにしても、結構な広さだ。この湖の周りを一周するだけで、どれくらい時間が掛るのだろうか？　時間つぶしにはもってこいだろうな……。

俺がぼうっとしていたら、恵梨が湖へと駆けて行く。そして、キョロキョロと地面に目を向ける。あいつ……何してるんだ？　俺が近づいて、声を掛ける。

「おい、恵梨。何してるんだよ？」
「うーん、これくらいかなぁ……」

恵梨が何かを拾い上げる。恵梨の手を覗き込むと、そこには平たい石だ。成る程。と思った直後、恵梨が俺に口を開く。

「見ててね……。何回くらい行くかな……？」

そう言った後、恵梨が湖に向かって、石を投げる。結構な速さで飛んで行き、良い角度で水面に触れる。そのままピョンピョンと兎の如く、跳ねて行き。最後は湖の中に沈んでしまった。

十数回は跳ねたな。上手いじゃん。俺が感心していたら、後ろから声が聞こえてくる。振りかえると、次は梨香だ。自慢げに石を見せつけて、俺に話しかけてくる。

「次は私だよ。見ててね。恵梨を抜いてみせるから」

「できるかな……？」と恵梨。

「頑張れよ」

恵梨の隣で、俺が応援だ。梨香が頷いて、湖に向かう。思いっきり、勢いをつけて、石を放り投げる。勢いのついた石は湖に向かって飛んで行くが。まったくもって、方向音痴。水面に跳ねる事もなく、とあるボートにまっしぐらだ。

ヤバいと思った時には既に遅い。ボートに乗っていた子どもの頭に向かって飛んで行く梨香の石。俺達が声を出す暇もなく、子どもの頭に直撃する。皆で蒼白していたら、子どもがそのまま湖に落ちる。

固まる空気。心臓が爆音を立てている。これ……かなりヤバくね？　謝って許してもらえるのか？　後の事を考えて、冷や汗を流す俺だが。ふと現状を思い出す。子どもが湖に落ちた。早く助けないと！

そんな中、急に聞こえてくるのは笑い声。子どもが落ちたボートの上で、黒コートの男が腹を抱えながら笑っている。あいつがいるってことは……落ちた子供は例の黒フードか。ヤバい、ヤバい。あの年齢で、頭に石を食らって、水に落ちたら。下手すりゃ死ぬよな？　マジ、やべーよ！

黒コートの方は役に立ちそうにない。何せ病人だ。弟が湖に落ち

ても笑っているんだから、相当可哀そうな兄貴だ。こりゃあ、救急車が二台いるかもしれないな。あ、それより救急車。マジで呼ばないといけないんじゃないのか？　っていうか、どうすればいいんだ？

頭で思い描いても、身体が硬直して動かない。冷静になれない俺は、何から手をつけていいのか分からない。それは恵梨も梨香も同じらしい。二人も涙顔で棒立ちしている。黒コートの笑い声が聞こえてくる中、起きる出来事は予想を上回る物。

突然に、ボート周りの水面が揺らぎだし。派手な水しぶきをあげて、ボートが引っくり返りだす。えぇー！？　って思う間もなく、ボートが沈み黒コートまで消えてしまう。ヤベーよ、被害者が二人に増えやがった！

っていうか、何でボートが引っくり返るんだよ？　石は子どもに直撃したが、ボートには当たっていないはずだ。一体、何が起きてるのか？　言葉を無くす俺達の隣で、聞いた事のある声が聞こえてくる。

「何や、何や？　何が起きたんや？」

隣を向くと、迷路で会ったチャラ男だ。助けを求める相手がいないので、思わず俺が口を開く。こんなチャラ男でも、話を聞いてくれるならありがたい。味方が一人いるのといないのとではわけが違う。

「ボートが引っくり返ったんだ。子どもと……その兄貴が湖に落ちた。兄貴もあれだけど……あの子どもは頭に石を食らって。ヤバいかもしんない」

「石？　何や、ようわからんけど。とにかく二人落ちてんな。よっ

しゃ、わいが救助に向かうさかい、兄ちゃんは人を呼んできてくれや」

「わ、私が行きます！」

俺が答える前に、梨香が口を開いた。それにしても、このチャラ男。思っていた以上に、人ができているじゃないか。梨香が立ち去り、チャラ男がサングラスを外して口を開く。

「よっしゃ、待ってろや。わいが助けてやるよってにな」

「えぇ！？」

チャラ男の顔を見て、俺と恵梨が目を丸める。えぇ！？　この人……もしかして。問いかける時間もなく、チャラ男が湖へとダイブだ。ボートが沈み、泡が噴き出る場所に向かって泳ぎだす。だけど、あのチャラ男が……。まさか、本物なわけないよな？

俺と恵梨が人命救助の様子を真剣に眺めていたら、湖の中から気泡が浮き上がってくる。俺達の目の前、一メートル先辺りだ。死体なんて浮き上がってこないでくれよ。誰でもいい、頼むから生きていてくれ。

俺達が息をのんでいたら、突然に気泡の辺りから何かが飛び出てくる。顔をのぞかせるなんてレベルじゃない。サメが空を飛ぶ鳥を捕まえるくらいに、勢いよく飛び出してきた。それがクルクルと回転しながら、俺達の隣に着地する。よく見ると、黒フードの子ども……。思わず俺が一人で呟く。

「アクロバティックにも程があるだろ……」

俺の言葉を聞いて、子どもが睨みつけてきた。かなりお怒りの様

子……。そりゃあ、もちろんだろう。頭に石を食らって、湖に落ちたら。誰だってマジ切れる。

子どもがフードを外して、首を振る。水しぶきが辺りに散らばり、地面がびしょ濡れだ。それ以上にずぶ濡れなのは子ども自身。まぁ、湖に落ちたのだから、当たり前か。不機嫌そうな子どもに向いて、恵梨が口を開く。

「あの……大丈夫？　怪我はない……？」
「非常に頭が痛いです」
「あの……えーっと。今、人を呼んでいるから……。すぐに手当てしてもらえるから……。横になって休んでいていいよ……」
「結構です。それよりも、一体誰ですか？　石なんて物を投げたのは？」
「えっと……その……」
「僕だったからよかったものの。未来さんを除いて、他の人に当たったら、ごめんなさいじゃあ済みませんよ。当たり所が悪ければ、死んでしまいます。相手が子どもだったら、尚更です。殺人ですよ、殺人。あなた達みたいな年で警察のお世話になるなんて、親が泣きますよ」

そして始まるのはお子様による説教。なぜか俺と恵梨が怒られ、ごめんなさいと謝罪する破目に。っていうか、俺は関係なくね？恵梨以上に無関係だと思うのだが……。そんな事、今の状況で言えるわけがない。

しかしながら、生きていてくれて良かった。不満は尽きないが、生きていた事に少し安心だ。それに大怪我でもなさそうだし……。後は病気の兄貴だが、あいつは勝手に沈んだんだから。俺達は関係ないだろう。

不意に黒フードが湖に振り向く。

「それにしても遅いですね。未来さん……。魚でも捕まえているんでしょうか？」

「いや、それはないだろ……」と俺。

「あの人も……遅いよね」

恵梨が言うのは、チャラ男の事だろう。恵梨の言葉に、黒フードが問いかけてくる。

「もしかして、未来さん以外にも溺れた方がいらっしゃるのですか？」

「いや、溺れたんじゃなくて。助けに行ったんだ」

「助けに……。でも、姿が見えませんけど」

「いや、だから変だなぁ……と」

「……」

俺達が首を傾げていると、岸辺から遠い水面に大量の気泡が浮き上がってくる。直後、黒コートが湖から顔を出す。が、すぐに沈んで見えなくなる。しばらく後に顔を出すのはチャラ男だ。が、それもすぐに沈んで見えなくなる。

次はどちらが顔を出すか？　出てきたのは黒コート。発狂気味に叫び出す。

「こいつ何なの！？　殺されるー！」

次に顔を覗かせるのはチャラ男。

「すまーん！　わい、泳がれへんのや！」
「うぉい！？　じゃあ、何で飛び込んだんだよ！？」

俺が大声で突っ込みだ。泳げないのに、湖に飛び込むなんて。バカとしか言いようがない。溺れる二人を見て、黒フードの子供が爆笑する。腹を抱えながら大笑いだ。聞こえてくるのは黒コートの声。

「マジで助けて！　シバ君！　これ笑えない！　マジでこいつウザい！」
「頑張って下さい。未来さんなら余裕ですよ」
「余裕ないし！　この足手まといをどうにかしてー！」

黒コートは本気で助けを呼んでいるようだが、子どもの方は至って気にしていない。ケラケラと笑いながら、タオルで自分の服を拭いてやがる。というか、そのタオルはどこから出現したんだ？

そうこうしているうちに、梨香が人を連れて帰ってくる。園内の救助隊だろう。救命道具を使い、二人を何とか救出する。

その後、ゴタゴタと話はあったが。警察沙汰にはならなかった。それもこれも、子どもが石の話をしなかった事と。死人や怪我人が出なかったおかげだろう。久しぶりに本気で感謝だ。子どもと神様にありがとうと頭を下げたい。

祝日〈その3〉（前書き）

突っ込みどころが多すぎて、主人公が付いていけてない……。

祝日〈その3〉

気が付けば夕暮れだ。皆して、お疲れ気味。すげー、ダイナミックイベントにはなったが。二度と経験したくはない。やっとのことで救助室から解放されて、事件のメンバーで外を歩く。不意にチャラ男が口を開く。

「ほんまに勘弁してな。わざとやないんやで。兄ちゃん」
「……いや、わざとでしょ？　狙ってやったとしか思えないんだけど」と黒コート。
「いやいや、ちゃうちゃう。狙ってへんって。ほんまに、わいは兄ちゃんを助けようと思てやなぁ～」
「それでもさぁ……、泳げないのに湖に飛び込む奴なんて普通いないよ。アホでもバカでも飛びこまないよ」
「いやなぁ……こんな事をいうのは今更かもしれんけどなぁ……。わいもテンパっとってん」
「いや、でもさぁ……」

納得いかなさそうな黒コート。その隣で、黒フードの子どもが口を開く。

「まぁ、いいじゃないですか。皆して、無事だったのです。それでよしとしましょうよ。それに、僕の知り合いにもいますよ。泳げない癖に海に飛び込んだバカな人が。懐かしいですね～。こういう事をする人って、案外に多いのかもしれません」
「せやろ！　やっぱりなぁ～。わいもそう思てた」とチャラ男。
「いや、何が？　何を勝手に納得してるの？　わけわかんないんだけど」

黒コートがチャラ男に目を向ける。不意にチャラ男が話を変え出す。

「せや！　せっかくやから、このメンバーで食事に行かへんか？　もちろん、わいが奢るやさかい。ええやろ？」

「このメンバーで食事ですか？　何だかけったいな組み合わせですね」と黒フード。

「これも何かの縁や。それに、わいも迷惑だけ掛けて、サイナラなんて言いたくないねん。やっぱり締めはきっちりしておきたいしな」

「まぁ、別に。俺は構わないけど」と黒コート。

「僕も構いませんよ。あなた達はどうされますか？」

黒フードが俺達に目を向ける。もちろん、俺達は遠慮だ。もとはと言えば、梨香が投げた石が黒フードに直撃して勃発した事件だ。それなのに、飯を奢ってもらうなんて。流石の俺でも遠慮する。梨香が真顔で両手を振りながら言う。

「いいです、いいです。私達はそんな……食事なんて。元々、私のせいでこんな事になったのに……。あの……その……」

「そんなん気にしたらあかんで。別にええやんか。喧嘩した後は仲直りと一緒や。最後くらいは気よくして終わろうや。よっしゃ、皆で飯食おか？　あっちにレストランあるねん。まだ開いてると思うし。ほな、行くでー」

勝手に話を進めて、走り去るチャラ男。断る暇もなく、俺達も強制参加させられる事に……。黒コートが肩をすくめて、話し出す。

「調子がいいよね。俺はああいうタイプは苦手かも」

「何を言っているんですか？　むしろ、得意でしょ？　未来さんと気が合いそうなオーラをバリバリに感じます」

「気が合うわけないじゃん。あれはハプニングメーカーだよ。事件を巻き起こす人物だよ。あまり係わりたくはないね」
「どうせ暇をしているのですから、いいじゃないですか。それよりも、あの人……勝手に行っちゃいましたよ。追いかけます？」
「歩いていても追いつくよ。目的地は見えてるから。無理して走る必要はないね」
「まぁ、そうですね」

ヘラヘラと笑う黒フードに、ため息をつく黒コート。えーっと……俺達はどうすればいいんだ？　話の流れから逃げ出せなくなってしまった。恵梨と梨香は困り顔で俺に目を向ける。しかし、行くしかないよな……。ここで断るような真似はできないし。

レストランの中に入ると、チャラ男が中で待っていた。席を確保したようで、手を上げて俺達に声を掛ける。

「ここや、ここ。この席が広いで～」

大袈裟に手を振るチャラ男に向かって、黒コートが手を上げる。ぞろぞろとチャラ男の所へ移動。皆で適当に席に着く。メニューを見て注文だが、そんなにあれやこれやと好き勝手な事を言えやしない。

俺と恵梨に梨香が黙り込み、黒コートと黒フードがメニューを覗き込む中。チャラ男が勝手に手を上げて、ウェートレスに呼び掛ける。おい、まだメニュー……決まってねーんじゃねーの？

ウェートレスがやってきて、まずは黒コートが口を開く。

「じゃあ、俺はクリームホットケーキとコーヒーで」
「未来さんの夕食はまるでオヤツですね。それって、食後に注文するものでしょ？」

口を挟むのは黒フード。黒コートが黒フードに話しだす。

「別にいいじゃん。美味しそうなんだから」
「まぁ、いいですけどね。じゃあ、僕はミラクルチョコレートパフェでお願いします」
「シバ君こそ自重しなよ。パフェって、ホットケーキ以上じゃない？」
「最近はチョコレートパフェを食べていないので。禁断症状で集中力がなくなって……」
「禁断症状なんてないでしょ？　それはただの飲みすぎだよ。お酒止めれば治るかもね」
「薬中に言われたくありません。こちらは付き合いというものがあるんですよ。何せ大学の講師ですからね。上にも下にも頭を下げて、頑張っています」
「頭なんて下げる必要ないのに。全ては暴力で解決するよ」
「そんな事をしてみなさい。神天界が黙っちゃいません。いくら僕でも組合を敵には回したくないですね」
「シバ君なら、勝てるのになぁ～」

不意に黒コートがチャラ男に目を向ける。

「で、そっちは決まった？」
「何や、兄ちゃんらはそれでええんか？　わいが奢るんやさかい、遠慮はいらんで」
「遠慮なんてしてないよ。これで十分」

「ほな、次はわいやな。じゃあ、わいは……」

ここから恐ろしい出来事が。チャラ男の奴が何を思ってか。メニューを指差し、次々と注文を始める。え？　お前、そんなに食うの？　目を丸くする俺達一同の事など気にもしないで、チャラ男が注文を終える。俺と恵梨に梨香は飲み物だけ注文だ。

それにしても、チャラ男の奴……本当にあれだけの量を一人で食べるつもりか？　相当な量だぞ。十人前近く頼んでいた気がする……。ウェートレスさんも『かなり多いですよ』って声を掛けていた。それでも、チャラ男は気にもせず。『これくらい大丈夫や』と言っていたが……。

注文した料理が来るまでの間、沈黙に耐えられないのか、チャラ男が話しかけてくる。

「ほな、せっかくやし。自己紹介しよかー？　そこの嬢ちゃんからな」

「え……？　わ、私……ですか？」と恵梨。

「せやせや、端っこから攻めて行くでー」

頷くチャラ男に対して。戸惑う恵梨。小さく返事をした後に、自己紹介を始める。恵梨の紹介が終わり、次は梨香が紹介だ。梨香が紹介を終えた後に、チャラ男が二人に声を掛ける。

「お二人さんはあれか？　双子ちゅう奴か？」

「瓜二つですからね。聞かずともそういうことでしょう」と黒フード。

恵梨と梨香はヘラヘラと笑いながら、適当に頷いている。まさか、

二人に分身しただなんて言えるわけない。言っても信じてもらえないだろうけど……。恵梨と梨香の様子を見て、チャラ男が質問してくる。

「双子って事は、嬢ちゃんら……テレパシーとかできるんか？」

「できるわけがないでしょ？　似通った考え方はあるかもしれませんが、テレパシーなんてそんな……」黒フードが口を挟む。

「さぁ？　案外にできたりして……」

黒フードの口を止めるのは、黒コート。何やら楽しげだ。何がそんなに面白いのか？　黒コートの様子を見て、黒フードが眉をしかめる。未だに問いかけるチャラ男に対して、恵梨と梨香は首を振るばかり。テレパシーはできないと言い続けている。

その後、俺が紹介して。次に、黒コートの紹介だ。

「俺の名前は森岡未来（もりおかみらい）だよ。詳細は極秘だね」

「極秘なんて言われたら、気になってしゃーないわ。兄ちゃん、学生ちゃうよな？　仕事は何してんのや？　んで、家はどこ？　趣味は何や？」

「君に説明する義理はないよ。っていうか、何でそこまで言わなきゃいけないわけ？　俺達は、湖で溺れた以外の関係はないじゃない。他人よりも酷い関係だよ。普通……マイナススタートで、いきなりそんな事聞く？」

「マイナスやから聞いとんのや。仲良くなろう思てな。わいも頑張ってるねん」

「親しくなんてならなくていいよ。どうせ一期一会だから」

「んなこと言わんといてーや」

チャラ男が黒コートのご機嫌を取ろうとする中、黒フードが話を

進める。

「僕は神上シバルです。まぁ、今はのどかに生きています」

「ちなみに、お前……何歳なんだ？」と俺。

「僕ですか？　えーっと……何歳にしましょうか……？」

いや、選ぶなよ！　歳は決まっているだろうが！　その歳でサバ読みなんて、必要ねーよ。俺の前では腕を組み考えるシバル……。っていうか、シバルって……変わった名前だよな。まぁ、かなりマセガキだとは思うが……。見た目は小学校低学年くらいか？

シバルが黒コート……未来に声を掛ける。

「未来さん。僕って何歳ですか？」

「天才かな？」

「成る程……。じゃなくて、歳の事を聞いているんですよ」

「千歳かな？」

「まぁ、リアルに言うとそれくらいですけど。そんな事を言ったら、笑われてしまいますし……」

「じゃあ、もう八歳にしといたら？」

「八歳ですか……。わかりました」

シバルが頷き、俺を見る。

「八歳だそうです」

「それは今決めただろ!?　そうじゃなくて、本当の歳を教えろよ！」

「本当の歳ですか？　そんなの覚えちゃいませんよ。まぁ、ざっと千年は生きているでしょうけど。正確には……何歳なのやら？」

駄目だ、兄に次いで弟もあっち系だった。っていうか、あれ？森岡と神上って……苗字違うじゃん。こいつら兄弟じゃなかったのか？　俺の疑問をそのままに、梨香が未来に口を開く。

「あの……お二人はお友達ですか？」
「え？　俺とシバ君？」
「あ、はい……」
「うん、友達だね。悪友みたいなものかな？」
「親友にしてください。悪友なんて言われると、何だか人聞きが悪いですから」

シバルが口を挟む。俺が未来に問いかける。

「兄弟じゃなかったのか？　俺はてっきり兄弟かと……」
「こんなの弟でも兄でも嫌だよ。文句が多いし、黙らないし」
「僕だって、未来さんを兄弟にするくらいなら。カメムシを兄弟にしたほうがマシです。未来さんは面倒事ばかり引き起こしますから」
とシバルが乱入。
「ちょっと待ってよ！　俺はカメムシ以下なの！？　それ、酷くない？」

未来がシバルを怒鳴り散らす。シバルは未来の話など聞いちゃいない。恵梨と梨香を質問攻めにしているチャラ男に目を向ける。

「次はあなたですよ。一番謎めいていますから、詳しくご説明願いますね」
「いやぁ～、シバ君ほどでもないで。シバ君の方がよっぽど不思議やわぁ～」
「……」

チャラ男を見て、黙るシバル。未来に近づき囁き声だ。

「この人……馴れ馴れしいです」

「今更気付いたの？　俺なんて、出会った直後に気付いたよ」

「ちょっと不謹慎（ふきんしん）ですね」

「親の躾（しつけ）かなぁ～？」

二人が不満げに喋る中、チャラ男が自己紹介を始める。

「わいの名前は水谷遼（みずたにりょう）や。よろしゅうなぁ～」

チャラ男が言った直後に、俺達の誰もが黙り込む。水谷遼って確か……。

祝日〈その４〉（前書き）

流石、シバル！
現役ではないが……主婦経験のある者はこういう時に強い。

祝日〈その4〉

まず初めに口を開いたのは梨香だ。チャラ男に向かって、問いかける。

「水谷遼（みずたにりょう）って……。あの……Ｒｅａｌｉｇｈｔ（リアライト）のリーダーをしていた……リョウですか？」

「そうそう、それや」

Ｒｅａｌｉｇｈｔと言えば、超人気の音楽グループ……。去年に大流行したにも関わらず、グループ内のゴタゴタで解散してしまった。何とも儚いグループだ。俺もいくつかＣＤを持っている。熱狂的なファンではないが、音楽性はかなり好みだ。

まさかと思ってはいたが……本物だったのか。ヤバい、色紙なんて持ってねーよ。せめてサインを貰いたい。恵梨や梨香も同じらしい。思わず自分のポケットをまさぐっている。俺達が有頂天になる中、シバルが口を開く。

「Ｒｅａｌｉｇｈｔ……聞いた事がありますね。確か、以前にメモリーさんがＣＤを持ってきて下さり。歌から、振りつけ。全てを極めた、あれですよね？」

「そう言えば、そんなことがあったね。あの時は楽しかったなぁ～。メモリーも珍しくハイになっていて。俺達がはしゃぎ回っていたら、姫様がご登場。ＣＤをぶち壊されて終わったけどね」と未来。

「あ～、そうでした。それ以後は、見かけませんね。どうなったんでしたっけ？」

「解散したって、聞いたけど……」

ぼそりと呟く未来に向いて、リョウが話に乗りだす。

「せやねん！　解散してもうてん！　わいも何でかはわからんねんけどな。皆が言うには、わいにはもうついていけんらしいねん。わいも何度も止めてんけど……。あかんかった。わいの何が悪かったんやと思う？」

「具体的に説明しよう。おせっかいな所、空回りな所、足手まといな所、馴れ馴れしい所、言いだしたら切りがないな」

未来が腕を組みながら、ザッパリといいのける。未来の言葉を聞いて、リョウが落ち込みだす。ウェートレスが食事を持ってくる中、シバルが未来に注意する。

「未来さん……いくら何でも言い過ぎですよ。落ち込んじゃったじゃないですか」

「本当に落ち込んでいるのだとしたら、俺の気分は最高潮」

「湖で足を引っ張られた事を、未だに根に持っているんですか？　あなたは大人でしょ？　少しは大人らしくしてください」

「こいつがいなけりゃ俺だって、普通に脱出できたのに……。こいつのせいで、カッコ悪い事になって。そりゃあ、メンバーも嫌がるよ。こんなのがリーダーだとマジで迷惑だね」

「ちょっと未来さん！」

シバルが未来に怒鳴るが、未来はプイッと顔をそむけている。マジで子どもだな……。大人っぽいシバルに対して、未来はガキレベルだ。ため息をつくリョウに向かって、恵梨が話しかける。

「あの……リョウさん。落ち込まないで下さい……。私もＣＤを持っていますけど、凄くいい音楽だと思います……。解散した時は凄く残念でしたけど……。また……メンバーと話しあうとか……色々

して。新しい音楽を……作って下さい……。あの……陰ながら、応援していますから……」

「ええこと言うなぁ～、嬢ちゃん。ありがとう。元気出てきた」

リョウが笑顔で恵梨に振り向き、恵梨が恥ずかしげにうつむく。火照る恵梨の隣では、梨香が緊張気味だ。そりゃあ、超有名人と共に食事をしているのだから、緊張気味にもなる。

俺だって、黙ってはいるが、リョウには興味がある。何せここで親しくなっておけば、後でいい事がありそうだ。友達に自慢できるだけじゃなくて……。もしかしたら、テレビに出させてもらえたりして……。

俺が妄想していたら、急に驚きの言葉が聞こえてくる。リョウが何を思ってか、黒コートに口を開く。

「せっかくやから、兄ちゃんら。わいとバンド組まへんか？」

「舐めんな」と黒コート。

「いきなりですね～」

黒フードが呆れ声だ。おいおい、ちょっと待てよ。リョウが本気なら絶対に組んだ方がいい。音楽ができなくったって構わない。リョウと親しくなるチャンスじゃないか。こんなチャンスは一生に一度……あるかないかだ。それなのに、未来の奴は興味がないのか。欠伸をしながら、リョウに言う。

「馬鹿げてるね。大体、そういう事を聞くのなら。まずは楽器を使えるか使えないか。それくらいは質問してから、誘ってよ」

「音楽は愛やで。愛があれば大丈夫や」

「そんなわけないでしょ？　無から、有は生み出せないよ。せめて

多少なりとも情報や技術は必要だね」
「それじゃあ、兄ちゃん。何かできるん？」
「ん～、ピアノは得意だけど。後は……歌かな？　まぁ、やれって言われたら。何でもできるけど」
「兄ちゃん……天才か？」
「さぁ？　俺よりもシバ君の方が天才じゃない？」

未来がシバルに目を向けるが、シバルの奴は話を聞いちゃいない。ウェートレスが持ってきたパフェに夢中だ。目を輝かしながら、パフェに気を取られている。そんなシバルの頭を小突いて、未来が質問する。

「シバ君。楽器は何が得意？」
「え？　楽器ですか？　何でも得意ですよ。まぁ、僕が苦手な事と言えば。犬と神様系の授業ですね。あの……実技はいいのですけど。神力とか魔力とかの構成がどうたらこうたらって……。正直に言って、わけがわからないんですよ」
「思い返せば、ハルトはできのいい弟子だったなぁ～。人間の頃も、人間を止めた後も。勉強については疎かにしない弟子だった……。シバ君以上に天才だね。あの子が一番できる子だったよ。あ～、懐かしい。今頃、どうしているんだろう？」
「未来さん、何かある度にその話を蒸し返しますね。今更になって、過保護ですか？　当初の頃は、未来さんの訓練がかなりきついって、ハルトさんが喚いていましたよ。過保護になるなら、あの頃に戻って優しくしてあげて下さい」
「そんな事より、とりあえずシバ君は何でもできるって。まぁ、俺達は合唱団しているから。何にしても、歌は得意だね」
「完璧や～。もう決まりやな」

リョウが超嬉しげに、グッドポーズをする。そんなリョウを見て、

シバルが質問をしてくる。

「え？　何の話ですか？」

「わいらは今日から家族や！」答えるのはリョウ。

「は？　何を言っているんですか？」

「わいとバンドを組むって話や。な、兄ちゃん？」

「まだ組むなんて言ってないじゃない。あくまで、お誘いの話だよ」

未来が冷静に状況説明だ。シバルがようやく理解して、首を横に振りだす。

「いや、無理ですよ。バンドなんて……。大体、僕は大学の授業があるんです。向こうで講師しながら、こっちでバンドを組むなんて。時間的にかなり厳しいですよ」

「大学の授業って、何だ？」と俺。

「物理学です」

「えっと……もしかして、あれか？　飛び級って奴か？」

「違いますよ。僕は講師です。生徒に物理学を教えているんですよ」

「教えるって……お前は子どもだろ？」

「……」

不満げに黙るシバル。急に立ち上がり、席を立とうとする。その腕を掴むのは未来だ。未来がコーヒーを飲みながら、シバルに言う。

「ここは我慢だよ。そんな事をしたら、大騒動じゃない。こんな所でヘマをしたら、メモリーに怒られるよ」

「すみません……。つい、面倒くさくなって。最近は我慢強さが減りました。少し考えを改めなければいけませんね」

そう言って、もう一度、シバルが席に着く。パフェを食いながら

俺を見て言う。

「とにかく、僕は大学の先生をしています。まぁ、天才だとでも思っていて下さい。学校名を教えるわけにはいきませんが、嘘ではありませんよ。嘘だと思うのなら、それでも構いませんけど」

「シバ君はちびっ子天才先生ってわけやな。ええやんかぁ～。ちびっ子がバンドに入るなんて、えらい新鮮やし。よし、バンド名は何にする？」

「だから、言ってるでしょ？　僕にはそんな事をする暇がないって！」

シバルがリョウに向いて怒鳴り散らす。結構、マジ切れだ。その隣では、未来がホットケーキを食いながら幸せそうな顔。ウェートレスがどんどんと注文した料理を並べる。何ともぎこちない空気の中、口を開くのは未来だ。

「俺達よりも、そっちの……恵梨ちゃんと梨香ちゃんに、信也君？　君達は何かできないの？」

「私は……音楽は聞く事しかできないので……。楽器はちょっと……」と恵梨。

「私も無理です。信也はどう？」

続けて、梨香が言い。俺に話を振ってきた。戸惑う俺が何とか答える。

「い、いや……俺も聞くのは好きだけど」

メンバーに入れてくれるのなら、かなり嬉しいのだが。自慢できるほどに得意な楽器なんてないし。歌だって凡人レベルだ。まさに能力不足。先程、未来が『無から有は生み出せない』と言っていた

が。本当にそうだと思う。

乗り気でない未来とシバルに次いで、楽器を使えない恵梨と梨香に俺。これで諦めるだろうと思っていたが、リョウが思わぬ行動に出る。立ち上がり、少し席を離れてから。テーブルに振り替える。そのまま地面に手をついて、土下座だ。マジかよ!?　唖然とする俺達に向いて、リョウが口を開く。

「ほんまにこの通りお願いや！　一回でいいねん！」

「土下座なんて止めてよね。大体、俺達以外にも人なんてたくさんいるじゃない。君は有名人なんだから、メンバーを探すのなんて簡単でしょ？」

眉をしかめる未来。リョウが真顔で未来を見上げる。

「いや、わいは兄ちゃんらがいいねん。オーラを感じてん。神様からのお告げや。兄ちゃんらと組むと、絶対に上手い事いくねん！」

「神様からのお告げだって。シバ君、お告げなんて出した？」

「いいえ、僕はまったく。それにしても、ある意味で鋭い勘をしていますね、リョウさん。仕方ありません。一回限りなら、僕も参加してあげますよ。まぁ、未来さんの返事によりますけど」

シバルがパフェを食べながら、未来に向く。すぐにリョウが未来に熱視線を送りつける。じりじりと放たれるリョウの視線に、未来が耐えきれず口を開く。

「仕方ないなぁ……一回だけだよ。あまり無茶をすると、俺達も怒られるから。メモリーは怒ると根に持つタイプだから面倒なんだよ。それに、拗ねてふて寝されると困るし。一回限りなら、そんなに問題にもならないよね？」

「そうですね。大丈夫だと思います。だけど、僕は時間がないので。打ち合わせは最小限で頼みます」
「ありがとう！　ほんまに助かるわ！　この礼は一生掛けて返すから、期待しといてや！」

再び土下座をするリョウに対して、未来が首を横に振る。

「お礼なんて期待しないから。っていうか、いらないから。君から貰えるお礼って……。多分、蛇足以外にないと思うし」
「そうですね。しいていうなら、顔を上げて席について下さい。皆さんがこちらを見ていて、恥ずかしいですから」

続けて、シバルが口を開く。リョウが笑顔で顔を上げるが、すぐに真顔だ。

「それで、もう一つ……頼み事があるねんけど」
「何ですか？　もっとメンバーが必要なんですか？」
「いや、ちゃうねん。わい……もう腹いっぱいやねん」

沈黙する一同。机の上に目を向ける。大量の料理が目に映る。やっぱり一人でこの量は無理だよなぁ～。料理を見て、未来が俺達三人に目を向ける。

「君達……何も食べてないよね？　これ全部、食べれる？」
「いえ……全部はちょっと……」首を傾げる恵梨。
「自信がないです」梨香が小声で言う。
「ちょっと……きついな」と俺。

不意にシバルに目を向けると、何やらゴソゴソしている。どこからともなく取り出したのは食品を入れる容器……タッパーだ。シバ

ルが笑顔で口を開く。

「こういう時に便利アイテムです。これに入れてお持ち帰りすれば、家でも食べれますから。無理して食べる必要もありませんし、料理が無駄になる事もありません。お出かけの際には、一つは所持していたい物ですね」

打ち合わせ〈その1〉

食事をしながら、話し合いをして。電話番号やメールアドレスの交換に、次に会う日の予定を決める。なぜか音楽のできない俺達まで、参加することになって。リョウとアドレス交換だ。ラッキーと思いながら、文句も言わずに登録する。

次回の集合は日曜日、時間は昼の一時頃。リョウがよく通っていた喫茶店にて、集合することになる。再度、予定を確認した後に、未来が口を開く。

「じゃあ、俺はそろそろ行くよ。今日は疲れたし。もう帰って寝たいから」

「僕もそろそろ失礼させて頂きますね。それでは、また日曜日にお会いしましょう」

未来の後に、シバルが言って。二人が席を立ってしまう。そんな二人の姿を眺めながら、リョウが口を開く。

「何や、おもろい二人やったな。日曜日が楽しみやわ」

「何だか不思議な人達でしたね」

梨香がリョウに同意する。恵梨も頷き、俺も釣られる。だけど、確かに……奇妙な二人だった。リョウも変わっているが、あの二人も変わっている。

あんな怪しい黒コートを着た奴なんて見たことないし、あんな究極のマセガキなんて見たことない。あいつらは一体何者なのか？家族とかいるのか？　想像できない……。

未来とシバルが立ち去った後、残された俺達はリョウとお喋りする事に。緊張しながらも、和やかな時が過ぎる。いくぶん時間が経過した頃、リョウも帰ると言い始めた。帰って今後の準備をするそうだ。リョウの奢りでレストランを出て、別れの挨拶。

リョウと別れた後に、恵梨と梨香を連れて帰宅する。暗い道を歩きながら、今日の出来事を語りあう。三人共に有頂天だ。何せ超有名人に会い、その人とアドレス交換したのだ。こんな奇跡が訪れるなんて、思ってもみなかった。

日曜日を楽しみにしながら、二人と別れる。まだ日があるにも係わらず、興奮してきた。早く日曜日にならないか？　ワクワクしながら、家に帰る。

翌日になり、土曜日の事だ。学校にて、教室の中。俺と梨香の周りに集まるのは野次馬達。昨日の話に聞き入っているのだ。まぁ、野次馬と言っても松元と北原だけだが。他の奴に話し出すと切りがなくなる。リョウの電話番号を教えてくれやら、自分を紹介してくれやら。そんな事を言われると面倒だ。

小さく輪になりながら、俺が二人に説明を終えると。二人が一斉に質問を始める。それがもう、尋常じゃないほどに必死なのだ。まぁ、気持ちはよくわかる。何せ相手がＲｅａｌｉｇｈｔのリョウだもんな。そりゃあ、新作のゲームよりも興味のある話だろう。

松元が俺と梨香に質問をしてくる。

「じゃあさぁ、明日……斎藤達もリョウと会うのか？」

「うん、そうなの」頷く恵梨。
「すっごーい！　マジで、あのリョウと打ち合わせ!?　雫も行きたーい！」

北原が騒ぎ出す。他の生徒達が俺達に振り替える中、俺が北原に注意をする。

「おい、北原。声がでかいぞ。頼むから、この事は極秘にしてくれ。こんな話が大っぴらになったら、大変だろうが」
「明日かぁ～。明日は外せない用事があるからなぁ～。ねぇねぇ、サインだけでも貰ってきてくれない？　雫宛に、リョウ君より。って、書いてもらって。お願い、後で何でも奢るから。恵梨香ちゃん、親友でしょ？」

俺の話も聞かずに、梨香に両手を合わせる北原。梨香が呆気に取られながら、口を開く。

「こういう時だけ調子がいいよね。雫ちゃん」
「ほら、恵梨香ちゃんの大好きな駅前のミルフィーユを買ってあげるから。お願い、この通り！」
「ミルフィーユかぁ……、一つじゃあ、心もとないなぁ～」
「いくつでも、恵梨香ちゃんが欲しいだけ買うから」
「じゃあ、四つ！」
「四つ!?　恵梨香ちゃん……四つも食べると太るよ」
「文句があるのなら、サインはなしだね」
「わかった！　四つ買ってくるから、サインお願いね」
「仕方ないなぁ～。今回だけだよ」
「ありがとう！　やっぱり恵梨香ちゃんは最高だよね～！」

大喜びの北原を横目で見ながら、松元が俺に言う。

「斎藤く～ん、俺達って親友だよな？　明日は俺も暇だから、一緒にお供させて貰えないか？」
「や～だ」
「何でだよ、俺達は親友だろ？　ほら、今度にでも昼飯奢ってやるからさぁ～」
「俺の欲しいゲームを買ってくれるのなら、考えてやらなくもない」
「お前の言っているゲームって……あれだろ？　あの……新発売のＲＰＧ。名前は忘れたけど……。って、高いなぁ～。何で俺の場合はゲームなんだよ？　ミルフィーユ買ってやるから許してくれよ～」
「いいよ～、私が許してあげる。代わりに、ミルフィーユを四つ買ってね。買ってくれるのなら。明日、松元君も一緒に行っていいよ」

調子に乗りだすのは梨香。俺が梨香に文句を言う。

「おい、そんな事をしたら、ミルフィーユの合計が八つになるじゃないか。そんなに食ったら、マジで太るぞ」
「太らないし。皆で分けるんだから。ね？」

えへっと首を傾げる梨香。そんな梨香の笑顔に負ける俺。俺が諦めて、松元に言う。

「……しゃーねーな。恵梨香に免じて、連れてってやるよ。恵梨香に感謝しろよなぁ～、松元」
「マジ、最高だよ。恵梨香ちゃん。いやぁ～、斎藤はやっぱり恵梨香ちゃんには弱いなぁ～」
「やっぱ、お前はついてくんな」

喜ぶ松元に、言ってやる。すぐに松元が謝罪を始めるが、俺は聞く耳持たずだ。そっぽを向いて、お嬢様に目を向ける。青鷺高校に

入学して、数日が経過したが。未だに記者に囲まれている毎日だ。
お金持ちっていうのも大変だよな。

それでも、教室内では静かになった。というか、野次馬が減った。皆が飽き性だという事もあるが。どちらかと言えば、お嬢様の人付き合いの悪さにより、近づく奴が減ったんだ。稀に声を掛ける生徒もいるが、そっぽを向かれてお仕舞い。マジで冷血お嬢様だ。

お嬢様とリョウを比べるなら、どちらのレア度が高いのだろう？
やっぱりお嬢様か？　あれだけ金持ちだったら、リョウなんて目じゃないのかもしれないな。
ぼんやりとお嬢様を眺めていたら、お嬢様が振り返る。俺とお嬢様の視線が合い、すぐに目を逸らす俺。やべ～、こえ～。何だか猛獣に睨まれた気分だ……。

打ち合わせ〈その2〉（前書き）

シバル……ダイナミックに嘘ついた！

打ち合わせ〈その2〉

長い土曜日を終えて、日曜日に入る。駅前にて、恵梨達と待ち合わせ。俺が駅前に着いた頃には、皆が到着していた。松元に聞くと、一時間も前から駅前にいるらしい。よっぽど楽しみにしていたのだろう。今日の松元はいつも以上にテンションが高い。かなりウザい奴になっている。

メンバーが揃ったので出発することに。今日はテンションの高い松元を上手く利用して、金をもぎ取り。電車を使って、目的地へと向かう。松元を連れてきて、丁度よかった。歩きでは少し遠いから、どうしようかと考えていたのだ。

目的の駅へと着いた後、喫茶店を目指して歩いていく。五分ほど歩いていたら、喫茶店を発見だ。パッと見た感じ、少し風変わりな喫茶店。いかにもリョウが好みそうな店だな。

中に入ると、奥の席に知り合いを発見する。黒コートを着た男……未来だ。一人で携帯電話をいじっている。机の上にはコーヒーが一つ。シバルの奴はどうしたのか？　未来に近づき、声を掛ける。

「この間はどうも……」

「あぁ、君達か。悪いけど、シバ君は少し遅れるかもしれないって。ちょっと急用が入ったそうだから」

「あの……それで、リョウさんは？」

急に話に割り込む松元。未来が松元を一瞥した後、肩をすくめる。

「さぁ？　別に連絡もないし。時間になったら来るんじゃない？」

「そうですか……」
「まぁ、とりあえず、席に着いたら？　ここのテーブルは広いから、全員座れるでしょ？」
「あ、はい！」

緊張気味の松元が返事をして、皆で揃って席に着く。微妙な沈黙が辺りを包み、何ともぎこちない雰囲気だ。何と言うか……何を喋ったらいいのかわからない。一人で携帯をいじり続ける未来を無視して会話するのもいいのだが、そういう空気でもないから。どうにも話しづらい。

まるで面接前のように俺達が大人しくしていたら、やってきたのが黒フード。未来に近づき、声を掛ける。

「遅れてすみませんね。いやぁ～、静香さんに買い物を頼まれまして。ちょっと時間が掛ってしまいました。まぁ、頼まれた物は買えましたから、後はお渡しするだけです。それはそうと、そろそろ静香さんの誕生日なんですけど。何をプレゼントしようか迷っているんですよ。何か良い案はありませんか？」
「そうだね……。自分の首にリボンをつけて、提供したら？　きっと静香ちゃんなら大喜びだよ。その後に何が起きるかは知らないけれど」
「そんな事ができますか！？　真面目に考えて下さいよ！」

未来の言葉に、顔を赤らめる黒フード。いや、まぁ……そんな事はどうでもいい。そんな事より、めちゃくちゃ聞きたい事があるんだが……。俺が訝しげな顔で、黒フードに声を掛ける。

「なぁ……お前、誰だ？」
「へっ？　誰って……二日前にお会いしたじゃないですか。もう忘

れたんですか？」
「いや……マジで誰？」
「僕ですよ。神上シバルです。確か……斎藤君でしたっけ？　あなた、頭は大丈夫ですか？」
「大丈夫じゃないかもしれない……」

俺の頭がおかしくなったのだろうか？　シバルって……確か、子どもだったよな？　今、目の前にいるのは、どう見ても大人……。俺の記憶に残るシバルがそのまま成長したような風貌になっている。いや、あり得ないだろ？　子どもが二日で大人になるなんて……。

俺の頭が駄目になったのかと思い、恵梨と梨香に質問しようとしたら。二人が硬直していた。そして、同時に首を傾げる。俺と同じ境遇にあるらしい。状況を理解できない俺達が固まっていたら、不意に未来がシバルを見る。

「まだ気づかないの？　シバ君？　最近は更に鈍くなってきたね。平和ボケってやつ？」
「何がですか？　平和ボケなんて、そんな……」

不意に黒フードが黙る。直後、蒼白した顔で自分の身体に目を落とす。その後、硬直……。俺達と同じように動かなくなる。意味を理解していない松元が口を開く。

「何がどうしたんだ？」
「あらら……やっちゃいましたね。何て言い訳をしましょう？」と黒フード。
「成長期って事にすれば？」

未来が黒フードに言う。黒フードが腕を組んで考え込んだ後、俺

達に目を向けて話し出す。

「まぁ、成長期ってやつですよ。気にしないで下さい」

「あぁ、わかった……。何て言うと思うのか!?」

俺が立ち上がり、黒フードに食ってかかる。

「どういうことだよ!?　説明しろよ！　二日前は小学校低学年だったのに、何で今は大人なんだよ!?　二日でそんなに成長するわけないだろ!?　お前、本当にあのシバルかよ!?」

「勢いがある突っ込みですね。仕方ありません、それではご説明しましょう。実は、僕達は軍の機密機関の研究員でして。研究の結果、若返りの薬を開発したんですよ。まぁ、公の場では公開されていませんが。現在は、薬の効果や副作用を調べていまして……」と黒フード。

「じゃあ、二日前のあんたはその薬を飲んでいたってことか？」

「まぁ、そういうことです」

う～ん、そうなのか？　だけど、確かに今は大人だし。現実を目にしているのだから信じるしかないよな……。っていうか、現代の科学で若返りの薬なんて開発できるんだな。すげー驚きだ。この勢いだと、俺が年寄りになった頃には若返りの薬が一般化していて。世界は若者だけになっていそうだな。

俺が将来を想像していたら、松元がシバルに問いかける。

「それって、副作用はあるのか？　というか、自分の身体で試すのって怖くない？」

「まぁ、動物実験後の薬ですから。いずれは誰かが試さなければいけませんし。まぁ、自分達が作った薬という事もありますので。愛

着があるんですよね。副作用の恐怖以上に、興味と関心が尽きません」

「へ～、そうなのか」

俺と松元が感心の声を漏らす。そして、若返り薬で始まる会話。未来以外のメンバーが真剣な眼差しで、現代科学について語り合う。

打ち合わせ〈その3〉

話に火が付き、お喋りが止まらない俺達。初めの目的を忘れた頃に。やっとのことで登場するのが、リョウ。皆に向いて頭を下げだす。

「遅れて、すまんな。ちょっと会場の手続きをしとったんや……。って、兄ちゃんら、誰や？」

「俺は松元と言います。リョウさんの大ファンでして！　あの……メンバーに入らせろ、なんて無理は言いませんので。俺もご一緒させて下さい！」

松元がかしこまりながら、頭を下げる。その様子を見て、リョウは笑顔だ。

「ええよ、ええよ。人は多い方が盛り上がるやろうし。それで、そっちの兄ちゃんは？　というか、シバ君はまだなん？」

「また一から説明ですか……。面倒ですね～」

シバルがため息をついた後に、リョウに向いて先程の説明だ。説明を聞いて、リョウが目を丸くする。

「凄いなぁ～。今はそんなんがあるん？　はぁ～、時代やなぁ～」

「さて、挨拶が終わったところで。今からどうするの？」

未来が携帯を仕舞いながら、リョウに向く。未来の言葉にリョウが反応する。

「ほな、悪いけど移動や。今から、借りた会場に向かうで」

喫茶店を後にして、リョウが借りた会場へと足を向ける。そもそも会場ってどんな所だろう？　でかいホールとかイメージしてしまうのだが。いや……逆に小さな部屋かもしれないな。

リョウと話をしながら、歩いていたら。大きなビルが見えてくる。リョウがビルを指差し、口を開く。

「ここや。このビルの八階にあるねん」

ビルの中に入ると、結構な人の数。色々な店があり、買い物客が辺りをうろつく。このビルの八階って……何だか部屋の形が想像できないな。人混みに紛れながらも、必死になりながら、リョウの後を追っていく。

六つほどあるエレベーターの一つに乗り込み、上の階へと移動する。八階で降りると、人の数もグッと減った。それでもちらほらと人の姿はなくならない。とある扉の前にて、リョウが俺達に振り替える。

「控室やさかい、そんな広ないで。期待せんといてや。まぁ、向こうのホールも借りてるねんけどな。とりあえず、こっちで皆の具合を見ようと思ってな。どれくらい楽器を使えるか、わいも知りたいから。ほな、行こうかー」

そう言って、リョウが部屋の中へ入る。続く俺達。

中に入ると、リョウの言葉通りに広くない部屋だった。というか、

むしろ狭いくらいだ。部屋自体は結構な広さなのだが、楽器の量が半端ない。この楽器は何なのだろう？　恵梨がリョウに問いかける。

「この楽器は……全部。リョウさんの物ですか……？」

「せやったら、ええねんけどなぁ～。借り物や、借り物。一つ残らず借りてんねん。なるべく、壊さんように頼むわ。まぁ、壊れてしもたらしゃーないけどな。わいも前に壊した事があるし」

「うわぁ～、夢のようだな……」

松元が感嘆の声をもらしながら、楽器の山を見まわしている。だけど、手を伸ばすことはない。何せ壊してしまったら大変だ。恵梨と梨香も遠慮勝ちに遠くから楽器を眺めている。

そんな俺達とは裏腹の行動にでるのが未来だ。スタスタと歩いて行って、手当たり次第に触りだす。少し触っては飽きて、次を触る。その繰り返しだ。別に弾いてみるわけではない。触って満足しているのだ。

リョウを見ると、ギターを触っている。鼻歌を歌いながら、音を合わせているようだ。松元がリョウの元へと駆けよって、ギターの話を始め出す。

俺と恵梨に梨香は立ち往生。何もできない俺達が手を持て余していたら、急にヴァイオリンの音が耳に入る。振りかえる先にはシバルだ。目を瞑りながら、ノリノリでヴァイオリンを弾いている。すげー……マジ上手いじゃん。

いつの間にやら、リョウと松元もシバルに釘付けだ。感心しながら、演奏に聞き入っている。不意に未来がシバルに近づく。

「シバ君、下手だなぁ～。音がズレてるじゃん」
「ヴァイオリンを扱うのは久しぶりなので、どうにも調子が……」
「俺にも貸して」
「いいですよ。はい、どうぞ」
「どうも」

未来がシバルからヴァイオリンを受け取り、弾き始める。こいつもすげー！　目玉が飛び出るほどに上手い。シバルが頷きながら、口を開く。

「やっぱり未来さんはお上手ですね。流石です」
「いや……っていうか、お前も十分にすげーよ。素人にはどっちが上手いかなんてわからねーよ」俺が思わず口にする。
「そうですか？　そう言われると嬉しいものですね」

シバルがヘラヘラと笑う中、未来がヴァイオリンを仕舞いだす。二人が次に向かった先には、ドラムだ。シバルが未来に口を開く。

「じゃあ、未来さんはドラムですね」
「え？　何で？」
「ドラムなんて初めてでしょ？　たまには人並みになって下さい」
「いつも人並みじゃない。それで……これって、どうするの？」
「こうするんですよ」

シバルがスティックを手に持って、ドラムを叩き始める。すげー！　上手過ぎるー！　お前、天才かよ!?　驚きで声が出ない俺達の前で、未来がじっとシバルの動きに目を向ける。シバルが一通り演奏を終えて、未来にスティックを手渡す。

「まぁ、こんなものでしょう」

「成る程、わかったよ」

え？　っと思った直後、更なる驚きの光景が……。未来の奴……たった一度だけ見た演奏を、見事にそのままマネてみせたのだ。これには流石のリョウも仰天している。真顔で硬直しながらも、半開きの口をゆっくりと動かす。

「ミラッチ……天才か？　今の……ほんまの話なん？」
「何が？」首を傾げる未来。
「ドラム……やったことないっていうのや」
「うん、ないよ」

未来がさらりと言ってのける。その言葉を聞いて、リョウが腕を組み考える。次に、シバルに向いて質問する。

「なぁ、シバ君は他に何ができるん？」
「以前にも言いましたけど、何でもできますよ。まぁ、しいて言うのなら……。あの……最近はパソコンで音楽を作る人がいますよね？　ああいうのはちょっと……苦手です。細かい機械類のごちゃごちゃしたような物は、ちょっと僕には……」
「二日前は、犬と神様系の授業以外は得意だって言っていたのにね」
未来が口を挟む。
「うるさいですね。追加ですよ、追加。一度に全てを説明するなんてことはできませんから。順を追って説明しているんです」

シバルが不満げに未来を見る。リョウを見ると、目を瞑り眉間にしわを寄せながら思考している。不意に目を開け、口を開く。

「もう完璧やん！　打ち合わせいらんわ。これやったら、明日にでもコンサートできるで。二人共、凄いわ。わいが一番頑張らなあか

んやん。どないしよ？　何か知らんけど、わい燃えてきたわ。えらい燃えてきたわ」

「でも、他の人はどうするの？　皆も参加するんでしょ？」

未来が俺達に目を向ける。もちろん、参加するわけがない。というか、参加なんてできるわけがないだろ。天才じゃない上に、楽器も使えないのだから。参加したら、足手まといだ。

参加を拒否る俺と恵梨に梨香。それに対して、松元は真剣に考え込んでいる。正直を言うところ、出たくて仕方ないのだろうが。自分とは比べ物にならないレベルの人を目にして、戸惑っているようだ。

深刻な顔をする松元に、声を掛けるのはリョウだ。

「どうしたんや？　まっつん？　腹痛いん？」

んなわけねーだろ！　ボケるリョウに突っ込みを入れそうになる。もちろん、グッと堪えて我慢だ。リョウに突っ込みなんて入れる勇気はない。松元がゆっくりと本音を言う。

「実は俺も……参加したいのですけど。俺みたいな下手が参加するには、あまりにもレベルが高くて……」

「大丈夫や、まっつん。安心しい。わいが直に訓練してあげるやさかい。まっつんも参加しいや」

「え？　リョウさんが直に教えて下さるのですか？　いや、そんな手間暇掛けさせるわけには……」

「ええやんか、ええやんか。みらっちとシバ君は最初で最後や言うてんねん。こんな天才様達のレアライブや。参加せんと損やで」

「いや……マジでいいのですか？」

「ええよ、ええよ。まっつんを教育するのなら。まぁ、ライブは一週間後くらいやね。ほな、行こうか！　まっつん！」
「はい！　よろしくお願いします！」

松元がリョウに頭を下げて、リョウがギターを手に持ち立ち上がる。有頂天にはしゃぎ回るリョウと、それ以上に浮かれ回る松元。二人が猛スピードで部屋を飛び出し、残された俺達は唖然とする。不意に未来が口を開く。

「若者は元気だね～」
「本当に、驚きですね。あの元気をわけてほしいです」とシバル。
「そういえば、俺達ってもう帰っていいのかな？」
「いえ、それはいけませんよ。ライブで何の曲を演奏するのかも聞いていませんし。楽譜も頂いていませんから。全員での曲合わせは後日でいいかもしれませんが……」
「だけど、俺は今から用があるの。狭間に用事だから……。俺の代わりに、シバ君が後の話を聞いておいてくれない？」
「仕方ありませんね。この貸しは高く付きますよ」
「わかったよ。じゃあ、後はよろしくね」

未来が口にした直後に……未来が消えた。え？　何？　は？　へ？　混乱する俺が間抜けな声を出す。

「え？　未来は……？」
「消えちゃった？　消えたの？」と梨香。
「あれ……何で？　目の錯覚……？」

恵梨がキョロキョロと辺りを見回す。どこかに隠れたわけではないらしい。姿形はどこにもない。何のマジックだ？　床に穴が開いているのか？　俺が未来の立っていた場所に近づき、床に触れるが。

異常はない。

状況を理解できない俺達を見ながら、シバルが口を開く。

「まったく……困った方です。本当に全てを任せて消えるなんて。それなら、僕よりもメモリーさんに頼んで欲しいですね」

「どういうことなの？　未来さんはどこに行ったの？」

梨香がシバルに問いかける。シバルがため息をついた後、俺達を見まわし、口を開く。

「正直に言って、あなた方にご説明する気はありません。何せ担当者が別にいますので。ここでは……僕は謙虚に生きるつもりです。ですが、このままではあなた方も納得できないでしょうし。まぁ、一言だけ捨て台詞を残しましょう。あなた方の身に訪れた奇怪な現象のように、世界は不思議に満ち溢れているんですよ」

「わけわかんねーよ。もっとわかりやすく説明してくれよ」

俺が言うと、シバルが面倒くさそうに話し出す。

「だから、言ったでしょ？　あなた方にご説明する気はないと……。何せメモリーさんは根に持つタイプですから。ゴタゴタを起こしてしまうと、後で何を言われるか。以前にも、未来さんがバカな事をして。メモリーさんがその事をずっと根に持っていて。僕や未来さんが忘れてしまった頃に、その話を持ち出してくるんですよ。ある意味で一番喧嘩をするとややこしい相手なんです。どうしても、知りたいと言うのなら。メモリーさんを探しだして、直接に問い合わせてください」

「その……メモリーさんと言うのは誰なの……？」と恵梨。

「これ以上はご説明できません。まぁ、あなた方ならいずれ出会え

るでしょう。僕達……『橋』には奇怪な出来事に引かれる性質がありますから」

話だけを聞いていると、まるで恵梨香の分離に気づいているような口ぶりだ。痺れを切らした梨香がシバルに向いて質問をする。

「もしかして、シバルさんは……私と恵梨が……」

梨香が話し終える前に、ドアの開く音。振りかえる先には、リョウだ。満面の笑みを浮かべながら、俺達に話し出す。

「何や～。皆、遅いで～。はよう練習しようや。って、あれ？　みらっちは？」

「未来さんなら急用があるそうで。また連絡して下さいと言っていました。日時や楽譜など詳しい事は僕が伝えておきますから。安心して下さい」

「みらっち、早退かいなぁ～。ショックやなぁ～」

落ち込むリョウ。リョウの出現により、シバルへの質問が滞ってしまう。何だかタイミングを逃したな。恵梨と梨香を見ると、訴えるようにシバルを見つめている。しかし、シバルは答えない。素知らぬ顔でリョウとお喋りだ。その後、話が戻る事もなく。俺達はリョウ達の演奏練習を拝見する事になる。

打ち合わせ〈その４〉

翌日になり。学校にて、昼休み。頬を膨らませながら怒るのは北原。その前では、手を合わせて謝罪する梨香。北原が風船のように膨れ上がる。

「恵梨香ちゃん、約束したのに～。サイン貰ってくれるって、約束したのに～。今日、ミルフィーユ四つも買ってきたのに～。四つもだよ、四つも。それなのに、サイン忘れるなんてひど～い」
「ごめんね、雫ちゃん。今度こそ、サイン貰ってくるから」
「もう家族に言っちゃったんだよ～。今日はすご～～～いレアな物を貰ってくるから。期待していてって～。もう～、恵梨香ちゃんのバカー！」
「本当にごめんね。ほら、しばらくの我慢だよ。今度の打ち合わせの時も会えるから、その時に貰ってくるから」
「あーん！　Ｒｅａｌｉｇｈｔのリョウのサイン、超欲しぃーーーー！」

ビックリするくらいにでかい声で北原が叫び出した。あわー！？こっちも仰天だ。梨香が北原を止めに掛る。

「雫ちゃん。お、落ち着いて……」
「恵梨香ちゃんだけ、ずるいし～！　雫もリョウに会いた～い！」
「雫ちゃん！」
「あ、そうだ。今度の打ち合わせの時に、雫も連れて行ってよ。そしたら、許してあげるから」

北原の言葉を耳にして、振り返るのは教室中にいる生徒、ほぼ全員。女子なんて、お嬢様を除いた全員が反応した。すげーなぁ……。

まぁ、それだけリョウが有名人だということだろうが。お嬢様の場合は知っていても興味がないのだろう。どうせ有名人なんて見飽きているんだろうな。

梨香の周りに群がりだす野次馬達。梨香を尋問するかのように、皆して質問を始め出す。慌てる梨香に、目を煌めかせるファンの皆。うわぁ……あまり係わりたくないな。俺は見て見ぬ振りをして、机の上で寝た振りだ。

しばらくして、聞こえてくるのは、松元の声。結構な大声で、自慢げに語りだす。内容は至って簡単だ。『俺はリョウに直接アドバイスを受けている。今度のライブにも参加するんだ』そんな感じの自慢話。

打ち合わせ〈恵梨編〉

学校の校舎裏。一人で呆ける私。

私が二人に分かれてしまってから、約二週間が経過した。未だに一人に戻る気配はないし、対処法もわからない。シバルさんは何かを知っているようだったから。話をしたら、もしかしたら……。やっぱり無理かな？　教えてくれそうになかったし……。えっと、確か……メモリーという人を探せって言っていたっけ？

メモリーって、誰だろう？　そもそも、本名じゃないよね？　そんな名前は聞いた事がないし。あだ名かな？　だけど、あだ名なら探しだすのは、まず無理だよね。

「はぁ……」

ため息をついて、落ち込む心。今日は……どうしようかな？　梨香が家だから、私は外の日……。

梨香はシャキシャキしていて、結構……言いたい事が言えるみたいだから。外の日には、友達の家に泊まっているみたいだけど。私には……そういう事ができない。

だから、近所にある川……。そこに橋があって。その橋の下で、一人でボーっとしている。着替えとかは家の日の時に用意しておいて。こっそりと、人に見られない所で着替えたりしている。

今はそれほど寒くない時期だから、まだマシだけど。これから寒くなりそうだから、厚めの布団も用意しないと……。

今日も橋の下か……。何だか寂しいな……。信也に頼み込んで、一日くらい泊めてもらう？　ううん、やっぱり止めよう。迷惑を掛けて、嫌がられるのは……悲しいもの。

購買で買ったジュースを一口飲んで、膝を抱えて丸くなる。あ～、梨香が羨ましいな。活発で前向きで……。恵梨香の良い所……全部、梨香に持っていかれたかも。きっと信也も梨香の方が好きなんだろうな。私は……ただの残り物か。

このまま空気になりたいな。皆から見えなくなって、消えてしまって。風に乗って、遠くへ行って。何も考えないで、フワフワと漂うだけで……。

不思議な日常〈恵梨編〉

凄く幸せな夢を見た。それがどんな夢なのか……具体的な事は忘れてしまったけれど。何だかとても大切な夢だった気がする。

夢の内容を、どうしても思い出したくて、何とか思い出そうと試みる。薄らとした記憶の中、大まかな事だけが頭の中に浮かんでくる。

私の前には大切な人。ずっと会いたくても、会えなかった。近くに居たのに、話しかける事もできなかった。その人が私に向いて、話し掛けてくる。ただ話しをするだけなのに、涙が出るほどに嬉しくて、楽しくて。

胸の奥から込み上げてくる感情が身体の中に収まりきらずに、今にも爆発してしまいそう。その人に抱きしめられた時には死んでしまうかと思ってしまったくらい。幸せ余って死ぬなんて……あんな気持ち、初めて感じた。

うっとりと夢を思い返す私の前では、信也と梨香がお喋りをしている。今日は木曜日。昨晩は嵐だったらしいけど。私はあまり……覚えていない。それどころか、昨晩の記憶が欠けている。思い出せるのは、あの夢だけ……。

気が付いた頃には、信也達と一緒に歩いていた。いつもは橋の下で目覚めて、浮かない気分で心が痛くなるのに。今日はそういう事もなく。むしろ、浮かれ過ぎて二人の話すら耳に入ってこない。

私……どうかしちゃったのかな？　ストレスで記憶喪失に妄想癖？　これって、かなりマズイよね。そう思いながらも、やっぱりあの夢が忘れられない。今晩も……あの夢を見ることはできないのかな？　まるで依存症みたいに、夢に執着していたら。不意に信也が話しかけてきた。

「おい、恵梨……どうしたんだよ？」
「へ？　何が？」
「さっきから、ボーっとしてるぞ。まだ寝ぼけてるのか？」
「え？　うん……まぁ」

情けない声を出して。少ししてから、二人に言う。

「昨晩ね。凄く良い夢を見て……。それが本当に良い夢でね……。思い出そうとすると、幸せで身体の中がところけそうになるの……」
「大袈裟だなぁ～」と信也。
「ねぇ、どんな夢を見たの？」

興味を示す梨香を見て、私が説明する。

「あのね……人とお喋りするだけの夢なんだけど。相手の人とお喋りするだけで、凄く幸せになるの……。もうね、ビックリするくらいに……」
「何だよ、夢の中で浮気かよ？」

信也が不満そうに口を開く。え？　もしかして、嫉妬してるの？　ただの夢に嫉妬？　へ～、そっか……。信也、私に興味がないわけじゃないんだ。昨晩の夢と少し似た気持ちを味わう私。だけど、あの夢はこんな気持ちの比にならないくらいに幸せだったな……。

学校の少し手前で、信也達と別れる。普段の授業は梨香に頼んであるから。私は……運動の授業があるまで時間つぶし。当初はこの辺りを探索していたけれど、最近は本当にする事がない。

時間を持て余して、何だか暇で。あ～、ここにベッドでもあれば二度寝なんだけどなぁ～。もう一度、あの夢を見たい一心で。放浪しながら、一人で妄想。

不思議な日常〈北原編〉（前書き）

この話……どっかで見た気がするぞ。
なーんて。「世界の枠組みを越えて」を見た人は知っている……。
省略しろよなんて、思わないで。
こっちしか知らない人が意味わからなくなるから。（^―^；）

不思議な日常〈北原編〉

やったぁ～、今日の数学の授業はお休みだぁ～！　先生が急用で、自習！　代わりの先生はいるけど、出席を取る事もないし。自習時間は好き勝手にしていいらしいし。雫って、超運がいいじゃん！

国語の授業が終わって、休み時間になって。次は自習だけど、勉強なんてする気はないから。教室を飛び出る。自習時間に図書室に行く人もいるから、遅れたところで怒られることもないし～。

校舎から飛び出て、大きく背伸び。う～ん、良い天気！　晴れって気持ちいい～！　さ～て、どうしようかな？　あ、そうだ。本屋に行こう。購買で売っている本って、大したことないから。学校の近くにある本屋は小さいけど、品ぞろえが充実してるし。

ウキウキノリノリで本屋へとダッシュ！　目的は新発売の漫画！　お小遣いは貰っているから、余裕で買えるし。な～んか、いい感じ！

そんなこんなで本屋に到着。新発売の本を探すけど……あっれ～？　売ってないし～。何で～？　探しても見つからないから、店員に聞いてみると。発売日が明日……。雫の勘違い！　う～ん、やっちゃった。

仕方がないから、ちょっと立ち読み。な～んか、最近は面白い本って少ないなぁ～。み～んな、同じような感じで。もっとサプライズが欲しいよね～。

数分間くらい立ち読みして、本屋を出て。学校に戻る。雫が歩いていると、学校の門の前に怪しい人を発見。生徒でもないし、先生でもない。学園内を覗き込む不審な男……。もしかして、ストーカー？　や～ん、気持ち悪～い。

どうしよ～う？　先生を読んだ方がいいの～？　だけど、先生を呼ぶにも学園に入らないと呼べないし～。雫が戸惑っていたら、不審者の横顔が目に入る。あれ？　この不審者……もしかして～。

雫が不審者に声を掛ける。

「もしかして、進兄（しんにい）～？」

雫の声を聞いて振り返る不審者。すっごく驚いた顔をしながら、雫に言う。

「雫！？　何でこんな所にいるの！？」

「それはこっちのセリフ～。進兄こそ、何でこんな所にいるの？」

「何でって……何でだろう？」

「雫に聞かれても知らないよ～。むしろ、雫の方が質問してるんだから」

「別に意味はないよ。たまたま通りがかったら、変な車があるから。不審者でもいるのかと思って、学校の中を覗いていたの」

お嬢様の高級車に目を向ける進兄。雫が笑いながら、進兄に教えてあげる。

「進兄の方が不審者だし～」

な〜んだ、不審者だと思っていたのは進兄だったんだ。紛らわしいし〜。傍から見ると、不審者以外の何者でもないし〜。雫だからよかったけど、他の人に見られていたら。進兄、警察行きだよ。そんな事になったら、雫の方が恥ずかしくて堪んないよ。

ちなみに、進兄って言うのは。雫のいとこに、日和お姉ちゃんという人がいて。その人の彼氏。日和お姉ちゃんは少し前に病気で死んじゃって……。それから、音沙汰がなかったから。心配していたら、こんな所で不審者になっていただなんて。心配して、損した気分〜。

進兄が首を傾げながら、雫に話しかけてくる。

「あれ？　雫の通っている学校って、青鶯だったっけ？　もしかして、転校？」

「違うよ〜！　今年から雫は高校生。青鶯高校に受験して、通ったの。進兄は未だに雫の事を中学生だと思ってるでしょ？」

超不愉快〜。進兄はいつも雫の事を子ども扱いするもん。雫だって、成長してるんだよ。進兄の方が成長してないんじゃないの、って思う〜。進兄が疑い深そうに雫を見る。

「……え？　マジで？」

「マジだよ。どこからどう見ても、高校生じゃん。ほら、この制服」

「中学も一緒でしょ？」

「中学のはもっと、襟とかスカートの部分が赤いの」

雫の言葉に進兄が黙り込む。マジで雫を中学生だと思っていたな！　いいよ、いいよ〜。そんな事を考えてるんなら、後で進兄にお小遣いを集るもん。大金くれなきゃ怒るからね〜。

雫だけ言われっぱなしは嫌だから、こっちも言い返してやる。今の進兄には突っ込みどころが満載だし。考えなくても、すぐに口が動く。

「それにしても、進兄は雰囲気変わったね。まるでオタクだよ～。その前髪どうにかしたら？」

進兄の前髪、左側だけすっごく長い。目が隠れているし。うっとうしくないの～？　ファッションにしては、服にセンスがなさすぎだし～。もう少し良い服を着たら、それっぽく見えるけど。しょぼい服だと、ダメダメオーラしか感じな～い。注意をする雫に向いて、進兄が口を開く。

「別にいいじゃん。僕の勝手でしょ？」
「良くないよ。引きこもりみたいだよ。根暗オーラ出過ぎ」
「悪かったね。どうせ僕はヒッキーだよ」

ヒッキー？　え？　嘘？　進兄って言えば、アウトドア専門ガイドみたいなイメージだったのに。いつも雫と日和お姉ちゃんを連れて、いろんな所に遊びに行っていたのに。あの進兄がヒッキー？　えー、ありえなーい！　雫が目を丸くする。

「えぇ!?　進兄が引きこもりしてるの!?　あの超アウトドアの進兄が引きこもり!?　いつも日和お姉ちゃんと雫を連れて、色々な所に連れて行ってくれてたのに！　連絡がつかないから、心配していたら。ヒッキーになっていただなんて……」
「うるさいなぁ～。そもそも、雫は関係ないし。毎回、無理矢理ついてきてただけじゃん。本当、邪魔で仕方なかったよ」

進兄が不満げに言う。別に無理矢理じゃないし～。「雫も行きたい」って言ったら、日和お姉ちゃんが「いいよ」っていうから。ついて行ってただけだもん。それに雫だって雫なりに、二人の仲を取り持つように努力していたのに～。

「雫は二人の愛のキューピッドだよ。ちゃんと二人の援護をしていたじゃない」

「どこがぁ～？　後ろで騒いで邪魔していただけでしょ？」

呆れ返る進兄。もう～、雫の気持ちも知らないで。よくそんな事が言えるなぁ～。それから始まる長い昔話。その後に、今の生活を聞いてみる。

進兄の話を聞いていたら、何だか心が痛くなってくる。進兄……まだ日和お姉ちゃんの事を気にしているみたい。きっと新しい彼女なんていないんだろうなぁ～。

だけどさぁ、いくら死んだ人を思い続けても……。こんな事を進兄に言ったら、進兄はどんな反応をするんだろう？　流石の雫も怖くて聞けないけど～。

だけど、辛いよね。特に進兄と日和お姉ちゃんは仲が良かったから。それが本当にもの凄く仲が良かったんだよ～。もう見てる雫が恥ずかしくなるくらいに仲が良かったんだ。まるでドラマでも見ているみたい。こんなに仲が良かったら、そりゃあ楽しいと思うよ。雫だって、そんな恋をしてみたいもん。

この二人なら皆が夢見るような理想の結婚をして、おしどり夫婦顔負けの超仲良し夫婦で。人が羨ましがるような……そんな生活を送るんだろうな。って思っていた矢先に……。日和お姉ちゃんの体調が崩れて、そのまま……。

お葬式の時なんて。皆が泣き喚く中、進兄は一人だけ泣いていなくて。まるで現実を受け入れられないかのように。抜け殻みたいに、ただぼうっと日和お姉ちゃんを眺めていて。話しかけても反応がないし。

皆が周りで優しい声を掛けてあげても、進兄には関係なくて。最後はおばさんとおじさん……日和お姉ちゃんの両親が「そっとしておいてあげて」というから。皆も話しかけるのを止めて。進兄はずっと日和お姉ちゃんを眺め続けていたな……。

あの頃の事を考えると、今の進兄は元気になったほう。話しかけたら返事を返してくれるし、笑ってもくれる。まぁ、日和お姉ちゃんが死んでしばらくは、進兄も死人みたいになっていたけど。

雫と進兄がお喋りをしていたら、チャイムの音が聞こえてくる。まぁ、雫には関係ないけど～。何にも知らない進兄が雫の背中を押しだす。

「ほら、授業でしょ？　行った、行った。はい、さよなら。またいつか会える日まで」
「ちょっと進兄～！　愛想なさすぎ～！」
「走らないと遅刻だよ。先生に怒られるよ」

雫を追い返そうとする進兄。もちろん、雫が振り返って進兄に自慢する。

「残念だけど、次は自習～。出席は取らないし、先生は優しいから。怒られないよ」

「そうなの？　だけど、こんな所をウロウロしていたら流石に怒られるでしょ？」
「怒られないし～。それより、進兄に学校を案内してあげる」
「何言ってるの？　僕が勝手に学校の中に侵入したら、警察沙汰だよ」
「大丈夫だよ。あっちに保護者カードを作る場所があるから。生徒と一緒に行って、記入欄に記入して～。証明書を出して、確認さえ取れたら。カードを首にさげて、自由だよ。ほら、行こうよ。地域住民との交流だよ」
「やだやだ、遠慮するよ。生徒でもないのに、学校の中に入るなんて嫌だよ。何か気が重いし……」

嫌がる進兄の腕を取って、無理矢理連行。だって、雫は暇で仕方ないんだもん。進兄だって、急ぎの用事があるならこんな所にいないだろうし。別にいいじゃん。学校に入るだけなのに、かなりビビる進兄。傍から見ると、不審者だよね～。雫が進兄に教えてあげる。

「進兄、挙動不審だよ。一人でいたら、間違いなく警察呼ばれるね」

不思議な日常〈その1〉

昨晩が嵐だったからか、妙に気分が清々しい。何だか吹っ切れた後みたいな気分だ。今日は何事もなく平凡な一日になりそうだな。そう思う俺の予想は不的中。数分後にハプニングが訪れる。

古典の授業の最中だ。かったるい授業だな。古典なんて今更勉強する必要ないだろう？　俺は現代人だ。現代文だけで十分じゃないか。なんて事を考えていたら、急に椅子を引く音が耳に入る。

思わず振り返る俺の目先に移るのは、お嬢様の姿。立ち上がって……何をするつもりだ？　俺が訝しげに眺めていたら、お嬢様が廊下に向かって歩きだす。廊下に目を向けると、そこには北原。北原の隣には見知らぬ男。保護者カードをつけているって事は、北原の知り合いか？

皆の視線を浴びながらも、お嬢様が男の前に立つ。けったいな状況だな……。お嬢様は何を考えているのか？　見つめ合うお嬢様のその男。

別に恋愛ドラマのような展開じゃない。お嬢様の考えている事はわからないが。男にしてみれば、「何こいつ？」みたいな顔をしながらお嬢様を眺めているだけだ。不意にお嬢様が口を開く。

「そこのあなた、ひざまずきなさい」

「何で？」

即答する男。いや、まぁ……確かにな。いきなりひざまずけって、何様のつもりか？　あぁ……お嬢様だったな。お嬢様が不満げにも

う一度命令をする。

「いいから、ひざまずきなさい」

「嫌」

躊躇ない。きっとこいつはお嬢様が誰なのか知らないんだろう。世間知らずそうな顔をしているからな。っていうか、こいつ引きこもりじゃないのか？　俺が言うのもなんだが、何だかマジで冴えない奴だ。

ある意味で強気の男に、周りの皆がうろたえだす。お嬢様の言う事を聞かない奴なんて、未だかつて見たことない。というか、初めは抵抗していても。次の日には蒼白しながら、お嬢様の前に跪くことになるんだ。そういう光景なら、何度か拝見している。

北原が青い顔で男を突く。そのまま男の耳元で何かを呟く。多分、説得しているんだろう。お嬢様の言う事を聞かないと怖い目に遭うという事を教えているんだ。男が北原に返答する中、お嬢様が男を指差す。

「この者を押さえつけなさい」

お嬢様の声により、至る所に潜んでいた黒いスーツの男達が現れる。怒る男を無理矢理に取り押さえ、男は抵抗できずにうつ伏せ。そりゃあ、こんな大人数に押さえ込まれると勝ち目なんてないに決まっている。超不満そうな男に向かって、お嬢様が口を開く。

「顔を上げなさい」

黒スーツにより、髪を掴まれる男。かなり怒っている。まぁ、そ

うだろうな。何もしていないのに……こりゃ酷い。不意にお嬢様がしゃがみ込んで、男に顔を近付ける。小声で何やら会話のやり取り。くそつ、何の話をしているのか聞こえない。もっと大きな声で喋ってくれよ。

俺が、歯がみしていたら。隣に松元がやってくる。お嬢様達を眺めながら、俺に囁く。

「なぁ、斎藤。あいつ……」
「知り合いか？」
「いや、そうじゃないけど。あいつの声……覚えてないか？」
「え？　何が？」
「歌だよ。歌。お嬢様が満点をつけた歌」
「あ！」

俺が思い出した直後に、大きなざわめきが。振りかえる先に思わぬ光景。動けない男に……お嬢様がキスしている。なにーーーっ!?　頬や額になんて優しい物じゃない。口で口に直接キスだ。

衝撃的な映像に皆が硬直する。これは……誰かが加工した映像じゃないのか？　まるで自分の目を疑いそうな光景だ。そこへ飛び込んでくるのが、またもや変な奴。今度は犬耳をつけた子ども？　えらい趣味してやがるな。

犬耳が男に近づき、口を開く。

「生きてますか？」
「死にそうだよ！」

お嬢様から顔を振り払って、怒鳴る男。泣きそうな声で犬耳に助

けを求める。

「助けてよ、ハル！　もう、わけわかんない！」

犬耳が頷いたかと思えば、ここからまたもやアニメが始まる。あり得ない光景。犬耳の……あのちっこい犬耳の子供が、大人のしかも護衛のエキスパートを一発で仕留めていくのだ。こりゃあ、もう……俺の夢だな。多分、授業をさぼって寝ているんだろう。早く起きないと……。

犬耳が黒スーツを全員倒して、大喜びだ。男に目を向けると、そそくさと犬耳の後ろに隠れている。その後、お嬢様の後ろから出現するのは、玲。そして、始まるのは犬耳ＶＳ玲の戦い。

もう正直に言って、アニメ以外の何物でもない。押され気味の犬耳が、挑発する玲に口を開く。

「今までは手を抜いていたのです。次は本気でいきますよ」
「フフッ……これで手を抜いていたの？　君は何者……？」
「その質問には答えられません。ですが、まぁ……人間ではないでしょうね」

何のアニメか？　ふざけた事をいう犬耳に呆れ返っていたら、犬耳の身体が紫色に輝いた。直後、犬耳が俺達くらいの歳にまで成長する。えぇー！？　マジで人間じゃなかった！　こいつ、化け犬だ！

俺達がパニックになっていたら、犬耳が玲に指を差す。そんな犬耳の後ろには、あの男。超不愉快そうな顔で犬耳の後ろに立っている。犬耳は気づいていないらしい。調子よさそうに口を開く。

「勝負再開です！　完全体の僕に勝てる人間など、この世にいま……」

犬耳が格好をつけている最中に、男が犬耳の後頭部を殴った。犬耳が振り返り、男と目が合う。男が犬耳を睨みつけながら、話し出す。

「元に戻れるじゃない！　どうして黙っていたの？　それに、こんな所で戻らないでよ。話がややこしくなるじゃないか！　僕の世界では魔法なんてないんだから。もっと現実的な動きをして、目立たないようにしてくれないと困るんだよ。こんなのでニュースにでもなってみなよ。後が大変……」

そして、ながーい説教だ。犬耳は次第に萎えていき、尻尾は垂れて、耳は倒れている。しょんぼりしながら怒られて、最後はまたもやちびっ子に戻る。そのまま男の足にしがみ付いて、泣き出した。おいおい、完全体のお前に勝てる人間はいないって言いかけたよな？　即効に負けているじゃないか。しかも、こんな冴えない奴なんかに……。

不意に男が犬耳を持ち上げ、肩に担ぐ。そのままお嬢様に向いて怒鳴りだす。

「今日の所は勘弁してやるけどな。次に会ったら、ぶっ殺してやるからな！　ちび助！」

捨て台詞を残した後は、廊下の奥へと走り去ってしまった。一体、何だったんだ？　周りの皆は言葉を無くしている。こんな場面……反応の仕様がないもんな。唯一皆と違うのはお嬢様。夢見る乙女のような顔をしながら、悦に浸っている。

不思議な日常〈その2〉

碌に授業もしないうちに、五時間目終了のチャイムが鳴る。その後、始まるのは野次馬の大暴走。未だに幸せそうなお嬢様に群がって、先程の二人組の素性について質問している。

それにしても、お嬢様……。本当に嬉しそうだ。いつもなら冷たい瞳で皆を追い払うのだが、今日に限って満面の笑み。

皆の質問に答える事はしないが。あの男の話になると、すげー可愛い笑顔を返してくれる。それがもう、本気で惚れていると一目でわかるくらいだ。やべー可愛さ。こんな笑顔で迫られたら、男子一同いちころだな。

お嬢様の笑顔を見て、鼻の下を伸ばす男子と。二人組の正体を知りたくてじれったそうにする女子。お嬢様の周りが盛り上がる中、忍び足で教室に入ってくるのは北原だ。存在感を消しながら、俺達の元へとやってくる。

「さっきのはビックリしたよね～。お嬢様が進兄にキスするなんて思わなかったし～」

「そういえば、さっきの男の人って、雫ちゃんの知り合い？」と梨香。

「うん。雫のいとこに、日和お姉ちゃんっていう人がいて、その人の彼氏なんだよ～」

「名前は何て言うの？」

「上野進一。雫は進兄って呼んでるけど。前はアウトドア派だったけど、最近はインドア派になったんだって～。めっちゃ普通の人。色々と奢ってくれるから、雫は好きだけどね～」

「なぁ、あいつって歌は上手いのか？」

松元が口を出す。北原が首を傾げながら、返答する。

「さぁ？　雫は普通だと思うけどなぁ～。だ～いぶ前に、進兄と日和お姉ちゃんと雫でカラオケに行った事はあるけど……。下手じゃないけど、ビックリするくらいに上手くもなかったよ～」

「え～。そうなのか？」

ガッカリする松元。俺が続いて、質問だ。

「じゃあ、あの犬耳は何なんだ？　子どもから大人に変身するなんて……あれはどうやってるんだよ？」

「あの子は知らないよ。進兄の知り合いだったみたいだけど……。雫は会った事がないもん。あのマジックの仕掛けなんて、わからないし～」

「そうなのか……」

次に手を上げるのは松元だ。北原に向いて、問いかける。

「でもさぁ、上野って奴には彼女がいるんだろ？　お嬢様の事は知らなかったみたいだし……。これって、お嬢様が一方的に好きなだけか？」

「だと思うよ。進兄はマジでお嬢様の事を知らなかったし。それにしても、歳が離れすぎだよねー」

「つーか、彼女がいるなら。どうしようもねーだろ？」

突っ込む俺の後ろから、人の気配……。振りかえるとお嬢様だ。やべー！　話を聞かれたか？　お嬢様の表情からは笑みが消えていて、いつものような冷たい表情。お嬢様がぼそりと呟く。

「今はいないもの……」
「え？　何が？」情けない声を出す俺。
「上野は……一人だもの」
「え？　そうなのか？　でも、北原が……」
「いや、あのね……。日和お姉ちゃん……もういないんだよね。別れたとかじゃなくて……病気で死んじゃって。でも、進兄はまだ日和お姉ちゃんの事が忘れられないみたいだよ～。な～んて」

うわぁ～、ドラマみたいだな。コメントの仕様がない俺達は黙って停止。不意にお嬢様が北原に近づく。右手を差しだし、口を開く。

「北原さん……上野と親しいみたいね。お互い仲良くしましょ」
「え……。う、うん……」

北原がぎこちなく頷いて、お嬢様の手を握る。かなりビビってるな。そりゃあそうだ。冷血なお嬢様に『仲良く』なんて言葉は似合わない。明らかに、上野という奴を意識した握手だ。お嬢様と北原の手が離れ、お嬢様が北原に迫る。

「それで、北原さん。お友達になったからには、上野の事を知っている限り教えてくれない？」
「え～、知っている限りって言われても。最近の事は知らないよ～。ずっと会ってなかったから。昔の事ならわかるけど～」
「何でもいいわ。昔の事でも、覚えているだけ私に教えて」
「う、う～ん。まぁ……いいけど」

断るわけにもいかないので、北原が頷き了解する。北原が語ってくれるのは、上野とその彼女の出会い話から、のろけ話まで。とにかく二人の仲の良さを語っている。それくらいしか話す事がないそ

うだ。上野とその彼女が出会った頃より昔の事は知らないらしい。上野に聞いても教えてくれなかったという。

北原の話を聞いていたら、チャイムの音が……。六時間目開始の合図だ。話の途中にも係わらず、北原が大慌てに去っていく。

イチャイチャ話ばかりでお嬢様がお怒りになったのではと思い、ちらりと顔を覗いてみたが。むしろ嬉しそう。自分の知らない事を知って、喜んでいるようだ　。

こうして、わけのわからない一日が終わり。帰り道。いつもなら恵梨が飛び出てくるのだが、今日は何やら様子が変だ。いくら待っていても恵梨がやってこない。俺が梨香に問いかける。

「なぁ、今日は恵梨……何か用事か？」
「さぁ？　聞いてないけど……」
「変だな。メールでもしてみるか……」
「そうだね……」

恵梨にメールをして、しばらくすると返事が返ってくる。内容は以下の通りだ。

『連絡が遅れて、ごめんね。今日はちょっと用事があるから、一緒に帰れないの。悪いけど、先に帰ってくれないかな？　本当にごめんね』

メールを目で読んだ後、梨香に伝える。梨香が肩をすくめて、口を開く。

「用事があるんじゃ仕方ないよね。だけど、何の用事かな？」
「さぁな？」

見当もつかない。恵梨が一人で行くところなんて、家だけだと思っていた。梨香は行動派だが、恵梨は大人しいから……。人付き合いも好きじゃなさそうだし……。一体、あいつは何考えてるんだ？

恵梨の夢〈その1〉

翌日になり、金曜日。登校すると、教室の中に梨香を発見だ。話を聞いてみるが、恵梨とはまだ会っていないという。いつもなら登校中に出会うらしいのだが……。恵梨の心配をしながらも、授業を受ける俺達。

一時間目の授業が終わり、校舎裏へと駆け付ける。するとどうしたここことか、恵梨の姿を発見だ。まるで夢見るようにボーっとしている。その様子を見て、梨香が恵梨に近づく。

「どうしたの？　ボーっとしちゃって……」
「何だか凄く幸せな夢を見て……。はぁ～」
「また夢なの？　今度はどんな夢？」
「えっとね……。昨日、夢に出てきた人だと思うんだけど……。一緒にお買い物に行ったり……カラオケに行ったり……。それが、本当に楽しくて……。あ～、次はどんな夢なんだろう……？」

立て続けに同じ人物が登場する夢？　妙な話だな。梨香に目を向けると、首を傾げて考え込んでいる。俺と同様に奇妙な違和感で落ち着かないのだろう。

それに対して、恵梨は呑気なものだ。夢に振り回されながらも、幸せそうな顔をしてやがる。正直に言って、『自分の事なんだから少しは心配しろよな』って言ってやりたい。

夢の事ばかりを気にする恵梨を置いて、授業に向かう俺と梨香。教室を目指しながらも、俺が梨香に話しかける。

「なぁ、梨香」

「どうしたの？」
「恵梨の奴、何だかヤバくないか？」
「うん……。だけど、どうしようもないよ。だって、恵梨の話す事は夢の話なんだもの。私達が恵梨の夢を確認するなんて事はできないし」
「まぁ、そうだけど……」

梨香の言葉に反論する事もできずに、そのまま話が流れてしまう。まぁ……本人は幸せそうだから。別に構わないと言えば、構わないのだが……。

恵梨の事について考え込んでいたら、二時限目が終了する。次は体育だ。果たして、恵梨の奴は大丈夫なのだろうか？

前回と同様に、バスケをする男子の隣には、バレーをする女子だ。女子の様子をちらちらと窺い見る俺。あまりにも恵梨に注目し過ぎて、他の女子と目が合ってしまう。気まずい空気が流れて目を逸らす。うーわ、気持ち悪い奴だと思われたかもしれないな。

そんな事を言いつつも気になって、その後も恵梨の様子を窺い続ける。未だにぼんやりしていて、ミスが多い。普段の恵梨ならこんなことはないのだが。どうにも夢に囚われているようだ。少しでも暇があると、一人夢想に耽っている。

恵梨の事ばかりを気にして、半分授業をさぼっている俺の元へと。駆けてくるのは、松元だ。調子よく俺の背中をブッ叩き、口を開く。

「よぉ、斎藤。そんなエロい目で女子を見てないで、俺の話を聞い

てくれよ」
「見てねーよ！」
「それよりもさぁ～。明日、最後の打ち合わせがあるから。もちろん、お前も参加するだろ？　本番は来週の水曜日だって」
「明日？　悪いけど、明日は無理だな……。家で妹と弟の面倒を見ろ、って言われているから」
「な～んだ、残念だな。じゃあ、恵梨ちゃんと梨香ちゃんはどうするんだ？」
「そりゃあ二人に聞いてくれ。俺は知らねーよ」
「お前って案外に冷たいよなぁ～。それはそうと、前売りチケット完売らしいぞ。お前は見に来れなくて残念だったなぁ～」
「え！？　ちょい！　俺らには特別招待券くれるんじゃなかったのか！？」
「冗談だよ、冗談。ほら、お前と恵梨ちゃんと梨香ちゃんの分」
松元がジャージのポケットから折りたたんだライブ券を三枚取り出す。ラッキー！　松元から券を受け取り、珍しく本気で礼を言う。
「ありがとな。今度、昼飯おごるから」
「ステーキが食べたいなぁ～。油がのっていて、食べ応えのある奴」
「金が溜まったら考えとくよ」
「マジかよ？　斎藤にしては太っ腹だ」
松元が言った直後、俺の真横に何かが飛び込んでくる。驚き余って飛び退く俺の隣には北原だ……。俺達の話に乱入してくる。
「何、何？　何の話？　今、チケットがどうとか言ってなかった？」
「今度、松元達がするライブのチケットだよ」と俺。
「それって、来週の水曜日に行われる、リョウが出るライブ？　あの……前売り券が一時間で完売した奴？」

「あぁ、それだな」

松元が頷く。すると、北原の目の色が変わり、松元に向いて慌しく頼み出す。

「松元君、本当、一生のお願い！　チケット譲って～。友達でしょ？」

「ん～、北原が俺と付き合ってくれるって言うんなら……」

「いいよ。付き合う、付き合う。だから、お願い。チケット頂戴」

マジで!?　冗談のつもりだったのが、本気の答えが帰ってきて、北原の言葉に驚く松元。流石に、苦笑しながら北原に言う。

「雫ちゃん、今の言葉は冗談だよな？　まさかチケット如きに、自分を売るのか？」

「別にいいじゃん。松元君、結構面白いし～。雫は嫌いじゃないよ」

「好きでもないけどな」

俺が突っ込むと、松元が俺の頭を殴ってくる。その後、北原に向いて口を開く。

「わかったよ。素直な雫ちゃんに完敗だ。雫ちゃんの分もチケットを貰っておくから」

「できれば三枚ね。知り合いにも配りたいし～」

「はいはい、了解」

「ありがとう～！　松元君、だ～いすき！」

そう言って、テンションの高い北原が松元を抱きしめ、喜びを表現する。すげー、行動的だ。そして、松元に手を振りながら、スキップでもとの場所へと帰って行く。北原の後ろ姿を眺めながら、松

元が言う。

「やべー。ああいうタイプは好みだな。もってかれそう～」

「マジかよ？　俺はああいうの……無理だな」

「何でだよ？」

「付き合い始めて、一分以内に、抱きしめてくるって何だよ？」

「それがいいんだよ。まるで、無邪気な動物のように愛嬌がある所が」

「ああいうのは金をむしり取って消えて行くタイプだぞ」

「わかってるんだけどなぁ～。俺って、そういうの好きなんだよなぁ～」

松元が腕を組みながら、真面目に考え込み出す。本気で北原と付き合うか否か？　ああいうタイプと付き合うのは。結構、体力がいりそうだ……。松元は将来、女に振り回されるタイプになるんだろうな。なんて考える俺がいる。

恵梨の夢〈その2〉

次々と授業が終わっていき、気が付けば放課後だ。俺と梨香が学校を出て、歩いていると恵梨に出会う。三人で話すのはライブの話。俺が二人に問いかける。

「それで、結局二人は今日……どうするんだ？」
「信也が行かないのなら……行かないよ」と恵梨。
「私も止めとこうかな。後で松元君にメールしておいてくれる？」

梨香が言って、俺が頷く。携帯を取り出し、メールをする俺。不意に梨香が騒ぎ出す。

「あ！　私、忘れ物しちゃった！　ちょっと取りに行ってくるから」
「あぁ、了解だ」

俺がメールをしながら返事。梨香が速足で学校へと戻って行った。走ってもすぐに息が切れるから、仕方なしに速足なのだろう。普段の恵梨香ならダッシュで戻りそうだ。不意に恵梨が口を開く。

「じゃあ、私は……先に帰るね」
「え？　待たなくてもいいのか……？」
「待っても……どうせ別れるから……」
「え……。まぁ……そうかもしれないけど」
「じゃあ、梨香によろしく……。バイバイ、信也……」
「あぁ、また明日な」

別れの挨拶をして、恵梨が立ち去ってしまう。俺が松元にメールを送信して、少ししてから梨香が戻って来た。恵梨の事を伝えると、

残念そうな顔をされる。いや、俺にそんな顔を向けられても困るから……。

さて、帰ろうかという話になり始めた頃。俺達の前にお嬢様の高級車がやってくる。車が止まって、出てきたのはお嬢様。俺達に向いて、話しかけてきた。

「確か……あなた達ね。リョウの友達っていうのは……」
「リョウって……Ｒｅａｌｉｇｈｔのリョウの事か？」
「ええ、そうよ」

思わず問いかける俺に、頷くお嬢様。俺が戸惑いながら口にする。

「まぁ、友達っていうか……。知り合いっていうか……」
「リョウが凄く良いメンバーを揃えたと言っていたけれど……。あの人……大袈裟だから、信憑性が薄いの。あなた達から見て、新しいメンバーはどうかしら？」
「えっと……私は凄いと思うよ。シバルさんは何でも楽器を使えるし。未来さんは一目見た演奏を、見事にそのまま演奏するから。きっと菊池さんが見ても満足すると思うよ」

梨香が答える。それに頷き同意を示す俺。お嬢様が更に問いかけてくる。

「歌は……？　ボーカルは誰？」
「さぁ？　そこまで詳しい事は知らないな。普段なら、リョウだよな？　未来やシバルは上手いそうだけど、聞いたことはないし」
「そう……」

残念そうにお嬢様が車に向かう。例の……上野とかいう奴を期待

していたのだろうか？　あいつの歌は確かに凄かったが……。未来やシバルも相当凄いから。もしかしたら、あいつを超えるくらいに上手いかもしれない。冗談抜きで。

不意に気になり、俺がお嬢様に問いかける。

「ちなみに、リョウの点数は？」

「六十点」

六十点……思っていた以上に低いな。リョウなら、八十点は行くと思っていたのだが……。それにしても、お嬢様は既にリョウと知り合っていたのか。そもそもＲｅａｌｉｇｈｔが有名になったのも、お嬢様の後ろ盾のおかげかもしれないな。

不意にお嬢様が振り返る。

「本当は七十五点にしようと思ったの……。でも、あの人……歌っている最中に大袈裟なアクションを起こすから。腹が立ってきて、六十点にしたのよ」

お嬢様の言葉を聞いて、思わず頷く俺と梨香。うん、確かに。リョウは歌いながらの無駄な動きが多い。あの……ダンスとか抜いて、無駄な動きが多い。リョウには悪いが、今回はお嬢様に同意だ。

つまらなさそうにお嬢様が立ち去り、俺と梨香は帰路につく。不意に梨香が口を押さえて言う。

「あ！　松元君もメンバーの一員だって言うの、忘れてた！」

ライブ当日〈その1〉（前書き）

未来とリョウの相性抜群だ。（笑）
珍しく未来が超突っ込みに入ってます。

ライブ当日〈その1〉

その後は何事もなく、時間が過ぎる。恵梨の夢想癖は相変わらずだが、それ以外は至って普通だ。同じような生活を繰り返しているうちに、ライブの日が近づいてくる。そして、当日の事だ……。

授業が終わり、俺と恵梨、梨香に、松元でライブ会場へと向かう。北原は後から行くらしい。チケットを三枚程貰っていたから、そいつらといくつもりだろう。緊張で顔が強張る松元をなだめながら、俺達は先に出発だ。

電車に乗って、会場へと向かい。見えてくるのは特大の会館。めちゃでかい会館だ。五階建てで、広さも相当ある。

音楽を専門とする会館だそうだが……。こんなに大きな会館を維持するにはかなりの経費がいるよな。噂では、ここも菊池財閥が援助しているとか。菊池家って音楽が好きなのか？

とにもかくにも、会館前に到着だ。まだ時間的に早いにも係わらず、結構……人が多い。わらわらと込み合う人混みを掻き分けて、会館の入り口まで歩いて行く。松元が警備の人に声を掛け、警備の人が確認を取る。すぐに道を開けてもらって、奥へと進む。

会館の中はガランとしていて、ほとんど人がいない。まぁ、今は一般人が立ち入り禁止なのだから当たり前か。松元の後ろを歩きながら、俺が口を開く。

「何かすげーなぁー。この会館……マジで広いじゃん」

「これで松元君も有名人だね」と梨香。

「いや、お願いだ！　その言葉はライブが終わってからにしてくれないか？　じゃないと、もう俺……緊張でガチガチ……」

松元が青い顔で言う。そりゃそうだ。ホールの五階までしきつまるように人が来るそうだから。緊張しないわけがない。初ライブの松元にとっては、人生で一番緊張する瞬間だろう。

ガチガチの松元に向いて、恵梨が微笑む。

「大丈夫だよ……松元君なら問題ないって。それにちょっとくらい失敗したって、わからないよ……」

「だといいんだけどな……。テンパって、ちょっとどころか、全部忘れたらどうしよう？」

「そんときゃ適当に弾く振りをして誤魔化せよ」と俺。

「そうだなぁ……」

元気のない松元の言葉で会話が途切れる。丁度それくらいに見えてくるのは大きな扉が二つ。扉は開いていて、中から歌声が聞こえてくる。リョウの声だろう。メロディーはないにしても、かなりノリノリだ。

俺達がホールの中へ入ると、予想通り。リョウがステージの真ん中に立っていた。マイクを片手に持ち。歌いながら、えらい派手に動き回っている。そんな事をしていたら、本番前にエネルギーが切れるぞ。と思うのだが、リョウの事だから平気なのだろう。

リョウが俺達に気づいて、手を振りながらマイクで喋る。

「おー！　皆、よう来てくれたなぁ～！　まっつん、今日は頑張ろうなぁ～」

「はい！　よろしくお願いします！」

頭を下げる松元。それで、後の二人はどうしたのだろう？　リョウの所まで行って、問いかける俺。

「それで……未来達は……？」

「ミラッチはさっきまでおったけど、電話や言うて、出て行ったで。すぐに帰ってくるんとちゃう？　シバ君は……まだやなぁ～」

「そうですか……」

まぁ、あいつらの事だ。音合わせなんて必要ないのだろう。あの二人は天才だもんな。練習だってほとんどしていないのに完璧だと、松元も言っていたし。

リョウと松元が最後の予行演習をする中、凄い勢いでホールの中に駆けてきたのが未来。ホールの入口からステージ上まで、忍者のように飛び込んできて。大慌てに口を開く。

「ヤバいよ、問題発生！　シバ君が急に来られなくなったって！」

「嘘だろ！？」

俺と松元が思わず口を開く。すぐに未来が不満げに返答する。

「こんな時に嘘ついてどうするのさ？　とにかく、どうしても来られないって。どうするの？　リーダー？」

「困ったなぁ……。本番まで後数時間か……」

リョウが腕を組んで眉をしかめる。しばらくして、決心したように未来を見る。

「ミラッチ……ドラムしながら、ボーカルやってくれへん？　わいがベースに入るやさかい」
「……いや、リョウがベースしながら歌えばいいじゃん！　何でわざわざ俺に回すの！？」
「実はわいなぁ……両立っていうのが、でけへんねん。練習中はできるねんけど、本番になると緊張して……頭パニックになるねん」
リョウが言って、固まる空気。そして、未来が突っ込みだ。
「……って、昔のグループではギター弾きながら歌ってたけど！？」
「あれなぁ……。ギター弾いてる振りやねん。わい……ギター好きやから、どうしても持ちたかってん。ギターの音はな……前もって録音していた奴を流してるねん」
「……」
呆れ顔の未来。だけど、リョウのギターを引く振りは有名だ。本当は楽器を使えないのでは？　という噂もあったが……。そういうわけじゃあなかったのか。未来が首を横に振りながら、口を開く。
「やだやだ、俺は絶対にボーカルはしないよ。元々、俺の地声は高いから……リョウの音楽は歌いづらいの。数曲ならいいけど、長時間は無理だよ。喉が持たないね。それに、ボーカルって一番目立つじゃん。そんなの絶対にお断り……。そうだ、松元君！」
「無理です！」
未来が松元を見て、松元が即答する。目が合う二人。しばらくして、松元が更に首を横に振る。
「俺は二十点の男、絶対に歌えません！」
「大丈夫！　五回歌えば合計百点だよ！」と未来。

「ムリムリムリ、俺は天才じゃないんですから。許して下さいよ」

松元が必死に両手を振りながら、蒼白する。急にリョウが未来に向いて、頭を下げる。

「ミラッチ！　この通りや！　今日だけやと思って、わいの願いを聞き入れてくれへんか！？」

「それ二回目だから！」

「そうか……しゃーないなぁ……」

リョウが勝手に頷き、皆の顔を見て回る。不意に大きな声で思いもよらぬ発言だ。

「よっしゃ！　今からメンバー探すでー！」

「いや、無理だろ！？」と俺。

「もう時間ないから！」

未来が言い終わると同時に、表情が強張る。何か閃いたのか。腕を組んで、口にする。

「もしかしたら、俺の弟がいけるかも……」

「でも、練習をする時間なんてないよ……」と梨香。

「大丈夫だよ。弟は俺より頭いいもん。多分、本番一発でいけると思うよ」

「ほな、頼むわ。ミラッチ。即急に弟はんを呼んできてくれへん？」とリョウ。

「期待しないでね。いつも忙しい人だから。無理だったら、俺がボーカル？　うーわ、それだけは避けたいなぁ……」

そう言った直後、未来が消滅。以前と同様の消滅事件。松元が仰天する中、リョウが場違いな事を言う。

「ミラッチ……。目に見えへん程のスピードで弟はん探しに行ってくれたわ。ええ人やなぁ～」

ライブ当日〈未来編〉（前書き）

久しぶりに登場したニート……。
相変わらずである。（笑）

ライブ当日〈未来編〉

本当に厄介な奴だ。こんな時に急用だなんて……。だったら、初めから無理だって言えよな！　シバ君のせいで走り回る破目になった俺。自分の世界に移動して、ダッシュで家に帰ってみる。

俺の住んでいる世界は元々別の場所で。リョウ達の住んでいる世界では、俺やシバ君は部外者に位置する。そうだな……。一言で言うのなら、異世界の住人だと思ってくれればいいだろう。って、今はそんな話をしている暇はない！

もう面倒だから、詳しい事は「～世界の枠組みを越えて～、『漫画小説？』」に載っているらしいから。そっちを見て。本当に今は時間ないの。詳しく説明どころじゃないの。

携帯は連絡つかず、家の中を走り回っても弟の姿はない。くそー！　仕事かー！　普段なら、いたら何かとうるさいけど。こういう時はいてもいいのに！　あー、どうしよう！？　向こうの時間は大丈夫？　早くしないと遅刻するし……。

大慌てでとりあえず狭間に移動。狭間って言うのは……。あー、もう！　それも余所で見て！　狭間に入って、停止空間を移動して。いつものビルへＧＯ！　普段なら人が多い、談話室へと駆けこむ。

中へ入ると、二人の人物が。ヤル気なさそうな人間二人。一人がＫＹで、もう一人がニート。二人の名前はもちろんあだ名。何か最近の流行らしい。俺が二人に問いかける。

「音楽が得意な人は誰！？」

「お前！」

二人して俺を指差す。俺が机を叩いて、怒鳴り散らす。

「それ以外！」

「江川先生！」

またもや二人が同時に言う。江川先生というのは……俺の弟の事。これもあだ名。最近は皆して本名を名乗らない主義だ。俺が頭を抱えて、叫び散らす。

「他に！」

「おい、ニート。お前はどうだ？」とＫＹ。

「フンッ、音楽の授業を全てボイコットしていた俺だぞ。得意なわけがないだろう」

「だよなぁ～」

ニートの言葉にＫＹが頷く。終了～、オワタ。両手で顔を覆いながら崩れ落ちる俺。ニートが爽やかな笑顔で俺に言う。

「まぁ、これも運命だと思って受け入れろ」

「……運命とか……そんなのいらないし」

俺がため息をつく。ニートが持つ本、その一冊を指差し問いかける。

「それ……今はどうなってる？」

「えーっと、今は……リアルタイムだ」

「あぁ、俺達が登場してるの。じゃあ、向こうの様子はわからないね。どうしようかなぁ～？」

「行くしかないだろ？　早くいかないと遅刻するぞ」
「やっぱり行くの？　もう……ウザい！　シバ君、後で半殺しだ」
「っていうかさぁ、シバルは今何してるの？」

ＫＹが質問してくる。俺が首を傾げて言う。

「さぁ？　何か凄く慌ててたけど……」
「向こうで戦争でも起きたのか？」とニート。
「まぁ、可能性はあるよね。神天界と神地界のゴタゴタで……。って、こんなにのんびりしていられないんだ。もう行くしかないよね」

俺が諦め発言。ＫＹが手を上げて言う。

「逝ってら！」
「お！　漢字違いだ」とニート。
「もう～、君ら最悪。後でポテチ奢ってよ」と俺。
「ほほいほいほい」

わけのわからない返事をするＫＹ。ニートが机の上にあるマグカップの中を覗いて、一言。

「コーヒーいれてくれ」
「時間ない、って言ってるだろ！」

怒鳴り散らして、狭間に飛ぶ俺。帰ろう……。マジで時間ないし。これで向こう時間が一日経過していたら、もう終わりだね。その時は俺のせいじゃない。シバ君のせいだ。
もう二度とメモリーの世界には行かない……。っていうか、行けない。リョウに会った時の反応が怖すぎるもん。

妙に気分が塞ぎこんで、停止空間をトボトボ歩く。何か……無駄に疲れた。あ～、もうさっさと終わらせて帰ってこよう。そんな気持ちで、狭間から出る。

今いる場所はライブ会館の裏側。確か裏門からも入れたはずだ……。不意に女の子の叫び声が聞こえてくる。

「キャー！　人が急に出てきた!?　すごーい!?　マジック!?」
「やば、人に見られ……」

振り返る先、目に映るのは知らない女の子。それとプラス、犬耳少年に、その子を肩車しているのは……。超ラッキー！　いいのを見つけた！

ライブ当日〈その2〉（前書き）

姫様に鍛え上げられた歌は最強である。

ライブ当日〈その2〉

未来がなかなか帰って来ず、不安げな俺達。リョウは至って能天気で『未来を信じる』という始末。リョウと松元がライブの準備を終え、警備の人も集まって。そろそろ、人がなだれ込む時間帯になる。

二人がステージの裏に移動して、俺達はそのままチケットの席につく。果たして、大丈夫なのか？　このまま未来も帰ってこないんじゃあ、もうネタにしかならないよな。

そして、幾分も経たぬうちに観客がぞろぞろと入ってくる。皆して期待溢れる目つき。めちゃくちゃ楽しみにしていたのだろう。顔を見れば一目でわかる。観客がどんどん席に着き、時間がどんどん流れて行くが……。

未来は一体どうなったのか？　もう帰ってきてるよな？　ステージ裏にいるのなら、俺達の目に見えるわけもないが。非常に気になる。帰ってこなかったら……どうするつもりだろう？

そうこうしているうちに、ライブ時間になる。電灯が消えて、ステージ裏からリョウの姿が。続いて、かなり真顔の松元だ。やっぱり緊張するんだろうなぁ～。松元が自分の持ち場につく中、リョウがマイクを手に取る。

「もうちょい待ってや。メンバーが揃ってからやさかい、後少しの辛抱や」

ということは……まだ未来は帰ってきていないのか？　それって

かなりヤバいじゃん！　俺と恵梨に梨香が顔を見合わせて話をする。

「これヤバくね？」

「未来さん……帰ってきていないのかな……？」と恵梨。

「弟さんが見つからないのかも」と梨香が言う。

俺達が駄弁っていたら。不意にステージ脇から、人が吹っ飛んでくる。地面に尻もちをついて唸るそいつの顔は……見た事のある顔。梨香がステージを見ながら口を開く。

「あれって……確か、上野さん？」

「だな……。何であいつがいるんだ？」

俺が眉をしかめる。ステージの脇から現れた人物は、お嬢様が惚れ込んだ上野という奴。上野が状況に気づいたのか、蒼白しながら観客席に振り向く。そのまま硬直だ。そんな上野に近づくのはリョウ。リョウが上野に話しかける。

「大丈夫か？　兄ちゃん？　ダイナミックな出現やなぁ～。もしかして、シバ君の代理してくれるん？」

「だ……代理？」

上野が困惑している。もしや、何も知らないのか？　じゃあ、どうしてこいつがこんな所にいるんだ？　状況が飲み込めないのは上野だけでなく俺達もだ。何が何だかさっぱりわからない。

上野とリョウが話をしていたら、未来まで乱入して。何だかごちゃごちゃした話になってくる。まぁ、一つ理解できたことは未来と上野は知り合いらしい。そのまま話が流れて行き、なぜか上野がボーカルをする事になる。

松元も加わり、四人で打ち合わせを開始。っていうか、今更打ち合わせって……大丈夫なのか？　まぁ、曲自体に新曲はないから。練習をしていない上野がボーカルなら、まだ可能性が……。とも思うが、不安要素は尽きない。

四人が打ち合わせをする中、俺達の後ろから聞こえてくる声……。

「おいおい、大丈夫かよ？」

「こんなの演出に決まってるじゃん。じゃないと、お客舐めるにも程があるし～」

「でも、あのビビり腰の奴。めっちゃ普段着じゃん。メンバーっつーか。むしろ観客？　みたいな？」

上野の事を言っているんだろうな。確かに、一般の観客に紛れ込んでいたら区別がつかない。未来の奴は普段から黒コートのため、いつもの格好でもそれっぽくみえるし。リョウや松元はそれなりに格好のついた服を着ている。本当に一人だけ飛びぬけて変なのが上野だ。

まだまだ暇な後ろの観客が話を続ける。

「つーか、リョウが歌わないんじゃあ。意味なくね？」

「うわぁ！　本当だ！　もう帰ろうか？」

「そうだよね～。冴えない奴の歌を聞いたって、無駄だし」

「でも、それじゃあ。チケット代が無駄になるなぁ～。マジもったいね～」

「最悪。詐欺だね」

「あ～あ、Ｒｅａｌｉｇｈｔの時代も終了か～」

言いたい放題だな。まぁ、わからなくもない。今の状況を目にしていたら、ダメダメオーラしか感じない。期待すら持てない俺達が待っていたら、リョウが三度手を叩く。

「ほな、行こうか。皆、行くでー。最初で最後の本番や」

メンバーが持ち場につき、準備が整う。真顔の三人を余所に、一人上野だけヤル気のない顔。無理矢理に強制されたので、もうどうにでもなれ気分なのか。何かを諦めた気配がある。

乗り気になれない観客が小声で駄弁る中、メロディーが流れだす。未来とリョウはもちろんの事、松元もしっかり自分のパートをこなしている。問題はステージの中心に立つ人物。

帰る準備を整える観客達に紛れ、流れ続ける音楽。そして、上野が口を開く。直後、観客達の動きがピタリと止まる。それが見事に停止する。え？　何、これ？　みたいに。一瞬、何が何だかわからなくなる。

下手な歌声を聞いた時、耳を閉じたくなる衝動に駆られる事があるが。その真逆。上手い歌声を聞いた時、耳の穴をほじくり出したくなる。あー、どうして耳掃除してこなかったんだ？　自分の疎かさに後悔。

お嬢様の録音機で一度は聴いた歌声だが。こういう所で聴くと、尚更いい。立ち上がりかけた人々が、ぞろぞろと座りなおし。身を前にして、音楽に聴き入る。まるで、オーケストラを聴いているよう。大袈裟に言っているわけじゃない。

そうだな……言い換えるなら、心臓を鷲づかみにされて。そのま

ま感情までコントロールされているような気分になる。旋律と共に、流れる歌声。本当にこいつ……上野は歌が上手い。

後ろでバカを言っていた奴らも、今や本腰で曲に聴きいっている。メロディーも凄いのだが、やはり何と言っても歌がメインになってしまう。上野の歌に聴き惚れて、涙を流している奴までいる。すげー、まだ一曲目の半分にも満たないのに……。

二番に差し掛かる時、上野がふざけた事を言う。メロディーに乗って、口にする言葉は歌詞じゃない。

「二番なんて～、覚えてるわけない～」

おい！？　思わず、心の中で突っ込みだ。あー！　もったいない！　かなりいいところなのに！　すぐにメロディーが消えうせて。未来とリョウが爆笑する。メンバーが上野の周りに集まって、相談会。もう～、肝心な所で……。

メンバーが話し合う中、ざわめく観客。聞こえてくる声。

「すげー。あのボーカル誰だよ？」
「見たことないけど……。めっちゃ良い声してるよね」
「何か涙出てきたよ～。あんな歌で告白されたら、私……コロッといっちゃうかも」

観客が話をしていたら、再度メンバーが持ち場につく。上野の手には……カンペ。え？　それ、ありなの？　でもまぁ、仕方ないだろう。練習なんてしてないんだからな。それであの上手さなんだから、上野って何者なんだ？　未来達と同じ天才って奴か？

こうして始まったライブは素晴らしく盛り上がりを見せる。切ない曲では泣き出す奴、熱い曲では暴れ出す奴、楽しい曲ではハイになる奴。いろんな奴が現れて、えらい盛り上がりようだ。既に洗脳の域まで達している。

さぁ、まだまだ行くぞ！　という観客の気持ちとは裏腹に、スケジュールが全て終わってしまう。歯抜けもいくつかあったが……とりあえず、一通りは終わってしまった。何だか物足りない気分。そして、観客の声はアンコールに。

リョウがマイクなしで大声だ。

「よっしゃー！　アンコールにお答えするでー！　どの曲がええかな？　選んでやー！」

リョウがいくつか曲名を言って、拍手の多かった曲をもう一度演奏する。そんな事を数度繰り返し、最後は上野が口を開く。

「ちょっと……もう限界だよ。許して……」

上野のギブアップ宣言に、会場がブーイングだ。でも、まぁ……そろそろきついだろうな。普通の奴なら、当の昔にくたばっている。上野は練習もなしに歌っているんだ。凄い奴だと思う。

上野の限界を理解して、リョウが上野からマイクを受け取る。

「もう勘弁してやってなー。喉枯れたら可愛そうやさかい。ほな、そろそろサイン会に行こうか？」

サイン会と聴いて、観客が盛り上がる。上手い具合に話を進めて、

ライブを終わらせるリョウ。サイン会は別の場所で行われるらしい。皆がサイン会場に移動する中、不意に上野が口を開く。

「じゃあ、僕は帰るから……」

その一言が仇となり、サインを貰おうとする観客がステージに向かって押し寄せる。ステージに這い上がる者まで現れ、えらい暴動だ。そんな観客に対して、上野が口を開く。

「ぼ、僕は代理だよ……。元々は関係ないし……。絶対にサインなんてしないからね！」

「関係なくても構わないから、サインして～！」

「お願いです！　サインして下さい！　俺、あなたの歌に聴き惚れました！」

「私、握手でいいし。お願い、ちょっと手を握るだけだから！」

上野に向かって押し寄せる観客、蒼白する上野。警備員ですら手つかずだ。そんな中、ステージの脇から何かが飛び出てくる。上野の前に行き、威嚇するのは以前見た事のある犬耳の子ども。

「パパは今から、僕とご飯を食べに行くの！」

「ハル……」と上野。

「食べに行くの……。ね？」

「……うん。そうだね」

上野が頷いたと思ったら、ハルという子どもが紫色の光に包まれる。それを見て、怖気だす人々。上野に近づこうとしていた人の半分が立ち止まる。

それにしても、まるでゲームのバリアーのようだ。すぐにバリア

ーが広がり上野すらも含んで、二人がその中に入る。そのまま眺めていたら、バリアーを気にもせずに近寄ろうとした観客が弾き飛ばされた。

マジでバリアーかよ!?　注意して見守っていたら、俺の予想通り。限定された人以外は弾き飛ばされるらしい。そんな中、またもや新しい奴がステージの脇から現れる。あれは……北原か？　北原がハルに向いて質問だ。

「ハル君……。これは何？」
「バリアーなの。雫お姉ちゃんは大丈夫なの」
「え？　そうなの？　うわぁ！　本当だ！　私は入れるじゃん！　すご〜い！　これも超能力の一種？」
「そうなの〜。パパ、お腹空いた〜」
「そう……。じゃあ、帰ろうか」と上野。

北原がバリアーの中ではしゃぎ回りながら、上野に言う。

「っていうか、進兄どうしちゃったの!?　めっちゃ歌上手いじゃん！　前はそんなに上手くなかったのに。何が起きたの!?　マジで雫、ビックリなんだけど！　もう何か凄く感動したんだけど！　ねぇ、何!?　何したの!?」
「はいはい、行くよー。雫、そっちに行ってー」

上野が興奮する北原の背を押して、ステージの脇へと消えて行く。裏口から帰るつもりだろう。ふと会場内を見渡すと、急ぎ足で裏口へまわろうとする人々が……。うわぁ〜、これは待ち伏せされるな……。

ライブ当日〈恵梨編〉

ライブが終わって、帰り道。松元君達は後片づけに忙しそうだから、先に帰らせてもらうことにする。梨香が三人からサインを貰って、ついでに別れの挨拶。松元君達にサヨナラを言って、会館の外に出る。

外に出ると、報道陣がたくさん。インタビューされそうになるけど、小さくなって何とか逃げ切る。私達が歩いていたら、聞こえてくる人の声……。二人の男の人が話をしている

「聞いたかよ？　さっき人が空飛んだらしいぜ」
「人が空なんて飛ぶかよ」
「飛んだんだって。会館の裏で、犬耳を付けた子どもが、急に大人になって。女の子と男を抱えて飛んでったんだって」
「それはデマだって」
「いや、カメラもあったそうだから。後でニュースするかも……」
「マジかよ？　俺は信じねーし」

犬耳をつけた子ども？　ということは、ハルという子と。北原さんと上野さん？　どういう事かな？　空を飛んだって……。だけど、会場でハル君が不思議なオーラを出していたのも。あれもよくわからないし……。

ぼうっとしていたら、他の声も耳に入る。三人の女の子達。

「今日のライブ良かったよね～」と長髪の子。
「私、未来さんに一目惚れ。カッコよかった～」派手な服を着た子が言う。

「やっぱりリョウでしょ？」さっぱりした格好の子が二人を見る。
「松元君、可愛いよね。あ、でも、私はボーカルの人かな？」

長髪の子が話す。すぐに反応するのは、派手な服を着た子。

「え～！　あのセンスない服着ていた人？」
「でも、歌は凄かったよね。遠目だったから、顔は良く見えなかったけど……」

それに対して、答えるのはさっぱりした格好の子。そして、また長髪の子が慌しく話し出す。

「私、見たよ。ライブが終わった後に、一階にダッシュして近づいたの。そしたら、結構タイプだった」
「マジで？　私も行けばよかったなぁ～」
「でも、あの人代理でしょ？本当は神上って人がくるはずだったって。あの人は確か……上野って名前……」

さっぱりした格好の子が言って、長髪の子が問いかける。

「上野？　何で名前知ってるの？」
「サインを貰う時、未来さんに聞いたの」とさっぱりした格好の子。
「え！？　未来さんと話したの！？」と派手な服を着た子。
「だって……気になったから」
「ズルイしー！　私も話したかったし！」
「上野っていうのか……。代理って事は、次回のライブは出ないのかな？」

長髪の子が一人で呟いて、他の子が二人で話を盛り上げる。上野さん……。信也や梨香から話は聞いていたけど……あの人が。

上野さんの顔を初めて見た時、言葉に詰まった。急に心臓が高鳴って、例の夢を見た時のような感覚を覚えたから。初めて会った気がしなかったし、何よりも駆け寄りたい衝動を抑える事に必死だった。

もしかして、これって……一目惚れ!?　マズイよ、マズイ。信也がいるのに、恋するなんて。夢の浮気よりも、マズイよ。蒼白しながらも、気が付けば上野さんの事を考えている自分がいる。うわーん!　どうしよう!?

一人で暴走していたら、急に信也が話を始める。

「それにしても、凄かったな。今日のライブ」
「カッコよかったね。皆、頑張っていたし」
「っていうか、あの上野って奴、代理であれだろ?　未来やシバルも……あいつら何者なんだろうな?」
「何かそういう……凄い人の集まりみたいなのがあるのかな?　でも、あのハルって子も別の凄さを感じるんだけど」
「あの犬耳だろ?　あいつは本当に地球人か?」

確かに不思議な人達。だけど、そういう私達は何なのだろう?私と梨香なんて、もとは一人の人間なのに……。ぼんやりと考えながら、頭の隅で別の妄想。上野さん……個人的に会ってみたいな。

大騒動〈その1〉

ライブが行われた翌日の話だ。今やテレビは昨晩のライブの話で持ち切りになっている。朝のニュースでは、ライブに続いて。人が空を飛んで行く光景が……。例のハルという子どもが、いきなりに大人になって。北原と上野を抱えて空を飛ぶ。

テレビ局が動画を細工したのではないのか？　という話があがる中、一般人の中にも目撃者が多数いるという情報も。何が真実か、わけがわからない。

しかし、俺的には実際に空を飛んでいたという案を信じている。何せけったいな出来事が頻繁に起きる世の中だ。恵梨香が二人に分かれ、ハルがバリアーを張り。未来が瞬間消滅し、シバル……というか、薬一つで大人から子どもになる時代。

こうなると、人が空を飛んでも不思議じゃないよな……。もう空想なんてする必要はない。リアルな事件が空想の領域と化している。普通に過ごしているだけで、ファンタジーだ。

この日も普段通り、恵梨と梨香……二人と待ち合わせをして、登校することに。恵梨香が二人に分かれてから、ほとんど一緒に登校してるな。何ていうか……以前は一人で登校していたから多かった遅刻寸前が、今やゼロだ。日課って、大したものだと思う。

三人で歩きながら、学校近くまで向かう中。急に恵梨が妙な事を口にする。

「猫飼いたいな……」
「猫？　急にどうしたの？　動物を飼うのは、世話が大変だよ」と梨香。
「わかってるんだけど……。何か夢に猫がでてきて……いや、あれって人かな？」
「また夢かよ？　飽きないなぁ～」

俺が呆れた声を出すと、恵梨が小さくなって黙り込む。怒られたとでも思ったのか、夢の内容を口にすることなく、別の話を口にする。

「それにしても……昨日のライブは凄かったよね。あの後……どうなったのか。松元君達に聞いてみないとね……」
「あぁ、そうだよな。今朝のニュースでも、すげー報道されてたし」と俺。
「ニュース？」

すぐに恵梨が首を傾げる。そんな恵梨の様子を見て、梨香が口を挟み出す。

「テレビ見てないの？　どのチャンネルも昨日のライブの話ばかりだったんだよ」
「そうなんだ……。今朝は……ちょっと寝坊して……。テレビ見てなかったから……。知らなかった……」
「しかも、ハルって子どもが大人になって。北原と上野を抱えて空を飛ぶんだ。あれって、事実なのか。北原に聞いてみたいな」と俺。
「空を……。そういえば、昨日の帰り道に。そんな話をしていた人達が何人かいたよね……。本当に空を……飛んでいたりして」

恵梨が言って、俺と梨香が頷く。可能性を否定できない。だから却って気になるんだ。早く北原に聞いてみたい。

途中で恵梨と別れて、俺と梨香が校舎の中へと入って行く。教室までの道のりは、ライブの話ばかりだ。祭り騒ぎになっているが、全ての原因は昨日のライブ。すげーよな。ライブ一つでこんなに大騒ぎになるなんて……。

教室の前には凄い数の生徒だ。中に入ると、椅子に座りながらお疲れ気味の松元と、その隣には北原。その周りには野次馬がたくさん……。二人に近づき、声を掛ける。

「お疲れだな、松元。北原、空飛んだって本当か？」

「もうクタクタだ。緊張疲れで半死、サインのしすぎで全死。今日の俺は死んでるからよろしくなぁ～」

「ビックリしたよね～。あれって、夢じゃなかったんだ。飛行機にも乗った事ないのに、あんな形で空を飛ぶなんて。めっちゃ怖かったけど、めっちゃ夜景が綺麗だったよ。ハル君の超能力って凄いよね～」

事実……っぽいな。北原がわざわざ嘘をつくとは思えないし……。これだけわかりやすい性格なんだから、嘘をついたとしても見破れる自信がある。

北原の言葉を信用していない奴もいるだろうが、わざわざ問い詰めることはしないらしい。首を傾げて、他の奴と駄弁っている。

今度は梨香が松元に声を掛ける。

「松元君、大変だったね。だけど、凄く良かったよ。私、感動したもの」

「恵梨香ちゃんの言葉を聞くと、右手の痛みも吹っ飛ぶなぁ～」
「あ！　そういえば、恵梨香ちゃん。サインは？　雫は貰い損ねちゃって……」

北原が口を出す。すぐに梨香がサイン色紙を取り出し、北原に手渡す。寄せ書き風に書かれた色紙だ。色紙を貰って北原が大喜び。そして、不適な笑みを浮かべながら自分の鞄を漁りだす。出てきたのは一枚の箸袋。それを開いて俺達に見せる。

「ジャジャーン！　実は進兄とシバルさんからもサインを頂いていたのでしたー。あの後、居酒屋に食べに行ってね。三人で食べていたら、進兄の代わりだったはずのシバルって人が現れて。進兄と一緒に二次会ライブしていたんだよ～。二人共、お酒を飲んで酔っていたから。すぐにサインしてくれたんだ～。これで全種類コンプリート！」

北原の言葉を聞いて、教室に嵐が。皆が北原に駆けより、そのサインを譲ってくれやら売ってくれやらと大暴動だ。嫌だという北原の言葉にも係わらずに、サイン色紙に手を伸ばす奴まで現れる。

北原がサインを手放してしまい、二枚の紙が宙に舞う。それを目にして、始まる戦争。マジで先生の助けが必要になった頃に、二枚の紙が空間から掻き消える。誰が色紙を手に入れたのかと、今度は喧嘩が始まりだす。

その直後に、壁を殴る様な音と共に人の怒鳴り声だ。

「くだらない事は止めろ！　これ以上暴れると怪我人が出るぞ！」

音と声にビビって、皆の動きが止まる。声の方を振り向くと未来

だ。右手の拳を壁について、左手には例の色紙。怖い形相で乱闘が起きていた場所に目を向けている。次に出すのは先程のような荒い声じゃなくて、妙に静かな重々しい声……。

「バカみたいでしょ？　こんな紙切れのために怪我をするなんて……。これは俺が預かるよ。こういう争いの原因は気づいた時に処分しないとね」

「でも、それは雫の……」

「君は、確か……。北原さんだよね？　えーと……」

そのまま未来が硬直。おもむろに、人差し指を上げて、北原を指差す。

「上野！　……の知り合い」

「うん、合ってるよ～。っていうか、思い出すの遅すぎだし～。未来さんだったっけ？　本当に進兄の知り合いなの～？　まぁ、親しく喋ってたけどさぁ～」

「いやぁ～、俺達っていつもあだ名で呼び合うんだよね。だから、本名を使わないし。昨日も焦ったよ～。『あのボーカル誰？』とか聞かれたら、答えられないの」

ヘラヘラと笑う未来。不意に松元に声を掛ける。

「そうそう、松元君。リョウに伝えてほしい事があるんだけど……」

「え？　それなら、本人に電話すれば……」

「リョウと直接対決は避ける事にしたの。俺とは相性が悪すぎるから。まぁ、簡単でいいよ。『約束通り最初で最後だから。俺とシバ君はもうグループを抜けるし。バイバイ、じゃあねー。もう出会わない事を祈るよ』って言っておいて」

「えぇ!?　ちょっと待って下さい！　そんな事をしたら、それこ

そ暴動ですよ！」

「そんな事を言われても、俺達は元々グループに加入するつもりはなかったんだよ。どうしてもって言うのなら。えーっと……上野君でも誘ってみたら？　まぁ、九割九分九厘、断られるだろうけど……」

「いや、でも……。確か、リョウさん……次のライブの事を……テレビで喋ってましたけど」

「……」

未来が超不愉快そうな顔をする。すぐに吐き捨てるように、口を開く。

「もう知らないよ！　あいつ、自分勝手なんだから！」

大騒動〈その2〉

松元や周りの生徒が未来を説得しようとする中、やってくるのはお嬢様。しかも、もの凄く不機嫌そうだ。教室に入ってきて、ギラリと俺と梨香を睨む。そのまま黙って、自分の席につく。

きっとボーカルが上野だった事を知らなかったので、ライブに行かなくて。上野の姿を見れずに怒っているのだろうが……。怒る相手を間違えているだろ？　俺達はわからないって言ったんだから。俺達に当たるのは変な話だ。

俺が不快な気分でいたら、未来がお嬢様をちら見する。

「あれは誰？　えらい場違いな雰囲気だしてるけど……」
「知らないんですか？　菊池財閥のお嬢様ですよ。日本一のお金持ちの」と松元が未来に囁く。
「日本一の金持ちか……。それで、何であんなに不機嫌なの？」
「それはたぶんね。あの……今回のライブで上野さんがボーカルだってことを知らなかったから。見に行かなかったのだと思うよ。菊池さんは上野さんの事が好きみたいだし」と梨香が話に割って入る。
「お嬢様なのに凄い趣味だね……。あんなのがタイプだなんて……。昔はしっかりしていたそうだけど、今なんてただの根暗ヒッキーじゃん」

未来が大きな声で言ったら、お嬢様が未来を睨む。お嬢様に睨まれたにも関わらず、平然としている未来。急に何かを思い出したのか、手を叩く。あれ？　そういえば、未来が持っていた色紙がない……。いつの間にか、消えていた。

未来が笑顔満面でお嬢様に近づく。

「菊池さんとか言ったね。可愛い顔しているのに、そんな不機嫌な顔していたらもったいないよ」

「あなた……森岡未来ね」

「うん、そう。あのボーカル、上野君の友達だよ。せっかくだから君に良い物をプレゼントしてあげようか？」

「……」

「そんな胡散臭げに見ないでよ。くだらない物だけど、君にとっては面白い物だと思うし」

「それで、いくら？」

「流石、お嬢様だ。よくわかってらっしゃる。そうだね……一万でどう？」

「……紙切れね。玲！　用意しなさい」

お嬢様が口にすると、教室の外から玲が入ってくる。手には布巾に包まれた物体。中身は金だろう。一万なんて小さなものじゃない。百万……なわけないよな？　一千万か？

玲がお嬢様の机にそれを乗せて、布巾を広げると案の定。皆がざわめく中、未来が肩をすくめる。

「えらく多いけど」

「額が小さすぎるわ。そんな物、却って面倒よ」

「はぁ～、君の一言は傷つくなぁ～。そんな小さな物で喜ぶ人が何人いるだろう？」

「それで、あなたは何をくれるの？」

「さてはて、一千万に届くかどうか？」

未来が不適な笑みを浮かべて、コートのポケットに手を突っ込む。取り出したのは携帯電話。それをポチポチいじりだし、お嬢様に見

えるように画面を向ける。画像だろうか？　非常に気になる……。

ふと横を見ると、北原がそそくさと未来に近づいて行く。松元も音を立てずに近づくので、俺と梨香も一緒に移動だ。未来の携帯を覗き込むと、動画モード。未来が俺達に口を開く。

「さぁ、行くよ。スタート」

未来がボタンを押すと動画が動き出す。コタツから何かの尻尾が飛び出ている。猫か……？　にしては大きいな……。じーっと見ていたら、人の声が聞こえてくる。何だか間の抜けた人の声。

「おい～、早く出てこいよ～。未来に状況説明しないといけないだろ？」

「いやぁ～！　こんなのいやぁ～！」

次に聞こえてきたのは……上野の声？　そのまま時間が経過して、もぞもぞと尻尾がコタツに入る。その後、十秒も経たぬうちに、コタツから顔だけ出すのは上野。しかも……なぜかネコ耳つき。上野がネコ耳をパタパタさせながら、口を開く。

「あっつい……」

「だろうな……。お前、飲んでるんだから。さっさと出てこいよ」

今度は先程とは違う声が……。

「こんなことなら、ニートに付ければよかった。何で自分に付けたんだろう？」

「怖い事を言うな。俺がそんな物を付けてみろ。警官に連行されるだろうが」

「僕だって連行されるし～。保健所行きだよ～」

「早く出てこないと、本当に保健所に連絡されるぞ」

ニートという奴が言うと、上野がもぞもぞとコタツから出てくる。ネコ耳に尻尾まで付けて。しかも……両方動いているし……。機械的じゃなくて、まるで本物みたいに。パタパタ動くネコ耳に上野が手を伸ばす。そのまま引っ張ろうとするが取れないようだ。目に涙を浮かべながら、必死……。尻尾も引っ張ろうとするが、こちらも取れないらしい。

そして、上野が泣き言を言う。

「もう見たまんまだよ～。未来～、お願いだから。これを取ってよ～。ふざけて付けたはいいけど、何しても取れないの。こんなんじゃあ、外に出れないよ～」

「帰りにマタタビ買ってきてくれ。効果があるか試してみようぜ」

と間抜け声。

「いらないし！　マタタビなんて興味ないし！」

「いやぁ～、何でも試してみないとな」

「もういいじゃん！　ＫＹ、そろそろ録画止めてよ！」

「ほら、可愛く『ニャー』って鳴いてみろ」

「鳴かないし！　もうさっさと送信してって！」

上野が画面に近づいてきて、ゴタゴタゴタゴタ……。画面が暗くなり、停止する。何てコメントしたらいいのかわからない。こんな物に一万も出せるかよ。一千万なんて論外だ。俺が呆れ返っていたら、お嬢様が興奮しながら未来を見る。

「後、一億払うから。この動画をコピーして！」

「凄くノリがいいね。でも、一億なんていらないよ。一千万も必要ないもの。俺には一万で十分。まぁ、同じ動画をこのＣＤに焼いているから。ネタとして、一枚作ったんだけど……。大量生産したら、

怒られそうだし。君にあげるよ。何か大切にしてくれそうだから」

未来がどこからともなくCDを取り出して、お嬢様に手渡す。そして、一千万から一枚手に取り満足そうな顔。せっかくなんだから、全部貰えばいいのに……。何ていうか、格好をつけすぎだよな。俺なら絶対に貰ってる。大喜びのお嬢様が超笑顔で未来に言う。

「ありがとう！」

「どういたしまして。じゃあ、一万円。確かに頂いたよ」

未来が一万円をお嬢様に見せて、携帯を仕舞い、俺達に振り替える。

「案外に良い子じゃない。もっと怖いのかと思っていたのに」

「上野の話になると、目の色が変わるんだ」と俺。

「へー、よっぽど惚れてるんだね」

「っていうか、上野さん……未来さんに助けを求めていませんでしたか？」

松元が話を変える。未来が非常に楽しげに口を開く。

「うん？　そうだったっけ？　俺にはめっちゃ楽しんでいるように見えたけど。それに、見ていて和むでしょ？　まぁ、ネコ耳をつけていたからって不便な事はないだろうし。ちょっとくらい新しい事をしてもいいと思わない？」

ニヤニヤと笑う未来。こいつ……上野を元に戻す気ないな。一目でわかる。浮かれるお嬢様と楽しげな未来、それを背負うのは哀れなネコ耳……上野か。

大騒動〈その3〉

その後、未来と松元が話をしていたら。先生が入って来た。皆が席につく中、気が付くと未来が消えている。いるのは困り顔の松元だけだ。

未来とシバルがグループを抜けるとなると……それを埋めるメンバーが必要になるし。その上、二人があまりにもできる奴だったので、それの代わりとなると……。同じくらいのレベルの奴を探さないといけないよな。だけど、あんな天才は稀だろうし。

まぁ、絶対必需品は上野だろう。せめてあいつが入ってくれるのなら、後が面倒じゃない。しかし、入ってくれないとなると本当にどえらい騒ぎだろうな。ファンの人達が大暴れするかも。

その後は、何事もなく授業が進む。休み時間を使い、松元が頻繁に教室を抜けるのは、リョウと連絡を取り合っているからだろう。俺達が口を出す事でもないので、遠くから見守る事に。青い顔の松元と対象なのはお嬢様。未来から買い取ったＣＤを大切そうに眺めながら、非常に嬉しそうだ。

授業が終わり足早に教室を出て行く松元に話しかける事もできずに、置いてけぼりをくらう。何だかんだ言っても音楽ができるわけでもなく、メンバーでもない俺達が乱入すると迷惑だろう。だから、追いかける事もしない。

俺と梨香が学園を出て歩いていたら、北原の姿を発見だ。梨香が

北原に声を掛ける。

「雫ちゃん、何してるの？」

「あ、恵梨香ちゃん。えーっとね……松元君に頼まれて。進兄に電話してるの。だけど、進兄の事だから絶対に断ると思うけどね～。せめて日和お姉ちゃんが生きていたら、わからないけれど。進兄は日和お姉ちゃんにぞっこんだったから、日和お姉ちゃんの言うことなら何でも聞いてくれるし～」

「へ～、そうなんだ」

「あ！　そっか！　じゃあ、日和お姉ちゃんに頼めばいいんだ！」

「え？　でも、亡くなったんじゃあ……」

「うん、そうだよ～。だけど、ハル君には見えるんだって。幽霊の日和お姉ちゃんが見えて会話もできるみたいだよ～。雫もハル君にお願いして、お喋りしたら。本当に日和お姉ちゃんなの。雫と日和お姉ちゃんしか知らない事を何でも知っていたから。幽霊っているんだね～」

北原がケラケラ笑って、電話を始める。今度は幽霊か……。まぁ、今更驚くことじゃないよな……。北原に声援を掛けて、俺達はそのまま角を曲がる。電柱の後ろからひょっこりと顔をだすのは恵梨。

急ぎ足で恵梨に近づき、早くこの場を離れるつもりだ。何せ後ろの角には北原。いつ見つかるかわからない。恵梨香の分離を今更説明するのは面倒だし、相手が北原だからなぁ～。あのテンションで迫られるなんて考えるだけで気分が滅入る。

なんて思っていたら、後ろから気配が……。恵梨が隠れるまでもなく、北原が凄い勢いで駆けてくる。

「あのさぁ～！　恵梨香ちゃ～んっ！？　って、二人いる！？　ど

っちが本物!?」
「えーっと、どっちも本物かなぁ～」ためらいがちに答える梨香。
「え!?　何、何!?　どういう事なの!?　もしかして、恵梨香ちゃんって双子だったの!?」
「えっと……それはね……」

小さくなりながら手遊びをする恵梨。ちらりと俺に目配せするが、俺は見ない振りだ。もう知らない。説明をするのなら、自分達でやってくれ。元々、俺は関係ないんだし。

北原が梨香を質問攻めにして、梨香が諦め説明を始める。まぁ、北原も色々とファンタジー体験をしているから。嘘だとは思わないらしい。梨香の説明を聞いた後に、北原がズレた反応。

「へー、それって便利だね。授業とか半分くらいサボれるじゃん」
「便利と言えば便利かな?　初めは戸惑っていたけど、最近は結構楽しんでるし。自由な時間も増えて、色々と遊べるから。恵梨はどう?」
「えっと……私は……わからないや」

恵梨が俺の後ろに隠れる。それを見て、北原が俺に言う。

「斎藤君、良かったね。彼女が二人に増えて、嬉しいでしょ?」
「嬉しかねーよ!　一人でも手を持て余すのに……」
「それはどういう意味?」

梨香に睨まれる。思わず口が動いてしまった。不機嫌な梨香から目を逸らし、話をなんとかはぐらかす。そして、北原に質問だ。

「それで、二人に用があったんじゃなかったのか?」

「あ！　そうそう、今ね。進兄に電話したら、大荷物を松元君に届けてほしいんだって。雫だけじゃあ持てないかもしれないから、皆も手伝ってくれないかなー？　とか思っちゃって」
「じゃあ、信也。よろしくね」
梨香が俺に顔を向ける。すぐに俺が拒否反応だ。
「な、何で俺なんだよ？　大体、二人が頼まれたんだろ？　俺は関係……」
「どうせ私達は足手まといだもの」
冷たい目で俺を見てくる梨香。言い返す事も出来ずに、ため息をつく俺。はぁ～、また荷物持ちかよ……。頼むからなるべく軽い物にしてくれよなー。

大騒動〈その4〉

北原の後に続いて歩く。上野はこの近辺に住んでいるらしい。それを聞いて、ふと頭をかすめる言葉。そういえば、お嬢様が言っていたな。転校してきた直後、その理由を『近いから』だと。近いって……上野の家の事を言っていたのか？　なんか……そんな気がするな。俺の家の事じゃなかったのかよ。少し期待していた俺がバカみたいじゃないか。

俺が一人で恥じていたら、急に北原が顔を上げる。北原の指差す先は、この近辺で有名な高級マンション。え？　上野って……こんなに良いところに住んでいたのか？　もっとボロッちい家だとばかりに思っていたのに。

北原を追いかけていたら、確かに……上野という表札が。北原がチャイムを押すと、中からドタドタという足音が聞こえてくる。しばらくして、扉が開かれる。扉越しには上野の姿。家の中にも係わらずに、フードをかぶっている。きっとあのネコ耳が恥ずかしいからだろう。それを見て、北原が笑いだす。

「進兄。そのフード、意味ないし～。ネコ耳の事はもう知ってるよ～」

「な、何で！？」赤面する上野。

「未来さんが動画を見せてくれたんだ～。可愛いから別にいいじゃん」

「未来の奴……本当に最悪だなぁ……」

不満そうにつぶやき、ため息をつく上野。北原から目を逸らし、俺達をちら見すると。扉を開けて、中を指差す。

「まぁ、とりあえず、中に入りなよ」

「は、はい……」

恵梨と梨香が同時に頷き、俺も会釈する。上野に勧められて中に入ると、予想通りに良い部屋だ。部屋の中を見回す俺達。俺達が感嘆していたら、上野が前を横切る。フードを取ったようだ。ネコ耳と尾を動かしながら、テクテクと歩いている。

上野の向かう先には、ハルの姿が。今は子ども姿で、ダンボールの上に座っている。俺達に気が付き、ダンボールから飛び降りる。直後、紫色に輝いて大人の姿へと変身した。

呆気に取られる俺と恵梨に梨香。直に見るのは二度目だが、やはり不思議だ。気にしてないのは北原だけ。

ハルが北原に近づき、頭を下げる。

「こんにちは、北原さん。わざわざすみません」

「別にいいよ。雫はどうせ暇だもん。だけど、思った以上に静かだよね～。もっとテレビの取材とか来て大変なのかと思ってたのに～」

「いえ、今は静かですけど。今朝は大事でした。お父さんはなかなか起きてくれないし。五分に一回のペースでチャイムの音ですから。頭が変になりそうです。最後はイヤホンをして音楽を聞きながら、漫画を読んでいました。あんなにうるさいのに、お父さんはグッスリですよ。感心します」

「そういうハルはどうなのさ？　熟睡している時なんて、頭叩いても起きないんだから。それに気が付いたら寝ているし。僕よりも寝付きいいよ」

上野が口を挟む。手にはマジックだ。ダンボールの方へと歩いて行くが、何をするつもりだろう？　上野がダンボールの前に座りこんで、口を開く。

「これって何だろう？　生物（なまもの）かな？」
「生物（なまもの）っていうか、生物（せいぶつ）ですね」

ハルが答える。上野が頷き、ダンボールに文字を書く。『せいぶつ』……。ひらがな。しかも、すげー字が汚い。北原が貰ったサインを見たときは。サインだから、わざと崩れ文字で書いているのかと思っていたが。そういうわけではなくて、単に字が汚かっただけか。

北原が上野に問いかける。

「え？　何？　動物？　……にしては大きいけど」

北原が言うと、上野が頷く。不意に恐ろしい発言だ。

「うん。中身はリョウなんだけど。僕には必要ないから。松元君なら、きっと貰ってくれると思うし……」
「え……？」

ハル以外の誰もが言葉を失う。リョウ？　って、どういう意味だ？　俺がおもむろに口を開く。

「リョウって……あのリョウだよな？」
「うん、あのリョウだよ」上野が答える。
「リョウ……のＣＤとか？」

「ううん、実物だよ」

上野が言った直後、部屋に奇妙な雰囲気が……。まさか……死体？　蒼白する俺。ダンボールから遠ざかろうとする俺とは違い、梨香が勇気ある行動だ。ダンボールに近づいて、無断で蓋を開きだす。

中に入っていたのは上野の言葉通り。リョウそのものだ。口にタオルを巻かれて、紐で手足を縛られている。とりあえず、生きてはいたが。中身を知っていたにも関わらず。正直に言って、かなりビビった。ダンボールの中に人が入っていたら、マジで怖い。かなり怖い。

リョウの生存を知って、俺もダンボールへと近づく。リョウの口に巻かれたタオルを取って、声を掛ける。

「おい、リョウ！？　生きてるよな！？」
「んん……？　ふぁ～、よく寝た」
「って、寝てたのかよ！？　こんな状態で！？」
「最近寝不足やったからなぁ～。って、何や。君かいな」
「お前……自分に置かれた状況をわかってるのかよ？」

呆れる俺とは余所に、リョウが上体を起こす。無論、手足は縛られたままだ。リョウが上野に向いて、口を開く。

「せや、進ちゃん！　頼むわ！　わいは進ちゃんのどんなプレイにも耐えるやさかい。メンバーに入ってくれへんか！？」
「何がプレイだよ？　いやらしいんだよ。お前はもう黙れよ」
「進ちゃんが入ってくれるまでは黙らんで～！　我慢勝負や～！」
「僕はグループには入らないよ。元々、人前に出るのは好きじゃないし。本業だってあるんだから。頼むから、帰ってよ。近所に迷惑

だし。僕も疲れてきて……頭痛いし」
「じゃあ、進ちゃん。今度のだけでいい！　最初で最後の一回でいいから。な？　お願いや～！」
「はぁ……頭痛い。誰かそいつを黙らせて」
「はい、わかりました」

答えたのはハル。背後からリョウの首に手刀を入れる。すると、リョウが気を失う。死んだわけではないと思う。そう信じたい。お疲れ気味の上野が北原に言う。

「というわけなんだけど……。とにかく、これを松元君に渡してくれない？」
「えー、雫が欲しいし～」
「こんな物を持って帰ったら、雫の両親が怒り狂うよ。しつこいし、うるさいし、迷惑だし」
「う～ん、そうかもしれないけど……」
「まぁ、欲しいのなら持って帰っていいけど。怒られても僕は責任取れないからね」
「う～ん……」
「とにかく、何かあったらハルに相談して。僕は……そろそろ仕事しなくちゃ。じゃあ、後はよろしくね」

そう言って、上野がテクテク歩いて行く。仕事部屋が別にあるようだ。扉があって、それを開けて中へ入って行った。ハルを見ると、リョウをダンボールに押し込んでいる。恵梨と梨香はそれを止める事もできずに、ただただ見守るばかり。俺は何もできずに立ち往生だ。何ていうか……これって犯罪じゃないのか？

大騒動〈恵梨編〉（前書き）

何にしても、ネコ耳を付けていることに変わりない。

ハル君がリョウさんをダンボールに詰めながら、口を開く。

「あ、そうだ。どなたか、皆さんにお茶をいれてくれませんか？ちょっと……僕はこれをしないといけないので。どうぞゆっくりくつろいで下さいね。何も用意していませんけど」

「あ、はい……。じゃあ、私がお茶をいれますね……」と私。

「美味しい紅茶が棚にありますので。皆さん、紅茶は飲めますか？」

皆が頷き、私がキッチンらしき場所へ足を向ける。ティーカップを探して、紅茶をいれながら考える事。上野さんに会ったのはいいけれど、なかなか話をする機会がないな。できれば、一人で話をしたいけれど……ここには皆がいるし。

ボーっとしながら、紅茶をいれて。一段落したハルさんと他の皆にも配る。あ、そうだ……上野さんにも渡さないと。皆がお喋りで盛り上がる中、私は一人で紅茶をいれる。

ぼんやりしていると、不思議な夢を思い出す。ずっと見続けている幸せな夢。夢ではあんなに幸せなのに、今の私には何かが足りない。何が足りないのかな？　物足りなさで、妙に寂しくなってくる。

紅茶を持って、上野さんが入って行った部屋の扉をノックする。返事が帰ってきたので、扉を開けてみる。中に入ると、上野さん……。パソコンの前に座って、何かしている。何だか難しそうな事……私には全然わからない。

不意に振り返る上野さんに、私が言う。

「あの……紅茶を……」
「あぁ、ありがとう」

上野さんが立ち上がって、私に近づいてくる。紅茶を手渡そうとティーカップの中を見て、仰天する私。何をどう間違えたの!?私……紅茶に氷を入れてる!?

大変失礼な事をしてしまい、戸惑う私の持つティーカップを上野さんが受け取ろうとする。すぐに私が謝罪する。

「ご、ごめんなさい！　ちょ……ちょっと待って！　もう一度いれてきますから！」
「え？　何が？」
「い、いえ……あの……」
「あぁ……。いや、これでいいよ。僕は猫舌だから、熱いの苦手だし」
「で、でも……。こ、氷入れるなんて……。その……」
「ううん、いつも入れてるから。こうしないと飲めないし。ごめんね、気を遣わせちゃって」
「いえ……そんな……」

もじもじと小さくなる私から目を逸らし、上野さんがティーカップを机の上に置く。上野さん……思っていた以上に優しい人みたい。リョウさんにあんな事をしていたから、てっきり冷たい人なのかと思っていたのに……。

今なら聞けるかな？　そう思い、思わず口を開いてしまう。

「あの……」
「うん？　どうしたの？」

「えっと……」

口を開いたのはいいけれど、何を聞きたいのかな？　聞きたい事……凄くたくさんあるけれど、具体的に説明できない。『上野さんを一目見た時から、他人のような気がしません』なんて言ったら、ただの告白だと思われるだろうし……。

何が何だかわからなくなって、思いついた事を適当に話し出す。

「最近……凄く幸せな夢を見続けていて……」
「夢？」
「同じようで違う……何て言うのかな？　好きな人と一緒にいる夢だけど……」
「……」
「あの……昨日見た夢は……好きな人が猫みたいで……。猫の耳をクニクニ触って……」

あーん！　わけわかんないー！　恥ずかしさに発狂しそう！　人生相談じゃなくて、夢相談。しかも、相談相手が初めてお話しする人。もう、最低だよ！　どうしよう！？

自分のバカさに赤面しながら黙り込む。だって、口を開いたら、変な事しか言わなさそうだもの。私が頭を下げて、逃げ去ろうとしたら。上野さんが真剣な面持ちで質問してくる。

「その夢……。もう一人の子は見ているの？」
「えっと……梨香ですか？」
「えーっと、そうなのかな？　君と同じ感じの子」
「はい、梨香です。私が恵梨で、彼女が梨香です」
「そう……。じゃあ、梨香って子は君と同じように夢を見る？」

あまりにも真面目に質問されて、逃げ去ろうと思う気持ちもなくなって。私も真面目に返事を返す。

「いいえ……。見るのは私だけです。梨香は……そういう事は一切ないって」

「そう……」

「あの、気にしないで下さい。ただの……夢の話なので。ちょっと……誰かに相談したかっただけで」

「相談か……。どうして僕に？」

「いえ、その……梨香は話を聞いてはくれるけど。真面目に取り合ってくれないし。信也は……こういう話……嫌がるから」

「そう……」

「あの……すみません。初めて話をするのに、こんな相談持ちかけて。本当に……気にしないで下さい」

話しているだけで、泣きそうになる。最近は現実に嫌気がさしてきて、奇妙な夢を見ているのだと、一人で勝手に思い込んで。相談相手もいなくて、ずっと一人で抱え込んで。こんなバカげた話を真面目に取り合ってくれる人がいるなんて思ってなかったから。

本当は、信也に相談したいのだけど。信也は昔からネガティブな話や面倒事が嫌いだから。すぐに適当な事を言って、誤魔化すのは知っていたし。梨香に相談しても……自分が哀れに見えてしかたないし。

不意に上野さんが口を開く。

「実は僕も……君に言わなきゃいけないことがあるの」

「私に……ですか？」

「そう……。君の夢の事だけど……」
「恵梨ちゃーん！　そろそろ出発だよー！」

上野さんの声を掻き消すように、雫ちゃんの大きな声。え？　もう出発なの？　私が上野さんを見つめていると、上野さんが苦笑する。

「フフッ、またにしよう。今はあのお荷物を持って行って貰わなくちゃ」
「あの……」
「もしも、一人で辛くなったなら、僕の所においで。話くらいなら、聞けると思うから」

何だか……凄く気になる所で話が途切れる。だけど、本当に行かなくちゃ。皆が待ってるだろうし……。私が頷いて、上野さんに背を向け。扉に手を伸ばそうとしたら、不意に反対側の腕を掴まれる。

引っ張られる勢いに反転したら、上野さん……。私の顔に顔を近づけてくる。へっ！？　硬直、赤面、不安に次いで、なぜか期待。だけど、私の思いとは裏腹に。上野さんが私の耳元で囁く。

「ごめんね」
「へ？」

間の抜けた声を出す私から顔を離して、上野さんが頭を撫でてくれる。私の肩を持って、私を反転させて。軽く背中を押す。私が振り返ると、上野さんが小さく手を振ってる。サヨナラの挨拶……。私も頭を下げて、部屋を出る。

部屋の外では、ハル君が軽々とリョウさん入りのダンボールを手

に持っている。信也はそれを見ながら驚いていて。雫ちゃんは妙に楽しそう。皆に近づいたら、梨香が私に話しかける。

「どうしたの？　凄く顔が赤いけど……」

「ちょ、ちょっと部屋が暑くって……」

何とか言い訳。だって、上野さんがあんな事をするから……。あのシチュエーションは絶対に……。ドラマとかはそうなるもん！だけど、もしもあの時にキスされていたらどうだろう？　嫌な気一つしないかも……。こんな事……信也に言ったら怒られるよね。

マンネリ化

リョウが松元の家に運ばれた日を境に、続いていた非日常がスッパリと途切れる。テレビでの大騒ぎもなくなって。未来やシバルなど、人間離れした奴らの気配も消えてしまう。

時たまに、テレビで過去の出来事が報道されるとついつい見入ってしまうが。当の本人達は今どこでどうしているのか？　上野は取材に応じないし、未来達とシバルの家はわからないから。状況を理解できるのは、松元とリョウだけだ。

ライブの日以来、松元はちょくちょくとテレビに出演し。ちょっとした有名人を気取っている。まぁ、すぐに消え去るキャラだろう。インパクトの薄い松元はテレビではやっていけそうにない。

続いて、リョウであるが。リョウの奴は音楽以外何もできないらしい。上野がグループに入ってくれない以上、身動きが取れないので。どうしたらいいのかと考えた末に、リョウが選んだ道は……。

授業中。教室の後ろ、お嬢様の隣席の奴が言う。

「なぁ、お嬢様。連立方程式って何やった？」

「黙りなさい、リョウ。あなたが喋ると、私の耳が腐るわ」

「そんな事言わんといてーや。マジムズイわ～。何でこんなんせんとあかんの？」

しなくてもいいだろ？　お前、高校生じゃないよな？　何でこんな所に居るんだよ？　今更突っ込むのもバカらしくて、耳だけ参加で二人の会話を聞きとる。リョウがお嬢様に言う。

「なぁ、お嬢様。どうやったら、進ちゃんを落とせると思う？」
「そんなの……私が知りたいわよ」ぼそりと呟くお嬢様。
「あ～、進ちゃんが入ってくれんときついわ。他に良いメンバーおらんしなぁ～。ミラッチとシバ君はどこに行ってんやろ？　電話しても出てくれへんしなぁ～」

ぶつぶつと呟くリョウ。その隣では、お嬢様が超不機嫌そうな顔をしている。リョウが鬱陶しいらしい。リョウの音楽は認めても、その他は論外なようだ。黙らないリョウに嫌気がさして、最後はお嬢様が教室を出て行く。そんなお嬢様に声を掛けるのはリョウ。

「お嬢様、どうしたん？　気分でも悪いん？」
「……」

お嬢様は返答する事もなく、リョウに振り返りもしなかった。本当に鬱陶しいらしい。お嬢様が出て行っても何も言わない先生。えこひいきもいいところだ。しかし、やっぱり金持ちには逆らえないよな。後、変に有名な有名人にも……。

こんな感じで、相変わらずな学校生活を送り。昼休み。いつも通りに、梨香と松元にリョウを加えて校舎裏へと行ってみる。最近は北原まで乱入してきて、六人で駄弁る事が多くなった。

恵梨香の分離を知る松元と北原。それに加えて、ややこしいのが

リョウ。リョウは未だに理解してくれない。その後、恵梨香分離の説明はしたものの。双子という文字が頭から離れないらしい。何を言っても最後は『それで……二人は双子やねんな？』と言われてしまうので。こちらも状況説明を断念した。

こうして、校舎裏へと移動した俺達だが。そこで待っていたのは北原だけだ。恵梨の姿がない。俺が北原に問いかける。

「恵梨はどうしたんだ？」

「さぁ～？　見てないよ～。雫が来た時にはもういなかったもん」

「そうか……」

最近の恵梨は人付き合いが悪いな。初めから人付き合いの良い方ではなかったけど、日に日に何か暗い奴になってきた。話しかけるのも面倒だし。ネガティブな奴と話をしていたら、こっちの気分まで落ち込んでくるから。俺もなるべく係わらないようにしていたら、この通りだ。

本当に困った奴だな。その半面、梨香は楽だ。怒る事はあっても、恵梨のように落ち込む事はないから。気楽に話しかけられる。

恵梨がいなくて、日常も平凡で。マンネリ化に耐えきれないのか、リョウが不満げに呟く。

「何や、湿気た空気やな。こらぁ、あかんわ。もっと皆で集まって、ワー！　ってせなあかん。やっぱり進ちゃんとミラッチとシバ君がいるな。もう一回、電話してみよー」

「リョウさん……一日に何回電話しているんですか？」と松元。

「心の赴くままや」

そう言って、リョウが携帯を取り出し、連絡を試みる。その間に、俺達は昼食だ。ダラダラとくだらない話をしながら、食事をする。お祭りのようなイベントが終わった後は、何か物足りなさが充満するよな。あー、大事件とか起きないかな？

お宅訪問〈恵梨編〉

どうしても一人でいるのが辛くなって、思わず学園を飛び出してしまう。行くあてもなく、フラフラしていたら、どこかで見た事のある場所。ここは確か……。しばらく歩いていると、立派なマンションが見えてくる。上野さんの家……。

行って……みようかな？　でも、今はお昼だし。上野さんいないかも……。いなかったら、いなかったでいいか……。行くべき場所ができて、とても足取りが軽くなって。ゆっくりと歩いていたら、マンションの前につく。

上野さんの部屋の前まで行って、チャイムに手を伸ばす。押そうかな？　止めようかな？　そんな事を考えていたら、後ろから人の声が聞こえてくる。

「こんな昼間に……」

ビックリして、振り返ったら上野さん。頭にフードをかぶり、肩に鞄を掛けながら、手には紙袋。上野さんの姿を見て、言葉を無くして、口をパクパクする私。何とか無理矢理に話し出す。

「えっと……す、すみません。あの……忙しいのなら、今度にします」

「えーっと……」

「あ、私……恵梨です」

「あぁ……。学校はどうしたの？」

「授業は梨香が……。あ、いえ……その……」

「そう。まぁ、中に入りなよ」

そう言って、上野さんに勧められて。私もお邪魔させてもらう事に。中に入ると、走ってくるのは小さなハル君。

「お帰りー、パパー。お土産はー？」

「はい、これ。有名なパン屋さんのパン」

「ワーイ！　それで、お仕事はどうだったの？」

「仕事どころじゃないよ。テレビの話とネコ耳の話で、いっぱいいっぱい。まぁ、どちらかと言えばネコ耳の話がメインだったけどね。テレビなんてそっちのけで、耳と尻尾を撫でくり回されて。気を失うかと思ったほどだよ。本当に、バカみたいに二次元オタクが集まってるんだから。あの会社」

「そうなの？　オタク会社？」

「オタク会社～。社長まで乱入してきて、皆で議論。議題は『何耳が一番か！？』。なんてどうでもいい話だろうね。結構、大きな会社なんだけど……。社長が変わり者だから」

「何耳が一番だったの？」

「まぁ、皆して好き好き言っていたけど……。やっぱりネコ耳は上位だったね。『ネコ耳なんて可愛い子ぶっているだけだ！』なんて言っている奴が、僕の耳をクニクニするんだよ。本当に、やんなっちゃう」

「犬耳は～？」

「犬耳も上位だったね。マイナーな所、カエルとか言いだす人もいたよ。カエルなんて耳あるのか？　とか思っていたら。その人が言うには、カエルの帽子に萌えるらしいよ。もうわけわかんないよね～」

上野さん、会社帰りみたい。フードを外して、服の下から尾を出した後。紙袋を机の上に置いて、鞄を椅子に掛けて。冷蔵庫に近づき、扉を開ける。リンゴジュースを取り出して、コップを三つ用意

する。コップにジュースを注いだ後、私とハル君に配ってくれる。

お礼を言う私の頭をポンポン撫でて、上野さんが自分のジュースを飲みながら、紙袋に手を伸ばす。コップを机の上に置いて、紙袋を引っ繰り返すと、たくさんのパンが転がり出てくる。

「ほら、今日のお昼ご飯だよ。パン食い競争だね。好きな物を選んで、たくさんあるから」

「パパが引っ繰り返すから、サンドイッチがグチャグチャなの～！」とハル君。

「大丈夫、味に支障はないよ」

「手がドロドロになる～」

「お箸を使えばいいの。ね？」

「ん～」

不満げなハル君が爆発したサンドイッチを手に取って食べ始める。もう……手がドロドロになってる。手を汚すハル君にティッシュを渡す上野さん。二人の様子を窺っていたら、上野さんが私を見る。

「君はお昼……まだ？」

「え……はい」

「そう……。丁度良かった、遠慮せずに食べてね」

「ありがとう……ございます。じゃあ、これ……頂きますね」

「うん、どうぞ」

メロンパンを一つ貰って、口に入れる。あ、美味しい……。

お昼を頂いて、二人の話を聞いていると。何だか和やかな気分に

なってくる。ここにいると、あの夢の感覚に近い物を覚えるな。何だろう？　凄く安心できる場所……みたいな感じ。

ハル君が大量のパンを頬張り、上野さんがゆっくりと食事をする中。私も新しいパンに手を伸ばす。今度はピザパンにしようかな。

お宅訪問〈恵梨編2〉（前書き）

江川先生が出てきた、やっぱりゲーセンと言えば江川だね。

お宅訪問〈恵梨編2〉

お昼を食べ終わり、三人で話をしていたら、どうしてか今からゲームセンターに行くことになる。上野さんとハル君が準備を整えて、私も同行させてもらう事に。

ちょっとお話をしにきたつもりが、何だか凄く馴染んじゃって……。お邪魔じゃないかな？　不安を感じつつも二人の後をついて行く。

マンションから出て、歩いているとゲームセンターを発見。かなり大型のゲームセンター。二階はコインゲームで、一階はその他のゲーム。私達が遊ぶのは一階。ハル君が上野さんにおねだりをして、お小遣いを貰っている。千円札を貰って、奥へと駆けて行っちゃった。両替をして、遊ぶみたい。

ハル君の後ろ姿を眺めていたら、急に上野さんが話しかけてくる。

「はい、これ。君の分」

「えっ！？　いえ、いいですよ！　私は……自分で払うので」

「そんな事を言って、そろそろお小遣いも尽きてきた頃でしょ？　たかが千円だけど、高校生にしたら大金だよ。使わないのなら他で使えばいいし。お金はあっても邪魔にはならないから」

そう言って、私に千円札を手渡す上野さん。何だか悪いな……。他人の私までお小遣いを貰っちゃって。そんな事を考えていたら、ハル君が駆けてくる。

「パパ～、お金なくなった～」
「早っ！？　何をしたら、そんなに一瞬にしてなくなるの！？」
「お菓子を取ろうと思ったら、取れなかった」
「お菓子って……クレーンゲームでもしたの？」
「そう！　グルグル回る奴」
「グルグル回る奴か～。よ～し、見に行こう」

ハル君と上野さんが奥へと歩いて行き、私も後ろに続く。私は……ゲームをしないで、このお金は他に使おう。上野さんの言うとおり、結構……残りの残高が厳しいから。食事とかだけで、もう限界きてるし……。

二人の後に付いて回って、ゲームセンターを楽しむ。見ているだけでも十分に楽しい。二人の遊ぶ姿が微笑ましくて、いつの間にか一緒になって笑っていたりする。

ハル君がたくさんお金をつぎ込んで、やっとのことでシューティングゲームをクリアーし。次は何をするか、ゲームセンター内を歩き回る。

不意に人混みを発見。誰か凄い人がゲームをしているのかな？何だか気になって、三人共に人混みに近づいてみる。人混みを掻き分けて、中を除くと一人の女性。凄く綺麗な人、女優さんみたい。真顔でゲームをしているけど……もの凄く強い！

こんな美人な人でもゲームするんだ……。別の意味で驚いていたら、上野さんが驚き顔で女性に近づく。

「江川先生じゃん！」
「メモリーさん！？　どうしたの、こんな所で！？」

江川先生と呼ばれた女性が驚き顔で上野さんを見る。それでも、手はゲームから離れない。画面を見ないでゲームをするなんて……本当に凄い。上野さんが江川先生に口を開く。

「どうしたのって、僕が聞きたいし……」
「いやぁ～、兄さんを探していたら。いつの間にかゲーセンめぐりになっちゃって」
「わざわざこんな所まで来てゲームなんて。江川先生は本当にゲーム好きだよね」
「ここは良いよね。俺の所よりもゲームセンターの規模が大きいし、珍しい物もあるから」
「あはは、そうかも。僕の所って、ゲームセンターとか機械に強いから。後は音楽かな？」
「へ～、世界によって微妙に違うんだ」
「うん、そうなの。姫様の所がある意味で一番最強だけどね」
「一度だけ行った事があるよ。火の鳥を使って、空を飛んで。あれこそゲームの世界だよね」
「うわぁ～、綺麗だろうな。姫様の所って、自然が豊かだから」

上野さんと江川先生が喋り込み、ハル君は江川先生のゲームを覗き込んでいる。私は二人の話を聞きながら、先程の江川先生の言葉を思い出す。『メモリーさん』……それって確かシバルさんが言っていた。ということは、上野さんが例の『メモリー』という人なの？

そわそわする私の事など気にもしないで盛り上がる二人。不意に江川先生が話を変える。

「そういえば、ニートさんが面白い事を言っていたけど……。メモリーさん、ドジってバカをしたって本当？」
「ドジってバカ？」
「シバルさんでもないのに、フードをかぶるなんて。新しいファッション？」
「あ！　そうなの！　ドジってバカしたよ！　これ、見て。えらい事しちゃったの」

上野さんがフードを取ると、ネコ耳が目立って見える。ピコピコと動くネコ耳を見て、江川先生が立ち上がる。江川先生がゲームを放棄したので、代わりにハル君が勝手に続きを開始。

ゆっくりと上野さんに近づく江川先生。うわぁ～、近くで見たら更に綺麗。すっごく美人……。江川先生の顔を見て、鼻の下を伸ばしている男性が結構いる。

上野さんの顔を見て、囁き合っている女性も結構いる。こちらは多分……ネコ耳か過去のライブの話だと思う。

江川先生が上野さんのネコ耳に手を伸ばし、ネコ耳を触って観察していると。上野さんが赤い顔で小さくなっていく。ちょっといけない声を出しながら、必死に耐える上野さん。

「え……江川先生。あまり触らないで。この耳、凄く刺激が……。やぁん！」
「うわぁ～、完璧にくっついちゃってるな。これは難題だ」
「あっ、あっ！　駄目っ！」
「ちょっと耳動かさないで。我慢してよ」
「我慢できない～。もう……はぁう！？」
「あ～、これは駄目だね。何とかなるとは思うけど、面倒くさそうだから。俺はパス」

「えぇー！？　そんなぁー！」

ネコ耳をパタパタさせながら、ショックを受ける上野さん。それを見て、江川先生が楽しげに口を開く。

「まぁ、いいじゃない。テクテクのミャラみたいで」

「あはははは！　確かに似てる～！」

江川先生の言葉を聞いて、上野さんが大笑いする。テクテクって……確か、『テクノ×テクノ』って格闘ゲーム。科学技術を巡って戦うような話だったと思う。江川先生が上野さんを見て言う。

「後は尻尾があれば、完璧だね」

「あるある！　ちょっと待って！」

上野さんが服の下から尻尾を取り出して、江川先生が上野さんの全体を見る。一度頷いて、上野さんに指を差す。

「これで服装変えたら、コスプレだよ。今度、友達に作ってもらおうか？　ミャラの服」

「いらないし～。ミャラは好きだけど、コスプレはいらないし～」

「似合ってるのに」

「じゃあ、江川先生はレフィンセだね」

「女性キャラはいらないし～」

「髪型を変えたら完璧だよ」

「そもそもミャラと時期が違うよ。レフィンセは『テクテク？』だけだけど、ミャラは『テクテク？』からだし」

「あー、そっか。残念。ミャラはレフィンセには出会えないのか」

二人で笑って楽しそう。そんな中、しょんぼり顔のハル君がゲー

ムから離れて上野さんのズボンを掴む。

「パパ―、負けたー」

「あらら、負けちゃったの」と上野さん。

「そういえば、メモリーさん……。子育て支援しているって本当だったんだ」

江川先生がハル君を見て言う。すぐに上野さんが首を横に振る。

「違う、違う。支援じゃなくて、子育てしてるの。初めはペットを育てていたんだけど、途中で進化してね。子供になっちゃったの」

「へ～、進化したんだ。次に進化したら、猫になるのかな？　ハル君？」

「うん、そうなの」

ハル君が頷いて、上野さんが苦笑している。不意にハル君が上野さんを見上げる。

「ねぇ、パパは江川先生と親しいの？」

「え？　あぁ……。でも実際に出会ったのは最近だよ。あの、死神の所の文化祭が初めて。それで、その後に何度か話をしていたら。ビックリする事がわかったんだよね」

「そうそう、あの時は驚いたね。まさかネットゲーで共に戦っていた仲だったなんて。今にして考えると、知らないうちに、かなり俺達組んでいたかな。ほとんどのゲーム……二人で行ってなかった？」と江川先生。

「うん、行ってた。だって、江川先生といると楽なんだもの」

「そう？　でも、メモリーさんの方が強い気がするけど。ほとんどのバグを知り尽くしているし。あの時は笑ったね。無理矢理に自分で改造武器をいれ込んできた時。あれって、最後どうなったの？」

「もちろん、追い出されたよ。強制排除で、アカウント停止」

上野さんの話を聞いて、江川先生が笑い転げる。そんな江川先生に、話し続ける上野さん。

「あの武器、結構お気に入りだったんだけどな。食らった人は一分間停止して、その間にバッチボコ大作戦。ただＣＰに食らわすと、見えなくなるけどね。向こうが透明になって、最強になるの。ちょっとそれは問題だったなぁ～」

「ちょっとじゃないし。それのおかげで俺かなり死んだよ。いきなり誰もいない場所から砲撃されるんだもの。ビックリだし」

「ちゃんと説明してなかったからね。ちょっと驚かせようと思って。まぁ、僕もビックリしたけど。見えなくなるなんて予想外だったし。消えてくれたらまだ良かったんだけど……」

話の尽きない二人。いつしか二人でゲーム対戦をする話に。さっき話していた『テクノ×テクノ』というゲームで対戦するらしい。二人がゲームを探しに移動する。私とハル君も後に続いて、観戦する事に。

ふと周りを見ると、私達以外にもちょろちょろと遠巻きで人が集まっている。皆して、この二人が気になるみたい。だって、江川先生……さっきのゲームとか凄く強かったもの。上野さんは太刀打ちできるのかな？

お宅訪問〈恵梨編3〉（前書き）

『テクノ×テクノ』……リアルにやってみたい。

お宅訪問〈恵梨編3〉

ゲーム台を見つけて、二人が対面に座る。私とハル君は上野さんの画面を覗き込んでいる。二人がプレイするのは『テクノ×テクノ?』みたい。キャラクター選択の画面になって、上野さんが選んだのは、ミャラという子。上野さんと同じようなネコ耳が付いている小柄な子。

一方、江川先生はランダムにしたみたい。ランダムなんかで大丈夫なのかな? でも、江川先生……このゲームやり込んでそうだから。大丈夫な気がする。

ゲームが始まり、試合が開始される。上野さん……思っていた以上に強い。江川先生と互角に戦っている。どちらもヒットポイントをほとんど減らすことなく激しいバトルが繰り広げられる。ゲームを見ながら、ハル君が上野さんに言う。

「パパ、ガンバレー!」
「う~ん、きついね……。流石、江川先生だ。一撃も入れさせてもらえないし」
「大丈夫。パパも強い」
「だけど、このままじゃあ僕が負けちゃうよ。いくらガードをしていても、微妙にHPは減るもの。ミャラは防御力が低いから……」
「パパ……負けちゃうの?」
「いや、こうなったら必殺技だ」

上野さんが言って、次に大きな声で独り言を言い始める。

「あれー!? 未来じゃん! どうしたの!?」

「え？　何？　兄さん、来たの？」

江川先生が向こうから顔を覗かせる。その隙を狙って、上野さんが一撃を入れる。そのまま連続コンボ。江川先生が手を出す間もなくノックダウン。唖然とする江川先生を無視して、上野さんが大喜びに決め台詞。ゲームのミャラと同時に喋る。

「世界の化学はミャラの物だよ！」
「ズルイし！　今のはズルイし！」向こう側で叫ぶのは江川先生。
「ズルじゃないよ。これも一種の戦法だし」
「せこいなぁ～。本当にもう～。次は絶対に油断しないから。こっちも本気で行くよ」
「今ので本気じゃなかったの？　マジ許して。ミャラは弱い子なの」
「どこが弱いんだよ。まったく……」

こうして始まる二回戦。試合中の上野さんに問いかける。

「江川先生と未来さんって……ご兄弟なんですか？」
「うん、そうだよ。未来が兄貴で、江川先生が……」

上野さんが話をしている最中。油断をしたのか、江川先生の一撃を受ける。やっぱりそのまま連続攻撃をされて、ノックダウン。上野さんが不満げに大きな声で騒ぎだす。

「ちょっと、これ。コントローラ悪くない？　下クリックの反応遅いし」
「今更コントローラーのせいにするなよ。さっきのコンボは何だったんだよ？」と江川先生。
「あれは下クリック使わないもの。関係ないし」

二人が言い争いをしていたら、三回戦が開始される。試合が開始された直後、二人が静かになる。かなり本気みたい。上野さん……凄く真顔。ネコ耳がピンッと立って、緊張している。

先程にも増して、壮絶な戦いが繰り広げられて。最後はわずかの差で上野さんの勝利。両手を上げて喜ぶ上野さんに近づいてくるのは江川先生。大喜びの上野さんを見て、言い訳がましく話し出す。

「いや、俺はこのキャラ苦手だから。普段は使わないし」
「ちょっと、それはないでしょ？　せっかく大喜びしているのに、本気出してないなんて言わないでよ～」
「本気は出したけど。このキャラは苦手なんだよ。だって、普段はテクノを使うから」
「じゃあ、それで勝負しようよ。次は本気の本気で行くから」
「じゃあ、俺も超本気で行くから」

子どものような会話の後、また勝負が始まる。今度は江川先生がランダムキャラクターじゃなくて、主人公のテクノを選択。始まる勝負。数分も立たないうちに完全勝利したのは江川先生。上野さんが不満げに騒ぎだす。

「ちょっと、何なの！？　あのハメ技？　勝負が始まって、こっちがキャラクターを動かそうとしたら。既に攻撃食らってるし。避けれないじゃん！」
「俺が編み出したテクテク最強ハメ技コンボだよ。この技から逃げ切れた人は見たことないね。ＣＰも含んで。ただ、あの……レイテルを使われると、防御力が高いから。微妙にＨＰが残るんだよね。コンボを入れた後は、こっちに隙ができるから。レイテルを極めている人には勝てないかもしれない」
「十分だし。最強じゃん。もうミャラは太刀打ちできないにゃ～。

僕の主戦力だったのにな～」
「元々、ミャラは弱いからね。癖があって使いづらいし。何でそんなキャラを選んだの？」
「何か使いやすかったから。手軽なんだよね。動きが速くて、小回りが利くから」
「あ、それは言えてるかも。でも、テクノも速いよ。使いやすいし」
「いや、他を言えばバグ技が多いんだよね。今回は使っていないけど。もしかしたら、江川先生のテクテク最強ハメ技コンボから逃げ切れるかも。ただ、その後……機械がバグる恐れがあるから。怖くてできないけど。以前に別のゲーセンでやってみたら、画面がフリーズしちゃって。あれはビビったなぁ～」
「へ～、それってどうやるの？」

こうして激戦が終わって、仲良くゲームの話をする二人。いつの間にか、たくさんの見物人に囲まれている事に気づいていない。二人共に、話に夢中だから。

ハル君が『テクノ×テクノ？』で遊び出し、私もそれを覗き込む。耳は上野さん達の話を聞きながら、先程の凄い戦いを思い出す。二人共……よっぽどこのゲームをやりこんでいるんだろうな。

お宅訪問〈恵梨編４〉（前書き）

お宅訪問っていうか、オタク訪問だよね。とか思っていた人、何人いるだろう？
ちなみに、未来は仕事をさぼって逃亡中であります。（笑）

お宅訪問〈恵梨編４〉

いくぶん話も落ち着いて、他のゲームをしようかと喋っていたら。人のざわめき声が聞こえてくる。そちらに目を向けると、黒スーツの人達。その真ん中には、菊池さん。もの凄くお怒りみたい。

菊池さんの姿を見て、眉をしかめる上野さん。江川先生は首を傾げている。ハル君が上野さんのズボンを掴んで、心配げに上野さんを見上げる。緊迫した空気。皆が固まって話し声のなくなるゲームセンター。機械の音だけが、尽きないで騒がしい。

菊池さんが歩いてきて、上野さんの前で立ち止まる。私を一瞥した後、江川先生に目を向ける。

「あなたは上野の何？」
「へ？　ただの友達だけど」
「……」

菊池さんが疑わしい目つきで、江川先生を睨みつける。上野さんは二人から目を逸らして、余所を向いている。話に興味がないのかな？　不意に菊池さんが上野さんに近づいて、上野さんの右腕を抱きしめる。そのまま勝ち誇ったような顔で江川先生に口を開く。

「上野は私の物よ。手を出したら、ただじゃ済まないんだから！」
「……ねぇ、メモリーさん。この可愛い勘違いさんは誰なの？」
「ちょっとした僕のストーカーだよ」

上野さんを見るとニヤニヤ笑って、何だか楽し気。どうしたのかな？　上野さんの言葉を聞いて、江川先生が微笑む。うわぁ、凄く

綺麗だな。菊池さんも私と同じ事を考えているみたい。凄く不満げな顔で江川先生を見つめている。そして、江川先生が口を開く。

「君は何を根拠に俺とメモリーさんが付き合っていると思っているの？」

「凄く綺麗な女が……上野に近づいているって情報が入ったから……」

「だけど、ただの友達かもしれないじゃないか」

「男女間に友達はないって……お母様が言っていたもの。それに、男は皆……美人が好きなんでしょ？」

「さぁ？　どうだろう？　あまり考えた事ないな」

江川先生が言って、すぐに上野さんに目を向ける。

「可愛らしいストーカーだね。羨ましいな。俺のストーカーなんて、変質者以外にいないもの」

「これも十分に変質者だよ。僕の家に盗聴器を仕掛けるんだよ。気持ち悪くて堪らないし」

「面白いじゃない。こっちなんて、本気で相手を殺す気で行って。丁度いいくらいだよ。いくら炎上させても復活するから。あいつの残機はいくつあるんだろう？」

「それはそれで大変だね。ゾンビが相手じゃあ、僕は勝てないや」

クスクスと二人が笑って、のんびりと会話。菊池さんを見ると、上野さんを取られまいと必死な顔。上野さんの腕を引っ張って、自分に注意を向けようとしている。それを見て、ハル君がものまね。上野さんの左腕をグイグイと引っ張り出す。

そろそろ話に飽きてきたのか。上野さんが菊池さんの頭をポンポン撫でて、ハル君を抱っこする。パタパタと尻尾を振るハル君を見

て、羨ましげな顔をする菊池さん。上野さんの服を掴んで離さない。

不意に江川先生が口を開く。

「さて、そろそろ俺は帰らなくちゃ……。それにしても、兄さんはどこに行ったんだろう？　ここにもいなかったら次は……」

「森とか山とか探してみたら？　未来は緑のある場所を好むから。後、ビルの屋上とか高い所も好きだよ」と上野さん。

「そう思って、色々と探しているんだけど……」

「もしかしたら、狭間かも。未来はあの辺りもよく行くから」

「あぁ、話では聞いているけど……。それってどうやって行くの？」

「いかないほうがいいよ。凄く危険だから。あの場所へ行くのなら、未来がいるね。未来を探すのに、未来がいるなんて。変な話だけど」

「僕も行けるよ。場所、わかる！」

急に話に入り込むハル君。そんなハル君の頭を撫でながら、上野さんが口を開く。

「ダメダメ。ハルはハルトよりも弱いんでしょ？　危ない所には行っちゃ駄目だよ」

「危なくないよ。道案内できるよ」

「駄目だって、あそこは子どもが行くような場所じゃないの。それに、ハルは狭間に飛べないでしょ？　下手をして、怪我でもしたら大変じゃない」

「ん～、大丈夫なのに」

膨れ上がるハル君。だけど、嬉しそう。心配してもらえて、嬉しいのかな？　上野さんにしがみ付きながら、耳をパタパタさせている。江川先生がため息をつきながら、口を開く。

「まぁ、いいや。とりあえず、最後に空から探したいけど……。マズイかな？」
「別に構わないよ。江川先生だし。僕が許可するから、自由にして」
「そう？　ややこしい事になったらごめんね」
「ううん、未来と死神のせいで十分にややこしいから。今更だし。それよりも帰りは大丈夫？　もしも、何なら僕が送るけど」
「それは大丈夫だよ。姫様が助けてくれるから」
「そっか。じゃあ、気をつけて。まぁ、ここは他よりものんびりしているから。気をつけるものなんてないけど」

上野さんがヘラヘラ笑う。江川先生が頷いて、菊池さんに顔を向ける。

「さて、せっかくだから勘違いさんに良い事を教えてあげよう」
「……何よ？」

警戒モードの菊池さん。両腕を使って、上野さんの身体に手を回す。すぐに上野さんが菊池さんの頭を片手で掴んで、菊池さんを自分から遠ざけようとするけど効果がない。菊池さんはしっかりと上野さんを確保している。

そんな菊池さんを眺めながら、江川先生が楽し気に言う。

「俺はメモリーさんと恋人関係じゃないし、今後もそういう関係にはならないよ」
「そんなの……わからないわよ」
「フフッ……絶対宣言できるよ」
「……なぜ？」
「なぜなら……俺は『男』だから」

えぇー！！？　江川先生の一言で周囲の人達がざわめきだす。私もビックリ。思わず耳を疑ってしまいそう。すぐに菊池さんが声を出す。

「嘘よ！」
「本当だよ」

江川先生が躊躇なく答える。今度は菊池さんが上野さんに向いて言う。

「嘘よ！」
「本当だよ。江川先生は未来の弟さんだよ」と上野さん。
「……」

菊池さんがしばらく硬直。今度は自分の勘違いに顔を赤らめて、上野さんに顔を埋める。静かになった菊池さんから目を離して、江川先生がサヨナラの挨拶。

「じゃあ、メモリーさん。また、ネットで」
「うん、ネットで。そういえば、面白いバグを見つけたら。またメールするよ」
「うわぁ、楽しみだな」

嬉しそうに笑う江川先生。どこからどう見ても女性にしか見えない。本当に男性なの？　未だに信じられないその言葉。江川先生をお見送りするために、皆でゲームセンターの外に出る。

不意に振り返って、江川先生が口を開く。

「少し俺から離れていて。危ないから」

危ない……って、何をするんだろう？　そう思っていたら、江川先生がズボンのポケットからライターを取り出す。そのまま上野さんに振り替える。

「もしも、兄さんに会ったら言っておいてほしいんだけど。父さんがお怒りだって、伝えておいて」

「うん、わかったよ」

「じゃあね」

「バイバ～イ」

上野さんとハル君が手を振って。江川先生がライターを持たない方の手をズボンのポケットに突っ込むと、ライターの火をつけた。何をしているんだろう？　と思っていたら、ライターの火が燃え上がる。

危険な気配に周囲の人達が江川先生に目を向ける。ライターの暴発かと思っていたら、そうじゃないみたい。燃え上がる炎が形を変えて大きな鳥の姿に……。瞬く間に出来上がるのは火の鳥。これって……私の頭がおかしくなったわけじゃないよね？

人々の視線を気にもしないで、江川先生が火の鳥に飛び乗る。そのまま火の鳥が飛びあがり、何度か螺旋（らせん）を描いた後に。彼方遠くへと飛んで行ってしまった。後に残るのは微かな煙のかおりと、驚愕して言葉のない人々の姿。

そんな中、上野さんが一人で話を進める。

「便利だよね、あの機能。僕も欲しいなぁ～」

「僕も飛べるよ。何にもなくても、お空飛べる」続いてハル君。

「そうだね。ハルもお空飛べるよね。前にカメラの前で、お空飛んだものね」

上野さんがハル君を抱きながら頭を撫でる。嬉しそうなハル君。菊池さんは火の鳥を見てもあまり驚いていないみたい。上野さんを見上げながら、構ってほしそうな顔をしている。私は……驚きの事ばかりで、ちょっとパニック。何をどう思えばいいのかな？　とにかく……凄く色々と新鮮だったかも。

お宅訪問〈恵梨編5〉（前書き）

夕食を食べた記憶がない恵梨ちゃんだけど……
代わりに秋山さんが食べてるから。食べてます！

お宅訪問〈恵梨編5〉

上野さんがハル君と手を繋ぎながら私の前を歩く。二人で楽しげに夕食の話をしている。私も会話に入りたいけど、それができない理由が隣に。

横に目を向けると、ちょっと不機嫌な菊池さん。どうして未だに菊池さんが付いてくるのか、わからないけど……聞けるわけない。

菊池さんを横目で見ていたら、不意に目が合う。鋭く睨まれた……。江川先生がいなくなって、次の標的が私になったの？　蒼白しながら、菊池さんから目を逸らす。そんな中、菊池さんが口を開く。

「あなた……二人に分かれたそうね」
「え……？　知ってるの……？」
「私を誰だと思ってるの？　それくらいの情報は入ってくるわ」
「そ……そうなんだ。えっと……うん……二人に別れちゃったの。理由は……わからないけれど。もとに戻れないし……。私が恵梨……向こうが梨香という名前を使って……。無理に二重生活をしてるの……」
「ふーん……」

適当に相槌を打つ菊池さん。上野さん以外の人には興味ないのかな？　ちょっと怖い……。私が小さくなっていたら、菊池さんの本心が明らかになる。

「それで……どうしてあなたが上野と一緒にいるの？」
「えっと……」

やっぱり……。それが知りたいのね。だけど、何て答えたらいい

んだろう？　ただのノリ……なんて言えるわけない。言葉に詰まる私。不意に上野さんが振り返る。

「それはそうと……何でちび助が付いてくるのさ？」

「別にいいじゃない。安曇さんだって、付いてきているんだから」

「その子には用があるからいいんだよ。君には無用なの。さっさと家に帰りなよ」

「嫌！」

キッパリといいのける菊池さん。そんな菊池さんを見ながら、上野さんが鬱陶しそうな顔をする。睨み合う二人。ここだけ見ていると、どう考えても不仲。上野さんは菊池さんの事……嫌いみたいだけど。菊池さんは上野さんの事……好きなんだよね？　改めて質問したい。

緊迫した空気。それを打ち破るのは上野さん。私に近づいてきて、私の手を掴んで引き連れて行く。菊池さんを完全無視しながら、私とハル君に問いかける。

「それで、夕食はどうする？　ハルは食べに行きたいみたいだけど、君は？」

「え！？　いえ……私はあの……」

「どうせ行く宛てもないんでしょ？　いいじゃない、食事くらい」

「あの……上野さんは私が二人に分離した事……」

「知ってるよ。だって、さっき後ろで話していたじゃない」

「いえ……あの……。でも……それ……信じてくれるのですか？」

戸惑う私を見て、上野さんが優しく微笑む。上野さん……菊池さんには冷たく当たるけど、どうしてか私には優しい気がする。菊池さんの不満オーラを背中に感じつつも、上野さんの話を聞く私。上

野さんが私に言う。

「フフッ……その話を後で君に言いたかったの」

「はい……えーっと……。あの……上野さんはいつから私達の事を……」

「君達を初めて見た時から。君達は気づいていなかっただろうけど。前に一度、僕は君達を街中で見かけているんだよ。その頃から……君達の異変には気付いていたね」

「そうなのですか……」

「大丈夫、心配しないで。きっと僕が君達をもとに戻してあげるから」

「え？　そんな事ができるの……？」

「うん……。ただ……」

上野さんの口が重くなる。少し間を置いて、気まずそうに話し出す。

「もう少し……待ってほしいの」

「待つって……？」

「もう少し……もう少しだけ……」

よくわからないけれど……。上野さんが凄く寂しそうな顔をして、じっと下を見ながら考え込む。その姿を見ていると、胸が張り裂けそうなくらいに辛い。私も押し黙ってうつむいて、静かにとぼとぼと道を歩いて行く。

結局は、上野さんの家で食事をする事になった。なぜなら、菊池さんがしつこいから。このままじゃあ、ずっと付きまとわれるから。

夕食にまで付いていきたら、気が狂いそうだ。というのが上野さんの意見。

上野さんの家の中、キッチンの前で上野さんが料理をする。私とハル君もお手伝い。だけど、ハル君は……途中で犬用ボールを使って遊び出す。お手伝いをサボるハル君を見ながら、上野さんが注意しているけど。ハル君の耳には入らないらしい。私にボールを手渡して投げてくれるように催促してくる。

バタバタと騒ぎながらも、夕食が完成。今日の夕食はマーボー春雨とチャーハンに玉子スープ。それに加えて、唐揚げに餃子。凄く豪華な中華風。久しぶりに豪華な食事を目にしてお腹が鳴りだす。最近は……夕食を食べた記憶がないもの。いつもそれまでに、寝込んでしまって。気が付けば翌日になっているから。

皆で頂きますの挨拶をして、夕食を口にする。おいしー！　美味しさのあまり、パクパクと口に入れていく。私とハル君がガッついて食べていたら、上野さんが呆れた声で話し出す。

「二人共……そんな急がなくても。もう少しゆっくり食べようよ」
「す……すみません。美味しくって……つい……」顔を赤らめる私。
「早く食べないと取られるの。好きなの取られるの」

ハル君が真顔で言う。上野さんが苦笑しながら、私を見る。

「取られるんだって。ハルが一番食べてるのにね。君も欲しい物があったら、先に確保したほうがいいよ。じゃないと、ハルがどんどん食べて行くから。掃除機みたいに飲み込むんだもの。ちゃんと歯で噛んでるのかな？」
「わ、私も……掃除機かも」

私が呟いたら、クスクスと笑いだす上野さん。だけど、上野さんって本当に食べるのがゆっくり。量が少ないというよりも、食べるスピードが遅い。私もあれくらいの速さで食べれたら、食べ過ぎる事がないのにな。

お宅訪問〈恵梨編6〉

のんびりとした夕食を食べ終わり、上野さんが食後の紅茶をいれてくれる。ハル君はテレビがあるからと、ソファーのある所に行ってしまった。キッチンの椅子に座りながら紅茶を飲む私と上野さん。不意に上野さんが話し出す。

「さて……そろそろ、話をしなくちゃね」
「さっきの話……ですか？」
「そう……。分離した君達をもとに戻す事……それを少し待ってもらいたい理由。それと、君の夢について」
「夢……ですか？」

私が反復するように問いかけると、上野さんが小さく頷く。そして、ゆっくりと説明を始める。

「そもそも、どうして僕が君達の異変に気付いたか……。その辺りから説明しようか」
「は、はい……。お願いします」
「まぁ、他の人に言えばバカげた話だと思って、信用してもらえないかもしれないけれど。君達は既に巻き込まれているから、信用せざるを得ないだろうね。こんな未知な体験は初めてでしょ？」
「はい……。自分が二人に分かれるなんて、漫画だけかと思っていました」
「フフッ……まぁ、そうだろうね。さぁ、説明するよ。ごちゃごちゃした話だから、わからない所は聞き流してね」

こうして、上野さんが話してくれる内容は、まるでおとぎ話のよう。要約すれば、こんんな感じ……。

地球という小さな枠組みじゃなくて、宇宙を含んだ大きな世界。
そんな世界が実はたくさん存在する。私達が生きている世界とは別の似通った世界がセントラルという場所を中心として、放射状に広がっているらしい。

そして、各世界に一人『橋』と呼ばれるリーダーがいて。上野さんはその一人だという事。話によると、同様に未来さんやシバルさんも別の世界の『橋』をしているらしい。要するに、異世界の人ってことかな？　だから、あんなに凄い人達だったのね。って、ちょっと納得してしまった。

この世界のリーダー……『橋』は上野さん。だから、世界の秩序を正す責任があるらしい。それで、秩序が乱れた私と梨香をもとに戻さないといけないみたい。だけど、それができない理由。ううん、そうしたくない理由……。それは上野さんの独断的意見。

上野さんの彼女……秋山さん。その方はずっと以前に亡くなっていて、それでも上野さんはその人の事を忘れないでいて。そんなある日、狭間という……世界の裏側のような場所の歪みから、幽霊の秋山さんが見えるようになったらしい。

見えると言っても、上野さんに見えるわけではなくて。秋山さんが見えるのは、別の世界の人達……ハル君やシバルさんなど。だから、私達には見る事ができないみたい。

だけど、一つ……秋山さんの存在を確認する方法があるという。それが、秋山さんが人の身体に乗り移る事。しかも、乗り移る事ができる唯一の相手が半分になってしまった私達だという。私が見ていた夢は……私に乗り移った秋山さんの生活風景らしい。

上野さんが心苦しそうに口を開く。

「もしも、君が今すぐにもとに戻りたいというのなら、僕は……君達をもとに戻さないといけない。だけど……もしも、急がないのなら、もう少し待ってほしいの……」

「上野さん……」

「ずっと……忘れられないでいた日和が僕と一緒にお喋りしてくれるの。笑ったり、泣いたり。買い物に行ったり、ご飯を作ったり。別にいやらしい事はしていないよ。ただ……一緒にそこにいるだけ。それが凄く幸せで。もう手に入らない物だと思っていたのに……」

上野さんの声が震えている。目に涙をためながら、必死に感情を押さえ込んでいるみたい。きっとできる事なら、私達をもとに戻らせたくないのだろう。だけど、上野さんは『橋』だから……本当は私達をもとに戻さなくちゃいけない……。辛い選択。

上野さんが椅子から立ち上がり、私から目を逸らす。そして、小さな声で話し出す。

「もしも……気持ちが決まったら、僕の所に来て。僕は……仕事部屋にいるから」

それだけ言って、奥の部屋へと入って行った。

私の気持ち……本当はもとに戻りたい。もとの……普通だった頃の生活を送りたいと思っている。だけど、どうなの？　もとに戻って……それって幸せ？

そうしたら、また信也が鬱陶しそうな顔をするんだろうな。だっ

て、あの時……言っていたもの。中途半端な性格をどうにかしろよって……。今の私を見ても鬱陶しそうな顔をしているけど。

きっと信也は私よりも梨香の方が好きだと思う。梨香のようなキツイ性格と、私のような内気な性格と。キツク言われるのは好きじゃないだろうけど、ウジウジされるほうがもっと嫌がるもの。最近……凄く感じる事。それだったら、一層の事……。あの幸せな夢を見続けた方が……。

上野さんが立ち去って、遠くからテレビの音が耐えなくて。私がおもむろに口を開く。

「秋山さん……いますか？　もしも、いるのなら……。上野さんの所へ行ってあげてください。私は……まだ急がないから」

私が言って、数秒後……。フワリと夢見る感覚に……。意識が半分くらい薄れてきて、心地よい気持ちが胸に溢れる。秋山さん……お願いしますね。

運動会〈その1〉　★（前書き）

挿絵を見たら、勝負の結果がわかります。
メモリーは漫画小説の主人公だから、こっちでも挿絵あり。
いや、単にネタで描いただけですけど。結構、笑えます（＾―＾）

運動会〈その1〉　★

かったりー。自宅にて、ため息をつきながら、時計を見る。今日は……運動会。だりーよ、いらねーよ。運動会なんて小学生だけで十分だろ？　何で高校生にもなって、運動会なんだよ？　これなら、テストのほうがよっぽど楽だし。

母親が変に意気込んで作った弁当に目を向ける。こういう時だけ、豪華な弁当だ。普段なら、購買で買うのに。悪あがきは寄せよな。あんたの手抜きレベルはもうバレバレだっつーの。

文句を言いながらも、うだうだと用意を始める俺。準備を終えたくらいに、出発の時間。「ガンバレ」とか「優勝しろ」とかほざく家族を無視して、外に出る。家を出てすぐに、梨香と鉢合わせ。梨香が俺に口を開く。

「今日は早いね。もしかして、ヤル気？」
「ちげーよ。家の応援団がうるさくて、頭がおかしくなるから出てきたんだ」
「へー、皆して応援してくれてるんだ。いいじゃない」
「全然よくねーし。朝っぱらから騒音なんて、ストレス堪るだけじゃん」

梨香と喋りながら歩いていたら、途中で恵梨と出くわす。恵梨が俺に向いて、口を開く。

「今日は……頑張ろうね」
「まぁ、程々にな」
「二人共頑張ってね。私は陰で応援しているから」

梨香が言って、恵梨が頷く。普段の授業は梨香が参加しているため、今日の恵梨は妙に意気込んでいる。運動の授業って、それほどないから。運動がメインの運動会は、珍しく恵梨の活躍が期待できる場なのだ。

ダラダラと喋りながら、教室に到着。梨香とは学校前で別れた。俺達が席に着くと、近づいてくるのが一般常識に欠ける奴……リョウだ。

今やリョウは学校の一生徒。他にする事ないのかよ？　と思うが、聞いてみたら。「あらへんねん」と返答された。やるべき事がないらしい……。だらしないというか、呑気というか。

次に松元がやってきて、リョウと優勝の誓いを立てる。それを見ていたお嬢様が口を開く。

「くだらない。そもそも、こんなイベント……必要あるの？」
「ちょい、お嬢様～。そんなしけた面してたら、あかんで。こういうのはな、楽しむためにあるんやで。初めからくだらんなんて言うてんと、本気で勝ちを狙ってや。わい、優勝目指しているさかい、頼みまっせ～」
「……」

お嬢様は返事を返さずに、リョウから目を逸らす。悪いが俺もお嬢様に一票だ。今回ばかりは本当に鬱陶しい。何だかんだ言って、俺は運動も勉強も好きじゃないんだ。あー、早く今日が終わってくれる事を祈っている。

開会式を行う為に、廊下に列をなす生徒。このまま音楽に乗って外に出て、先生達の長い話が始まる。できれば一分で済ませたいが、こういうのって無駄に時間が掛るんだよな。何をもたもたしてるんだろう？

やっとのことで、運動場へと向かう。外に出ると、周りは結構な人の海。保護者とかも見学に来ているから、かなりの人数になる。生徒が並んで、開会式が始まる。長い話の後に、決められた席へと移動。

俺達は白組だ。確か、北原も白組だと言っていた。赤組の知り合いもいるにはいるが、だからどうってこともない。一種目めの準備が進む中、やって来たのが北原だ。俺達に向かって、手を上げる。

「やっほー！　恵梨香ちゃん！」
「あ、雫ちゃん……」と恵梨。
「今日は頑張ろうね。優勝したら、先生からご褒美貰えるそうだから。って言っても、ジュース一本だけど～」
「うん、頑張ろう……ね」

恵梨が真顔で頷いて、今度はリョウがやってくる。

「嬢ちゃん、本気モードやね。ヤル気あるのはええけど、あまり緊張すると本番でミスるで。ちょっとくらいは気を抜いときや～」
「は、はい……」

頷く恵梨。そんな中、聞いた事のある声が聞こえてくる。そちら

を振り向くと意外な奴だ。こちらに向かって歩いてくるのは……ネコ耳上野と犬耳ハル。上野が北原に話しかける。

「雫、探したよ。雫のクラスにいないから、人に聞いてみたらここだって。本当、チョロチョロと走り回る癖は未だに変わらないね」
「進兄、おはよう！　もしかして、応援？　雫が頑張る所を見に来てくれたの？」
「そういうこと。っていうか、メールしてきたのはそっちじゃない。しつこく十通もメールなんて止めてよね。迷惑メールにも程があるよ」
「だって、進兄が返信してくれないから～」

うだうだと喋り込む上野達の前に、跪くのはリョウの奴。顔を上げて、上野に言う。

「進ちゃん、この機会や！　言いたい事があるねん！」
「その鉢巻を見る限り、雫も白組なんだね。このクラスも白組だし。僕は白組を応援すればいいってことか」
「うん、そういう事」と北原。
「優勝目指して頑張ってね。クラス別の得点とかも出るの？」

楽しげに北原との話を進める上野。リョウを完全無視してやがる。リョウが頭を下げ続ける中、上野の背後に人影だ。誰かが上野に抱きつき、上野が振り返る。その先にはお嬢様……めちゃくちゃ嬉しそう。お嬢様の姿を目にして、上野が超不愉快そうに口を開く。

「またちび助か。鬱陶しいから、止めてよ」
「別にいいじゃない……。迷惑を掛けているわけでもないんだから」
「迷惑に決まってるでしょ！　この間だってそうじゃん！　僕の周りをチョロチョロして。嫌がらせなら他でやってよね！」

「嫌がらせって何よ！　上野の方が嫌がらせじゃない！　少しくらい話を聞いてくれたって……」
「鬱陶しいストーカーの話なんて誰も聞きたくないよ。頼むから、僕に近づかないで。僕の視界に入らないで。僕に触れないで。汚らわしい」

上野の冷血極まりない言葉にお嬢様が打ち切れる。二人で睨み合い。よく飽きないなと感心する。そんな事を言っているうちに、一種目めが始まった。二年生の玉転がし。赤組と白組が同じような速さで競い合っている。

お嬢様から目を逸らし、頑張る二年生に目を向ける上野。不意に何を思ったのか、お嬢様に目を戻す。

「ねぇ、賭けをしない？」
「賭け？」
「この運動会。総合得点で、赤組が勝つか、白組が勝つか」
「別に構わないけど……」

お嬢様が答えると、上野が微笑む。微笑むと言っても、あくどい笑みだ。何を考えているのか？　上野がお嬢様に言う。

「もしも、僕が勝ったら。『二度と僕に近づかない、話しかけない、顔見せない。の三点セットで、ストーカー行為を止めるのおまけつき』わかった？」
「いいわ。もしも、私が賭けに勝ったら。『上野は一週間私の言いなりよ』」
「いいよ。だけど、条件をつけてもらうから」

上野の条件は極簡単だ。無茶な事は論外という事。まぁ、例を言

うなら『一週間の言いなりを、二週間に延ばしたり』『命に係わる事……死ねとかいう命令』など、そういう事は駄目だという話。

こうして始まる上野とお嬢様の賭け勝負。上野は白組、お嬢様は赤組に賭ける。ただし、お嬢様は試合に参加しないとのこと。手を抜いたりすると、勝負に支障をきたすからしい。

赤組の方へと向かおうとするお嬢様。不意に上野が声を掛ける。

「ちょっと待って……」
「まだ何か？」
「これ……このビデオで証拠を撮っておかないと。後でしらばくれたりされたら困るもの」
「そんな事はしないわよ」
「ちび助なんて信用できない。ほら、ビデオ撮るよ」

そう言って、上野が自分の鞄からビデオを取り出す。俺に手渡して、ボタンの操作を教える。俺が撮るのかよ……とか思うが。まぁ、これくらいは手伝ってやろう。賭け勝負の話をして、どちらに賭けるか。また勝った時の賭け金の話。一通り撮り終えて、お嬢様が去っていく。

ビデオを上野に返したくらいに、一科目めが終了した。ギリギリの得点で、白組の勝ち。この調子で行けば、上野の勝ちになる。不意に上野が北原に振り替える。

「そういうわけだから……。何が何でも勝ってね！　雫！　すっごく期待しているから！　負けたら、僕の命が掛ってるから！　手足が吹っ飛んでも、勝ってね！」
「努力はするけど、手足はいるよ～。ないと勝てないし～。それに、

雫だけが頑張ったって仕方ないじゃん。皆が頑張らないと、勝ち目ないよ～」

「皆、お願いだから。死ぬ気で勝ちに行ってね！　お願い！　本当に、お願いしますから！」

上野が超でかい声で俺達のクラスに希う。何だかんだ言って、上野達の話を耳に挟んでいた奴が大勢だ。呆気に取られて頷くクラスメート。話を聞いていなかった奴は、隣の奴に話を聞く。

広まる上野とお嬢様の賭け勝負。不意にマイクの音……お嬢様の声が聞こえてくる。お嬢様が上野との勝負の話をして、続いてビックリ発言だ。

「という話があったの……。それで、私は赤組に勝利してもらわないといけないのよ。だから、赤組の皆さん……」

お嬢様が言葉を区切って、ニッコリ微笑む。

「もしも、赤組が勝ったなら。お礼に一クラスに付き、百万出すわ。礼金ね」

何―!?　いや、それはちょっとズルイだろ!?　ざわめく運動場。もちろん、上野が叫び出す。苦情を口にしながら、お嬢様の所へ駆けて行く。

「ちょっとそれズルイじゃん！　お金で人を釣らないでよね！」

「礼金くらい、当たり前でしょ？　赤組のモチベーションを上げているのよ。だから、白組には手を出していないじゃない。それとも何？　上野は人を使っておいて、何も出さないつもり？」

「っ……!?」黙り込む上野。

「まぁ、何も出せないの間違いかしら？」

うわぁ……お嬢様はやっぱりすげーな。金持ちにしてみれば、はした金なんだろうな。一千万といえば、乱闘が起きるだろうから。微妙な百万にしたのだろうが。一クラスに付き、百万円？　一クラス、三十人いたとしても。約三万円か……。

こりゃあ、上野に勝ち目はないな。ヤル気のない白組に対して、赤組は溌剌としている。金で燃えない者はいない。先生ですらヤル気満タンだ。上野が頑張ったところで、出せてチューインガムくらいか？

白組がブーイングモードになっていたら、不意に上野がお嬢様のマイクを取り上げる。そして静かに口を開く。

「こんな事で落ち込むなよ、白組……」

何か……上野の様子が変だ。目つきがヤバい。かなり切れているもよう。上野が続けて口を開く。

「これでも僕は……ちょっとしたプログラマーでね。今、開発中のゲームがあるんだけど……。それの提案者でもって、開発責任者でもあるんだ。だから、結構……権限があるんだよね。もしも、白組が勝ったなら……一人に付き一つ。そのゲームを無料で譲ってあげる」

ゲームを無料提供か……。俺的には嬉しいけど、どうせクソゲーだろうな。とか思っていたら、思わぬ出来事。終わらない上野の言葉。

「ゲーム名は……『ラストベクテル？』。前作で大ブームが起きました。今回も僕が担当者です」

ほしぃーーーー！！！！！　喉から手が出る程に欲しいーーーーー！！！！！　おいおいおいおいおい、嘘だろ？　おい？　まさに俺が次に買おうと狙っているゲームじゃないか！　というか、あれの開発責任者!?　上野って、すげー奴だったのか!?　いや、凄い奴だとは思っていたが、まさか歌以外にこんな能力があるだなんて……。

マジ欲しい、マジ欲しいんですけど……。前作の『ラストベクテル』でも、この学校内で九割の奴は知っていた。八割の奴は持っていた。後の一割は、ゲームに興味のない勉強家だ。

全力で頑張らねば……。俺が思考していたら、未だに聞こえてくる上野の声。

「まぁ、ゲームに興味がない人にはゴミみたいな物だけど……。あのゲーム……結構な人気でね。前作は生産が間に合わなかったんだ。きっと今回も生産が間に合わないと思うから。ゲームをオークションに出してみな。早い段階で売ると、三万は軽く行くね。上手くいけば、二桁になるかも」

＞ｉ２０６７７―２３１＜

運動会〈その2〉

上野の機嫌が良くなれば、お嬢様の機嫌が悪くなる。何て相反する二人なのか。白熱するバトル、均衡が取れた状態で進んでいく。微妙に白組が優勢で、赤組が後を追う形。

そんな中やってくるのが、俺達一年の競技。綱引きだ。クラス対抗で、男女別。男子組と女子組に分かれて勝負する。男子の隣では、女子。どうして男女混合じゃないのか？　色々と推測されるが、きっと嫌がる女子がいるんだろうな。

競技開始の合図が鳴り、綱をちぎれんばかりに引っ張る。一秒も経たぬうちに、隣から歓声が。思わずちら見してしまう。何やら赤組が勝った気配。そうこうせぬ間に、綱が引き戻されてしまい。赤組の勝ちだ……。いや、まだ二回戦がある。

始まる二回戦、勝負開始直後に隣では勝利の声が。女子の所はまた赤組が勝ったらしい。駄目だな、これは……。こっちも勝てそうにない。

相手の勢いに引きずり込まれそうになっていたら、急に綱の引っ張られる気配がなくなる。というか、綱が均衡している？　ゆっくり力を抜いてみるが前に進まない。相手が手を抜いている気配はないが……。

どうしてか気になり、思わず後ろを振り返る。俺が振り返ると、皆が連鎖的に振り返りだす。そして、俺達の最後尾に位置するのは犬耳少年……っていうか、青年？　今は俺達くらいの年代の姿をしているハル。

俺達のクラス全員が綱から手を離しても、綱は身動き一つしない。ハルが……たったの一人で、しかも片手で、綱の均衡を保っている。多分、本気を出せば、赤組なんて軽く倒せるのだろう。ハルの力はどれほどのものなのか？

不意にハルが軽く綱を引き、勝負が決まる。そして、ハルが口を開く。

「僕も参加してあげますよ。要は、バランスですね」

どういう事かと思っていたら、相手の女子組から玲が登場する。そりゃあ、勝てないわけだ。玲が珍しく楽しげに口を開く。

「何だ……。何も言わないから、気づいていないのかと思っていたのに」

「気付かないわけないじゃないですか。僕とあなたの勝負はまだついていませんよ。本格的に僕が参加すると、あなた方があまりにも不憫なので。僕はあなたが参加する科目にだけ、参加させていただく事にします。以後、競技に参加する際は僕の事をお忘れなく」

カッコいい台詞を言った後に、ハルが背を向け観客席へと戻って行く。それにしても、キザだった。犬耳がなくて、学生服とか着ていたら、惚れる女子も多いだろう。お前は漫画キャラかよ？　問いかけたい。

って言うか、男子はまだ三回戦があるんですけど……。ハルが去って行ったら、勝てないんじゃないのか？　ふと頭に過る疑問。

上野を見ると、ビデオカメラでハルを撮影中だ。そして、ハルが

ちびっ子になって上野の元へと駆けて行く。凄く幼稚な声で上野に言う。

「パパ―！　僕、頑張ったー！」
「凄いよ、ハル！　白組は優勝間違いなしだね」
「うん！」

上野に近づいて、頭を撫でてもらうハル。こいつ完璧にファザコンだよな。とか思っていたら、三回戦が始まる。やべーよ！　帰ってこいよ、ハル！

その後、どうなったかというと……。何とかハルなしで勝つ事ができた。要するに、女子組は赤組、男子組は白組の勝ち。ただ、それは俺達のクラスの話であって、他のクラスの勝負は微妙に異なる。

それら全てを足した現在の総合得点は、微妙に白組が上。と言っても、五点程の差だ。こんな物は一勝負で逆転される数字。気を引き締めて掛らないと、急に追い詰められる恐れがある。

次々と競技が進み……あ、ヤベ。赤組がリードした。微妙ながら、赤組の得点が上だ。次の競技で何とか逆転しないと……。そして、やってくるのは一年の競技。二人三脚リレー。これ苦手なんだよなー。

これも男女別であり、男子は男子の二人組、女子は女子の二人組になって。別クラスと競い合う。もちろん、男子ＶＳ男子。女子ＶＳ女子だ。こういった分別をするのは、嫌みではなく。どうしても男女間では体力に差が出てしまうからだろう。

そういうわけで、勝負が始まる。まずは余所クラスの戦いだ。お、北原が登場。相方とお喋りをして、何か取り決めをしているもよう。足を紐で結んで、位置につく。スタートと同時に飛び出す二人。速い！　結構な速さだ！　流石、北原。いつも走り回っているだけはある。

北原達が一位をキープしたまま、次にバトンを手渡す。いい感じに白組がリードして、最後にゴールだ。白組が一位と二位を手にして終了した。北原のクラスはなかなかやり手だ。

次々と他のクラスが競技を進めていると、不意に後ろの会話が耳に入る。声から察するに、先生と松元だ。

「なぁ、松元。悪いんだが、二順目に出てくれないか？　林が体調不良になってな」

「えぇ！？　無理ですよ！　だって、俺は二回出ますもん。三回はきついですって！」

「そうか……。じゃあ、速そうな奴は他にいないか？」

「速そうな奴ですか……。って言っても、うちのクラス遅いですからね……。ちょっと探してみます」

「悪いな。うちのクラスは次の次だから、それまでに何とか探してくれ」

「はい、わかりました」

俺が後ろを向くと、先生が去って行くシーン。松元が苦笑いしながら、俺に近づいてくる。

「お前は無理だよなぁ～」

「当たり前だろ？　速いって言えば、高野か南くらいだろ？　そう

いえば、リョウはどうするんだ？」
「リョウさんは俺と組むから、二回出るんだよ。俺達はアンカーだからな」
「そりゃあ、キツイな……」
「うーん、とりあえず……。あ、そうだ！　まずはハル君に聞いてみるか」

松元が名案を出してくる。そりゃあ、ハルが出れば速いだろうな。あいつは玲と同じかそれ以上に敏速だ。松元がハルの場所へと向かう中、俺も一緒に同行する。ハルに近づき、松元が言う。

「悪いんだけどさぁ、ハル君。二人三脚に出場してもらえないかな？　ちょっと人数が足らなくて……」
「むり～。僕はあのお姉ちゃんが出る競技にだけ参加するの」
「いやぁ～、そんな事を言わずに頼むよ～」
「だめ～」
「うーん……そっか……」

松元がため息をついて、考えだす。不意にハルの隣にいる人物……ビデオカメラをいじる上野に話しかける。

「あの……上野さんは足速いですか？」
「遅いよ。無理だよ。そりゃあ、若い頃はまだマシだったけど。今は本当に動かないもの。足を釣るか、こけるか。とにかく、僕には期待しないで」
「そうですか……。じゃあ、白組の優勝も期待しないでくださいね」
「いや、無理、駄目！　絶対に勝たなきゃ駄目だし！　もしも負けたら、僕はあのちび助に何されるかわからないもの。何が何でも勝ってね！」
「そんな無茶な……」

なんつー自分勝手な意見なのか。呆れる俺の前では、松元と上野の会話が続いている。他の人に聞いてみようと、話がまとまる中。どこからともなく人の声が……。

「面白そうだね。俺が参加してあげようか？」

え？　と思い、キョロキョロ見回すと、上野の後ろに未来が……。いつの間に来たんだろう？　上野が振り返り、未来を見る。

「未来じゃん！　丁度よかった！　未来も参加してよ！　白組が勝たないと、僕……大変な事になっちゃうの。負けられない勝負なんだよ」

「大変な事？」

「ちょっとちび助と約束しちゃってね。白組が負けたら、僕は一週間……ちび助の言いなりにならないといけないの。そんな事になったら、何されるかわからないもの。あのちび助は気味が悪いし。お願い、未来も手伝って！」

「いいよ、どうせ暇だし」

「ありがとう～。後でポテチとコーラを好きなだけ奢るから。よろしくね！」

「そりゃあいいや。暇つぶしに運動会に参加して、奢ってもらえるのならありがたいね。それで、俺は何の競技に参加すればいいわけ？」

尋ねる未来に答えるのは松元。話を聞いて、未来が納得する。そうこうしているうちに、俺達のクラスの出番になる。始まる競技。まずは男子から。走り出すのは二人組の赤組が二つと、二人組の白組が二つ。合計八人。すげー、ゴタゴタしている。

走り出して、すぐに赤組の一人が躓いてしまう。そして、時間をロス。おぉ～、いい感じだ。そんな具合で白組がリードしていたら、未来の出番だ。未来の相方は緊張気味だが、未来は至っていつも通り。

未来の相方がタスキを受け取り、走り出そうとした直後。未来が相方を脇に抱える。困惑する相方。それを無視して未来が腰を低くする。そのままジャンプ。いや、正しく言えばウルトラジャンプと言えようか？　人間ってあんなにジャンプできるのか？　と疑問を感じてしまいそうだ。この競技が高跳びなら、間違いなく優勝だろう。現実は、二人三脚リレーなのだが……。

それでも、恐ろしい程に速い……。未来達はジャンプだけで進んでいる。既に二人三脚の領域を超えている気がするが。深いルールなどない高校の運動会だ。注意する奴なんているわけない。というか、注意する暇がない。

すげー、もうゴールだ。断トツで一位になった。このまま行くと白組が勝てるんじゃないか？　未来が硬直気味の相方のタスキを勝手に取って、次の二人組に手渡す。走り出す二人は、未来のような無茶はしない。というかできない。普通に走り、後ろの奴らが徐々に近づいてくるが。まだまだ余裕がある。未来のおかげで貯金がたんまりだ。

運動会〈その3〉　★（前書き）

挿絵に深い意味はないけど……。
この人、漫画小説の主人公だから。
とりあえず、こっちでも挿絵を入れておく。

運動会〈その3〉　★

こうして、男子の部。二人三脚リレーは白組が一位と三位。三位を取ったのは少し辛いが、まぁ、四位よりはましだろう。そして次は女子の部。合図が聞こえてきて、競技が開始される。

恵梨はアンカーで二回走るらしい。まぁ、元々……恵梨香は勉強も運動も完璧だから。ミスをしない限り、良い線いくと思う。女子の部が行われている間、未来が上野に近づき話しかける。

「それにしても、上野君って。見た目以上に外出するんだね。ライブの時もそうだったけど、ちょっと意外かな」
「上野君……？　うわぁ、未来に実名を呼ばれると凄く違和感」
「え？　あだ名の方が良かったの？」
「ううん、実名でいいよ。まぁ、あだ名でもいいけど……。っていうか、未来こそ僕の所にチョロチョロ来るけど。暇なの？」
「暇だと言えば、暇だし。忙しいと言えば、忙しいかな」
「へ～」

凄く平凡な会話。上野は白組が必ず勝つとでも思っているのだろうか？　緊張感がまるでない。未来が上野に口を開く。

「何かさぁ……最近、思うんだけど……」
「何？」
「上野君……感じ良くなったよね」
「……そう？」
「うん、以前よりずっと良くなったよ。前は……もっと人見知り的な所があったもの。まぁ、最低限の付き合いはするけど。本当に世間付き合いくらいで。リベンジャーとまではいかないけど。結構、

他人行儀だったよね」
「そ……そうかな？」
「だけど、最近は人付き合い良いよね。ハルやニートの話を聞く限り、明るくなったって言うの？　いい感じに変わってきたと思うよ」
「何か……そういう言われ方をすると恥ずかしいな。っていうか、ニートの奴……まだあの本持っていたんだ。早く捨ててほしいし……」
「まぁ、ハルに関しては、ちょっと過保護行きすぎだと思うけど。食べ物で口を汚した時に、わざわざティッシュで拭いてあげたり。ちょっと咳き込んだだけで、薬とか用意したり。はたまた、お風呂が少し遅いからって心配して見に行ったり。親バカもいい加減にしなよ。ちびっ子バージョンでも中身は高校生だよ。そこまでする必要はないし」
「それくらいわかってるけど……何か気になるし」

二人がうだうだ喋っていたら、恵梨の出番が回ってくる。現在、四位……。こりゃあ、キツイな。恵梨が走り出して、ビデオを撮る上野。未来は声を出して応援している。俺も応援くらいしなきゃな。

恵梨がゴールに到着するころには、何とか三位に這い上がっていた。赤組を抜いたから、意味のある三位だ。赤組が一位と四位、白組が二位と三位。微妙な結果。

俺達一年の競技が終わり、得点が表示される。総合得点は……白組がリード。よし！　追い抜く事ができた！

とか言っていたら、その後に待ちうけるのは白組の危機……。二年と三年の競技が連続して続く中、白組が大敗してしまう。最初のうちは笑っていた上野だが、負けが続くにつれて顔色が悪くなってくる。

かなり追いつめられた状況で、昼休憩がやってきた。運動場の隅の方、ビニールシートに座るのは知り合いメンバーだ。俺に恵梨、松元、リョウ。その隣……別のビニールシートに、未来、上野、ハルに北原。梨香は……いない。多分、人に見られるので来るつもりはないだろう。まぁ、あいつなら自分で何とかしていると思うし。問題ない。

リョウが上野達の弁当を見て、口を開く。

「えらい豪華やな～。わいにもわけて～」

「駄目！」即答するのは真顔のちびハル。

「こらこら、そんな事言わないの。一人占めはだめだよ、ハル。皆で一緒に食べようね」

上野が言って、ハルが考え込む。リョウが上野に断りを入れてから、上野達の弁当に手を伸ばす。それを見て、ハルがすぐに対策だ。自分の小皿におかずをてんこ盛り。おにぎりを食べながら、それを突く。

それにしても、マジで豪華な弁当だ。しかも、結構な量。上野とハルだけでこれを全部食べるつもりだったのか？　というか、そもそも……これを作ったのは上野なのか？　いや、マジで凄いんですけど。俺の母親なんて勝ち目ないだろう。

不意に松元が話を振ってくる。

「だけどさぁ、この調子で行くとヤバいよな。白組が優勝するには、

それなりに勝たなきゃいけないし。一位を連続して取らないと、厳しいな」

「まぁな、俺達の残り競技は……障害物競争と紅白対抗リレーだろ？　組体操は得点に関係ないから」と俺。

「紅白対抗リレーって……。確か……他の競技よりも……入る得点が大きかった……よね？」

恵梨が言って、松元が頷く。リョウとハルが大食い競争を始める中、上野が話に首を突っ込んでくる。

「ねぇ、勝ち目はあるよね？　もう勝ち目ゼロだなんて事はないよね？」

「ゼロじゃないよ。ただ勝ち続けなきゃいけないだけ」と未来。

「ねぇ、未来的にはどう？　白組が勝ち続けられると思う？」

「いや、まず無理だね」

「……。じゃあ、このまま負けちゃうの！？　そんなの駄目だし！　そんな事になったら……」

「楽しみね」

二人の会話に別の声が聞こえてくる。振りかえる先にはお嬢様。めっちゃ嬉しそうだ。上野の前に行って、勝ち誇ったような顔で口を開く。

「もしも、今ここで謝罪するのなら。そうね、少しは今後の予定を変えてあげてもいいかしら？　もちろん、例の約束は実行よ。ただし、その中身を手加減してあげるわ。ほら、言ってみなさい。『お嬢様、すみませんでした。僕が悪かったです』って」

「誰が言うか！　大体、君は何がしたいわけ？　一週間も僕の生活を奪って……」

「そうね……」

お嬢様が喋りかけて、口を閉じる。数秒間の停止時間。直後、お嬢様の顔が赤くなって。好色な顔つきで上野を見る。

「上野の顔が恥辱で歪む所を見てみたいわ。上野が顔を赤らめながら言うの。『止めて、お嬢様。そんな事しないで』って。そんな上野をいたぶり回したら……凄く楽しいわね。ウフフ……」

「ただの変態じゃないか……」

「今からでも構わないわよ。ほら、私に泣きつきなさい」

「死にやがれ、くそったれ！　白組の優勝で、二度と顔を拝めないようにしてやる」

争う上野とお嬢様。未来は気にしちゃいない。上野達の弁当を勝手に突いて、和んでいる。不意にハルが口を開く。

「ねぇねぇ、この後の競技に玲お姉ちゃんは出ないの？」

「玲は出ないわ。だって、あなたがいるもの」とお嬢様。

「ん～」

お嬢様の言葉を聞いて、ハルがつまらなそうな顔をする。不意に未来がお嬢様に振り替える。

「ねぇ、ちょっとミニゲームをしようよ」

「今度は何？」

「このままなら赤組の勝ちは……まぁ、揺るぎないよね。それじゃあ、つまらないし。ちょっとだけ、白組にも可能性を与えてあげてほしいんだよね」

「可能性なんていらないわ。赤組は勝ちで決定。上野には約束を守ってもらう。それで十分よ」

「まぁまぁ、ちょっとだけ話を聞いてよ。君にだって、良い事があ

るかもしれないんだから」
「何？　簡潔に言いなさい」
「もしも、君が勝ったなら。上野君を丸ごとプレゼントするよ。一週間と言わずに、死ぬまでこき使ってやって。以前のルールもなしでいいから。殺したって構わないし」
「ちょっと何考えてるの！？　未来！」

叫ぶ上野を無視して、未来が続ける。

「だけど……。もしも、俺達が勝ったなら、白組の総合得点に三十点だけ加算してほしいんだよね。気持ち程度の三十点だよ。それで赤組を追いぬくわけでもないし、ましてや勝てるわけでもない。だから、君にしてみれば……リスクは少ないはずだよ」
「……」
「一週間なんて早いものでしょ？　そんな一週間そこらで上野君が懐くわけでもないし、むしろ余計に嫌われちゃあ意味ないものね。君は上野君が好きみたいだから……。ペットを手なずけるには、時間が掛って当然だよ。それなら、ずっとそばに置いておけば、いずれ懐いてくれると思うし。この条件、悪くないと思うけど。まぁ、嫌なら別に構わないよ。俺の気まぐれ案だから。上野君も何か嫌そうな顔をしながら、こっち見てるし」
「……ゲームは？　ゲームの内容は？」
「至って簡単だよ。玲ちゃんとハルがバトルするの。武器なしの格闘バトル。だけど、殴り合いで相手を負かすのは骨が折れるし。そんなので死ぬのも面白くない。だからね、騎馬戦みたいに頭に鉢巻するの。相手の鉢巻を先に取った方が勝ち」
「相手の鉢巻を取れば勝ちね。その間の組み打ちはありというわけ」
「そういうわけ。面白いでしょ？　もちろん、自分の鉢巻に触れる事はできないし。他の人に直してもらうのもなし。二人だけのデスマッチだよ」

「フフン、良いわ。そのゲームに乗ってあげる。ゲーム開始は十分後よ。他の競技が開始される前に始めるわ」
「うん、そうしよう。それじゃあ、俺達は準備があるから」
「楽しい試合になりそうね」
「ごもっともで」

お嬢様と未来が二人して不適な笑みを浮かべている。何だかこいつら恐ろしい……。上野を見ると、今にも泣きそうだ。ハルは嬉しそうに尾を振っている。どうしても玲と勝負したかったらしい。

昼休みが終わる頃、マイクで流れるのは予定外の放送。大人ハルと玲が運動場の真ん中に立ち、対面する。ハルの後ろには未来、その隣には半泣きの上野。玲の後ろにお嬢様といった感じだ。

ハルと玲がお互いに頭を下げて、鉢巻を付ける。準備が整った。ピストルの音が鳴り響き、バトルが開始される。これでハルが負けたなら、上野の人生が終わるのか……。まぁ、別に俺には関係ないから構わないんだが。あー、でも、『ラストベクテル？』を貰えないのはショックだなぁ～。

＞ｉ２１１５８―２３１＜

運動会〈恵梨編〉（前書き）

基本的に、未来は勝てる勝負しかしない人だ。

運動会〈恵梨編〉

上野さん……大丈夫かな？　さっきから顔色が良くない。元気なくうつむいている。だって……ハル君が負けてしまったら。一生死ぬまで、菊池さんに仕えなきゃいけないらしいから……無理もないよね。

元気づけてあげたいけど、私が出しゃばるのはよくない。信也の前だし、私が上野さんの家に泊まっていて、結構親しくなっているなんて事は誰もしらないから。私がそわそわしていたら、ハル君と玲さんの勝負が始まる。

まずは玲さんが先手を切り、ハル君に蹴りを入れる。ハル君はそれを軽く避けて、玲さんの軸足を下蹴りしようとする。だけど、玲さんが飛びあがり回避。そのままハル君の鉢巻に手を伸ばす。ハル君はそれを瞬時に察して、玲さんから遠ざかる。

二人の動きは互角くらい。どちらが勝っても不思議じゃない。人間離れした戦いが続く中、不意に信也が口を開く。

「どっちが勝つかなんて見当もつかねーよな」

「そうだね……」

「ハルが負けたら、上野はどうするつもりなんだろうな？」

「うーん……」

本当にどうするつもりだろう？　菊池さんから逃げられるわけないだろうし。だけど、この勝負は元々が未来さんの言いだしだから。菊池さんによく話をすれば、なかった事に……してくれるわけないよね。

上野さんを見ると、地面の砂を集めて、山を作っていた。ちょっと楽しそうな上野さんを見て、思わずときめいてしまう。な……何だか可愛い。これって、秋山さんが私に取り付いたりした影響かな？　どうしても上野さんの動きを目で追ってしまう。

それにしても、上野さん……現実逃避もいいところ。子どもみたいな顔をしながら、ポンポンと山を叩いている。そして、なぜか未来さんがビデオを撮る係りに。上野さんのビデオを持って、ハル君達を撮影している。

私達が二人の戦いを眺めていたら、急にリョウさんの声が聞こえてくる。後ろを向くと、リョウさん。結構、真顔で話し出す。

「何やハル君、押されてんな。これって、結構ピンチちゃう？」
「押されていますか……？　私には互角くらいに……見えますけど……」と私。
「よう見てみ。ハル君の方が死角を取られる率が高いやろ？　あれはよろしくない傾向やで」
「そういえば、そうだな……」

信也が頷く。ハル君……押されているんだ。大丈夫かな？　ハル君達の戦いを見ながらも、ちらりと視界に入るもの。それを見て、思わず声を出しそうになる。だって、上野さん……さっきの山の中央に木の枝を突き刺している。そして、手を合わせて拝んでいる。あれって、お墓だったのー！？　しかも、きっとあれは自分のお墓……。

上野さん、自分でお墓を作って。勝負を諦めちゃった……。まだ可能性はあるのに。何だかもう一人でご臨終モード。不意に未来さ

んのビデオが上野さんに向く。そして、上野さんが未来さんを見上げる。何か喋っているけど、ここからじゃあ聞こえない。

ハル君はちょっと辛そう。リョウさんが言うとおり、やっぱり押されているみたい。玲さんの攻撃を避ける事に全力を尽くして、息を切らしている。ハル君が玲さんから一時避難して、体調を整えていたら。未来さんがビデオを取りながら大声で言う。

「ハル！　師匠からのお言葉だよ！」

「は、はい！　何ですか！？」

「無理に敵を自分の視界に入れようと思わない事！　君は左目が見えないんだから、そういう事をすると時間が掛るし。却って、敵の思うつぼだ。相手の動きを見る限り、視力の事はバレてるよ」

「やっぱりバレて……」

「何のために見えない時の訓練をしたの？　ほら、相手の気配を読み取るの。目が見えなくても、他の人より別の感覚は鋭いはずだから」

「わかってはいるのですけど。最近はめっぽう戦闘訓練を怠っていたので。どうも腕が落ちたみたいで……」

「駄目だな、まったく……。親の躾がなってないよ。だから、言ったじゃん甘やかしすぎだって」

「何で僕のせいにするの！？」

上野さんが怒りながら、未来さんを睨みつける。未来さんは上野さんを無視。ハル君に向いて、話を続ける。

「よし、じゃあちょっと本格的な勝負にしよう。もしも、ハルが負けたら……俺の超スパルタ訓練が入るから。それに、このニャンコは保健所よりもキツイ所に連行されるそうだし。ハルに全てが掛ってるよ。死ぬ気で勝負だ」

「……はい！」
「縛りを入れよう。ハル！」
「はい！」

ハル君が緊張気味に返事をする。未来さんがトントンと自分の喉を指で叩いてから、口を開く。

「今から君は右目も見えない！」
「……え？　えぇ！！？」

一瞬、ハル君が目を丸くしたかと思うと。自分の目の前に両手を持っていく。そのまま硬直。すぐに蒼白しながら大声を出す。

「ちょっと、師匠！　何をしたのですか！？　右目まで使い物になりませんけど！？」
「本当にハルは言霊に弱いよね。ほら、これで両目が見えなくなった。次に頼るものは何だった？」
「……」

押し黙るハル君。上野さんが未来さんのズボンを掴みながら騒ぎだす。

「未来のバカー！　ハルを元に戻せー！」
「落ち着け親バカ。少しは息子を成長させようと思わないの？」
「バカー！　バカー！　早く戻せー！」
「さぁ、俺の助言はこれで終わり。勝負再開だよ」

未来さんが言った直後、玲さんが動き出す。ハル君達の会話の間は攻撃してこなかった。何か信念みたいな物があるのかな？　とにもかくにも勝負再開。

上野さんがうじうじと泣き言を言いながら、未来さんのズボンを引っ張り。それに対して、未来さんが怒り出す。その前では、ハル君と玲さんの戦い。

菊池さんは観客席から、黙って眺めているだけ。だけど、菊池さんが眺めているのはハル君達の戦い……じゃなくて、上野さん。先程から、一人で嘆いている上野さんを眺めながら幸せそう。菊池さんって、何かある度に上野さんを見ているな。本当に……好きなんだろうな。

ハル君達の戦いはどうなっているのかと言うと。先程まで追い詰められていたハル君の動きが急に良くなった。無駄がなくなったって言うのかな？　ずっと眺めていたからか、私にも少しわかる。ハル君の動きのキレが良くなり、玲さんにも異変が。顔色は一つも変わらないけれど、動きにぎこちなさが表れている。焦っているみたい……。

ちょっとした隙……玲さんがハル君の鉢巻に手を伸ばす。ハル君は軽く避けるけど、今回の動きはいつもと違う。というのも、玲さん……伸ばした手で、そのままハル君の尾を引っ掴む。ハル君がキャンと叫び、玲さんがもう片方の手をハル君の鉢巻に伸ばす。マズイよ、それは！

皆が息をのむ中、ハル君が突然に消えてしまう。目を丸くする玲さん。その後ろに出現するのはハル君。瞬く間に、玲さんの鉢巻を奪い取って口を開く。

「尻尾を掴むなんて、酷いです！　痛いです！　こんな尻尾なんてなければ、もっと余裕だったのにー！」

「自分の立場と状況を理解する訓練が必要だね。はい、今日からハルには道場に通ってもらうよ。狭間道場。師匠が直々に訓練してあげるから」
「んん～」

ちょっと不満げなハル君。そんなハル君を見て見ぬ振りして、未来さんが玲さんに振り向く。

「それはそうと、ハルの勝ちでいいかな？」
「……」
「気に入らないの？　何なら、俺が一勝負してあげようか？」
「いえ、結構……。負けは負け、認めるわ。だけど、どうして消えたのか。理由を教えて」
「ハルの動きが速過ぎたんじゃない？　凄く頑張っていたから」
「……」

気に入らなさそうな玲さん。未来さんの言葉を信じていない。ちょっと気まずい空気が流れる中、菊池さんがやってくる。

「玲、下がりなさい」
「お嬢様……」と玲さん。
「未来と言ったわね。あなたが手を出したのね。あなたがいる時に、こういう事が多々起きているから。しらを切ってもバレバレよ」
「手は出していないよ。ただちょっと超能力が使えてね。今回は能力が暴走しちゃったみたい。たまに制御できないんだよ。困った能力だよね」
「……フフッ。まぁ、いいわ。この借りは赤組が勝利した際に、上野に返してもらうから」
「そりゃあ、ありがたいや。じゃあ、後は上野君に任せるよ。聞こえた、上野君？」

未来さんが上野さんに目を向けると、上野さんは子どもに戻ったハル君を抱きしめながら頭をなでなでしている。話なんて聞いていないみたい。ハル君が上野さんに言う。

「パパー、オメメが見えないの～」
「可哀そうにね。よしよし」
「真っ暗なの～、怖いの～」
「未来の奴、酷いよね～。早く治してもらわないとね～」
「あーん、パパー」
「よしよしよし。良い子だから泣かないで。もう少しの我慢だよ～」
「おい、クソ親子。バカな事してないで、さっさとそこをどけよ」

未来さんの冷血な言葉。ハル君が泣き出し、上野さんが未来さんを睨む。なぜか未来さんが悪者みたいな展開に……。ギャーギャーと言い争いをした後に、何とか次の競技に入る。

だけど、おかげで白組に三十点入ったから……。勝てる見込みがでてきたかも。もう少し……もう少し頑張れば、きっと赤組を追いぬけるよ。

運動会〈その4〉

壮大なミニゲームが終わり、白組にも希望の光が見えてきた。このミニゲームを機に、白組の大逆転が繰り広げられる。流れに乗った白組が徐々に赤組を追いあげて行く。

白組の調子が良くなれば、上野のご機嫌も良くなる。上野のご機嫌が良くなれば、お嬢様がご機嫌斜めだ。皆で楽しくというわけにはいかないらしい。

いくぶん時間が経過して、ラストスパートに入る。最後の試合は紅白対抗リレー。三年生、二年生と続いて、一年生の番になる。今の得点はギリギリだ。一年生の競技が始まり、他のクラスが競技を進めて行く。終わったクラスは安堵の笑みだ。赤組も白組も責任逃れしたような顔で別クラスの戦いに目を向ける。

そしてどうしてか、こういう時に限って、自分のクラスがラストを飾る事に。最後って、嫌だなぁ～。ただの運動会ならいいんだけど、今回は賞品の規模が大きいから。負けたら何か言われそうで、すげー気が重い。

俺が嫌な気分でいると、女子の部がスタートする。男子の部はその後だ、まずは女子から。白組が2チームと赤組が2チームの勝負。松元が言うには、ここで最低でも白組のどちらかのチームが一位を確保しなければ、ちょいキツイらしい。

だけど、俺のクラスのアンカーは恵梨だ。あいつがアンカーを務めるのなら、酷い差をつけられない限り。一位を取れるような気がする。これは余裕だな。そう思っていたら、想像もせぬ事態が訪れ

る。

次がアンカーの番という時。赤組が一位と四位、白組が二位と三位をキープしている状況。赤組のアンカーに近づくのはお嬢様だ。何やら話をしているかと思えば、アンカー用のタスキを受け取っている。まさか……。

俺の予想通り、お嬢様が肩にタスキを掛けて。アンカーの位置につく。お嬢様が走るつもりか……。しかも、現在一位の赤組として。これはヤバいな。お嬢様はあれでも運動神経がかなりいいから、恵梨ですら敵うかどうか。

お嬢様の動きに対して、上野が不満げに口を開く。

「ズルイし！　何なの、あれ！？」

「別にズルじゃないでしょ？　本来は生徒の一人なんだから出場して当たり前だよ」

答えるのは未来。まぁ、確かに一理ありだ。理論無視の上野が騒ぎ出す。

「ズルイよ、ズルイ！　あいつは出場しないって、言っていたのに！」

「それは白組として、って意味じゃないの？　赤組で出るのなら、別にいいじゃん。っていうか、それを言いだしたら。俺が出場するほうがアウトじゃない？」

「うっ……」

言葉に詰まる上野。今度は未来に八つ当たり開始だ。

「何なの、未来は？　本当に味方なの？　何でわざわざいらない事をいうのさ？」
「俺は味方でも敵でもないよ。中立者。さっきは面白そうだから、参加したの。こういう勝負はバランスがとれてこそ燃えるからね。勝利の可能性を必死になって追い求める生徒達を見たかっただけ」
「ズルイ奴。それなら、未来が勝利の可能性を追い求めてよ。未来は頭が良いから、何か思いつくでしょ？」
「せっかく敗者復活戦を与えてあげたのに、そんな事を言うの？　それなら、ハルのバトルをなかった事にしてもらおうか？　するとどうだろう、白組は完敗だね」
「うっ……それは……」

上野が静かになる。不意に未来が恵梨達を指差す。

「ほら、最後の決戦になるかもよ。上手くいけば、続編あるし。下手をすれば、終わりだね」
「ガンバレ、恵梨！　勝って！　一位になって！　ガンバレー！　ガンバレ、恵梨！」

上野が大声で恵梨を応援する。だけど、一位はお嬢様。しかも、すげー速い！　恵梨はやっと今、バトンを受け取った所。逆転なんてできるのか？　とにかく俺達は応援するしかない。俺も声を振り絞って、応援だ。

お嬢様と恵梨、比べて見れば微かに恵梨の方が速い。しかし、差が大きすぎる。相手が少し速いくらいの奴なら恵梨が追い抜くだろうけど。お嬢様はかなり速い。追いつくことすら危ういくらい。

アンカーは二周走るために、追い越せる可能性はあるにはあるが……。一週目が終わるころ、お嬢様と恵梨の差はそれなりに縮まっ

ていた。しかし、このまま行くとお嬢様が勝ちそうだ。不意に上野が騒ぎ出す。

「くそっ！　こうなったら、奥の手だ！」

「何するの？」

問いかける未来に答えず、上野が大声でビックリ発言だ。

「お嬢様、愛してるー！　大好きだから、こっち見てー！」

マジでー！？　って、そんなわけがなかろうに。上野の言葉を聞いたお嬢様が思わずこちらに振り替える。お嬢様のスピードが落ちた。それに対して、恵梨がハイスピードでお嬢様を追い掛ける。かなり嬉しげなお嬢様に向いて、上野が鼻で笑いだす。

「ばっかじゃん！　そんなわけないだろ！？　死ねよ、バーカ！　恵梨―！　ガンバレー！」

「ある意味最高で、ある意味最低だね」

未来が言って、周りの人々が小さく頷く。確かに……俺も思わず頷いてしまいそうだ。上野の言葉を聞いて、お嬢様が凄く不満そう。ちょっと泣きそうな顔をしながら、顔を前に向ける。その頃には、恵梨はお嬢様の真横だ。そのまま恵梨が追い抜いて、何とか白組が一位になった。

こうして、女子の試合結果が出る。赤組が二位と四位、白組が一位と三位だ。悪くはない結果。後は俺達男子のチームが『一位と二位』の組み合わせか『一位と三位』の組み合わせを取れば、白組の優勝だ。四位を取った時点で、アウトになるが。これくらいなら、頑張れば赤組に勝てるような気がする。

上野を睨むお嬢様、お嬢様を嘲る上野。勝者は一体、誰の手に？

未来が欠伸をしながら、話し出す。

「平和で良いね。本当にのどかだな、ここは」

運動会〈その5〉

そして、最後の戦いだ。えらく緊張の高まる中、一年生の競技…紅白対抗リレー男子の部が開始される。うわぁ～、マジで気が重い。

来るなと願い続けても、確実に逃げ切れない自分のターン。次だ、次。マジで、次？　こういう時って、運動が得意な奴が腹立たしい。何で人間には得手不得手が存在するんだよ？　いらねーよ、そんなもん。

文句をタラタラ言っていたら、バトンが回ってきた。後は頭を真っ白にして、走るだけだ。走れ、走れ、走りながら、ふと思う。これで白組が勝つ事ができたら、『ラストベクテル？』が貰えるのか。うおー！　ヤル気出てきた！

ヤル気が出たからといって、これ以上速くなるわけもなく。同じような速度で走り続ける。たくさんの歓声が聞こえる中、とりあえずゴール。何の事件も起こることなく、普通にゴールできた。こういうのが一番いい。俺の存在なんて、誰の印象にも残らずに、掻き消えてくれ。

緊張する松元達に頑張れと声を掛けて、俺は終わった組の列に並ぶ。フゥー、やれることはしたつもりだ。これで文句なんて言われたら、マジ切れするからな。精神的に疲れ切った俺が残りの走者を眺めていたら、誰かに声を掛けられる。振りかえると、そこには上野だ。

「お疲れ様、斎藤君」

「あ、はい。お疲れ様です」
「今は……白組が一位、三位か。この調子で行けば、赤組に勝てそうだね」
「そうッスね」

頷く俺。一位の白組に目を向けると、二位の赤組との差がかなりある。これは余裕だな。俺と上野が喋っていたら、近づいてくるのはお嬢様。毎度の如く、上野とお嬢様の睨み合いが始まる。

上野とお嬢様がどす黒いオーラを醸し出していたら、松元が俺の所へやってくる。俺のクラスのアンカーはリョウだ。その前が松元。俺達のクラスは現在三位らしい。松元は走り終わったようで、溌剌とした笑顔を俺に向けてきた。

「お疲れ！」
「お疲れ、どうだった？」
「一位のクラス、滅茶苦茶速いよな。俺、頑張ったけど。二位の奴を追いぬく所まではいかなかったし。まぁ、だいぶ追いついたけど。もしかしたら、リョウさんが追い抜いてくれて。白組の圧勝になるかもしれないな」
「お～、いいじゃん。後はリョウに任せるっきゃないな」
「まぁ、リョウさんは速いから問題ないだろ？」

確かに、リョウは速いから。四位になる事はまずないだろう。そんな話をしているうちに、ゴールの音が聞こえてくる。顔を向けると、一位が白組、二位が赤組。それを見て、上野がテンション高くお嬢様に向く。

「ほら、白組の勝ちだよ！　約束通り、二度とその面見せないでよね。僕の家に近づくのもなし、もちろん不法侵入なんて止めてよ。

他にも、僕に触れないで、話しかけないで。っていうか、僕の半径一メートル以内に入らないで」

「そ、そんなの……」

今にも泣きそうなお嬢様。いつものようなツンッとした冷血さがない。おどおどと慌てふためきながら、目に涙を溜めている。普通の奴なら、こんなお嬢様を見た瞬間、むしろこっちからアプローチするだろう。上野みたいな奴はそうはいない。

上野がお嬢様に罵声を浴びせていたら、俺の視界に飛んでもな光景が入ってくる。残る白組の三位と赤組の四位……。かなり離れていた2チーム間の距離。凄い勢いで縮まって行く。っていうか……。おい、リョウ！　お前、何してるんだよ!?

横を向くと、松元も騒いでいた。もちろん、俺も騒ぎだす。リョウの耳には入っていない。地面にしゃがみ込みながら一人でブツブツ呟いている。そうこうしているうちに、四位の赤組がリョウを追い越し、ゴールへとまっしぐら。

赤組がゴールした頃に、上野が周りの異変に気づく。状況無理解、唖然とする上野の耳に入ってくるのは赤組が三位という情報。そして、リョウが立ち上がりやっとのことで帰ってくる。リョウに向かって、皆でブーイングの嵐だ。だけど、上野は未だに理解しちゃいない。そして、リョウが真顔で言う。

「ホンマに悪い事したと思うわ。でも、わい……靴紐が解けてたら走られへんねん。まさか、走っている途中で靴紐が解けるなんて……。もっと初めにしっかり結んどくべきやったわ～」

「裸足でもいいから、走れよ！」と俺。

「あー！　その手があったなぁー！　サイちゃん、ナイスアイデア

や。今度はそれで行こう」
「もうおせーよ！　勝負なんて終わっちまったよ！」

不意に流れる放送は総合得点の発表。赤組の勝利が確信に変わる。やっとのことで理解した上野の顔色は真っ青だ。世界が崩壊したような顔をしている。俺もかなり残念だが、上野の場合はそういう領域を超えているのだろう。ほぼ硬直状態だ。上野に代わって、喜び出すのはお嬢様。上野の腕にベッタリ抱きついて、上野を見上げる。

「赤組の勝ちよ。約束は守ってもらうわ」
「い……いや……。ちょっと……待って……」片言で話す上野。
「待たないわ。約束したもの。今日から一週間、上野は私の言いなりよ。さっきは色々と言ってくれたわね。今度は私が教えてあげる。そうね、上野とはたくさんしたい事があるの。お話したり、お食事したり……。だけど、一週間は短いわ。それなら、初めに一番大切な事から始めなきゃいけないわね」
「……」
「私……初めてだから、優しくしてね」

お嬢様の一言で、上野がお嬢様を突き放す。そのまま走って逃亡しようとするが、不意に未来が現れて、上野をひっとらえる。

それにしても、お嬢様の言葉……そのままとらえれば禁断の話にならないか？　え？　それっていいの？　というか、何で上野なんだよ？　普通こういうのは同じクラスの誰か、って決まってるだろ？　このノリなら、俺とかあり得そうじゃね？　本当に何で上野なんだよ？　って思っている男子はかなり多いと思う。

上野が半狂乱になりながら、未来から逃げようとする。しかし、逃げる事ができないようだ。未来がどこからともなく取り出したハ

ンカチで上野の鼻を塞ぎ、上野がそのまま気を失ってしまう。睡眠薬でも仕込まれていたのか？

地面に崩れ落ちる上野を眺めながら、未来が言う。

「約束は守らないとね。自己責任だよ」

未来が顔を上げて、お嬢様に目を向ける。

「それはそうと、本当にこんなのが欲しいの？　いくらなんでも趣味悪いと思うけど。もっと他にいいのがいるじゃない。君ならいくらでもいいお相手が見つかるのに、もったいないよ」

「上野がいいわ。上野が一番よ」嬉しそうなお嬢様。

「……わっからないな。引きこもりで、ドジで、根暗で、文句だけは人一倍多くて。こんなに君の事を嫌うニャンコのどこがいいの？」

「そんなことないわ。上野は凄く優しいもの」

「ふーん、幸せ者だね。もうさっさと日和ちゃんを諦めて、この子にチェンジしたらいいのに。聞こえてる？　上野君？」

未来が上野を軽く蹴りながら問いかける。もちろん、上野には聞こえちゃいない。スヤスヤと一人でお眠りしている。

一週間後に……〈その1〉（前書き）

ハルはやっぱり最高キャラです。
案外に元気な上野君、ちょっと心魅かれるキャラを発見しました。
もちろん、半端なくやかります。
基本的に上野君は常識ないので（笑）。

一週間後に……〈その1〉

その日からの約一週間。お嬢様のご機嫌は最高潮だった。一度は学校をお休みされたが、どうせ上野関連の話だろう。お嬢様の上野に対する依存度はヤバい。

それにしても、本当に人間って恋で変わるものなんだな。というのも、上野を手に入れてからのお嬢様はいつものようにツンツンしていなくて。常に笑顔を絶やさないリア充になっていた。

笑顔のお嬢様には近づきやすい。興味を持った女子生徒達がお嬢様に話しかける。普段のお嬢様なら返事なんて返さないのだが、リア充なお嬢様は別だ。何でもかんでもペラペラペラペラとよく喋る。こんなキャラだったっけ？　と疑問を感じるくらいだ。

そんなお嬢様に上野の話なんてしてみろ。授業が始まっても話が止まらない。寝顔が可愛いだの、食事を食べさせたら恥ずかしがるだの。くだらない事まで事細かに説明しだす。

あまりにもお嬢様が楽しそうなので、どこかの誰かが冗談を言い始め。『上野さんとどこまで何したの？』なんて聞いたら、お嬢様は顔を真っ赤にして。はにかみながら、『全部』だ。

笑っていいのかどうなのか？　このお嬢様なら、何をしても不思議じゃない。そこから始まる話は女子お得意のヒソヒソ話。何をしたのか具体的に聴いているのだろう。後で梨香に聞いてみたら、『信也には言えないよ。凄く刺激が強いから』と言われてしまう。いや、気になるじゃんか！　何で女子だけでひた隠しにしようとするんだよ？

という日々が続くのかと思った矢先に、お嬢様のテンションがガク落ちだ。どうしたのか……説明せずともわかるだろう。上野が逃げたらしい。元気のないお嬢様は、ぼうっと一人で呆けている。話しかけても反応が遅く、かと言って以前のような冷血さにも欠ける。だから、却って不気味に見える。

落ち込むお嬢様を元気づけようとする梨香。その隣では、上野失踪の件をあまり気にしていないリョウ。お嬢様に音楽が得意な人物が他にいないか質問している。もちろん、上野は既にグループに入っていると仮定した話だ。なんて気の早い話なのか……。

それから数日後の話。教卓の前に立つ人物を先生が紹介している。いや……どこからどうみても、あいつにしか見えないのだが……。しかし、獣耳や尾はないし、高校生の姿で普通に制服を着ている。人違い……にしては似過ぎだろ？　転校生が自己紹介……黒板に名前を書いて口を開く。

「初めまして、今日からこのクラスの一員になります。青木……いえ、上野陽（うえのはる）です。どうぞ仲良くしてください。よろしくお願いします」

「やっぱハルだよな！！？　ってか、お前……犬耳は！！？」と俺。

「え？　犬耳？　何の話ですか？　僕はそんなにオタクじゃありませんけど」

キョトンと目を丸くするハル……というか、陽？　いや、同一人物だと思うんだけど……。俺が眉をしかめていたら、リョウが陽に手を上げる。

「この間はすまんなぁ～。進ちゃん、元気にしとる？」
「はい、元気ですよ。少し拗ねていましたけど、今は立ち直っています」
「やっぱハルじゃん！」と俺。
「はい、陽ですよ。だから、先程も名乗りましたけど」
「じゃなくて、この間まで犬耳を付けてたハルだろ？」
「そういえばそんな物を付けていた時期もありましたね。ですけど、学校に来るのに犬耳なんて不謹慎ですので。何とか魔術の本を読み漁って外してきました。まぁ、お父さんのネコ耳は外れませんでしたけど。あれは強固だな。未来さんにでも頼まないと無理ですね」

ハルが言い終わると同時に、お嬢様の声が聞こえてくる。

「上野は？　上野はどこにいるの？」
「お父さんですか？　お父さんなら……廊下にいますよ。黒スーツでサングラスを掛けた、凄く背の高い人を見ながら目を輝かしています。あれって、菊池さんの護衛の方ですよね？」
「あぁ、黒松ね。今日は玲がいないから、黒松が代わりなのよ……」
「そうですか。それなら助けてあげてくれませんか？　お父さん、滅茶苦茶なくらい黒松さんの邪魔をしまくっているので。僕が言っても聞いてくれないのですよ。このままじゃあ、黒松さんがノイローゼになるかもしれませんし」
「そう……よくわからないけど、とにかく上野に会えるのね？」

そう言って、お嬢様が立ち上がり廊下へと向かっていく。気になる俺達は先生も含んで廊下に顔を覗かせる。少し離れに上野を発見だ。ハルと違い、未だにネコ耳を付けている。その前には長身で体格の良い人物、こいつが黒松だろう。上野が黒松を見上げながら、何かを話している。

上野の元へ歩いて行くお嬢様。俺達も後に続く。近づくにつれて、聞こえてくる上野の声。

「コーヒーはブラック派？　それともミルク入れる人？」
「……」反応しない黒松。
「動物は好き？　猫と犬どっちが好き？」
「……」
「ねぇ、こんな所で何してるの？　誰かと待ち合わせ？」
「……」
「あ、そうだ。菓子パン買ったんだけど、食べる？」
「……」
「えーっと、リチャードが好きそうなのは……。あ、これ」
「……」
「はい、メロンパン！」
「……」

上野が黒松にメロンパンを押し付ける。黒松はご遠慮モードだ。手を振って、上野のメロンパンを拒否する。それを見て、上野が残念そうに呟く。

「えー、美味しいのにー。一口くらい食べたら？　別に毒なんて入ってないよ」
「上野……何してるの？」

お嬢様が上野に話しかけ、上野が振り返る。お嬢様が視界に入った途端に不愉快そうな顔をする上野。メロンパンを食べながら、不満げに話し出す。

「何だ、ちび助か。何か用？」

「……。上野は……黒松と知り合いなの？」
「黒松？」
「あなたが話そうとしている相手よ。まぁ、基本的に護衛は他人と話す事を禁じられているから話なんてしないでしょうけど」
「へ？　そうなの？」
「外界との接触はなるべく控えるように訓練されているわ。裏切りやワイロを避けるためね。まぁ、玲は別だけど……」
「ふーん。だから、リチャードは喋らないのか」
「リチャード？」
「うん？　あぁ……。『ディザイクロン』ってゲームなんだけど。大昔に凄く流行ってね。銃火器を使って、敵を倒していくの。僕は幼かったし、友達の家で数回プレイさせてもらっただけだから、ストーリーは忘れちゃったけど。そのゲームの主人公がリチャード・ネイソンって言って、彼に凄く似ているの」

楽しげに話す上野。一人でニコニコしながら、話を続ける。

「幼い頃の僕にしてみれば、ヒーローみたいなものだよ。いつかリチャードみたいになりたいなって思っていたんだ。まぁ、あの頃の僕は身長も低くて華奢（きゃしゃ）だったから。無理だろう、って期待はしていなかったけどね。そう考えれば、僕……思った以上に、身長伸びたんだね。リチャード程はないけど、それなりに高いよね……」

上野が黒松を見上げながら、パンをくわえる。しばらくして、黒松に言う。

「ねぇ、漫画は読む人？　ゲームとかする？」
「……」

黙る黒松。お嬢様に視線を向けて、ＳＯＳ信号だ。お嬢様が口を

開く。

「答えなさい。黒松」

「いえ……昔は手を付けていた時期もありますが。今はまったく……」

「喋った！　リチャードが喋った！」

黒松の一言で上野に火が付いた。そこから始まる上野トーク。黒松がノイローゼ気味にお嬢様に目を向ける。それに気づいたお嬢様が黒松に笑顔を向ける。

「いいわ、黒松。上野の相手をしてあげて。ただし、教室の中でよ」

一週間後に……〈その2〉

授業中、教室の後ろ。床にビニールシートを敷いて、その上に座るのは上野と黒松。
なぜか二人でオセロをしている。ハルは普通に勉強中だ。一番後ろの席、リョウの隣にいるのだが、制服を着ているとまったく違和感がない。もうまるでクラスに溶け込んでいる。

上野がオセロをしながら、口を開く。

「リチャードは日頃から何してるの？」
「お嬢様の護衛、及びお屋敷の巡廻。護衛の指導などを行っています」
「へー、何だか大変そう」
「いえ、それほどでも……」
「護衛の指導って、何するの？」
「お嬢様を警護する時の対応や。何者かに襲われた時に対抗できるよう、訓練を指導します」
「へー。じゃあ、リチャードは……スポーツとか得意なの？」
「柔道と剣道を少々……。後は狙撃など……」
「銃？　本物？」
「はい」
「うわー、凄い。やっぱりお金持ちの護衛は何でもできるんだね。じゃあさぁ、玲とどっちが強いの？」
「玲様には手も足も……」
「黒松は玲の一番弟子よ。だけど、まぁ……玲には勝った記録はないわね」

お嬢様が口を出す。黒松が頷き、上野がオセロを手に取る。石を

置いて、話を続ける。

「確かに、玲は人間離れしているものね。何であんなに凄いんだろう？　ハルはどう思う？」

「今は忙しいから、後にして……」

そっけなく返事を返すハル。授業に集中したいらしい。こいつ…玲並に凄い上に勉強家だったなんて。こいつこそ人間離れしてないか？　と俺は思うのだけど。上野がハルに目を向けて、続いてリチャ……じゃなくて、黒松に声を掛ける。

「真面目君だね。僕はあんなに熱心に勉強なんてした覚えないよ。授業中なんていつも居眠りしていたのに。何であんなに真面目なんだろ？」

「良い事だと思われますが……」

「リチャードは勉強できる人？」

「いえ、若い頃はまったく……。玲様に出会って以来、少々手を付けるようになりました」

「えらいなぁ～。僕なんて今も昔も勉強は苦手。昔はバイトの嵐だったし、今はそんな事をする必要もないから。おかげでバカ扱いされるの。ねぇ……リチャード」

「はい。何か？」

「この石……白にしたい」

「ゲームのルール上は不可能ですが。好きになさってください」

「やったー！　じゃあ、ここは白ね」

「……」

上野がルール破りを始める。要するに、それくらいしないと負けてしまうくらいにボロ負けしているようだ。更に石を並べようとする上野を眺めながら、黒松が言う。

「上野様……次は私の番ですが」
「いいの。僕の番なの」
「……そうですか」
「じゃあ、ここ。こうしたら、ほら真っ白」
「では、私はこちらで」
「……ちょっと待って。一手戻してもいい？」
「お好きにどうぞ」
「うーん……」

上野が思考したところで、負けるものは負けるらしい。最後に聞こえてくるのは上野の呻き声。

「勝てない……。負けちゃった……」
「失礼いたしました」と黒松。
「まぁ、いいや。リチャードはやっぱり強いね。伝説のスナイパーだものね」
「いえ……それはゲームであり。私とは無関係で……」
「次はトランプしよう。トランプ」

上野の奴、黒松の話を聞いちゃいない。勝手に一人で暴走している。トランプを用意して、黒松に手渡す。

「何する？　ババ抜き？」
「上野様のご希望通りにいたします」
「うーん……二人でトランプも寂しいね。ちょっと待ってて……」

上野が言って、教室から出て行く。しばらく経過して、起きる事態は予想外の事。まさかのまさか……上野に引っ張られて、連れてこられるのは恵梨の姿。あわー！？　仰天する俺と梨香。松元は唖

然としており、リョウとお嬢様は気にしていない。ハルは……勉強に熱心だ。

教室中の空気が固まる中、上野が黒松に話し出す。

「これで三人。人が多ければ、ゲームも楽しくなるよね」

一週間後に……〈その3〉

授業が終わり休み時間。恵梨と梨香に押し寄せるのは生徒の群れ。必死に言い訳を考える梨香の後ろでは、恵梨が小さく縮こまっている。先生まで介入してきて、流石に嘘も付けなくなり。真実を話す事に。もちろん、誰もが疑わしげに二人を見比べる。

疑惑の目が漂う教室。恵梨達へ向けられる視線が冷たい。俺も話に入って、二人を援護するべきなのだろうか？　しかし、俺が乱入したところで何かが進展するとは思えねーしな。

これからどうなるのか？　ヒヤヒヤしていたら、上野が二人の元へ歩いて行く。二人に集る野次馬達に向いて話し出す。

「別にいいじゃない。たかが人が二人に分かれただけで、大騒ぎしすぎだよ。最近では、空を飛ぶ人や瞬間移動する人がいるんだよ。分身する人が現れたって、不思議じゃないでしょ？　それに、行方不明になったわけじゃなくて。その逆だから、困る話でもないよ」

そりゃまぁそうだけど……。それにしても冷静だ。心から信じているのか、又はその真逆か。中途半端な気持ちは持ち合わせていないらしい。上野の落ち着きぶりに感心したのか、松元が上野に問いかける。

「上野さんはこの話を信じてくれるんですか？」
「うん、信じるよ。当たり前じゃん」
「でも、ちょっと……現実離れしていません？」
「君は信じないの？」
「いや、俺は信じてますけど……」

「じゃあ、いいじゃん。それに信じる信じないは個人の自由だし」
「いや、まぁ……そうですけど」

皆がワイワイ騒いでいたら、いつの間にやら授業時間。次の授業が始まって、上野達は教室の後ろでゲームを始める。上野と黒松に恵梨を含んだ三人でお喋りしながらゲームだ。というか、上野……お前はここへ何をしに来たんだ？　俺の心を読み取ったように、恵梨が上野に話しかける。

「あの……上野さんは……学校へ何をしに……？」
「フフッ、ちょっとした整理整頓。気にしなくてもいいよ。用が終われればすぐに帰るから。ただ……今日になるか、明日になるか。日がわからないんだよね。もしかしたら、一週間くらい掛るかも」
「整理整頓ですか……？　それって、もしかして……」

おどおどと戸惑う恵梨。上野が楽しげに話を続ける。

「恵梨は勘がいいね。大丈夫だよ、安心して。無茶な事はしないから。大概は夜中に起きるし。昼間ってことはあまりないと思うけど……。ただ、太陽が陰ると良くないな。まぁ、晴天でも力が強い時は無理。もちろん、雨は論外だよ。雨になると、今のこの空気じゃあ間違いないね」
「あの……それって、危険な事は……」
「うん、超危険。僕、今にも逃げ出したい気分。だけど、未来に怒られちゃったから。何とかしないと。『ここは空気が悪すぎる』って。『息ができない』って、凄く言われたの。普段ならこんな事ないんだけど。最近は荒れているから……」
「えっと……私は何かお手伝いできる事は……」
「皆から離れないで。なるべく一つの場所に集まって。僕にはそれほど力がないから、知り合いを守るだけでも精一杯だよ。雫にはハ

ルの作ったお守りを持たせたし。他の人は……ごめんなさい」
「えぇ!?　他の人は無理なの!!?　でも、じゃあ……学校を休校に」
「そんなの無理だよ。僕の一人意見じゃあ、何にもならないね。それに……今は丁度ここに集中しているんだ。人の生活が変われば、歪みも変わってしまうから。このまま……静かに時を待つのがベスト。散ってしまうと、またどこか僕の知らないところで起きてしまう。そうなると厄介。できる限り、僕の目が届く範囲で起きるほうがいいんだよ。対処できる人が僕しかいないもの」
「何だか……凄い事になりましたね」
「うん、本当……。嫌だよね。運動会では賭けに負けて、ちび助には好き放題されて。その後に狭間の歪みでしょ?　もう呪われているとしか言いようがないよね。あー、本当に嫌んなっちゃう」

上野が言い終わり、しばらくの沈黙。不意に黒松が話し出す。

「あがりです」
「早!　リチャード早過ぎ!」と上野。
「あ、私も……あがり」恵梨が言う。
「えー!?　恵梨まで!?　じゃあ、僕の負けじゃん……」

上野がしょげて、ため息をつく。そんな上野に黒松が話しかける。

「ところで、上野様……。先程の話をお伺いする限り、まるでテロでも起きるような口ぶりでしたが……」
「テロか……。うーん、ちょっと違うけど。似たようなものかな?」
「お嬢様の護衛として、お嬢様を危険に巻き込むわけにはいきません。それが真実であるなら、私達はしばらくここへ立ち寄らないよう行動したいのですが」
「うん、それがいいと思うよ。安全の保証なんてないし。僕はちび

助の顔なんて見たくないから」
「嫌よ！　私はここへ来るわ！　上野が来るのなら、私も来るわ！」
騒ぎだすのはお嬢様。ちゃっかり話を聞いていたようだ。そういう俺もちゃっかりしているのだが……。何か言いたげな黒松であるが、お嬢様には逆らえないらしい。黙り込む黒松の隣で上野が話し出す。
「しつこい奴。お嬢様はお嬢様らしく、お金持ちの学校へ行けばいいんだよ。何でこんな一般学校に来るのかなぁ～？」
「別にいいじゃない」
「良くないし、ウザいし。ちび助のせいで僕の精神ズタボロだよ。寿命が十年は縮まったよ」
「何？　文句あるの？」
「文句ある！　例のビデオ……全部処分しただろうね!?」
「そんなもったいない事……するわけないじゃない」
「消せよ、消せ！　あのビデオは処分しろ！」
「いいわ。ただし、上野が毎日……私の家に寄ってくれるのならだけど……」
「そんなことしたら、更にビデオが増えるじゃないか……。僕を舐めるのもいい加減にしろよ」
「嫌よ。だって、上野……美味しいし」
「ちがっ!!?　もう知らない！　話しかけないで！」
上野が恥ずかし気に怒鳴って、そっぽを向く。

一週間後に……〈その４〉（前書き）

この人達には羞恥心の欠片もないのか？
じっくりと考えなくても、周りに人が多いです。
何せ教室内の授業中。

一週間後に……〈その4〉

じりじりと過ぎる時間。不意に立ち上がるのはリョウの奴。欠伸をしながら、上野達の所へ移動する。

「もう、わいには無理やわ。いくら勉強を頑張っても頭に入らんねん」

「こっちに来るなよ。疫病神」と上野。

「そんなこと言わんといてや、進ちゃん」

「お前のせいで、僕の人生は無茶苦茶だよ。ちび助に何されたかわかってるの？」

「何されたん？」

「……『ｗｏｒｌｄ（ワールド）　Ｌａｂｙｒｉｎｔｈ（ラビリンス）』のミサカ編みたいな？」

上野がぼそりと呟いた言葉。それを聞いて、リョウが大声を出す。

「それホンマかいな!!？　ドエロいな!!　進ちゃん、お嬢様にそんな事されたん!!？」

「うわぁあああ!!？　話が通じた!!？　お前……あのゲームした事あるの？」

「あるある。あれ、結構好きやで。ええ話やん。ちょいエロさヤバいけど……」

「まさか話が通じるなんて……」

「わい的には、ミサカちゃん編が一番好きやよ」

「僕はエレン編が好き」

「進ちゃんって、えらい大人しい子が好きやねんな。エレンちゃん編って、エロシーンなかったんちゃう？　いや、一回だけあったかな？」

「リョウは肉食派が好きなんだね……。ミサカって、かなり常識外

れてなかった？」
「あんなんされたら、堪らんやろうね。わい持ってかれるかもしれん」

そこから盛り上がる二人の会話。それにしても、『ｗｏｒｌｄ Ｌａｂｙｒｉｎｔｈ』……悪いが俺も知っている。かなり有名なエロゲーだ。

主人公が元カノに会いに行き。その後、家に帰るのだが。車で走行中、大雨の中。とある山で迷子になり、見つけたのは立派なお屋敷だ。そこで雨が止むまで泊めてもらうことになる。その屋敷に住んでいるのは、五つ子の姉妹。なかなか止まない雨の中、主人公が姉妹達と生活していくのだが。まぁ、基本的に主人公が洗脳されていく系の話だ。

乱入してくるリョウを止めもせずに、上野が話を続ける。

「だけど、あのストーリー。ちょっと不気味だよね。特に途中で『逃げる』を選択した時」
「わいは『逃げる』を選んだ事はないな。どうなるん？」
「ミサカ編だったら、激情したミサカに主人公が殺されてエンド。エレン編は何もなかったかな？　後で主人公の家に手紙が届いて、主人公がちょっと後悔してエンド。でも、主人公いわく住所とか教えてなかったらしいけど。何か気味が悪いよね。後、怖いのがカナデ編。主人公が家に帰ったらなぜかカナデが家にいるの。しかも、超笑顔で。それで、カナデが夕食を作ったとか言って。主人公がキッチンへ向かうと……。あ、やった！　僕、あがり！」
「ちょっと、どうなるん！？　進ちゃん、トランプはええから、続きを教えてや」
「え？　何の話してたっけ？」

「冗談止めてや、進ちゃん。カナデちゃん編やで、カナデちゃん編。カナデちゃんが夕食を作ってくれて、どうなったん!?」
「えーっと……具体的な表現はなかったけど。多分ね、主人公の元カノがカナデに殺されてるんだよね。しかも、カナデの作った夕食が、元カノみたいな?」
「カナデちゃん、ブラックやな……」
「あの話を見た時はゾッとしたな……。何か……あいつが背後に立っていそうで……」
「カナデちゃんが背後に立ってたら、流石に怖いで」
「いや、そうじゃないけど……」

急に静かになる上野。数テンポ置いてから、リョウが話し出す。

「そういえば、アヤネちゃん編って、なかったね。何でやろ? ネタ尽きたんかな?」
「……」
「どうしたん? 進ちゃん?」
「え? あぁ……えーっと、アヤネ編? 確か、あったよ」
「え!? あったん!?」
「隠しモードだけどね。凄く残念な事になるけど、聞きたいなら話すよ」
「話して、気になるし」
「アヤネね……」

アヤネ編……気になる。俺も知らない。存在したのか、アヤネ編。俺的には、好きなキャラだったから。かなり探したのだが、見つからなかった。攻略本を買う程でもなかったしな……。上野が気になる続きを話し出す。

「実は男だったの」

「えぇー！！？　そうやったん！！？」

マジでー！！？　あの可愛いキャラがマジかよ！！？　仰天する俺とリョウの耳に入るのは、残念なお話だ。

「アヤネ編に突入してから、男だって事がわかるんだけど。その時には、時既に遅しで、選択肢もなし。一方通行だよ。アヤネがもうノリノリになっちゃってね。主人公がアヤネにされちゃって、エンド。『逃げる』の選択肢なんてなかったし」

「そらぁ、残念やわ。男として残念やわ。でも、アヤネちゃんも可愛かったからな。むしろ、ありかも」

「リョウって、両方いける人？　僕なら絶対にお断りだね」

たった一つのエロゲーでどれだけ盛り上がるのか？　ワイワイと騒ぐ上野とリョウ。お前らには羞恥心って物がないのか？　とか言う俺も、授業を受ける振りをしながら耳は二人の会話に向ける。

一週間後に……〈その5〉

昼休憩に入り、昼食だ。上野達が食堂に行くと言いだしたら、なぜか皆でこぞって食堂に行く事に。ぞろぞろと食堂へ移動。席を確保し、列に並んで、注文をする。お弁当持ち……梨香やお嬢様は場所取りだ。

ちなみに、黒松はお嬢様から少し離れた所で待機。空いた席に座って、お嬢様を見守っている。が、下手したら逆に怪しい。そう思うのは俺だけじゃないよな？　食事はしないらしいから、新聞を読んでいるのだが。時折、お嬢様の様子も窺っている。これが玲なら何も思わないが、身長の高い黒松は妙に存在感がある。

それにしても、お嬢様と一緒に食事なんて……これ夢じゃないのか？　すげードキドキするんだけど。何せお嬢様はいつも一人で食べているし。こんな奇跡的な行動は、上野がいないと起こり得ない。

俺がメニューを選んでいると、急に上野が話しかけてくる。

「何にするの？」
「えーっと……カツ丼定食」
「ねぇ、ここって麺類ある？」
「あるある。ほら、この辺りのメニュー」
「わー、本当だ。ありがとう。じゃあ、僕は……醤油ラーメンにしようかな」
「麺類……好きなんッスか？」
「うん、大好き。特にラーメンが。君は？」
「まぁ、好きだけど。ソバは苦手かな？」
「えー、美味しいのに。ザルソバとかいいじゃない。熱くないし、

食べやすいし、美味しいし」
「あー、ザルソバはまぁ……。でも、暖かいソバとかはちょっと……」

俺達がくだらない話をしていたら、順番が回って来た。俺が注文をした後に、続いて上野が注文する。

「醤油ラーメン、氷入りで！」
「氷？」

思わず問い返す食堂のおばちゃん。上野の不思議な言葉に、俺まで質問してしまう。

「氷って、あの……冷たい氷の事？」
「そうそう。僕、猫舌だから。熱い物を食べられないの。冷めるのを待つ時間なんてないだろうし。氷を入れたら冷めるでしょ？」
「あぁ、成る程ね。まぁ、氷ラーメンってのもあるからね～。わかったよ、氷ね。いくつにする？」とおばちゃん。
「三つくらいかな？」
「はいよ。醤油ラーメン、氷三つ入りで！」

おばちゃんが注文を繰り返して、調理しに行く。しばらくして、おばちゃんが上野の頼んだラーメンを持ってくる。丁度そのタイミングで、ハルがやってきた。ラーメンを受け取る上野の隣で、ハルがおばちゃんに話しかける。

「注文してもいいですか？」
「はいはい、どうぞ」
「チャー特麺、チャー特、特々盛りチャーで」

何言ってるの？　こいつ？　眉をしかめる俺。上野を見ると俺と同様に理解していないらしい。茫然とした顔でハルを見ている。たった一人おばちゃんだけは除外だ。一度頷いた後、ハルに注文を繰り返す。

「特大チャーシュー麺のチャーシューを特盛りにして、更に特々盛りチャーシュー追加だね？　言っておくけど、合計でチャーシューが十六枚になるけど。本当に大丈夫かい？」

「はい、問題ありません！」

「はぁ～、その身体でそれ程に大食なのかい？　驚きだね」

「僕のお腹はブラックホールです。これでもきっと足りません。後で追加注文をしに来るので、その時はよろしくお願いします」

「その台詞は食べ終わってからがいいよ。以前に同じ注文をした学生さんが、途中でギブアップしたからね。今なら取り消しが効くけど、本当にいいのかい？」

「ノープロブレムです」

ハルが断言。チャーシューが十六枚ってヤバいだろ？　見るだけでも満足しそうだ。俺なら半分も食えやしない。気分が悪くなるだろう。ゾッとするような注文を受けて、おばちゃんが調理しに行く。怖いが怖い物見たさに、ハルの注文を待つ俺。

気が付けば上野はいなくなっていた。皆の元へと戻ったのだろう。そして、俺のカツ丼も完成し。次にやって来たハルのチャーシューだらけ麺。一目見て、俺がハルに話しかける。

「ヤバいだろ、それ？」

「チャーシューで麺が見えませんね」

「食えるのか？」

「もちろんです。これくらいオヤツにも満たないですよ」

「お前、普段からどれだけ食うの？」
「えーっと、カレーライスで例えると。十人前くらいでしょうか？　まぁ、なければ我慢しますけど」
「十人前……。それ、ヤバくない？」
「それでも足りませんよ。本当に満足しようと思うのなら、百人前くらいは食べないと。なんて言ったら、お父さんに止められました。魔力不足に陥ってから、こんな食べ癖が付いてしまって。どうしようもないですよね。お父さんにも悪いし。バイトでもしようかな？」

料理を運びながら、ハルが言う。そんなハルに、俺がどうしても気になる質問だ。

「……なぁ、一つ聞きたいんだけど。魔力って何だ？」
「魔力は魔力ですよ。ゲームとかでも出てくるじゃないですか」
「いや、そりゃわかるけど……。それはゲームの話だろ？」
「いえ、実際に魔力は存在します。生物が生きる上で魔力は欠かせませんから。どんな生物にだってあるのですよ。それは人間も同様です。ただ出力の方法がないので、見えないだけです。僕は……まぁ、人間ではないので。魔力を扱う事ができるのです。理解していただけましたか？」
「お前は人間じゃないって言うんなら、何なんだよ？」
「お札です。僕は元々……ハルトという僕の元になる人物が作ったお札なのです。見た目は瓜二つですが、魔力や体力は向こうの方が倍以上高いですし。僕はどうも言霊に弱くて。本来、ハルトは人間だったのですけど、ちょっと悪霊に取り憑かれて以来。人間を止めてしまいまして……」
「わけわかんねー」
「でしょうね。話せば長くなりますから。とにかく、僕は生物ではありません。しいて言うのなら、芸術作品ですよ。ハルトの最高傑作です」

「で、本当の話は？」
「今の話が真実ですよ」
「……それを信じろって言うのか？」
「人が空を飛びますか？」
「……飛行機を使ったら」

俺の言葉に呆れながら、ハルが自分の席に座る。俺も自分の席について、ハルの話を思い出しながら、他の話に耳を向ける。松元とリョウがライブの話をしながら、上野を勧誘しようとしているが、上野はスルーだ。というか隣でへばりついてくるお嬢様を鬱陶しそうに避けている。

恵梨と梨香はいつの間にか乱入していた北原とお喋り。三人でヒソヒソと話すのはどういう内容なのか？　俺がカツ丼を食べ始めようとしたら、急に松元が話を振ってきた。

「なぁ、斎藤からも頼んでくれよ。上野さんがＲｅａｌｉｇｈｔに入ってくれるように」
「俺は関係ねーし」と俺。
「っていうか、わい的には既に進ちゃんはメンバーの一員やねんけど」リョウが言う。
「いや、そりゃあ、マズイでしょ？　せめて上野さんから了承を頂かないと……」

松元が言う。その隣では、上野がお嬢様に不満の声だ。

「もう鬱陶しいんだよ！　ちび助はあっち行けよ！」
「別にいいじゃない。邪魔しているわけじゃないんだから」
「邪魔してるよ！　肘が当たるから、そんなに近づかないで！」
「当たらないわよ。ちゃんと避けるもの」

「もう精神的に鬱陶しいの……。向こうに行ってよ。本当にヤダなぁ……。こんなの嫌がらせだし……」

上野がぶつぶつと文句を言いながら、食事を始める。そんな上野に話しかけるのはリョウ。

「なぁ、進ちゃん。進ちゃんはもうメンバーやんな？　今度のライブに一緒に参加してくれるやんな？」

「知らないよ。初耳だし、興味ない」とちょっと怒り気味の上野。

「上野さん、お願いしますよ。今度のライブはリョウさんがテレビで発言してしまったので。取り消すのは辛いんです。お手数を掛けるんですが、今度だけでも……」と松元。

「ちび助をどうにかしてくれたら、考えるけど」

上野が言って、松元が困り果てる。そして、リョウとお嬢様が上野にワイワイと喋りかけ。最後はハルが食事を手に持ち、立ち上がる。

「ここはうるさいですね。向こうで食べてきます」

ハルが向かった先は、黒松の所。何やら黒松に話しかけて、黒松と対面の席につく。了承を貰ったのだろう。上野がハルの様子を見て、羨ましげな顔をする。

一週間後に……〈その6〉（前書き）

ハルが素直すぎ！
何気に、毒を吐いてます。
犬耳のない学生バージョンのハルは、ハルト並みにクールです。

一週間後に……〈その6〉

こんな調子で、午後の授業に入るが、至って普段と変わりない。妙な事といえば、上野達の存在くらいだろうか？　お喋りをしながら、楽しげにゲームを続ける上野。上野に誘われ、仕方なくゲームをする黒松。それに加えて、遠慮深そうにゲームをするのは恵梨。

リョウはというと、昼食を食べて眠くなったらしい。授業をサボって、居眠りしている。お嬢様は上野が気になるようだ。ちらちら、様子を窺っている。残りのメンバー、梨香に松元、ハルは真面目に授業……優等生組だ。

刻々と過ぎる時間。気が付けば、放課後になる。皆が家に帰る中、上野とハルがヒソヒソと話し合っている。何の話をしているのか？　気になって仕方ない俺は、二人に近づき耳を傾ける。聞こえてくるのは、上野の声。

「二十四時間もフルで監視するなんて事はできないよね……」
「学校に寝泊まりすればどうにか……。僕は平気だけど、お父さんは嫌でしょ？」
「うん、凄く嫌」
「うーん、じゃあ……お父さんは家に帰っていいよ。後は僕が監視しておくから」
「駄目！　絶対に駄目！」
「え？　どうして？」
「もしも、ハルの身に何かあったらどうするの！？　夜中に一人で学校なんて危険だよ！　変質者が現れて、襲われたらどうするの！

？　相手が言霊とか使えたら、お仕舞いだよ！　ちび助みたいな奴は、世の中にたくさんいるんだから！　ハルは可愛い顔しているから、何されるかわかんないよ！　一人は危険！　それなら、僕も一緒に泊まるから！」

　ハルの肩を掴みながら、一気にまくしたてる上野。ハルが上野を見ながら、口を開く。

「お父さん……僕を襲える人なんてほとんどいないし。そんなに心配する必要はないと思うけど……。それに、今の僕は高校生の姿なのに……そこまで構われると……。ちょっと……キモイよ」

「とにかく、ハルが残るのなら僕も残るからね。あ、でも……一度、家に帰って準備をしてこないと。着替えもいるし、他にも必要な物があるかも」

「え……そんな無理しなくてもいいのに。僕一人でも……」

「ちょっと準備してくるから、ハルはここで待っていて。もしも、僕がいない間に事が起きても困るから。必要な物があったら。電話してくれたらいいよ。ちゃんと準備してくるから。じゃあ、しばらくごめんね」

「ちょっとお父さん！？」

　ハルの話を聞きもせずに、上野が走り去って行く。立ち去る上野の背中を見ながら、ハルが呟く。

「何だか……世話焼きな小動物を見ている気分」

「あははははは！　それ笑える！」

　急に聞こえてくるのは未来の声。どこにいるんだ？　キョロキョロ見回していたら、いつの間にかハルの隣に立っていた。いつ来たのか？　また例の瞬間移動か？　ハルが未来に気づいて振り向く。

「あ、未来さん……」
「今のはいいね。上野君は小動物か」
「牙を持たない小動物ですね。僕にしてみれば、ハムスターがいいところです」
「可愛いじゃない。だけど、ハムスターに心配されるなんて。ちょっと楽しそう」
「楽しいというよりも、逆に心配ですよ。何もできないのに、チョロチョロと動いて。どこかでドジって、カラスに食べられないか。僕が見はらないといけないのですから」

ため息をつくハル。未来が笑いを堪えながら、ハルに言う。

「もう食べられたって噂だけど」
「菊池さんにですか？」
「そうそう」
「まぁ、そうとうやられたみたいですよ。帰ってきてからのお父さんはへにゃへにゃです。お母さんにベッタリくっついて、離れませんから。あの二人は何なのでしょうね？　怖いくらいに仲がいいのですよ」
「あぁ、そういえば、日和ちゃんに会えるとか。シバ君が言っていたっけ。俺も一度くらいは挨拶にいかないと。姫様にはまだ伝えていないけど。言ったら、絶対に会いたいって言うだろうな。姫様と日和ちゃんは仲が良かったもの」
「へー、そうなのですか。ちょっと意外です」

そんな具合でお喋りをする二人を眺めていたら、誰かに声を掛けられる。後ろを振り向くと、梨香だ。梨香が俺に向いて言う。

「信也、帰らないの？」

「いや……もう帰るけど」
「恵梨は行っちゃったよ。今日は用事だって」
「またかよ。最近のあいつは付き合い悪いな」
「そういう信也だって、新作ゲームが発売した時なんかは一人で先に帰っちゃう癖に」
「うっせーな。それとこれとは別だよ」
「ふーん、そうなんだ」

一言述べて、梨香が俺を見捨てて教室を後にする。何なんだよなー、まったく。俺が梨香を追いかけて、廊下へ出ると、えらくごちゃごちゃした空間だ。

上野とお嬢様が喧嘩をしていて、リョウと松元が話し合っている。それを見ながら、硬直する梨香と俺。何が起きているのか？　考えるまでもなく、松元が俺達に声を掛ける。

「なぁ、二人共。今日、暇なら皆で学校に泊まらないか？」

夜の学校〈その1〉

嫌だなんていう間もなく、強制参加だ。俺に、梨香、松元、リョウ。上野に、ハル。お嬢様には黒松付き。そのメンバーでお泊まりをする事に。未来は上野と話すだけ話して、帰ってしまった。一体、何をしに来たんだろう？　よくわからない。

一度帰宅して、準備をしてから。学校に集まる。その頃には、学園内の人の数も減っていて。静かな空気が漂っていた。しかし、無人になる事はないだろう。大学を備えた学園なんだ。ゼミやら何やらで、学校に泊まる生徒は結構いるから。それに、先生や警備員もいるし……。

教室の中、超不満げな上野がメンバーを一瞥して、ため息をつく。

「もう最悪……」
「それなら、お父さんだけ帰る？」とハル。
「……ハルは？」
「もちろん、ここに泊まるよ。当然でしょ？」
「うーん……」

ハルの言葉に、頭を抱える上野。最後は黙って現況を受け入れる。お嬢様は上野の腕に抱きついて、もの凄く嬉しそうな顔をしている。上野が鬱陶しげに、お嬢様を突き放す中。松元がリョウに向いて口を開く。

「泊まりという事で、茶道部の部室を借りてきました。ダチが言うには、あの部屋が一番寝心地がいいそうです。結構、広い部屋なんで。大人数でも雑魚寝できるという話です」

「おー、あんがとさん。じゃあ、そろそろ移動しよか。メンバー揃ったやさかいな」

リョウが言って、茶道部へと移動する。部屋に入ると、それなりなかなか……いい感じじゃないか。流石、茶道部だ。地面が畳だし、和風でシャレた部屋。一見、ホテルのような気もしないではない。

こうして、お泊まり会の準備も揃い、部屋でぐうたらする俺達。と言っても、えらく個人行動が多い。ハルは一人でパズルをしているし、黒松は外で警備だ。いつの間にか、上野までいなくなっている。ハルに聞いてみると、黒松を探しに外に出たらしい。

残りのメンバーで、話をしていたら。今からゲームをする事になる。ゲームの名は、王様ゲーム。まず初めに王様になったのは、松元だ。松元が楽しげに話し出す。

「じゃあ、まずは気晴らしに。二番の人が『ｌｕｃｋｙ（ラッキー）　ｃｏｌｏｒ（カラー）』を歌う！」

「それって、Ｒｅａｌｉｇｈｔの曲だよね？」と梨香。

「そうそう、有名曲だから誰でも知ってるだろ？」

「よっしゃー、わいも手伝ったろ。二番は誰や？」

リョウが言って、皆を見回す。反応なし。俺は四番だけど……。誰もが反応しないから、ついには松元が質問だ。

「誰が二番なんだ？　梨香ちゃん？」

「私は一番だけど……」と梨香。

「えーっと……お嬢様は？」

「私は三番よ」

お嬢様の返事を聞いて、皆が停止。すぐに、リョウに向けられる視線。リョウがやっと気づいて、照れ笑いだ。

「って、わいやんか！　自分は関係ないと思ってたわ」
「リョウさんの歌を聞けるのね」と梨香。
「生ライブだ。だけど、演奏はなしだな」

俺が言うと、リョウが右手を構える。まるで、マイクを持っているような格好をして、口を開く。

「演奏はないけど、ノリノリで歌うで～！　久しぶりの歌やさかい、歌詞間違えるかもしれんけど」

そう言って、リョウが歌いだす。おおー！　ＣＤと同じ声だ！　すげー！　やっぱり上手い！　上野のような洗脳的な声ではないけど、それでも上手い！　二番に入り、妙な違和感……。何かが変だ。何が変なのか？　リョウが歌い終わった後に、お嬢様が口を開く。

「十点」
「十点かいな～。それは悲しいで、お嬢様～」
「前半は七十点、後半はマイナス六十点。合計で、十点ね。いくらなんでも、歌詞を間違え過ぎよ。別の曲の歌詞が色々と混ざっていたわ」
「流石、お嬢様やな。バレとったか～」
「お嬢様じゃなくても、バレますよ。俺もわかってましたもん」

と松元。続いて、梨香が口を開く。

「『彼方（かなた）』の歌詞が混ざってましたね。あ、でも……歌は凄く上手かったですよ」

「ホンマに？　じゃあ、まだ現役は行けそうやな」

リョウが言って、ケラケラ笑う。皆……結構、すげーじゃん。俺の場合は、違和感を覚えたものの、具体的な間違いまでは気付かなかった。

こうして、続くゲーム。二度目の王様はお嬢様。ニヤリと冷笑を浮かべた後、口にする言葉は以下の通り。

「一番の人……恥ずかしい思い出を洗いざらい吐きなさい」
「全部はキツイっしょ」と松元。
「恥ずかしい思い出なぁ～。わいなんていつも恥ずかしい思いしてるわ～。この間も……」とリョウ。
「っていうか、リョウさん。一番なんですか？」
「いや、わいは二番やな」

勝手に話し出すリョウを止める松元。放っておけよ。そうしたら、一番の人が話さなくてすむじゃないか。とか考えるのは、自分が一番だからであろう。うわー、どうしよう！？　何とか口にできるレベルの話を思い出して、話し出す。いくらなんでも本気で恥ずかしいと思った話は話せない。ありゃ無理だ。話したら、俺の人生が終わる。

こうして、三度目のゲーム。王様になったのはリョウ。リョウが笑顔でとんでもない言葉を口にする。

「よっしゃー。じゃあ、三番の人と四番の人がキスするで、どや？」
「ちょい待って下さいよ。下手したら、俺と斎藤って最悪ですよ！」と真顔の松元。
「んなことになったら、俺だって最悪だ！」

俺が怒鳴って、隣で梨香が囁く。

「私……、一番だ。良かったぁ～」

「ちょい待て！　確立が上がった！」

俺が叫ぶ。ビビリ腰でクジの番号に目を向けると、三番。いやー！　松元とだけは勘弁してくれー！　ギャーギャー騒ぐ俺。不意に松元が俺の肩を叩く。

「斎藤、俺とお前は一心同体」

「止めろー！　冗談じゃない！　キモイ！　触んな！　その顔、見たくない！」

「お前よりマシだろ？　俺は結構もてるほうなんだぞ」

「うっせーな。もてるもてないじゃねーよ！」

「頭もいいし、運動神経もいい。男でも惚れるほどの男だろ？」

「しらねーよ。俺は惚れねーよ」

「俺だって、お前に惚れるわけないじゃん。お前に惚れるくらいなら、地面に這いずり回っている虫けらに惚れたほうがマシだ」

「それは言い過ぎだろ？　俺は虫けら以下かよ？」

「頭も悪いし、運動神経もないし。口も悪いとなりゃあ、虫けら以下だろ？」

俺と松元がギャーギャー怒鳴り合っていたら、急にお嬢様が叫び出す。

「リョウ！　ルールを変えなさい！」

「どうしたん、お嬢様？　あ、もしかして……当たり番号？」

「誰かとキスすれば、それでいいでしょ！？」

「いや、まぁ……いいけど。選択肢は少ないで。残ってるのは……

わいか、まっつんか、梨香ちゃん……」

リョウが言い終わる前に、お嬢様が部屋を飛び出す。靴も履かずに飛びだすなんて、そんなに俺の事が嫌いなのかよ？　っていうか、お嬢様が当たりだったのか。それなら、別にキスされても構わないのに。っていうか、むしろキスしてくれよ。

飛び出して行ったお嬢様の様子が気になり、俺達も扉の外に顔をのぞかせる。その先に見えるのは、廊下の奥を眺める黒松と、その隣に座る上野だが……。お嬢様が上野に、マジ熱いキスを繰り広げている。

上野にはわけがわからないだろう。いきなりお嬢様が現れて、なぜかキスされるのだから。でも、お嬢様だからいいじゃないか。むしろ、俺からすれば羨ましい立場だ。長くエロいキスを終えて、お嬢様がリョウに向く。勝ち誇ったような顔をしている。

そして、リョウとお嬢様がごちゃごちゃとお喋りだ。上野を見ると、妙な色気を出しながら、一人で指をくわえている。何だか見ている俺が恥ずかしい。顔を赤らめながらぼうっと指をくわえる上野を見て、松元が俺に囁く。

「上野さん、お嬢様にキスされただけで。えらく顔色変わったよな」
「あいつマゾ気あるんじゃねーの？」
「……かもな」
「お嬢様の事、嫌いみたいだけど。本気で嫌いなら、普通は突き飛ばすだろ？　キスされても無抵抗ってことは、やっぱり好きなんじゃねーの？」
「実際、どうなんだろうな？　うわぁー、気になる」
「聞けば？」

「聞いても、答えてくれないだろ？　流石に……」
「だよな」

俺達が喋っていたら、リョウが帰ってくる。遠くでは、お嬢様が上野とお喋りだ。上野はお嬢様から目を逸らし、ぶつぶつと何か話しているが声が小さくて聞こえない。不意にお嬢様が上野の手を取り、立ち上がらせる。そのまま腕を引っ張って、部屋まで強制連行だ。

夜の学校〈その2〉（前書き）

シャワラッターって、何だろう？
リョウに詳しい話を聞いてみたい。（笑）

夜の学校〈その2〉

お嬢様が上野にちょっかいを出す中、俺達はトランプをしながらお喋りだ。食事はカップ麺などで適当に終わらせる。時間が刻々と経過して、夜の九時頃。梨香が気分悪そうに口を開く。

「もう限界！　お風呂に入りたい！」
「学校に風呂なんてねーよ」と俺。
「シャワー室はあるけど。それで良かったら、梨香ちゃん行ってきたら？」と松元。

松元の言葉を聞いて、梨香がおねだり視線だ。

「一人で行くの怖いな。皆で行こうよ」
「どうせ女子と男子は別れてるんだから、関係ないだろ？」と俺。
「関係あるし。途中の廊下が怖いんだから」
「おもろそうやん。どうせ暇やし、皆で連れシャワー浴びに行こうか？」

リョウが言って、松元が賛成する。かったるいが、確かにする事がないから。暇つぶしには丁度いいかも。そういうわけで、皆でシャワーを浴びに行く事に。と言っても、ハルとお嬢様は行かないらしい。黒松はまずありえないだろう。上野なんて、お嬢様の膝を枕にしながら眠ってやがる。ちょい、羨ましいし！

俺に梨香、松元、リョウのメンバーで暗い廊下を歩き続ける。うわー、確かに一人でここを歩くのはちょっとホラーチックだな。俺

の心を読むように、リョウが話し出す。

「何やお化け屋敷みたいやな。気持ちわる～」

「誰か怖い話でもしてくれよ。盛り上がりそうじゃないか」と松元。

「ダメダメダメダメ！　私、シャワー浴びるの一人なんだから。怖い話は戻ってからにして！」

蒼白する梨香は俺の腕にしがみ付いている。俺的には、誰かに怖い話をしてもらいたい。そうしたら、梨香がシャワーを浴びるのも付いてきてとか言いだして。ちょっとエロエロな展開に……。というのは、期待し過ぎか？

グダグダとお喋りをしていたら、シャワー室に到着する。梨香と別れて、更衣室に入る。すぐに電気を付けるが、やっぱり不気味だ。きっと梨香は俺達の三倍以上に不気味だろうな。さっさと入って、出てこよう。地味にこういう所は苦手だ。

準備をしながら、横を向くと。面白い物を発見する。俺がリョウの左腕に指差して話し出す。

「それ刺青（いれずみ）って奴？」

「ちゃうちゃう。タトゥーって奴や」

「いや、タトゥーって、刺青じゃないのか？」

「え？　そうなん？」

「そうですよ。もしかして、リョウさん……何も知らずにタトゥー彫ったんですか？」

呆れ声の松元。リョウが笑顔で答える。

「そうやねん。知り合いが練習したいって言うからな。ええよ、っ

て言ったら。こんなんなってん。でもカッコエエやろ？　いつか動きだすんちゃうかと思って、楽しみにまってるねん」
「動くわけねーだろ！」と俺。
「動いたら怖いですよ……」

松元が言う。それにしても、すげーな。竜だ、竜。ちっちゃいけど、竜だ。しかも細かい……。よくこんなの書ける……っていうか、彫れるっていうか。俺と松元がリョウの左腕を凝視していたら、リョウがアホな事を言いだす。

「わいの腕に惚れたか？」
「リョウの腕はどうでもいいけど、この竜すげーよな」と俺。
「お前って素直だよな。斎藤……」

松元が続ける。リョウが残念そうな顔をして、口を開く。

「わいの腕には惚れんかったかぁ～。そらぁ、残念やな。まぁ、ええわ。じゃあ、行くでー。わいに続け～！」
「っていうか、早く行ってくれよ。後ろつっかえてるつーの」と俺。
「サイちゃんって、案外にキツイ口調やな……」
「こいつ、人に慣れると口悪くなるんですよ。昔から、それは変わらないよな」

松元に背中を叩かれる。松元の言葉と行動に不満を隠せない俺。振りむいて、松元に言う。

「んなことねーよ。大体、お前だって……」
「俺は常識を心得てるよ。お前は子どもだもんな」
「ちげーよ！」
「まぁ、ええやんか。要するに、わいはサイちゃんに認められたっ

て事やね？」

明るく口を挟むリョウ。いや……そういうつもりでもないんだけど……。どうも納得のいかない話にまとまり。首を傾げながら、シャワー室に向かう俺。何か……嫌な感じだ。

リョウが一番奥のシャワーに、俺が真ん中、松元が一番手前。部屋ではないが、無駄に仕切りで区切られた空間だ。妙な狭苦しさを感じつつシャワーを浴びる事にする。俺がシャワーの蛇口を捻ろうとした直後、リョウの叫び声が聞こえてくる。

先程の沸々と残る不満も吹っ飛んで、リョウのいる所へと顔をのぞかせる。

「おい、どうした！？」
「呪いや～、シャワラッターの呪いや～」
「シャワラッターって何だよ？　って、うぉあ！？　何だよ、これ！？」

リョウの持つシャワーから、どくどくと流れるのは赤い水。もしかして、これ……何かの呪いか？　学校の七不思議的なもの？　思わず、俺まで叫んだから。今度は松元がやってくる。

「どうしたんだよ？　って、うわぁ……」
「シャワラッター、シャワラッター、シャワラッター」リョウが謎の言葉を呟く。
「やべーよ、呪われてるよ。リョウの奴」

俺とリョウがパニックになっていたら、松元が冷静なご意見だ。

「赤サビみたいだな。ここのシャワー、かなりの間使われてなか…。っていうか、リョウさん。その……そこに『故障のため使用禁止』って書いてありますけど」
「あ……」俺が言葉を無くす。
「なーんや。ビックリした。ただの故障かいな」

安堵の笑みを浮かべるリョウの手には、赤サビが尽きないシャワー。ゴポゴポと音を立てて、お湯の出が悪い。故障しているのだろう。っていうか、紛らわしいし！

そんなくだらないホラーがありながらも、無事にシャワー室を出る事ができた。当たり前か……。まぁ、これが現実なんだろうな。小説とかだったら、きっとこの後に殺人とかでゴタゴタするんだろうけど。それがないだけ、現実は素晴らしい。

帰り道、梨香が先程の叫び声が何だったのかを問いかけてきて。リョウがそれを面白可笑しく説明しだす。俺と松元もケラケラ笑いながら、リョウの話に耳を向ける。実際には、ちょっとビビったけど……。後から思い出せば、笑い話以外の何物でもない。

夜の学校〈その3〉（前書き）

新キャラ多いのでよろしくです。
いきなり凄く個性なのが出てきた（＾－＾）

夜の学校〈その3〉

茶道部の部屋に戻ると、ハルがいなくなっていた。お嬢様に聞いてみたら、風呂に入るために家に帰ったそうだ。わざわざだな……。それなら、一緒にシャワー室に来れば良かったのに。

しばらくして、ハルが戻ってきて。今度はお嬢様が上野を揺さぶり起こす。目が覚める上野はぼんやりしていて、お嬢様に誘導されるままに行動する。お嬢様が上野を引き連れて、出て行った。

それにしても、お嬢様……もの凄く嬉しそうだったが。本当に怖いという理由から上野を連れて行くのか？　もっと別の意図があるような気がしてならない。正直に言って、二人の後を尾行したくて堪らないが。まぁ、変な事をしてお嬢様に怒られるのも嫌だしなぁ……。

刻々と過ぎる時間。一時間近く経過しても、二人は未だに帰ってこない。俺らが心配しだした頃に、大太鼓を力の限り殴る様な雷の音が聞こえてくる。けたたましい雨の音。ハルがパズルを仕舞って立ち上がる。

「来ましたね。けったいな時間帯だ……」
「うわー、大雨だな。明日は学校……休みじゃねーの？」と俺。
「さぁ？　休みの理由が大雨だといいのですけど……」
「どういう意味だよ？」
「そうですね、皆さん……お怪我のないようお身体には気を付けて下さい」
「こんな時に、気味の悪い事を言うなよ……」

俺の言葉を聞いて、ハルが冷たい視線を送ってくる。

「今から僕が帰ってくるまで、皆さんはこの部屋から一歩も出ないで下さい。ドアノブに触れる事すら止めて下さい。これは忠告ですよ。本来、僕はあなた達と無関係だ。ですから、忠告する必要もないですし。あなた達が消えたところで悲しむ程に親しくない。何も言わずに出て行ってもいいのですが。お父さんとの間柄、一度だけ注意しておきます」

そう言って、ハルが部屋を出て行く。止める間もなかった。もっと詳しく説明してほしかったのに……。詳細すら語っていない。何なんだよ、まったく……。ハルが残した一言に妙な不気味さを感じたのか、黙って扉を見つめる残りのメンバー。

不意にリョウが小声で呟く。

「何や、ホラーチックになってきたな。ワクワクするやん」

「何だか寒気がしてきました。冷え込んできたからかなぁ？」

松元が言って、用意していた布団を敷き始める。俺もそれを手伝って、恐怖心を紛らわす事に。布団を敷きつめた後、四人でお喋りだ。ちょっと怖い話を、一人一つずつ語っていく。

お嬢様と上野は帰ってこない。ハルは出て行った。黒松は外にいるのか？　しかし、ハルに忠告されたので様子を見に行くことすらできない。

こういう時に、どうしてなのか？　こういう時に限って、どうし

てだろう？　こういう時こそ、むしろそうなのか？　ごめん、マジでトイレに行きたい……。ハルが帰ってくるまで我慢？　いや、早く帰ってきてくれ。冗談抜きで早く帰ってきてくれ。

じっと我慢して、五分が経過。

冷や汗が出てきて、十分が経過。

もう無理だと悟って、十五分が経過。

死んでもいい……トイレに行かせてくれ。

ゆっくりと立ち上がって、一人で悟る。

「もう無理。トイレくらい、行ってもいいよな？　すぐそこだし」
「何や、我慢しとったんか？　我慢は良くないで」とリョウ。
「ですよね？　じゃあ、行ってくる」
「気をつけろよ。怨霊に取り憑かれないようにな」松元が言う。
「怖い事言うなよ！　それでなくても、ハルの言葉が恐怖なのに……」

俺が扉に手を掛け、開いてみる。すぐに外を確認だ。右、左、右、左……別に何もない。というか、黒松もいない。どこに行ったのか？　後ろから聞こえてくるリョウの声。

「何かおった？」
「いや、黒松がいない」
「ハル君と一緒に行ったんかな？」
「かもな……。じゃあ、ちょっと行ってくる」
「はいよ～」

「気を付けてね」

最後に聞こえてくる梨香の声を真に受けて、警戒しながら外に出る。外には何もいないが……すげー暗い。マジで出そう。うわぁ……嫌だな。さっきトイレに行っておけばよかった。ハルもいきなり過ぎるんだよ。急に外に出るなとか言われても無理だろ？

よし、歌を歌って行こう。頭の中で歌を歌いながら、さっさと行ってこよう。歌いながらゆっくりと歩きだすが、しばらくも経たぬうちに、早足だ。やっぱ怖い。あー、一人で来るんじゃなかった。

トイレに行って、用を足しながら安堵感。何だ、何も出ないじゃないか。ハルも大袈裟なんだよな～。そう思いながらも、消えぬ恐怖心と戦いながら手を洗う。さっさと皆のいる所に戻ろう。

俺がトイレから出ようとしたら、いきなり扉が閉まりだす。思わず叫びながら後ずさり。いや、今のは風だ。かぜかぜかぜかぜ……。そう思おうとしても、実際には風なんて感じられなかった。というか、そもそも室内で風なんて吹くのか？

いや、落ち着け俺……。そんな事はどうでもいい。とにかく、皆の所へ戻る事が第一だ。ドアノブに手を伸ばして、扉を開けようとする。あれ……？　開かない。いくら押しても、開かない。もしかして、引けば……。やっぱり開かない。

うそっ！？　マジ！？　許して！！　押しても引いても、何をしても開かない。何だよ、これ！？　引っかかってるのか！！？　先程とは別の意味で冷や汗を流しながら、扉を乱暴に押し引きする。

俺が必死になっていたら、背後から何かの気配。青い顔で振り返る先は、個室トイレの一番奥。クスクスクスと女の子の笑い声？いや、ないないない。花子さんなんて止めてくれ。

何が何でも見に行かない。絶対に死んでも見に行かないぞ。俺はここで人が来るのを待つ！　じっと時間が過ぎるのを待っていたら、例の個室トイレの扉が乱暴に開く。ヒィッ……！！？

開きっぱなしの扉。硬直する俺。周りの空気まで固まって、時間すら止まっているのかと錯覚する。扉の奥から、ゆっくりと出てくるのはお河童の女の子……じゃない。もっと違う……。人型の黒い物体。あれは……何だ？

のめりのめりと近づいてくる。逃げ場なんてあるわけない。あまりの恐怖に俺の身体が震えだす。扉は開かず。絶体絶命。

俺と奇怪生物との距離が後一メートルになった時。トイレの外から何かが割れる音。急に扉が開きだす。扉に持たれていた俺はぶっ倒れ。頭の上から何か……水しぶきが降り注ぐ。続いて、声……。

「トイレの花子さんなんて古臭いでやんす。大体、男子トイレに花子さんなんて違法でやんすよ」

「な、何だよ？　お前？」

扉の向こう側に現れたのは、ぬいぐるみ。猫……か？　それにしても、滅茶苦茶に気持ち悪いぬいぐるみだ。喋らずに黙っていたら、奇怪生物並に怖い。猫が手に持つペットボトルを振りながら、口を開く。

「塩水でやんす。手軽な割に、効力は抜群でやんすよ。お前にも一つやるでやんす」
「あ、ありがとう……。で、あんた何だ？」
「自分はレトロと言うでやんす。若に頼まれて、バカな奴らの助っ人をしているでやんすよ。お前は運が良かったでやんす。一人なら間違いなく引きずり込まれていたでやんすよ」
「す、すまん。ありがとう……」

とりあえず、わかった事はレトロが敵ではない事か。仲間で良かった。こんな不気味な奴が敵だったら、俺が発狂する所だ。レトロがため息をつきながら話し続ける。

「礼を言うなら、若に言ってほしいでやんす。今は体調も良くないのに、ここに来ると言って、人の話を聞かんでやんすよ。まったく持って、お人よしでやんすね。放っておけばいいのに……。って、そういうわけにはいかんでやんすな。ここに若がいなければ、将来が危ういでやんす」
「えっと……若って誰？」
「お前には関係ないでやんす。それよりも、さっさと安全な所へ移動するでやんす。お前は妄想力が強いから、あんな物が寄ってくるんでやんす。楽しい事だけを考えながら、皆の所へ戻るでやんす。わかったでやんすか？」
「えっと……あんたは？」
「まだ自分に頼るでやんすか？　お子様でやんすね。自分は子守りではないでやんすが、仕方ないでやんす。送ってやるから、付いてくるでやんす」
「す、すんません……」

なぜ不気味なぬいぐるみなんかに、俺が謝らなければならないのか？　わからないが、今の所……こいつの方が状況を理解していそ

うだ。文句を言うのは後にしよう。手招きするレトロの後に続いて、歩きだす。

夜の学校〈黒松編〉（前書き）

ホラーになってきた。
それにしても、塩水最強だ。
ちなみに、珍しく……というか、初めてのリチャード視点です。

お嬢様の仰せに従い、茶道部屋の前で待機する。真実を言うと、お嬢様の後に続き。厳重な警備を行いたいのだが、お嬢様に睨まれると近づくわけにはいかない。しかし、お嬢様に何かあったらと気が気でないのも事実。

お嬢様はご自身の警護のために、常に専用の発信器を所持していらっしゃる。要するに、こちらからお嬢様の居場所を即座に把握する事ができるということだ。少しでも不審な動きがあるのなら、お嬢様の元へと駆け付けよう。

お嬢様と上野様が出かけて、早一時間。いくらなんでも遅くないか？　二人の様子を見に行くべきか？　いや、しかし……。以前に類似した出来事が起き、心配のあまりお嬢様を探しに向かったら。お嬢様に酷く叱られた覚えがある。

本来なら、護衛である私がお嬢様から離れる事は許されない。玲様なら、何が何でもお嬢様に付き添うだろう。どれほどお嬢様がお怒りになっても、その行動は変わらない。お嬢様も玲様の行動については諦めているようだ。

しかし、私は異なる。以前にお嬢様がどうしてもというので、十分程の間だけお嬢様の個人行動を承認してしまった。それがきっかけだ……。その日から、お嬢様のわがままが始まり。あまりのしつこさに、少しずつ許可していったら。このありさま。こんな事……玲様にばれると、間違いなく殺される。

刻々と過ぎる時間。つのる不安は晴れないまま……。やはり心配だ。二人の様子を見に行こう。無事を確認し、またここへ戻ってくればいいだろう。お嬢様のご希望には反するが、こちらも仕事だ、仕方ない。

お嬢様の居場所へと足を向ける。シャワー室は一階の西側にある。地図は既に把握している。お嬢様に何かあった時に、効率よく行動できるように。前もって、頭に入れているのだ。

私が廊下を歩いていたら、急に雷の音が聞こえてくる。雨まで降り出した。天気が崩れたのか……。今日は晴れだと聞いていたが、天気予報もあてにならないな。

歩いていて、ふと気付く。どうも周りの様子が変だ……。四階から階段を下り、二階のスロープを渡って、更に下りの階段を歩き、ここは一階のはずだ。このまま真っすぐに歩けば、シャワー室があるはず……。

窓の外に目を向ける。見えるのは生い茂る木の葉。ここは……二階か？　そんなはずは……。奇妙な違和感。まだ階段を下りていなかった……とは思えない。しかし、一度戻らなければ。向こう側の階段は使用禁止……。

後ろを振り返り、硬直する。私の目の前には、壁。なぜ……？お嬢様の悪戯か？　ドッキリでも仕込んでいるのかと思い、壁を調べるが本物だ。私は今……壁の向こう側から歩いて来た。そんな事があるのだろうか？

夢でも見ているのかと思い、壁の前で腕を組んでいたら。背後から人の気配。振り向くと、見慣れぬ子どもの姿。猫のお面を付けていて、着物を着ている。少年のようだ。手に持つのは、ペットボトルと棒付きの飴。

ここが祭りならわかるが、高等学校では異様な光景。言葉を無くす私の前で、少年が飴をくわえる。ペットボトルを数回振って、蓋を開ける。私の前まで歩いてきて、私にそれを押し付けてくる。これをどうしろと……？

首を傾げる私の前で、少年が飲み物を飲む振り。飲めということか？　私が少年に問いかける。

「これを飲めばいいのか？」

頷く少年。言葉は返さない。本来ならば、こんな物を口にする事はないが。頭で理解できない状況に飲まれていたのだろう。少年の願い通り、ペットボトルの水を口にする。が、すぐに吹き出しむせかえす。何だ……これは？　塩水か？

口を押さえる私の前では楽しげな少年。怒りを感じた私が少年にペットボトルを突き返す。

「私をからかっているつもりか？　冗談は止めてくれ。遊び相手なら、他をあたるんだな」

「……」

少年がペットボトルを手に持ちながら、残念そうな顔をしている。少年を無視して、歩きだす。しかし、ここは何階だ？　とにかく階

段を使って一番下まで……。一人で考え事をしていたら、服を引っ張られる。横を向くと、少年だ。じっと私を見つめてくる。一体、何がしたいのか？

その時だ。壁が現れた方面から、何かの気配。振りかえると、壁の中から獣が飛び出してくる。黒い獣……犬？　いや、狼か？　しかし、目はなく、形だけだ。獣が私に向かって走り出す。

牙を見せながら、飛びかかってくる獣に向いて。わざと左腕を差しだす。腕にかぶりついた直後、右肘で獣の頭を押しつぶす。そして、獣がぐったりと動かなくなる。あれくらいなら余裕だ。以前に熊と戦った事もあるのだから、こんな奴に負けていられない。

動かなくなった獣の頭を踏みつけて、息の根を絶やしてから。足を進める。早くお嬢様を見つけなければ……。まさか、このような所に獣が歩きまわっているなんて。他にもいるとすれば、お嬢様の身に危険が……。

不意に足を止め、振り返る。異様ではあるが、子どもは子どもだ。せめて、早く家に帰るよう促してやろう。獣の様子を窺う少年に向いて、口を開こうとする。が、止まる言葉。少年の背を見て、困惑する。どういう事だ？

私が更なる疑問に眉をしかめていたら、獣の様子に異変が。まるで、獣の中で別の生き物がうごめくように。獣の形が変化していく。これは……何だ？

私が目を丸くしていると、少年が私に目を向ける。まるで、私に合図をするかのような視線。私が唖然と獣を見ていたら、少年がペットボトルの中身を獣に振りかける。直後、獣が煙を上げて消えて

しまった。一体、あれはどういう生き物なのか？

駆け寄ってくる少年。私にペットボトルを押しつけてくる。塩水入りのペットボトルか……。大した効力じゃないか。思わず感心して、ペットボトルを受け取る。すると、今度は少年が私の左側に付いて、私のズボンを握りしめる。まさかと思い少年に問いかける。

「私に付いてくる気か？」

頷く少年。まぁ、いい……。一人にするより安全か。それに、気になる事もある。返事は返さず、一度だけ頷く。私の了承を見て、少年は嬉しげだ。少年から貰ったペットボトルを手にし、少年と共に異界をさまよう。

それにしても、どうして私はこうも子どもに甘いのだろう？　こんな事だから、お嬢様にも舐められて……。もう少し玲様のように仕事と割り切る事ができればいいのだが……。

夜の学校〈黒松編2〉（前書き）

上野君は仕事をサボって爆睡中。
お疲れの模様です。

歩けど、歩けど、目的地が見えてこない。ここだと思う道は全てハズレだ。常識的観点では考えられない混沌。一度通った道ですら、二度目には変化している。

かといって、来た道を戻る事もできない。いつの間にか、扉が消えていたり、扉が開かなかったりと。まるで、何者かの意思が働いているかのようだ。

しかし、立ち止るわけにもいかない。この迷路を脱出する手段を考えながら、歩き続ける。

隣を歩く少年は、私のズボンを握りしめながらも、黙って歩き続けている。名前を聞いても話さない。もしや、話せないのだろうか？　今のところは、声を聞いた記憶はないが……。

しばらくすると、見覚えのある場所。この道を歩くのは五度目だ。フゥ……どうしたものか？　疲れを感じて、廊下の隅に座り込む。すると、少年が私の隣で真似するように座りだす。ペロペロと飴をなめながら、楽しげだ。今の状況を理解しているのだろうか？

まるで悪夢でも見ているよう。答えの出ない問題に、頭が痛くなってくる。何か手がないものかと思うが、思いつく限りの事はしたつもりだ。どこかに見落としでもあるのだろうか？

不意に少年が私の服を引っ張り出す。少年に顔を向けると、飴を押し付けられる。流石に頭を振って、お断りだ。今は飴になど興味ない。私の反応を見て、落ち込む少年。

そろそろ出発しようとした矢先に、少年が立ち上がる。キョロキョロと辺りを見回して、何かを探しているようだ。私が問いかける前に、少年がある扉の前まで歩いて行く。トントンと人差し指で扉を叩いて、首を傾げる。何をしているのだろう？

しばらく扉に耳を当ててから、私の元へと戻ってくる。私の腕を引っ張って、扉に向かえと催促してくる。立ち上がり、少年の声に答えよう。扉の方へと向かおうとした直後、扉がけたたましい音を上げて吹っ飛んだ。

それと共に、壊れた扉の向こうから飛び込んでくるのは大きな青い竜。私達の前を勢いよく通り過ぎて行く。竜なんて見るのは初めてだ。しかしながら、このような生き物が実在していただなんて……。私の頭がおかしくなったわけではないだろうな？

唖然とする私の前に人影が。あれは上野様のご家族……ハルという青年か？　青い竜を追って、走り去ってしまった。遠くから聞こえてくるハル様の声。

「こらぁ～！　お前、僕が狙っていた獲物を全部食べただろ！　あれは僕が全力を尽くして掻き集めたんだぞ！　返せよ！　僕の夕食！」

何なのか？　消え去るハル様達の後を眺めていたら、人に手を掴まれる。振りかえると、少年だ。私の腕を引っ張りながら指差す先は、竜によって壊されてしまったあの扉。

少年と共に歩いていたら、科学室の前を通り掛る。このような場所へ移動できたのは初めてだ。やっとのことであの迷宮から脱出できたのだろうか？　一安心する私の服を引っ張りながら、少年が科学室を指差す。ここに入れということか？　また迷宮に埋もれる事はないだろうな？

科学室の扉を開けると、中は至って普通。別室に繋がる事もなく、ちゃんと科学室に入る事ができた。駆けて行く少年の後を追うと、部屋の奥に人影が。目の前に映るのは、地面に座り込むお嬢様と、その足元で横たわっている上野様。

お嬢様が私達に気づいて振り返る。

「あら、黒松。迎えに来てくれたの？」

「お嬢様、ご無事で何よりです。上野様は……」

「眠っているだけよ。さっきは発作を起こして、少し焦ったけど……。今は大丈夫」

「さようですか」

「そういえば、数分前にハル君が来たわ。私達にここを動かないように言って。自分は上に登ると言っていたけれど……」

「こちらも少し前にハル様に出会いました。すれ違いで、私達の歩いて来た方向へ走って行かれました。何やら、青い竜のような生き物を追い掛けておりましたが」

「竜？」

「いえ、何でもありません……」

竜なんてそんな生き物がいるはずない。しかし、奇怪な出来事が続いているので、どうも感覚が鈍っている。事実、存在するのでは

ないかと今でも疑ってしまう。不意にお嬢様が少年を指差す。

「ところで、その子は誰？」

「先程、廊下で出会いまして。どうも迷子のようで」

「迷子？　こんな所で？」

「奇妙ではありますが、こちらに害を与える事もありませんし。別段、邪魔でもなかったので。共に行動しているわけです」

「名前は？」

「何分、この者は話をしたがらないので。今の所、声は一度も……」

「要するに、何もわからないわけね。名前も住所も声もわからないんじゃあ、気味が悪いわ。せめて、そのお面を外して、顔くらい見せたらどう？」

眉をしかめるお嬢様。確かに、不気味だろう。素顔も見せない上に、声も出さないとなると、不気味さもかなりのものだ。対する少年はそっぽを向いて、私の後ろに隠れる。それを見て、お嬢様が不満げな顔。お嬢様にそういう態度を取るのは止めてほしい。ヒヤヒヤしながら、後ろの少年に小声で話しかける。

「今だけでいいから、声を出して答えてくれないか？　それが無理なら、せめて素顔だけでも見せてくれ。お嬢様がお怒りになられると面倒なんだ」

「……」

少年が私の服を掴みながら、じっと動かなくなる。ダメか……。

私がお嬢様に頭を下げようとした直後、少年がお嬢様の対面に足を踏み出す。私には少年の頭しか見えない角度。その状態で、少年が棒付き飴を口から出して、猫のお面に手を伸ばす。

お面を外す少年。それを見て、硬直するのはお嬢様。どうしたの

だろうか？　言葉を無くすお嬢様に顔を近付ける少年。少年だという事で気を抜いていたのが悪かった。私が止める間もなく、少年がお嬢様にキスをする。

マズイ……。蒼白する私。少年に掴みかかろうとしたら、少年が私の手をすり抜けて部屋から出て行った。顔を見せる事もなく、最後に爆弾を残したまま……。この後の事体は想像が付く。お嬢様が怒り出し、玲様にも怒られ。下手をしたら、私が処分される。くそっ……だから子どもは。

硬直していたお嬢様が正気に戻り、私に命令を出す。

「何してるの、黒松！　早くあの子を追って！」
「はい、すぐにでも！」
「乱暴は駄目よ！　あの子を捕まえて、私の所へ連れてきなさい！」
「はい！」

部屋を飛び出し、廊下を見回す。微かに足音がする方向。そちらに向かって、駆け始める。

夜の学校〈その４〉（前書き）

すげー、ハルが悪になってる。

夜の学校〈その4〉

「まったくもって、最近の子どもはダメでやんす。知能のなさに驚きでやんすね。こんな事になるのなら、放っておけばよかったでやんす。お前はドジの中でも、とことんでやんすね。ダメな奴、ベストスリーには入るでやんす」

「うっせーな！　仕方ねーだろ！　携帯電話を落としたくらいで、うだうだ言うなよ！」

「落としたとしても、普通はすぐに気付くでやんすよ。最後の最後になって、『あ、忘れ物』なんてバカな奴はそうそういないでやんす。ノロマでドジはお前くらいでやんす」

「何だよ、うだうだうだうだと。キモイぬいぐるみは黙ってろ！」

「キモイとは何でやんすか！？　命の恩人に罵声を浴びせるなんて、お前の頭には脳味噌なんて入ってないでやんすね」

「お前こそ、脳味噌ねーだろ？」

「ぬいぐるみをバカにするなでやんす！　これでも若には気に入られているでやんすよ。『凄く可愛い』っていつも褒めてくれるでやんす」

「どこが可愛いんだよ？　つぎはぎだらけの化け物じゃん」

「うるさいでやんす。お前の腐りきった脳味噌よりもマシでやんすよ」

「良かったな。お前の頭には脳味噌なくて。どうせ白綿を詰めてるんだろ？」

俺が言ったら、レトロが騒ぎ出す。こいつと話をしていたら、いつしか口が裂けてしまう。それほどまでに切りがない。

うるさいレトロを無視して歩いていたら、やっとのことで茶道部屋に辿り着く。長かった……。今や迷宮と化している学校だ。よく

ぞまぁ、ここまで辿り着いたな。

レトロが扉に近づいて、持っていた食塩水をぶちまける。振りかえって、俺に言う。

「念には念を入れるでやんす。まぁ、問題ないと思うでやんすが」

「どうも、あんがとさん」

「まったく心がこもってないでやんす。お前は本当に中身のない人間でやんすね。綿が詰まっている分、自分の方がマシでやんす」

「お前なんてさっさと汚れて捨てられろ」

俺がレトロに暴言を吐いていたら、廊下の奥から足音が聞こえてくる。大きな足音を立てながら、現れたのはハルだ。呼吸を整えながら、俺に言う。

「あれほど、外に出ないでくださいと注意したのに。お散歩ですか？　大した度胸ですね」

「トイレくらい、いいじゃんか！」

「別に怒らなくても……。そういえば、青い竜を見かけませんでした？」

「いや、知らないけど」

「あぁ、あれならきっと先に行っているでやんす。スピードが速い分、一人で突っ走っていると思われるでやんす。そろそろ自分も行かないと、若に怒られるでやんすね。じゃあ、このバカをよろしくでやんす」

レトロが口を挟んで立ち去ろうとする。すぐにハルが手を伸ばして、レトロの頭を鷲づかみだ。

「ところで、あなたは誰です？」

「質問をするのなら、人の頭を力の限り握らないことでやんす。あまり強く握られると、継ぎ目から綿が飛び出すでやんす」
「すみません。僕は力が強いので、どうも加減がわからなくて」
「相変わらずでやんすね。自分が人間なら、間違いなく発狂しているでやんすよ」
「で、あなたのお名前は？　僕はハルです。一般的な高校生を目指しています」
「それなら、きっと夢は叶わないでやんすね。お前の将来は不良でやんす。自分の名前はレトロというでやんすよ。プリティーなぬいぐるみを目指しているでやんす」
「あ、そりゃ無理だ。一度、作り直さないと無理ですね。で、不良在庫が何でこんな所にいるんですか？」
「不良高校生に言う必要はないでやんす」

レトロの言葉を聞いて、ハルがレトロの頭を更に強く握りしめる。そのまま宙に浮かせて、レトロを調べ出す。

「見た目以上に重いですね。中身は綿だけではないようです。特別な魔力も感じられませんし……。もしや、機械ですか？」
「さっさと離せでやんす。自分はお前達みたいに暇人じゃないでやんすよ。すぐにでも行かなければいけない場所があるでやんす」
「そうですか、それは残念です。では、さようなら」
「だから、離せでやんす！　お前は何様でやんすか？」
「え？　一人で行くのは怖いのですか？　しかたないですね。僕も付き添ってあげましょう」
「そんな事は言ってないでやんす！　自分は一人でも問題ないでやんすよ！」

すげー無茶苦茶だな。特にハルの奴……会話してねー。なんつー自分勝手な話なのか。怒り狂うレトロを掴んだまま、ハルが俺に向

き直る。

「そういうわけで、僕はぬいぐるみを持ち主に送り届けることにします。あなたはどうしますか？」

「そりゃあ……皆と一緒に待ってる」

「そうですか。でしたら、今度は外に出ないように」

「わかってる」

「それでは、皆さんと大人しく待っていて下さい」

「あぁ、もちろんだ」

ハルと別れて、部屋に入る。部屋の中では、梨香、松元、リョウの三人がお喋りをしていた。相変わらずに、穏やかな空気。扉の一つ向こう側で起きている奇怪事件なんて思わせない。これが俺達の普通なんだろうな。

未だに続いていた怖い話の喋り合い。俺も参加して、先程の出来事を話し出す。作り話だと思われる事を承知の上で、三人に話すと食い付きが良かった。リョウが外に出たがるが、もちろん止める。今は止めてくれ。

聞き手にとっては作り話に聞こえるが、俺にとっては本物だ。嘘いつわりのない話。これが夢でも外に出たくない。現実と思われるなら尚更だ。

刻々と過ぎる時間。ハルもお嬢様も上野も黒松も帰ってこない。どうなっているんだろう？　考えるのも怖くなり、布団にもぐって目を瞑る。俺は関係ないからな……と思いつつも。明日にでも死体が出てきて、テレビでニュースとかになったらどうしよう？　頭の片隅に過る不安。うーん、明日になってから考えよう。

騒動の後〈ハル編〉（前書き）

ハルが語っていますが。
えらく騒がしい状況です。

騒動の後〈ハル編〉

それでは、続きをお話しましょう。斎藤君に会い、ぬいぐるみを拾った僕は。ぬいぐるみの頭を鷲づかみにしたまま。脅しを掛けて、話を聞きだし。屋上へと上がります。

屋上の扉を開くと、向こう側には一人の少年と黒松さんがいました。少年はお面をかぶっていて、見慣れない格好をした子です。ぐったりと寝込んでいて、黒松さんが少年に声を掛けていられました。ぬいぐるみが少年を見て騒ぎだします。

「若！　大丈夫でやんすか！？」
「あの子があなたの持ち主ですか？」
「お前はそろそろ頭を離せでやんす！」

うるさいぬいぐるみに嫌気がさして、僕が手を離します。すると、ぬいぐるみが少年に向かって駆けて行きました。僕も後を追います。黒松さんと目が合い、話しかけられます。ですが、どうも黒松さんもパニックになっているようで。話の内容がよくわかりません。

しかし、僕もバカではありません。周りの状況と少年の状態を見て、察します。どうやら、この少年は魔力を大量消費して気を失っているようです。

周囲の空気に強い魔力を感じられるのと、狭間の穴が綺麗さっぱり消えうせているので。きっと自分の魔力を使用して、学校中の狭間を閉じたのでしょう。

こんな事ができるのは、普通の人間ではありえません。魔力を使用できる上に、狭間を閉じる事ができるなんて。レベルで言えば、

そうですね……『橋』の皆さんと類似しているでしょうか？　かなりの大物です。

調べてみると、少年の命に別状はありません。普通の者ならば、安静にしていれば、すぐに回復します。僕が説明すると、黒松さんが安堵します。ぬいぐるみは知りません。顔色なんてありませんから。

ところで気になる少年の素顔。お面なんて今どき古臭い物をしていますし、隠されると却って気になります。着物を着ていて、お面をしていて。地面に落ちている飴は少年の物でしょうか？　どう考えても、お祭りに行ってきたとしか思えません。

僕が興味本位でお面に手を伸ばしたら、ぬいぐるみに叱られます。別にいいじゃないですか、減る物でもありませんし。もちろん、ぬいぐるみと取っ組み合いを始めます。このぬいぐるみを粉々にしたら、お面を外してもいいですよね？

僕らが騒いでいたら、急に知らぬ声が聞こえてきます。振りかえる先には、ジェントルマン！　すっごいジェントルマン！　本物を見たのは初めてです。

シルクハットにマントを付けていて、片眼鏡までしています。その片眼鏡の利用価値はいかほどのものですか？　やっぱりファッションレベルでしょうか？　ですが、似合っていたら問題ありません。

ジェントルマンが僕達に言います。

「その少年をこちらにお渡し願えますかな？」

「報酬はいくらですか？」と僕。

「お前は黙ってろでやんす！」

ぬいぐるみが僕を罵倒します。すぐにジェントルマンに言います。

「若はお前には興味ないと言っているでやんす。お前はしつこいでやんすよ。さっさと諦めて、他の奴を狙えでやんす。丁度、手頃なのがここにいるでやんす。これやるから、今日は帰ってくれでやんす」

「手頃って、それは僕の事ですか？　それなら、この小汚いぬいぐるみを持って帰ってください」

「ふむっ、どちらも面白い代物ではあるが……。今はそうではない。それよりも、そちらの方が価値高でしょう。さぁ、その者をお渡し願いましょうか？」

ジェントルマンにマジマジと見られて、背筋が凍りつきそうになります。女の子に見つめられるのとはわけがちがいます。こう……男性にじろじろ見られるのは気持ちが悪いです。いくら相手が紳士でも変わりません。

黒松さんが少年の様子を窺いながら、ジェントルマンに目を向けます。

「残念ですが、お嬢様のご命令がありますので。少年はこちらで一時預からせて頂きます。もしも、あなたが少年のご親戚であるのなら、身分証明書を提示して頂きたい」

「……仕方ありませんな」

ジェントルマンがため息を付きながら、マントの下から何かを取り出します。ここで身分証明書が出てきたら、僕は笑い転げることでしょう。ですが、そんなわけもなく。やっぱりシリアスなノリで、

話は展開します。

不意に感じるのは殺気です。微かに冷ややかな魔力。ジェントルマンの周りで一瞬線のような物が見えます。マズイと思い、黒松さんの前に出てバリアーを張りますが。すぐに砕け散ります。

僕のバリアーを破ったのは、ジェントルマンの武器。ピアノ線でしょうが、強い魔力が通っているので、かなりヤバいです。こういった武器は剣などと違い。細い分、道がハッキリとしていて、魔力がまわりやすいのです。

自分よりも弱い魔力なら、ザコ意外の何物でもありません。ですが、逆は強敵です。特に僕は苦手なのですよ……こういうの。片目が見えない上に、武器の気配が少なすぎます。たまに鳴るヒュンという音だけで、逃げ切れますか？　無理でしょ？

再度、バリアーを張り。飛んでくるピアノ線をキャッチします。1、2、3、4、うん、調子いいじゃん。なんて思っていたら、いきなりに左腕がもげ落ちます。うぎゃー！　なんて言っていられません。見ている人は発狂物でしょうが、僕はそれどころじゃありません。

左腕を再生して、戦力を立てなおします。もとがお札なので、腕がもげようが足がもげようが関係ないのです。核がやられるか、魔力が尽きない限り。僕は無敵に等しい存在です。

さて、どうしましょう？　僕がハルトなら、狭間に飛んで、相手の背後を狙うという行動を取るでしょうが。僕にはそんな力がありません。相手が弱者なら、力ずくで抑え込みますが。かなりのつわものです。

その上、こちらには守るべき対象が多すぎます。これがキツイ……。一人なら逃げる事も隠れる事もできますが、後ろの人達が非常に邪魔です。やっぱりここは飛び道具で、相手の注意を引く作戦ですか？

そんな事を考えていたのは、数秒の間。そのコンマ一秒で、相手が先手を打ってきます。冷やかな目で笑うのはジェントルマン。

「フフッ、君に魔力は必要ないでしょう」

「ちょい、せこいし！」

僕の苦手な言霊です。魔力のコントロールができなくなります。バリアーが消えうせて、かなりピンチ。ヒュンとピアノ線が通り過ぎる音を耳元で聞いて、気を取られてしまいます。そうしたら、瞬く間にピアノ線でグルグル巻き。動けないし、魔力も使えないし。ただの役立たずに成り下がりです。

不意に右足がもげます。地面に崩れ落ちる僕。もちろん、痛いです。しかも、魔力が使えないので再生がききません。かなりマズイ事になりました。傷口から魔力が漏れ出し、このままではマジで壊れてしまいます。せめて魔力の流出を止めないと……。

蒼白する僕の傍らで、ジェントルマンの声が聞こえてきます。顔を上げると、目が合います。

「君の核はそこですか。私にならすぐに壊せる」

「壊せば……いいじゃないですか。どうせ僕は生き物ではありませんから……」

「強い口を利きますが、怖いという感情は備わっているようですな。

よくできた代物だ」

「ハルトの……最高傑作ですから」

朦朧（もうろう）とする意識。あー、最後に梅茶を飲みたかった～。恐怖心を紛らわすための、場違いな思考。聞こえてくるのは、黒松さんとジェントルマンのやり取りです。僕を見逃す代わりに、子どもをよこせという話を耳にします。

どうしてそこまでこだわるのだろう？　というか、そもそもあの子は何者なの？　考えの果て、僕は地面に倒れ込みます。よくわからない事になってきました。できれば未来さんに翻訳してもらいたいです。

僕が耳を立てていたら、ついに気が狂ったのか。耳に入るのは僕の声です。

「リベンジです！」

ゴーという竜巻にも似た音が聞こえてきます。その後には、ゴタゴタと色々な騒がしい音。そして、聞こえてくるのは未来さん……師匠の声ですが。

「はぁ……まったく。俺の周りには、お騒がせな人達ばかりだな」

「君が言うなよ！　こっち系の能力は副作用が多いから使用禁止って。自分で誓い合ったじゃん！　後でどれだけ辛くなるかわかってるの？　っていうか、ちゃんと戻れるよね？」

「戻れなかったらどうしよう？」

「最近、使ってなかったから自信ないって？　もう、そういうの最低！　頼むから、世界の秩序を乱さないで。狂った世界を作り上げないで。できもしない能力を使用しないで」

「まぁ、そう言わないでくれよ。俺だって、頼まれてどうしようもなく……。君も同じ立場になれば、わかるから。もうね、断れるレベルじゃないの。もうね、哀れで断れないの」
「言い訳はどうでもいいから、さっさと帰れよ！」
「はいはい。じゃあ、後で手紙書くから」
「いらないし！」

何で……二人共に未来さん？　そう思っていたら、また騒がしい音です。しばらくして、静かになり未来さんの声が聞こえてきます。

「言霊解除……」

未来さんの言葉を聞いて、身体に暖かさが戻ってきます。魔力のコントロールが戻ってきて、目を開くと未来さんが見えます。ぼうっとしながら、問いかけます。

「僕は……壊れますか？」
「さぁ？　壊れるかもしれないし、壊れないかもしれない」
「今……二人の未来さんの声が」
「うん、独り言を喋ってたから。そういえば、さっきの黒スーツのいかつい人。誰だったんだろう？」
「黒松さん……ですか？」
「へー、黒松って言うんだ」
「はい、菊池さんのボディーガードです」
「ふーん」

未来さんが頷きながら、僕の口元に何かを持ってきます。

「飲んで。超高濃度凝縮魔力」

不思議な味の液体です。ちょっとチョコレートに似ています。だけど、もっと薄味です。僕が薬を飲み終えたくらいに、未来さんが質問します。

「ねぇ、まさかとは思うけど……」
「はい……？」
「さっきの人……黒松だったっけ？」
「はい……」
「あの人……こっち側の人？」
「え？　こっち側？」
「いや……何でも」

押し黙る未来さん。僕が眠気に負けそうになっていたら、未来さんの呟く声が聞こえてきます。

「もしかして、あいつ……間違えて連れて帰ったんじゃない？　嘘？　バカでしょ？　アホでしょ？　どうするつもりなんだろう？　まぁ、どうにかするだろうけど……。うわぁ、ヤダな。絶対に俺は間違えないように注意しなきゃ。絶対に間違えない。紙に書いて、部屋に貼っておこう」

騒動の後〈その1〉（前書き）

お嬢様はきっと授業サボってる。
まぁ、それは置いておいて。
パズルゲームを作りました。
「世界の枠組にを越えて」の目次の下の方にあります。
よかったら、遊んでください。いろんなところで報告するのですよー。

騒動の後〈その1〉

ハルが長い話を語り終え、皆が静かになる。というか、今は授業中……しかも、先生がお留守をしているために自習時間。出題されたプリントを解かなければいけないはずなのだが、別の問題を解いている俺達だ。

昨晩の出来事を振り返り、皆で話をまとめている。特に、外に出ていたメンバーの話は非常に興味深い。まるでミステリー、まるでファンタジー。皆が興味深げに耳を傾ける。

それにしても、あれから数時間が経過したのか。俺は未だにあの迷宮をさまよっている感覚を忘れられないが。本当に脱出できたんだよな？　妙な物足りなさを感じながらも、皆の話を頭で描く。

一通り話を終えてから、上野が落ち込み加減に呟く。

「あ～あ、情けないな。結局、僕は何もせずに。寝ちゃったわけだ。自分の役目も果たせないなんて失格だよ。僕には不向きなのかな？　そろそろ止めどきかも……」

「無茶言わないでよ。お父さんが『橋』を止めたら、後継ぎいないじゃない」

「だって、その噂の子が現れなかったら。今頃、大事になっていた所だよ。それに、リチャードまで消えちゃって。僕が頼りないから……」

「別にいいじゃん。次に頑張ろうよ。僕だって、ボロ負けだったし。今度会ったら、あの紳士……エールさん？　あの人にリベンジするつもりだよ。僕の手足をもぎ取った罪は重いからね」

「ハルは無茶しすぎなの。それより、大丈夫？　いくら人間じゃな

いと言っても、かなりの魔力を消耗したんでしょ？　身体に負担が掛ったんじゃないの？」

「それは大丈夫。未来さんから数日分の薬を貰ったから。それを飲めばすぐに回復するって。飲まなくても、大丈夫なくらい元気だ。って言われたけど。とりあえず、もらったの。明日にでもエールさんとバトルできるように」

「もう危険な事は止めてよ……。あの人にはなるべく係わらないで。何だか危なそうな雰囲気を出していたから。係わると碌な事がなさそうだし」

上野が立ち上がり、教室の外へと向かう。それを見て、リョウが口を開く。

「進ちゃん、どこに行くん？　トイレ？」

「家に帰るの。僕の用事は終わったし。リチャードの行方が気になるから、少し調べようと思って」

「上野、帰っちゃうの！？」

お嬢様が上野に駆けより、すがるような顔で問いかける。本当に、上野がいる時のお嬢様はどうしてこんなにも可愛らしい顔をするのか？　上野がお嬢様に向いて、爽やかなイケメンオーラを醸し出す。

「昨日はごめんね。心配かけちゃって」

「私こそ……ごめんなさい。その……私のせいで、嫌な事……思い出させちゃって」

「君のせいじゃないよ。僕が勝手に狭間に飲まれただけ。君まで巻き込んで悪い事をしたと思ってる。リチャードの件は僕がなんとかするから……」

「うん……」

「それじゃあ……」

立ち去ろうとする上野の服を掴んで、お嬢様が言う。

「あの……。大丈夫……？」

「……うん、大丈夫。あれは……気にしなくてもいいよ。昔の話だし」

「私……何にも知らなかった」

「知らなくて当然だよ。僕はあの頃の記録を何も残していないし。中学に入ってからは、別れて暮らしていたから」

「うん……」

お嬢様は珍しく言葉少なだ。皆には語れない何かが二人の間で起きた模様。ふと気が付くと、九割の生徒が二人の様子を窺っている。何せリアルドラマが目の前で起きているのだ。見なきゃ損だろ。

お嬢様の手を自分から離して、上野が廊下へ顔を向ける。

「じゃあね。また機会があれば」

「三日後と週二回」

「……」

「約束」

「……」

停止する上野。帰るのか、帰らないのか、ハッキリしない態度だ。本当は帰りたくないんじゃないのか？　とか考えてしまう。上野がもう一度、お嬢様に振り返り。顔を赤らめながら、少し不満げな口調で言う。

「三日後は遊びに行くだけだよ。後の話はハルが勝手に約束しただけで……」

「え？　僕、何か約束したっけ？」口を出すのはハル。
「お嬢様と勝手に取引したでしょ？　僕を一晩貸す代わりに、トラックいっぱいの食べ物と引き換え。それを週二回」
「……」
「もしかして、覚えてないの？」
「それ、多分、僕じゃない。だけど、それいいじゃん！　グッドアイデアだよ、お父さん！　そろそろ家計がヤバいって、お母さんが嘆いていたし。僕もバイトでもしようかと思っていたけど、面倒くさいし。来週の作文も書く事なかったし。ナイスだね！」
「ちょっと待って！　じゃあ、今からそれをキャンセル……」
「できないわよ。一度行った取引はキャンセル不可だから」

上目遣いに上野を見るお嬢様。上野は硬直して言葉もない。ハルは棚から牡丹餅か、非常に嬉しそうだ。最後は上野が両手で自分の顔を覆って、後悔する。

「ハルじゃないなんて聞いてないし……。もしかして、あれも狭間の生き物だったの？」
「まぁ、いいじゃん。相手は若くて可愛いお嬢様だよ。普通なら、こっちがお金払っても無理な話なんだから。大金を貰って、なおかつ、可愛い子とイチャイチャできるなんて最高じゃない。お父さんの年ではありえないって。まさに、逆玉の輿」
「人事だと思って……」
「別に男とやれなんて言ってるわけじゃないんだし。それに、お父さんって変なオーラ出しているから、売春とか向いてそうだし。良かったじゃん」
「君、ハルじゃないでしょ！！？　未来でしょ！？　未来が変装してるんでしょ！？」
「未来さんと一緒にしないでよ。っていうか、本当はお父さんだって嬉しいんでしょ？　お嬢様にいたぶられるの。だって、ちらちら

お嬢様の様子を窺っていたり、構ってほしそうな顔している時あるよ。しかも、まるで誘うような目つきしたり、声出したり、お嬢様を挑発しているのかと思う事もあるよ。こんな事をされれば、お嬢様だって我慢の限界くるんじゃない？」

「そ、そんな事……」

「本当はお嬢様に興味あるんでしょ？　どうなの？」

「うぅ……」

上野が泣く十秒前。顔が真っ赤だ、目に涙も溜まっている。そして、上野が泣き声で叫びながら、走り去って行く。

「う、うわーん！　この不良バカ息子ー！　死ねー！」

「夕食はカツ丼がいいなー」

立ち去る上野の後ろで、ハルが大声で注文だ。上野が消え去り、梨香がハルに問いかける。

「あんな事を言って、良かったの？　上野さん、本気で泣いていたけど」

「お父さんは頭が固いのですよ。お母さんは既に亡くなっているのに、まだ思いつめていて。そろそろ現実に目を向けないと、お母さんが成仏できませんから。早く新しい人を見つけてほしいって、お母さんが言っていたのです」

「そういえば、お前の母親って、もういないんだな。でも、お前には幽霊の母親が見えるんだろ？」

俺が口を出すと、ハルが頷き俺に目を向ける。

「はい。ですが、お父さんには見えないのですよ。僕には見えて、お父さんには見えないなんて。ややこしいですよね。せめて逆の方

が楽だったかもしれません。お母さんを見る事ができない分、お父さんは拗ねるし。お母さんはお父さんに伝えたい事が多いのか、僕から伝えてくれと伝言の嵐です。お互い共に静かになるのは、お母さんの身体がある時だけですね。まぁ、その時は二人がのろけだして、僕の耳が変になりそうですけど……」

「身体がある時って、何だよ？」

眉をしかめる俺を見て、ハルが気まずそうに話し出す。

「いえ、何でもないですよ。それより、そろそろプリントを仕上げないと。宿題が増えますよ。もちろん、僕は仕上げました。これくらい、余裕ですね。皆さんはどうです？」

「いつの間にしたんだよ!?　俺なんて、一問目の途中だし」

「私も終わったよ。信也は相変わらずだね」

梨香が呆れ顔を俺に向ける。うっせーよ。どうせ俺はバカだよ。二人の話を聞き終えて、不満を抱く。隣を見ると、リョウの勢いある声が聞こえてくる。

「よっしゃー！　終わったで～！　流石、まっつんや！　教え方上手いなぁ～」

「リョウさん、やればできるじゃないですか。いつも授業中に寝てるから、わからないだけですよ。真面目に授業受けてたら、まだまだ成績上がりますって」

「そうか？　じゃあ、もうちょい頑張るわ。目指すは東大やで～」

っていうか、そもそもお前……生徒じゃないだろ？　今更、成績上げてどうするんだよ？　満面の笑みを浮かべるリョウを不愉快に眺めていたら、お嬢様がプリントを手に取り一人呟く。

「勉強なんて……時間の無駄。それより、上野に会いたいわ……」

騒動の後〈その2〉（前書き）

リチャードが帰ってきたよ！

騒動の後〈その2〉

それから一週間近く時が過ぎ、ある日の事だ。かったるい歴史の授業が永遠と続く中、廊下を駆ける音が聞こえてくる。何事かと思った直後、教室の扉が開かれて。その先には、すっかり忘れられていた黒松の姿。

黒松がお嬢様の所へ駆けより、頭を下げる。

「お嬢様、帰りが遅れました事をお詫び申し上げます」
「あら、黒松。おかえりなさい。上野が凄く心配していたわよ」
「さようですか……」
「ところで、黒松……今までどこにいたの？」
「……」

お嬢様の質問に黒松が困り顔を見せる。非常に悩んだあげく、うやむやな返事を返す。

「失礼ながら、私から詳しい話をご説明する事はできません。しかし、お嬢様に黙っているわけにもいかないので、一言で申し上げます」

黒松が一呼吸置いてから、あり得ない事を口にする。

「近未来に行ってまいりました」
「黒松、ふざけるのは止しなさい」

後ろで話を聞いていた玲が乱入してくる。黒松が玲に振り返り、両手を上げて、慌てだす。

「滅相もない。今の話は冗談ではございません。全て真実です。バカげた話に聞こえるかもしれませんが、私は本当に……」
「それで、未来はどうだった？　今と何か変わっていた？」
「お嬢様！　このような戯言を信じるのですか？」

黒松の話に興味を持つお嬢様。それに対して、不満げなのは玲。どうも玲はそういった超常現象を信じていないらしい。だけど、空飛ぶ犬耳とか、そういう物は信じるのか？　何だか玲の思う常識っていうのがよくわからない。

妙な話が続いた後、黒松が爆弾発言だ。

「わかりました。それでは証拠をお見せします。目で見える物なら玲様も納得していただけることでしょう」
「そうね。見える物なら信じるわ」

玲が言い放ち、黒松が頷く。お嬢様は楽しげだ。二人のやり取りを静かに見守っている。不意に黒松が右袖をたくし上げ、手首に付けているリングを取り外す。一見、腕輪のようだが……デジタルな画面がある。もしかして、デジタル時計？　そんな落ちだったら、黒松は玲に殺されるだろうな。

黒松が説明をする前に、興味を持ったのか、リョウが席を立ち、そそくさと近づいて行く。そして、静かに声を掛ける。

「何や、それ？　おもろそうやん」
「近未来からの贈り物です。若様……いえ、とある方からプレゼントとして頂きまして。この装置をご説明する前に、少し話がありま す。それも信じられないような話ですが、口を挟まずに聞いて欲し

いのです」
「いいわ、言って。皆、口を挟んじゃ駄目よ」

お嬢様が黒松から腕輪を受け取り、いじりだす。と言っても、眺めるだけ。何やらボタンのような物があるようだが、むやみやたらに押そうとは思わないらしい。お嬢様と対するのはリョウの奴。お嬢様にボタンを押せと、えらく急かしている。そんな中、黒松が話を始める。

「このリングをくださった方が仰っていた事です。まるでゲームのような話になりますが。本来、生物には目に見えない力……。ゲームで言うところ魔力に値する力が備わっているそうです。大小の格差はあるにしても、必ず含まれているそうで。それは人間も同様と聞きました。ただ、出力の方法がないので、目には映らない。要するに、そういう物は存在しないと思われていたのですが……。お嬢様、よろしいですか？」
「あぁ……これね。どうぞ説明して」

お嬢様が黒松に腕輪を手渡す。リョウは何気に残念そうだ。自分も触りたかったらしい。気が付けば、ハルがリョウの隣で真面目に話を聞いている。どうやら、話に興味があるらしい。そういえば、ハルも同じような事を言っていた事があるよな。これって……ドッキリじゃなかったのか？

「そこで……このリングを開発なさったそうです。と言っても、元々はただの趣味でお作りになられたそうですが。近未来では大流行していました」
「それで、そのリングは何なん？　はよ、教えて」とせっかちなリョウ。
「こちらのリングは生物に含まれる見えない魔力を出力させる装置

になります。と言っても、魔力を自然に送りだす事ができない人間が使うので。自由自在というわけにはいきません。個人により、能力に違いが生じます。それでは、一度……使用してみます」

そう言って、黒松が腕輪を再度装備する。皆の視線は黒松に集中。気が付けば、先生まで顔を覗かせている。マジックでも始まりそうな気配に、無視できないらしい。そういう俺も、身体ごと皆の方へ向いている。だって、気になるしな……。

「ちなみに、私の能力は武器化です。このように両手を近付けて、念じますと……」

黒松が両手の平を近付けると、黒松の身体から灰色のオーラが……。まるで、ハルみたいだ。あいつもよくこんな感じに紫色のオーラをまとっていた。黒松の両手の中にオーラが集まりだす。しばらくも経たぬうちに、形が変化してハンドガンになる。

「こちらはまだ小型の銃ですが。出力を上げると、何にでも……。ただし、武器に限定されています。他の物……例えば、椅子などを作ろうとしても、上手くいきません。一度、戦車を作ろうとしたら。機関銃などは作れるのですが、戦車の本体を作る事はできませんでした」

黒松が言い終えたと同時に、ハンドガンが消えうせる。皆が物欲しそうに黒松の腕輪に目を向ける中、黒松が玲に目を向ける。

「玲様、ご理解していただけましたか？」

「そうね……」

「その機械……誰が作ったのですか？　人間のための魔力出力機なんて、僕の世界にも存在しませんよ。それに、そこまで進んだ発想。

この世界の人が自然に思い付いたにしては、でき過ぎです」

口を挟むのはハル。黒松が首を振って返事をする。

「それは言えません。そればかりは止められています。私が発言してしまいますと……少々マズイ事になりかねないので。お許し下さいませ」

「誰かな……？　だけど、お父さんは無理でしょ？　理屈は分かっていても、『橋』じゃないし、凡人だもの。いくらパソコンに強くても、機械を作るのは別だろうし。エールさんはどう考えても敵っぽいし。後は未来さんくらいか……？」

ぶつぶつと独り言が尽きないハルに、押し黙る黒松。玲は一人で考え込んでいる。リョウが黒松の腕輪を欲しそうに眺めていて、お嬢様は携帯のメールを見ている。何やら最近は上野と上手くいっているようだ。お嬢様の様子を見れば、すぐにわかる。

近未来にあの腕輪が流行るのか……。もちろん買うだろ？　売っているのなら、買うだろ？　だって、魔法使いみたいじゃん。自分が使うところを想像して興奮する。それで、近未来って……何日くらい先の話だ？

バードウオッチング〈その1〉

教室の後ろ、べらぼうに熱烈なキスを繰り広げているのは上野とお嬢様。正しくは、お嬢様の一方通行だが、上野はもはや逃げも隠れもしない。当初の頃は、『鬱陶しい』とか『止めろ』とか喚きながら、お嬢様といがみ合っていたが。今は従順な犬に成り下がっている。

口を離すお嬢様から顔をそむけて、小さくため息をつく上野。お嬢様が上野に抱きつき、身体を摺り寄せる中、松元の声が聞こえてくる。

「上野さん……。ここの所、お嬢様に好き放題されていますね。もう反発心はなくなったんですか？　傍から見ると、なんていうか……」

「ネコ以上に、犬ですね」

ハッキリと断言するのはハル。元、犬コロだ。二人の言葉を耳にしながら、上野がお嬢様の髪をいじりだす。

「もう逃げても無駄だって悟ったの。そうしたら、どんどん瑠菜の行動がエスカレートしていって……。もう少し周りの事を考えてよ」

「いーや」

上野の胸に顔を埋めて楽しげに答えるお嬢様。上野の言葉を真に受け止めていないのだろう。ため息をつく上野に向いて、お嬢様が口を開く。

「そういえば、上野は明日……暇？」

「僕はいつでも暇だと思われているようだけどね。残念ながら、用事があるよ。これは外せないの。本業だからね。絶対に行かなきゃいけないの、わかった？」

「明日は学校から、一年生の皆でバードウオッチングをするために、鳥新山（ちょうしんざん）に行くの。上野も一緒に行きましょ」

「だから、明日は用事が……」

「そんなの知らないわ」

「勝手な事を言わないでよ。とにかく、明日はダメなの。瑠菜がいくら喚いても駄目だから。あまり無理を言うと、いくら僕でも怒るからね」

「玲！　上野の会社に連絡して！」

「はい、かしこまりました。お嬢様」

上野が反論する間もなく、玲が立ち去る。上野の会社に連絡をするつもりだろう。蒼白する上野の身体に手を回して、お嬢様が楽しげに微笑む。

「明日は上野とピクニックね」

「もう～、何て事をしてくれるの～」

「上野も嬉しいでしょ？」

「嬉しくないよ。ちょっと、僕の膝から下りて。会社に連絡しなきゃ……」

膨れるお嬢様を膝から下ろして、携帯を取り出す上野。その場で、すぐに電話を始める。

「あ、もしもし、渡辺（わたべ）？　うん、……え？　あぁ……。いや、その話しでさ。違う、違う。別にそういうのじゃないよ。ちょっとね、知り合いのお嬢様に頼まれて。え？　お嬢様って？　あぁ、えーっと……まぁ、かなり。で、何か、明日の学校の行事について来いっ

て。うん、そう。それで、多分、社長からも連絡あると思うけど。うん、うん。いや……本当、ごめん。いや、僕もそういうつもりじゃなかったんだって。仕方ないじゃん。うるさいお嬢様が目を輝かしながら、こっちを見ているんだから。今から写メールでも送ってあげようか？　うん、じゃあ、ちょっと待ってて」

上野が電話を切り、カメラモードでお嬢様に携帯を向ける。

「はい、瑠菜。いくよ」

上野がお嬢様の返事も待たずに、写真を撮ってメールに添付する。携帯に手を伸ばすお嬢様を阻止しながら。再度、電話を始める。

「見た？　うん、うん。そうだよ。菊池お嬢様。ううん、本物。何かこの間から凄くへばり付いてくるの。もうね、ベッタリなの。どうにかしてほしいんだけどね。いや、マジで。何？　代わってあげようか？　凄く体力いるけどね、いろんな意味で」

同僚とでも話しているのだろうか？　会話が盛り上がり、楽しげな上野の携帯を奪い取るのはリョウの奴。何をしでかすのかと思っていたら、急に余計な発言だ。勝手に電話を切りながら、携帯をいじりだす。

「せっかくやから、お嬢様と進ちゃんのツーショットを撮ったるわ。えーっと、カメラモードはこれやな。ほな、行くでー」

「ちょっと、リョウ！　余計な事しな……」

上野が怒鳴る寸前に、お嬢様が上野にキスをする。キスをされたら、急に上野が大人しくなる。ぽうっとした目つきになり、思う存分にいたぶられる。不意にお嬢様が上野から口を離す。うっとりす

るお嬢様にしがみ付いて、荒い息を整えるのは上野。まったくもって、お嬢様には手も足も出ないらしい。

そして、リョウが口を開く。

「あ、これビデオモードやったわ。まぁ、ええわ。それで、さっきの相手にメールしたらええねんな？」

「や、止めて！　そんなのダメ！」と上野。

「えーっと、こうやって……」

上野の悲鳴など聞いていないリョウが、迷惑行為炸裂だ。満足げなリョウが不意に暗い顔をする。

「進ちゃん……間違えたかもしれん」

「ちょっ！？　何したの！！？」

やっとのことでリョウから携帯を奪い取り、上野が画面に目を向ける。そのまま、泣きそうな表情で一人呟く。

「一括送信……しかも、全員？　嘘、ヤダ……」

「へ～、一括送信機能で全員に送る事ができるのですか。結構、ハイテクですね。僕の携帯は無理だなぁ～」

上野の携帯を覗き込みながら、ハルが別件で感心している。そんな中、上野の携帯が震えだす。じっと停止する上野。不意に携帯の電源を切る。目の前のお嬢様を抱きしめながら、恨めしそうに口を開く。

「皆、死ねばいいのに～」

バードウオッチング〈恵梨編〉（前書き）

恵理さんが暴露している。
消極的な割にはしっかりした意見を持っているようだ。
うーん、難しい悩みだな。

バードウオッチング〈恵梨編〉

ここは上野さんの家の中。明日は学校の行事があるのだけど、なぜか上野さんも一緒に行く事になっちゃった。上野さんは嫌な顔をしていたけど、私的にはかなり嬉しい。だって、私は……皆と少し違うから。

最近は静かに授業参加しているけれど、それでも疎外感が絶えない。梨香は友達と仲良くしているけれど、私はそういう事をできないから。黙っていたら、一人ぼっちになってしまう。でも、ハル君が話し掛けてくれるから、息が詰まる程に辛くはないかな。一人で橋の下にいた頃の方がよっぽど辛かった。

信也はとりあえず話をしてくれるけど、やっぱり私の事を避けようとしている。鬱陶しいのはわかっているけれど、もう少し構ってほしいな。もちろん、梨香とは上手くやっているみたい。そういうのを見ていると、少し安心する。だって、元々は私達……一人の人間だったんだもの。

梨香が羨ましいと思いながら、案外に自分は幸せかも。なんて考える。というのも、今の生活が凄く平和で……。目の前でバタバタと忙しなく動き回るのは上野さん。明日の準備に忙しそう。不意に上野さんが口を開く。

「ほら、ハル。明日の荷物はこのリュックに入れて。恵梨もボーっとしていないで、明日の準備をしなよ。服は用意した？　明日の昼間は暑いそうだから、薄手の物がいいよ。半袖のTシャツとか。でも、山手だから長袖の上着も用意しなよ。スカートも止めて、ズボンね。虫が多いと困るから」

上野さんに背中を押されて、バタバタと準備を始める。最近は、秋山さんが私に入ることなく、自分が自分である時間帯が少し多い。上野さんが言うには、あまり秋山さんが入り過ぎるのも良くないし。私の気持ちが安定してきたから、リハビリも兼ねて自由な時間を増やしてくれているらしい。

上野さん達といると、なぜか安心できる。秋山さんの影響かな？本当に、家族といるような安心感。

他人といる時の緊張感がまったく感じられない。それが私の気持ちを安定させているのだと思う。凄く心地の良い空気。

リュックに物を詰めながら、ハル君が上野さんを見る。

「お父さん、双眼鏡ある？」

「一つならあるよ。僕は関係ないから必要ないけど……。どうする？」

「じゃあ、僕はいらない。まぁ、鳥くらい素手で捕まえられるよ」

「野鳥は捕まえちゃ駄目だよ。鳥の横を飛びまわって、観察するだけにしておきなよ。まぁ、観察に夢中になって、木に頭をぶつけないように、注意だけはしておいてね」

「そんな情けない事しないし……。どう思う？」

ハル君が急に話を振ってきて、慌てふためく私。

「ハル君なら……大丈夫だよ。私は……無理だけど……」

「恵梨さんこそ大丈夫だよ。運動神経抜群だもの。お父さんは無理だけどね」

「人の文句を言うくらいだったら、手を動かすの。それにしても、ハル。だんだん口が悪くなってるけど。恵梨にまで敬語を使わなく

なって。いつもの口調はどうしたの？」

不満げな上野さんの言葉を聞いて、ハル君が大きな声で言う。

「家ではルーズに生きるって決めたの。大体、恵梨さんも家族だし～。兄弟だよ、兄弟。兄弟に敬語は使わないでしょ？　それに、お父さんにだけは言われたくないよね。名前すら呼び捨てな癖に」

「もう反抗期だな～！　どこで育て方を間違えたんだろう！？」

「あ……ごめんなさい。お母さんがドラマ見ているから静かにしてって」

「ハルが悪いんだし……」

ぶつぶつと二人で文句を言い合いながらも、仲良く明日の準備を済ませる。こうやって、喧嘩をしているようだけど、本気で言い争っているわけじゃない。ただじゃれ合っているだけ。最近の二人の傾向。

ハル君が高校生の時は、こういう会話が多い。逆に、ハル君が子どもの時は、上野さんが過保護になる。変な事をしようとするハル君を止めようと、かなり本気で走り回っていたりする。ハル君はきっと冗談で危なげな事をするような振りをしているのだろうけど、傍から見ると本当に子どもみたいに見えるから。思わず、止めに走ってしまうみたい。

あぁ、これで秋山さんが生きていたらなぁ～。本当に、家族みたいに楽しいと思う。そういえば、私の家族は今頃どうしているんだろう？　最近は『凄く良い宿泊場を見つけたから』とか言って、実家での生活は梨香に任せている。だから、私はほとんど会っていない。元気にしているのかな？　うん、きっと元気だよね。

しっかりと明日の準備を終えて、一段落。秋山さんはテレビドラマに夢中だそうだから、私達で夕食を取る事に。今日の夕食はナポリタンスパゲッティー。上野さんの言葉に従い、私とハル君はお手伝い。

夕食を食べ終えて、後片づけを終えた頃に。秋山さんに身体を貸してほしいと頼まれる。もちろん、直接に聞いたわけじゃなくて。ハル君から、間接的に聞いた話。私には秋山さんは見えないから。

すぐに了承の返事をすると、秋山さんが私の中に入ってくる。頭がボーっとしてきて、夢心地な感じ。

口や身体が自然に動き出して、何だかテレビを見ている気分になる。近づいてくる上野さん、優しい微笑み。私に向けられているものじゃないと知っていても、この笑顔は大好き。

秋山さんに身体を貸すと心が凄く幸せになる。意識はぼんやりとしていて、身体の自由も利かないのに。上野さんを見ているだけで、心底から湧きあがる様な幸福を感じる。あぁ、これが本当の恋なのだろうな。私もこういう恋をしてみたい……。

不意に上野さんが抱きついてきて、何か喋り出す。秋山さんが何かを言って、上野さんのネコ耳に手を伸ばす。キャイキャイ騒ぐ二人を目にして、ハル君が注意する。

何だか凄く楽しい。幸せで、幸せで、死んでしまいそうなくらいに幸せで。もう堪らなく羨ましいな。いいな、いいな。この気持ちをこのまま自分の物にしてしまいたい。上野さん、このまま私の事を好きになってくれないかな？　そうしたら、信也なんかポイして、上野さんに乗りかえるのに。

信也はダメだよ。やっぱりまだまだ子どもだもの。私の事なんて考えてくれない。本当の恋を仮にでも体験している私だから言える事。梨香は気づいていないと思う。自分の求めている物と現実との違い。

私一人の事なら、信也に言ってやれるのに。消極的な私だけど、この気持ちだけはハッキリと伝えたい。伝えなきゃ……このまま悪化して行く気がする。だけど、梨香が……。梨香はどう思っているんだろう？　信也の事……好きなのかな？　好きだとしても、本当の恋じゃない。友達みたいな感覚だと思うけど……。

私と梨香が別れてから、少し時間が立ち過ぎた。いくら同じ自分の事でも、私達の生活には違いがありすぎる。だから、きっと考え方にも違いが出ているはず。

湧き上がる幸せを感じながらも、一方で小さな虚空を描いている。この気持ちは私の物。秋山さんの気持ちじゃなくて、私の気持ち。寂しくなりそうなこの気持ちを紛らわしてくれるのは、それを上回る至福。

秋山さんが『大丈夫だよ』って言ってくれているみたい。『きっとあなたにも素敵な恋が訪れるから』という声が聞こえてきそう。そう考えると、少し安心する。上野さんと秋山さんがテレビを見ながら話をする。あぁ、幸せ。凄く幸せ。これは人の幸せだけど、今だけ……自分の幸せだと思って楽しもう。

秋山さんが上野さんの耳をクニクニしていたら、上野さんがゴロゴロと喉を鳴らす。揺れる尻尾にも手を伸ばして、フニフニと触ってみる。気持ちいい……。秋山さんがテレビをそっちのけで、上野さんの尻尾を触り続ける。うーん、何とも言えない心地よさ。いつ

の間にか、秋山さんに負けないくらい必死になっている私がいる。
もうちょっと……もうちょっとだけ、触らせて。

バードウオッチング〈その2〉

あー、かったるい行事が始まった。特に今日は日が強いから、外に出るのが嫌になる。しかし、雨が降っているわけでもないから。もちろん中止になるわけなく、行事は実行。弁当と水筒をリュックに詰めて、出発だ。

一度、学校に集合してから。専用のバスに乗って、向かうらしい。だけど、バードウオッチングって……。どうせ鳥なんて見えないだろうに。下手すりゃ、ただのハイキングだ。マジダルい。

学校に到着して、クラス別でバスに乗り込む。バスガイドさんを無視して、リョウが騒ぎ回る中。他の奴らの様子を窺う。俺の隣には、梨香。恵梨とハルが隣同士で、松元の隣がリョウだが……リョウは前に出て騒いでいるから、誰もいないに等しい状況。

もちろん、お嬢様の隣は上野だ。強制連行されていた。その後ろに黒松。今日は黒スーツじゃなくて、軍隊みたいな恰好をしている。お前は戦場にでも行くのか？　って、聞いてやりたい。ちなみに、玲は来ていない。黒松いわく、虫が多いから嫌だと言っていたそうだ。

不意に上野が後ろを向きながら、黒松に話し掛ける。

「それにしても、リチャード。更に、リチャードっぽくなってるよね。マシンガンは背負わないの？」

「緊急になりましたら、いつでも出現させられるので。今は必要な

いかと」
「えー、カッコいいのに」
「ねぇ、上野。私は？　この格好、おかしくない？」

上野を突くのはお嬢様。今日のお嬢様はかなり普通の格好をしている。いつものお嬢様オーラを出していない。黙って歩いていれば、他の生徒と区別がつかないかもしれない。そんなお嬢様に、上野が意見を述べる。

「いつも黒い服を着ているから、ちょっとイメージが変わるよね」
「やっぱり……変？」
「ううん、おかしくないよ。凄く普通。平凡で良い感じ」
「そう、良かった。玲が黒い服はダメだって言うから。スカートも止めとけって言うし……」
「そりゃあね。スズメ蜂に襲われたくなければ、黒は控えた方がいいよ。何かと色々いるからね。素足も危ないよね」
「スズメ蜂って、黒色に寄ってくるの？」
「そうらしいよ。真っ黒の服で、山の中を走り回る友人が言っていたから。その友達ね、基本的にどんな生物でも好きだけど。例外で、大嫌いなのがスズメ蜂だって。山の中で襲われてから、いつもスズメ蜂撃退スプレーを所持しているらしいよ」

そいつの名前……未来って言わないか？　そうじゃなかったら、もしかしてシバルか？　問いかけてみたいが、少し席が離れているから質問できない。俺がまどろっこしい気分になっていたら、松元が俺の心を読んだように質問してくれる。

「それって、未来さんですか？」
「そうだよ。よくわかったね」と上野。
「シバルはどうなんだよ？　あいつも黒い服着ていたけど」

松元が問いかけてくれたノリで、俺も参加する。すぐに上野が口を開く。

「え？　死神はどうだろう？　そういえば、昔は山の中で生活していたそうだけど……。そういう話は聞いてないや。ごめんね、今度聞いておくから」

「いや……。別に、知らなきゃいいんだけどな」

「まぁ、死神はハルみたいにバリアーを張れるから。そういうので防御していたのかもね」

「……」

ふーん、成る程な。不意にもう一つ質問を思い付いたので、せっかくだから聞いてみる。

「なぁ、上野さん」

「何？」

「何でシバルの事を死神って呼んでるんだ？」

「えー、だって死神だから」

「いや、よくわかんねーんだけど」

「そのまんまだよ」

そのまんまって……わかんねーよ。首を傾げる俺の隣で、梨香が口を開く。

「シバルさんは死神なのかな？」

「死神って、本物？　そんなのいるわけないだろ？」

「超能力者がいるんだから、死神もいたりして」

「……うーん、そうだな」

言われてみれば、そうだな。もう一度、シバルに会う機会があれば聞いてみようか。バカみたいに思われるかもしれないけど……。

バスの中での出来事はそれくらいだ。後は、はしゃぎ過ぎたリョウが乗り物酔いをして、ぐったりしていた事くらいか？　とにかく大したことは起きちゃいない。

目的地へと到着して、グループに分かれる。グループはあらかじめ前もって決めてあり、一つのクラスを六分割くらいにしたものだ。一つのグループにカメラを一つ手渡され、それで鳥の写真を撮ればいいらしい。まぁ、撮れなくても構わないみたいだけど。とりあえずは、バードウオッチングが目的だから、こういう形式になっているんだろう。

後は地図を貰って、グループで目的地へと向かうだけ。迷子になるような道はなく、一本道だそうだから、気を張り詰める必要もなさそうだ。

目的地へは、真っすぐに向かって、一時間。しかし、食事をする時間や土産物屋に寄る時間などを合わせて、二時間。次に、出発時間がまちまちな別クラスなどを待つのに余裕を置いて、全ての合計で三時間。

真っ先に出発する俺達のクラスには三時間の余裕がある。後で出発するクラスはちょっと不便だな。まぁ、代表者がジャンケンをして決めたんだから、文句も言えないんだけど。

俺達のグループはいつものメンバー。俺に梨香、恵梨。リョウ、

松元。上野にハル、お嬢様、黒松。余計なメンバーも含まれているので、他のグループより人数が多い。ぞろぞろと駄弁りながら、出発する。ちなみに、カメラを持っているのはハルだ。俺はめんどいから、後はあいつに任せよう。

バードウオッチング〈ハル編〉

鳥新山の麓（ふもと）。ちらほらと民家が目に付き、田んぼや水車も目に留まる。のどかな風景。今回のバードウオッチングは山奥までは入らない。ほとんど麓をウロウロするくらいのレベルだ。

少し山に入る道もあるけれど、すぐ外に出るから、大した事もないだろう。僕にとっては、ちょっと物足りないくらい。思いっきり、本気で山登りとかしてみたかった。体力のない人間だった頃のハルトには考えられない話だろう。

僕に与えられた任務は野鳥の写真を撮る事。だけど……野鳥がいない！　声は聞こえてくるのに、姿が見えない。くそっ！　どこにいるんだ!?　カメラを持ちながら、必死に野鳥の姿を探す僕。その周りでは、呑気に駄弁る残りのメンバー。

皆を見ていると腹が立ってくる。何で僕だけ真面目に野鳥を探しているの？　これでも僕は片目見えないんだよ。誰か手伝ってくれないの？　僕が不満げな表情を浮かべていたら、恵梨さんが話し掛けてくる。

「ハル君は……真面目だね。野鳥は……見つかった？」
「まったく見当たりません。声は聞こえてくるのですが……」
「私も……一緒に探すよ」
「大丈夫ですよ。恵梨さんは皆とお喋りしていて下さい。僕が全力を尽くして、野鳥図鑑を完成させますから」
「ううん……。私にも……手伝わせて」
「いいのですか？　まぁ、手伝ってもらえると非常に大助かりですけど。正直に言って、僕は片目が見えないので、そういう小さい物

を探すのって苦手なのですよね」
「昨日は……強気だったのにね」

恵梨さんがクスクスと笑いながら呟く。いや、昨日はね。もっと余裕だと思っていたのですよ。一度でも、目に見えたのなら。まだ可能性がありますけど、見えなかったら手も足も出ませんよ。心の中の言い訳を簡単にまとめて口にする。

「一目でも見る事ができたなら、皆が驚くような立派な写真を撮ってやりますよ」
「そうなれるように……早く野鳥を見つけようね」
「はい、頑張りましょう」

そういうわけで、恵梨さんと一緒に野鳥探しの旅だ。とにかく耳をそばだてる。チチチッという鳥の声。他にも色々と鳴き声は聞こえてくるけど……。声が聞こえてくる方面に顔を向けて、目を凝らす。何もいない……。

僕が目疲れで目薬を必要とした頃に、恵梨さんが囁いてくる。

「ねぇ、ハル君……。あの……茂みの中にいるのって」
「茂み？　どこですか？」
「あれだよ……。あの場所……」

恵梨さんが指差す方向。じっと目を凝らすと動く物が……。野鳥だ！　野鳥の種類は分からずとも野鳥は野鳥。写真に収める必要がある。カメラを構えて、ズームアップ。やっぱり、野鳥だ！　すぐに写真を撮る。せっかくだから、ダッシュで近づいて。かなり近くで撮影。上手くいった。

これでとりあえず恥を掻く事はなくなった。鳩やスズメのような見慣れた鳥じゃないから。まぁ、許されるレベルだろう。最低ノルマは達成だ。こうなると少し安心できる。後は、異なる種類の野鳥を三匹ほど撮れれば最高なのだけど……。

僕達がはしゃいでいたら、梨香さん達が近づいてくる。

「どう？　野鳥は見つかった？」
「はい、なんとか一匹は」と僕。
「もう見つかったのか？　ってことは、後はゴールまで行けばいいって事だな」

呑気な発言をするのは斎藤君。せめてお礼くらいは言ってほしい。何もしないで、課題を終えたのに。お礼もないなんて非常識人だ。そう思っていたら、梨香さんが笑顔で僕に言う。

「ありがとう、ハル君。私達、何もしていないのに。悪いね」
「いえ、見つけたのは恵梨さんですから。僕は写真を撮っただけです」
「自分に言うのも変だけど。ありがとうね、恵梨」
「う……うん……」

恵梨さんが恥ずかしげに頷く。だけど、流石に恵梨さんの片割れだな。梨香さんはちゃんとお礼を言ってくれた。常識人だ。一方、非常識人の斎藤君がリョウさん達に向いて手を上げる。

「課題、終わったぜー。とりあえず、一匹は撮れたってー」

あなた、何もしていないでしょ？　あたかも自分の功績のように言うのは止めて下さいよ。僕も人の事を言えませんけど、あなた程

じゃありませんよ。まったくもって中学生レベルだな。呆れながら斎藤君を見ていたら、不意に背中をポンポンと叩かれる。振りかえるとお父さん。なかなか重要な情報をくれる。

「もう少し行けば、浅瀬があるから。その辺りに、よく野鳥が集まるらしいよ。休憩所もあって、景色も綺麗だから。そこでお昼を食べるといいって」

「お父さん……その情報はどこから？」

「どこって……。その辺りに歩いている住人の人に聞いたの」

「案外に行動力がありますね。お父さんの癖に生意気な……」

「うるさいなぁ～。そんな事を言うのなら、今度から良い情報を仕入れても教えてやんない」

「あ、ごめんなさい。凄いです。ありがとうございます。流石、お父さんです」

説得力のない僕の言葉を聞いて、お父さんが僕の頭をわしゃわしゃしてくる。髪が乱れてギャーギャー騒ぐ僕。不意に恵梨さんが僕の腕を引っ張りだす。振りかえると、恵梨さんの指差す方向。かなり遠くに野鳥のような物の姿が。恵梨さん、見つけるの早過ぎだ。僕の出る幕がないのだけど……。

バードウオッチング〈その3〉

写真を撮り終えて、後は集合場所へと向かうだけ。これならかなりゆっくり歩いても大丈夫だ。急に旅行に来た気分になって、大声でバカ騒ぎを始めると、梨香に注意をされた。せっかくの校外授業なのに、ノリの悪い奴だな。

途中、上野の話通りに休憩所を発見だ。そこから、少し離れた場所に浅瀬が見える。噂通り、野鳥の姿も見る事ができた。もちろん、ハルが走って行って写真を撮りまくる。

ここでお昼を食べる事に決まり、個人で用意した弁当を広げだす。ちかくに、小さな売店があるらしい。それを聞いて、リョウが口を開く。

「誰か飲み物買ってきてや～。もう手持ちだけじゃあ持たんわ～」
「お前が行けよ」と俺。
「サイちゃん、友達やろ？　わい、水不足で動かれへんねん」
「今まで動いてたじゃん」
「頼むわ～。財布を預けるやさかい、行ってきてな～」
「じゃあ、俺の分も買ってもらうからな」
「ええよ、ええよ。好きなだけ買いや。千円しかないけどな」

何でそんなに少ねーんだよ！？　リョウの財布を預かり、中を覗くと成る程な。カードの山が目に留まる。流石、超人気歌手だ。現金は持ち合わせていないらしい。

つーか、千円どころか五百円しかねーけど？　バカらしいから、現金五百円だけ預かって、財布をリョウに返す。余ったおつりで俺

もジュースを奢ってもらおう。ってか、それくらいしか買えないんだよな。

歩いて三分ほどで売店に辿り着く。適当にジュースを買って、帰り道。浅瀬の近くで佇む知り合いを発見。上野だ。何をしているんだ？　近づいて行って、声を掛ける。

「何してるんッスか？」
「え？　あぁ……。ちょっと、考え事をね」
「何考えてたんッスか？」
「いや……大した事じゃないよ」
「大した事じゃないのなら、教えてくれよ。気になって仕方ねーし」
「うん、そうだね……」

ボーっと浅瀬を眺めながら、上野が話し出す。

「僕はね、ハルに出会うまで……。ずっと一人でいたんだよ。日和が……彼女が亡くなってからね。人と係わるのが嫌で、家に一人で引きこもっていたの。仕事とか、未来達とか。必要最低限の係わりはあったけどね。それでも、本当に今とは打って変わって、一人だったんだよね……」

少し間を置いてから、呟くように続きを話す。

「あの頃はあの頃で良かったと思うよ。日和が死んでしまった当初は、ちょっとあれだけど……。それから時間が流れて、ハルが来る少し前くらいの生活。凄く安定した生活。今の生活を知らないから、あの頃の生活はそれで良かったと思っている」

不意に地面に目を落として、上野が暗い顔をする。

「怖いのはこの後の生活。今は凄く幸せで、本当に掛け替えのない物だとわかっている。だから、凄く大切に日々を過ごしているつもり。だけど、いつかはこの幸せにも終わりが来るでしょ？　元々、ハルにはちゃんとした家があるから、いつかは……帰ってしまうだろうし。日和も今は幽霊として存在するけど、きっといつかはいなくなってしまう。二人共、僕の前からいなくなってしまったら……。僕はどうすればいいんだろう？　今度は一人なんて耐えられないかも……」

「そうなったら、お嬢様と暮らせばいいんじゃねーの？」

「あははは、そりゃいいや。瑠菜のストーカーもなくなるだろうしね」

「後はあれだろ？　Ｒｅａｌｉｇｈｔにも入って、リョウと一緒にライブすれば嫌な気分も吹っ飛ぶぜ」

「賑やかだろうね。歌えば気分も晴れるかな？」

「そりゃあな。てゆーかさ……」

「うん？」

なんて言えばいいのかわからないけれど、思っている事を素直に口にしてみる。

「今のあんたは、あんたが思っている以上に一人じゃねーと思うけどな。お嬢様もいるし、俺らもいるし。それに、仕事だろうが、合唱グループだろうが。喋れる相手がいるんだろ？　それなら、一人って言わねーよ」

「うーん、そう言われてみればそうかな？」

「まぁ、お嬢様がいる時点で一人にはなれねーだろ？」

「うーん、それは確かに……」

苦笑しながら、上野が俺に振り向く。

「ごめんね、変な話をして」
「別に構わねーけど」
「君に話して、気分が晴れたよ。そうだね、今は一人じゃないよね」
俺から目を離して、上野が呟く。
「もう立ち止まるのは止すよ。来年は前に進まなきゃ……」
丁度、そのタイミングで他の声が聞こえてくる。少し離れた場所から大声で叫ぶのは松元だ。
「おい、斎藤―！　早く飲み物を持ってこいよ！　リョウさんが水不足で乾燥しそうだって！」
「はいはい、わかったー」
俺が松元に答えて、上野に向く。上野が俺に口を開く。
「お昼……食べてくるといいよ。僕は食べないから」
「腹減らねーの？」
「朝食は食べたから、大丈夫」
「マジで食わないの？」
「フフッ……僕は食べるのが遅いから。帰ってから食べるよ」
「そっか。じゃあ、先に行くぜ」
「うん」
頷く上野を置いて、松元の元へと駆けて行く。そういえば、上野と二人で話をするのは初めてじゃないか？　お嬢様やリョウと係わっているシーンをよく目撃するから、もっとギャーギャーとうるさい奴かと思っていたけど。そうでもなかったな。

そんな事を考えながら、休憩所に辿り着いたら。リョウの奴が見慣れた水筒をラッパ飲みしてやがる。って、それは俺の水筒じゃねーか！　俺が打ち切れながら、リョウに怒鳴り込んだら。リョウの奴がお茶を吹き出す。おかげで辺りがドロドロだ。俺のリュックにも微かに水しぶきが付いているし。マジでリョウの奴やってくれるなぁ……。

バードウオッチング〈恵梨編2〉

昼食を食べ終わり、出発する事になる。丁度、出発がてらに梨香に話し掛けるタイミングができた。私が梨香に口を開く。

「ねぇ、梨香……。ちょっと相談したい事があるんだけど……」
「え？　何？」
「ちょっと……二人きりで話したいの……」
「いいよ。だけど、何の話？」
「うん、まぁ……」

うやむやに誤魔化して、二人きりになる機会を窺う。皆が歩きだしたので、その後ろを梨香と歩く。ゆっくりと歩いて、少し人から離れてから。梨香に質問する。

「あのさぁ……」
「何？」
「梨香はね……」

息がつまりそうになるのを堪えて、無理矢理に言葉を吐き出す。

「信也の事……好き？」
「うん、好きだよ」
「そう……」

軽い返事。きっと友情感覚なんだろうな。だけど、私がしたいのは秋山さんのような恋……。何となく好きの度合いを聞いてみる。

「それって……どんな感じ？　友達みたいな感じ？　それとも……

恋している感じ？」
「え？　どうだろう？　一緒にいて楽しいって感じ？　恵梨はどう思う？」
「恋じゃないと思う」
「ハッキリ言うね。だけど、急にどうしたの？　恵梨？」
驚きかえる梨香の隣で、出来る限りの気持ちを伝える。
「なんていうか……。私ね、もっとちゃんとした恋をしたいの……。友情ごっこじゃなくて、もっとドラマみたいな……。高校生にもなって、お友達関係じゃあ……。このままグダグダと日々が過ぎて行きそうで……。そんな事をしているうちに、大人になるなんて嫌だもの……」
「そんなドラマみたいな恋なんてあるわけないじゃん。テレビの見過ぎだよ」
「あるよ！　現実に……」
思わず言い返して、途中で口を止める。これ以上言ったら、上野さん達に迷惑が掛る？　硬直する私を見て、梨香が口を開く。
「恵梨……。もしかして、本気で誰かに恋してる？」
「違う、違う！　私じゃないよ！」
「嘘、怪しい。顔が真っ赤だよ。私が恋する相手って、誰だろ？　信也以外でしょ？　松元君はないだろうし……。もしかして、ハル君？」
「違うよ。そんなわけないじゃん……」
私が首を振って否定していると、そこへ誰かがやってくる。こちらに振り返って走ってくるのは上野さん。その姿を見て、思わず赤面してしまう。そんな私の様子に、梨香が真顔で話し出す。

「もしかして、上野さん？　それ、ヤバいよ。菊池さんのライバルになるじゃない」
「違うよ！　そんなの、違うよ！」と私。
「何が違うの？」
話に入ってくるのは上野さん。首を傾げる上野さんに向いて、私が怒鳴り散らす。
「今は梨香と話し合い中です！　乙女の会話に入らないで下さい！」
「へっ！？　いや……ごめん。じゃあ、あの……先に、あそこの土産物屋に入ってるから。後で、二人も来てね……」
「私は何も思わないけど……。確かに、良い人だよね。上野さん」と梨香。
「へ？　何の話？」
話に参加しようとする上野さんの背中を押して、私が口を開く。
「何でもないです！　上野さんは先に行ってて下さい」
「別々の生活をしているうちに好みが変わったのかな？　恵梨が上野さんの事を好きだなんて……」
「あー！　上野さん、早く！　早くあっちに行って！」
口の減らない梨香から離すために上野さんを焦らせる。混乱気味の上野さんが、私に背中を押されながら声を出す。
「ど、どうしたの？　恵梨？　僕……何か気に入らない事でもした？」
「まさに今です！　私達の会話に入らないで下さい！」
「は、はい。すみません……」

上野さんを追い返して、梨香とお喋りをする。話の内容を変えて、誤魔化すつもり。だけど、別に私が上野さんの事を好きなわけじゃなくて……。この気持ちは秋山さんの物で……。でも、今は秋山さんいないけど……。だけど、やっぱり秋山さんの影響だって……。きっとそうだよ……ね？

バードウオッチング〈恵梨編3〉

もやもやした気分のまま、梨香と一緒にお土産物屋さんに入る。お店の中では、一升瓶のお酒を抱えながら、泣き喚く幼いハル君が目立っている。そんなハル君に注意をするのは上野さん。

「高校生の姿でもダメなのに、子どもの姿なら尚更ダメだよ。せめてノンアルコールにしなさい」

「いーやー！　これがいいのー！」

「だーめーだぁー。ほら、あっちでお菓子を見ようか？」

「いやぁー！　これー！」

「ほらほらほらほら、あっちに美味しそうなお菓子があるよ。パパと一緒に見に行こう」

「やぁー！　あーん！　わーん！」

嫌がるハル君から、一升瓶を取り上げて、お菓子売り場へ移動する上野さん。どうしても買ってもらえなさそうな雰囲気に気づいたのか、ハル君が次第に静かになる。拗ねながら、試食品のお菓子をパクパクと食べていき。気に入った物をいくつか選んで、上野さんの手に持つカゴの中に入れていく。

不意に別の場所から話し声が聞こえてくる。振りかえる先には、松元君とリョウさん。なぜかリョウさんが松元君におねだりしている。たぶん……このお店、カードが使えないのだろうな。だから、リョウさん……お買い物をできないみたい。

また別の場所では、珍しい組み合わせ……菊池さんと信也。菊池さんの後ろでは、黒松さんが控えている。信也はきっとお金がないのだと思う。菊池さんは欲しい物がないのかな？　まぁ、お嬢様だ

から、いつでも手に入れられるし。わざわざ買う必要もないのかも。

それにしても、信也……何だか楽しそう。菊池さんとお喋りできて嬉しいのかな？　ちょっと面白くない……。不意に梨香が二人に近づく。信也に向いて口を開く。

「信也は何か買わないの？」
「金ねーし」
「相変わらずだね」
「うるせーな。大体、俺ん家は小遣い少ないんだよ」
「どうせ無駄遣いしているんでしょ？」
「してねーよ」

二人の様子を眺めていたら、不意に声を掛けられる。振りかえると上野さん。ヘラヘラ笑いながら、私に問いかけてくる。

「恵梨は何か買うの？」
「えっと……多分、買わないです」
「何で？」
「だって……梨香もいるし。あまりお金を使うのは……」
「そう？　じゃあ、僕が買ってあげるから。何か選びなよ」
「いえ、いいです！　大丈夫です！」
「別にいいじゃない。梨香の分も買うから、伝えてあげてね」

首を振る私の頭を撫でながら、上野さんが口を開く。赤面する私の背後から、殺意のオーラを放つのは菊池さん。脅える私を睨みつけて、上野さんに抱きつき訴える。

「上野！　私も欲しい！　何か買って！」
「瑠菜はいらないでしょ？　僕よりもお金持ちなのに……」

「買って！　恵梨さんだけズルい！」
「まったく……すぐに焼き餅を焼くんだから」
「買って！　私にも買って！」
「わかった、わかった。それで、何が欲しいの？」
「上野のヌード写真……」
「よーし、向こうで一般常識について話し合おうか？」

うだうだと話をしながら、上野さんと菊池さんが品物を見て回る。私は……私も選んでいいのかな？　とりあえず、梨香に伝えよう。

先程の話を梨香に言ったら、困り顔をされてしまう。梨香にしてみれば、上野さんとそれほど親しくないから。どうしても遠慮してしまうみたい。二人で話し合った結果、二人で一つの物を買ってもらおうという話になる。

ウロウロと品物を眺めていたら、不意に梨香が手を伸ばす。猫のぬいぐるみを一つ手に取って、私に見せる。

「これ可愛いよ！　恵梨はどう思う？」
「わぁ、可愛い……。あ、こっちにも色違いがあるよ……」
「こっちの色の方が可愛くない？」
「えー、私はこっちかな……」
「えー、そうかな？　私はやっぱりこっちだけど」

二人で話せば話す程に、好みが見事に分かれてしまう。何だろう、この気持ち？　以前にも、同じような事がなかったっけ？　二人で悩み出したら、止まらなくて。ジャンケンをしても、あいこ続き。結果、決まらずに焦りだす。

梨香も私も意地を張って、どうしても自分好みのぬいぐるみを買

ってもらいたいとごね始めた頃に上野さんが現れる。

「どう？　決まった？」

「ちょっと待って下さい……。今は相談している所……」と私。

「これにします。このぬいぐるみ」

梨香が上野さんにぬいぐるみを見せる。えっ！？　勝手に選ばれた！？　ショックを受ける私を無視して、勝手に話を進める梨香。不満げな私に向いて、悪魔のように微笑む。

「これでいいよね。恵梨？」

「うん……」気乗りしないままに頷く私。

「え？　恵梨は選ばなくていいの？」

「いいんです。私達、二人で一つにするって決めたので」

優しい声を掛けてくれる上野さんとは裏腹に、梨香が冷たい言葉を吐く。自分の分身だけど、すっごく腹が立つ。何でこうなるのかな？　プーッと膨れる私に気づかず、上野さんがぬいぐるみを持って行ってしまう。

あんなぬいぐるみなんて、今度にでも捨ててやる。上野さんに買ってもらって悪いけど、凄く悔しい。梨香なんて大嫌いだよ。人の気持ちも考えないで。まったく、もう……。

そうこうしているうちに、お土産物屋さんを出る事になる。梨香は私と話したくないのか、信也の所へ行ってしまった。気持ちがブルーな私の隣には、幼いハル君が先程買ったお土産の袋を手に持ち歩いている。不意にハル君が話し掛けてくる。

「どうしたの？　恵梨お姉ちゃん……すっごく怒ってる」

「あのね～。聞いてよ、ハル君。梨香の奴がね。お土産物屋さんで、勝手に商品を選ぶんだよ。私はあっちのぬいぐるみの方がいいと思うのに～」
「じゃあ、恵梨お姉ちゃんはお父さんに何も買ってもらわなかったの？」
「だって……上野さんに悪いし。あまり贅沢言えないよ……」
「えー、そんな事ないのにー」

ハル君が言って、手に持つ袋からお菓子を取り出す。それを私に手渡し、口を開く。

「僕のをわけてあげる」
「ありがとう、お姉ちゃん嬉しいよ……。ちょっと元気が出てきたかも……」
「よかった。もっとあげるね。いっぱいあげるから、恵梨お姉ちゃんも元気出して」

ハル君がどんどん私にお菓子をプレゼントしてくれる。私はそれをひたすらに食べ続ける。もう知らない。太ってもいいもん。口の中にお菓子を放り込んで、ストレスを解消していたら、不意に肩を叩かれる。フニャフニャした感触……。何だろうと思い、横を向いたらあのぬいぐるみ。

「そんなに食べると太るのニャ～」
「上野さん!?　え……そのぬいぐるみはどうしたんですか？」
「さっき買ったの。本当は恵梨……これが欲しかったんでしょ？梨香と二人で喧嘩をしていたから、きっとそうだろうと思って。遠慮なんてしなくていいのに」
「え……」
「はい、どうぞ。プレゼント」

上野さんが私にぬいぐるみを渡してくる。欲しかった物を貰えて、急に嬉しくなってくる。だけど、それに負けないくらいに恥ずかしい。うぅ……あの子どもみたいなやり取りを見られていただなんて。赤面する私の頭を撫でながら、上野さんが微笑む。

「フフッ、恵梨って面白いね。顔がリンゴみたいになってる」

「お、面白くないですよ……。それに変な事を言わないで下さい……。もう恥ずかしい……」

「ごめん、ごめん。それよりも、ほら。早く仕舞って。梨香に見つかると怒られちゃうよ」

上野さんに言われて、リュックの中にぬいぐるみを仕舞う。リュックを背負い直すと、上野さんに頭をポンポンと撫でられる。

「さぁ、これで元気が出てきたでしょ？　後半もバードウオッチングを頑張ってね」

「はい……。ありがとうございます……」

「うん、じゃあね」

そう言って、どす黒いオーラをまといながらこちらを睨みつけている菊池さんの元へと歩きだす上野さん。そんな上野さんに問いかけてみる。

「あの……上野さん」

「うん？　どうしたの？」振り返る上野さん。

「あの……。いえ、やっぱり止めておきます」

「気になるよ。最後まで言って」

「えっ……と……。上野さんは……秋山さんが生きていた頃、よくプレゼントとか渡したりしていたのかな？　っと思って」

「プレゼント……？」
「あ、いえ……何でもないです」

ちょっと気になるから聞いてしまった。こんなにも秋山さんの事が好きなのだから、きっと毎日の如くプレゼントしていたんだろうな。秋山さんが羨ましい……。とか考えていた私の耳に入るのは、意外な言葉。

「プレゼントは……あまり……していないね」
「え？　そうなのですか？」
「あの頃の僕は、自分の生活だけで大変だったから。たくさんバイトを掛け持ちはしていたけど、お金がなくてね。一日を過ごす事で精一杯だよ。バタバタとしていた時期もあったし……。まぁ、デートの時にゲームセンターで取ったぬいぐるみとか。そういうプレゼントはあるけど……。まともに買ってプレゼントした物は……オルゴールくらいかな？　それも今は僕が持っているね」
「へー、そうなのですか……」

そうなんだ……。上野さんの話を聞きながら、バカな私の口が動いてしまう。

「上野さんのお家って、貧乏だったんですか？」

ハッと我に返った頃には、どうしようもできない展開に。普通でも、聞きづらい事だけど……。よくよく思い返せば、上野さんは確か幼い頃に虐待を受けていたはず……。

一か月……いや、もう少し前の話。秋山さんが入っていたからぼんやりとした記憶だけど、なんとなく覚えている。二人でそんな話をしていた事があった。だから、きっと家の事には触れてほしくな

いと思う。私の言葉を真に受けて、上野さんの表情が暗くなる。

「裕福か……そうじゃないかと聞かれたら、どう考えても後のほうだね。学生の頃に、僕は……家出をしているから」

「家出……ですか？」

「そう、家出。ちょっとね……。色々あったの」

上野さんが静かな口調で答える。その後に、苦笑しながら口を開く。

「こうやって自立した今になって、日和がいないなんて。世の中って、不都合で溢れているよね」

しんみりとした空気が流れる中、ハル君が口を開く。

「帰ったら、ママに会えるよー」

「フフッ、そうだね。早くお家に帰ろうね」

上野さんがハル君の頭を撫でて、抱き上げる。嬉しげなハル君が上野さんの肩に足を掛けて、肩車。『あっちー』とハル君が指差す方とは違う方向に上野さんが歩いて行く。だって、そちらに怖い顔をした菊池さんがいるから。無視したら、後で怖い事になりそう……。

バードウオッチング〈その４〉（前書き）

そりゃ、上野君が悪い。

バードウオッチング〈その4〉

集合時間まで、残り三十分程度。するべき事もない俺達がブラブラしていたら、丁度いい場所を発見する。集合場所から歩いて三分程度の場所に、野原を発見だ。広々としていて、ボール遊びをする子どもやイチャイチャするアベックの姿が見られる。

ここで少し寛ごうという話になり、各自好きな事をすることに。偉くバードウオッチングに熱心なハルがカメラを手に持ち走り回る中。俺と梨香は野原に座りながら、お喋りを始める。不意に梨香が口を開く。

「こうやって耳を済ませると、色々な野鳥の声が聞こえてくるよね。こんな所にも、野鳥っているんだ」

「そりゃあな。街中でも、鳩とかスズメがいるんだもんな」

俺が答えて、仰向けに寝転がる。ボーっとしていたら、野鳥の姿が目に留まる。青い色をした野鳥……。何て名前だろう？　ハルはこの野鳥の写真を撮ったのか？　撮っただろうな。あいつが見逃すわけがない。

不意にその野鳥が近くの地面に降り立ち、鳴き始める。その声を聞いて、梨香が口を開く。

「何だか人の名前を呼んでいるみたい。変な鳴き声の野鳥だね」

「本当にな」

じっと耳を済ませる。その野鳥の鳴き声は、まるで人の名前を呼んでいるようだ。俺の耳に聞こえてくるのはこんな言葉……。

「メモリー様！　メモリー様！」

いや、どう考えても人の声だ。そう思えば思う程に、人の声に聞こえてしまう。気になって仕方がないので、上体を起こして野鳥を凝視する。何て名前の野鳥なんだ？　俺と梨香が野鳥の様子を眺めていたら、不意に上野が通りかかる。

「あれ？　ブレットじゃん。どうしたの？」

「大変な事になりました。メモリー様の命に危険が迫っています」

「え？　いきなり、何で？　僕……何か悪い事をした？」

青い顔をする上野を見ながら、ブレットと呼ばれた鳥が話を変えてくる。

「はっ！　これは失礼を。鳥の姿で話を進めるなど、もっての他でした」

そう言った直後、ブレットが人の姿に変身する。鳥が……人になった。しかも、どこかの西洋に出てくる騎士のような姿の男。っていうか、マジで騎士じゃねーの？　ゲームを見ているような現象に、唖然とする俺と梨香。上野がブレットを見ながら、呆れ顔をする。

「こんなに人目の付く場所で、鳥が騎士になるなんて……。はぁ～、頭が痛くなる」

「ところで、メモリー様。話を進めてもよろしいですか？」

上野の声が聞こえていなかったのか、ブレットが真顔で膝をつきながら、上野を見上げる。そんなブレットの姿を見て、上野が周りを気にしながら口を開く。

「わかったから、早く話して。凄く人に見られているし……」
「はい。少し前の話です。突然に、姫様が『ひよちゃんに会いたい』と仰いまして。それを耳にした未来様が、『皆で会いに行こう』と仰い。姫様と未来様に私を含み、メモリー様の家を訪問させて頂きまして」
「え……？」
「そこで、秋山様に出会い。姫様と秋山様が楽しくお話をなさっている間に、未来様が部屋の中を歩きまわりまして……。それから数分も経たぬうちに、何を見つけたのか……未来様が闇夜も砕くような形相で現れ、『メモリーを呼んできて』と一言」
「あわわわわっ……」急に蒼白しながら震えだす上野。
「秋山様が未来様を落ち着かせようとなさっていましたが、どうにも未来様の怒りは治まらない様子で。とにかく、この話をメモリー様に伝えてくれと姫様からの伝言です」
「こ……殺される。未来に……バレた？　ヤバいよ……」

ネコ耳を伏せて、尻尾を落とし。本気で脅える上野に向いて、ブレットが問いかける。

「それにしても、メモリー様は何をなさったのですか？　未来様があれほどにお怒りになるなんて……」
「ちょっと……ね。未来のパソコンにウイルスを送り込んだりしていたの……。未来は僕がパソコンの素人だと思い込んでいたから……。あの部屋を見られたのなら、きっとすぐに勘付くよ。わざとウイルスを送り込んでいたって事……。あぁ、ブレットにはわからないかも。気にしないで……」
「話の詳細まではわかりませんが。とにかく未来様に悪戯をなさっていたのですね？　それなら、顔を合わせて詫びるしかありません。ここで逃げても、いずれは捕まってしまうので」

「そうだね……。相手は未来だもの。逃げ場なしだね……」
「こういう時は、早く手を打つべきです。今からでも、未来様に謝罪して下さい」
「うん……わかった。僕は未来に会いに行くから、ハルに伝えて。先に戻るって」
「はい。かしこまりました」

ブレットが鳥の姿に戻って、ハルの元へと飛び去って行く。残ったのはしょぼくれた上野。凄く落ち込んだ顔をしながら、一人で呟く。

「あ～、何でこんな事に～。未来に会いたくないなぁ～」

一人で呟き、野原の端にある一本の木の方へと歩いて行く。何をしているんだ？　ここからじゃあ、遠くて見えない。俺が首を傾げていたら、急に上野が近づいた木が白く光り出す。え？　何が起きているんだ？

皆が仰天しながら、白く輝く木を眺めていたら、上野がその中へと入って行く。一体、どうなってるんだ？　わけもわからないうちに、木が元の色に戻る。が、上野はいない。何のマジックだよ？

一足違いで、木に駆けよるのはお嬢様。木に近づいて、上野の名を呼び、叫んでいる。しかし、しばらくすると諦めて、残念そうに木から離れる。不意に梨香が俺に問いかける。

「今の……夢かな？」
「夢だな。白昼夢って奴じゃね？」
「うん……そうだよね」

時間がやって来たので、集合場所に集まり。バスに乗って、学校へと戻る。妙な事も多々起きたが、別に俺は関係ない。関係がないから、気にもしない。バスの中では、皆して疲れたのか、到着するまで静かな時間が続いた。

気づけば眠っていて、起きたらもう学校。ボーっとする頭で、サヨナラの挨拶をする。こうして、終わったバードウオッチング。そして、翌日にバッドウオッチングする事になる。

何の話かって？　不幸な上野が泣きながら学校へとやってきたのだ。上野のバッドな人生をウオッチングするから、バッドウオッチング。俺には関係ないが、それにしても……。まぁ、この話は次回持ちだな。

訪問者〈その1〉

バードウオッチングが終わり、数日が経ったある日の事。教室に、超可愛い女の子がやってくる。おいおい、誰だ？　という質問を投げかける事なく明らかになる真実。その子の頭にはネコ耳だ。ハルが事態を説明してくれる。

上野が未来の逆襲により、女子に姿を変えられたらしい。しかし、上野にも非があるためにハルも止めはしなかったようだ。そういうわけで、女子バージョンの上野が泣き喚く。だが、出来事はそれだけではない。

時間経過と共に落ち着きを取り戻した上野が、黒松と一緒に本屋へ行く。そこで出会ったのが菊池家に並ぶ財閥、吉川家の長男、吉川伊吹。超天才で有名なお坊ちゃまだ。

しかも、そいつが上野に一目惚れ。翌日、学校にやってきやがった。お嬢様とは不仲なようで、上野以外には興味がないらしい。興味がない相手には冷たく当たるようで、要するに、上野以外には毒を吐く冷血な生き物だ。

それでも、イケメン天才お坊ちゃまという肩書きがある以上。女子には大人気。なんつーか、ズルくね？　性格が悪くても、他が良ければいいなんて発想はなしだろ？

そんな出来事があり、数日後の話。上野が学校を休む。というか、上野の奴、女子になってから、なぜか生徒に紛れて授業を受けているのだ。セーラー服まで着て、今や生徒の一員。誰も突っ込まない辺りが、大したものだと思う。

おかげ様で、吉川が勘違いして。上野がこの学校の生徒であると思い込んでいる。そんな吉川は毎日の如く学校訪問。上野に会うという目的のためだけに、青鶯学園へとやってくる。という状況の中で、上野が授業を休んだわけだが……。

朝っぱらの学校にて、一時間目の授業が始まる少し前。最近は、遅刻もせず真面目に登校している俺。机の上にうつ伏せになりながら、へばっていたら、生徒のざわめきが聞こえてくる。どうせ吉川だろうと思い、顔をあげて、扉付近に目を向けたら案の定。吉川が教室中を見まわしながら、上野を探していた。

そんな吉川に声を掛けるのはハル。

「今日は、お姉ちゃん……お休みですよ。ちょっと用があって、休んでいます」

『お姉ちゃん』というのは上野の事。上野が女子になって以来、ハルは上野をこう呼んでいる。何せ、大人というよりも高校生くらいに見えるのだから仕方ない。母親には見えないな。実を言うと、姉でも厳しい。妹くらいが丁度適切だと思うけど、とりあえず姉止まりなったらしい。

「何だ、ミャラちゃんはいないのか……」

吉川が残念そうに呟く。ちなみに、『ミャラちゃん』というのも上野の事。上野が自ら名乗った仮の名前だ。ミャラといえば、『テクノ×テクノ』のミャラを思い出すな。というか、もしかしなくて

も、その名前から取ってきたんだろう。

何せ今の上野はテクテクのミャラにそっくりだ。もうコスプレなんてレベルじゃない。本物がゲームから抜け出してきたのかと勘違いするくらいにそっくりだ。ミャラに性別はなかったが、背が低くて小柄な感じが見事に一致している。もう少し女バージョンの上野に胸がなかったら、完璧なミャラになる。

上野がいない事を知り、クルリッと反転する吉川。教室から出て行こうとする吉川に声を掛けるのはお嬢様だ。

「あら、もうお帰り？　今日はもの凄く早いわね」
「ミャラちゃんがいないのに、こんな所に居ても意味ないだろ？　さっさと帰ったほうが有意義だね」

厭味ったらしく口を開くお嬢様に、淡々と答える吉川。そんな吉川の言葉を聞いて、リョウが余計な事を言う。

「何や、もう帰るん？　せっかくやからヨッちゃんも皆と一緒に授業受けようや」
「嫌だね。それと、気味が悪いからボクの事をそういう呼び方しないでよ」
「まぁ、ええやん。そんなん言わんと、席に座り。丁度、ミャラちゃんの席が空いてるやさかい」

そう言って、リョウが吉川に近づき。かなり強引に席に座らせる。不満げな吉川に向いて、リョウが言う。

「そや、せっかくやから。ミャラちゃんのノートを書いてあげ。そしたら、ミャラちゃんが喜ぶと思うで」

「……」

吉川が黙り込む。一理あると踏んだのか、上野の机からノートと筆記用具を取り出して、授業の準備を始める。それを見て、お嬢様が吉川に文句だ。

「早く帰りなさいよ！　あなたはここの生徒じゃないでしょ？　上野の分は私が書くから、手を出さないで！」

「まぁまぁ、お嬢様も落ち着きいや。別にミャラちゃんを取られるわけやないし、もうそろそろ授業が始まるで。騒がしくしていると、また先生が泣くやさかい。静かにしよな」

「……」

リョウに説得され、お嬢様が静かになる。まぁ、上野本人がいるわけじゃないので、構わないと思ったのだろう。こうして始まるのは、日常とは少し離れた授業。上野の席に吉川か……。何だか、嫌な予感しかしねーんだけど……。

訪問者〈ハル編1〉

授業中、吉川君を横目で見ると、国語の教科書を眺めていた。凄く真面目だ。流石、天才。だけど、今は数学の授業ですよ。もちろん、わかっていますよね？

授業を受ける気がないのかな？　そう思っていたら、先生が順に生徒を当てていく。当てられた生徒は前に出て、黒板に回答を記入だ。

泣きそうな恵梨さんが僕に振りかえるので、答えを教えてあげた。ちなみに、恵梨さんの席は僕の前。だって、恵梨さんは勉強が大の苦手だから、自分で書いた回答は九分九厘、間違えている。それをフォローするのが僕の役目だ。

次の問題を僕が答え、そして更に次の問題……。問題以上に問題なのが、次が吉川君の出番だという事……。たじろぎながら先生が吉川君を当てる。答えてくれるのだろうか？　というか、それ以前に教科が異なるのですけど。凄く突っ込みを入れたい。

先生に当てられて瞬く間に、吉川君が口にする言葉は回答そのもの。ふと気付けば、黒板の前に例の執事さんがいた。執事さんが吉川君の言葉を黒板に書き写す。まさに、正解。まさに、正解なのだけど……。

どうして、回答がわかったのだろう？　だって、吉川君は教科書を見ていない。先生が問題を黒板に書いていたわけでもなく、もちろん口頭で伝えたわけでもない。机の上にノートが出ているわけでもない。じゃあ、他生徒の教科書を覗きこんだのか？　いや、吉川

君にそのような動きはなかった。

気になって仕方がないので、吉川君に聞いてみる。

「どうして問題がわかったのですか？」

「さっき教科書を見たから」

「え……まさか一目で問題を覚えたなんて」

「そうだよ。それが？」

「……」

しょぼんモードに入ってもいいですか？　めげますよ、めげます。一目で問題を全て覚えた？　しかも、間違いなく答えるなんて。教科書に書いてある問題が全て同一の物ならわかりますよ。だけど、現実は異なります。まったく違う問題が並ぶ、教科書の中身を全て覚えた？　ふざけるのも大概にして下さい。

妙に気が悪くなったので、話を変える事にする。吉川君に質問だ。

「そういえば、ノートは取らなくていいのですか？」

「もう書いた。ほら……」

吉川君が机の中から取り出したノートを、僕が受け取り、中を覗く。ペラペラとページを捲っていくと……。うん、確かに。グチャグチャ文字の羅列が続いた後に、凄くわかりやすく書かれた回答を発見する。グチャグチャ文字はお姉ちゃんの物だ。まず間違いない。

それにしても、理解しやすい。これはもう教科書よりも素晴らしい。ワンポイントまで書いていてくれて、もっと簡単な式まで記入してくれている。ほう、成る程……へー。僕が読んでも勉強になるのだから、本当に良くできた記述だ。

僕が感心する中、吉川君は僕の事を気にもしないで、国語の教科書を読み続けている。僕がノートを返すと、それを机の中に仕舞って、そのまま読書。お姉ちゃんがいる時はあんなにも口が止まらない吉川君だけど、お姉ちゃんがいない時はあまり口数が多くない。

話しかけたら返事が返ってくるけど、基本は黙っている。自分が興味ある事については多少お喋りもするけど、基本は黙っている。菊池さんとは喧嘩をするけど、それ以外は黙っている。何て言うか、吉川君にとってのお姉ちゃんの価値って、そんなにも凄い物だったのか。

一時間目の授業が終わり、皆が吉川君に寄って集る。特に女子の皆さん。ワイワイ集って、吉川君が鬱陶しそうな顔をしている。まぁ、今まではお姉ちゃんがいたから。菊池さんと吉川君の争いで、吉川君に話しかけるチャンスなんてなかった。

今になってチャンス到来。だけど、お姉ちゃんの真実については語らない。何せ『言ったら殺す』と、菊池さん自らに止められているから。

今朝、菊池さんが教卓の前で、冷たく吐いた言葉だ。絶対に言えない。口が裂けても言えない。菊池さんが何を考えているのかは知らないけれど、言ったら殺されるのなら言えるわけない。

女子生徒達に集られて、吉川君のストレスゲージが向上していく。腕を組んで指をトントン。これがイライラの合図だ。そろそろヤバいかな？　と思い始めたタイミングで、リョウさんが乱入する。リョウさんが吉川君に質問だ。

「そういえば、君は天才なんやてな。逆に苦手な事とかあるん？」

「ない」キッパリと言ってのける吉川君。
「じゃあ、楽器とか……何でも使えるん？」
「まぁね」
「君に頼みたい事があるねんけど……」
「嫌だね」
「ちょい、話くらい聞いてや」
「バンドメンバーには加入しないよ。どうせそういう話でしょ？」
「ようわかっとるやん」
「他をあたって」
「せやかて、ミャラちゃんも参加してるで」
「じゃあ、本人に聞いてから考えるよ……」
「よろしく頼むな～」

リョウさんが笑顔で言って、僕に近づいてくる。その後、すぐに女子生徒達が吉川君に集りだす。そんな中、吉川君が腕組を止めて、右手の人差指を曲げると。執事さんが乱入する。女子生徒達を吉川君から遠ざけて、立ち去る。

吉川君は机の中から、次の授業の用意を取り出す。それを見て思う事。お姉ちゃん……宿題持って帰ってない。吉川君は気づいているのか？　まぁ、気づいているよね。きっと先程の授業時間にお姉ちゃんの宿題も終えているのだろう。もはやこの天才には口出しする必要がない。

そんな吉川君をちら見してから、リョウさんが僕に囁く。

「何や、ご機嫌斜めやね。ミャラちゃんがおらんかったら、無表情が不機嫌かの二選択やん。昨日はあんなに楽しそうやったのにね」
「まったくですね。お姉ちゃん好きにも程がありますよ。まぁ、菊池さんも似たり寄ったりですけど……。それにしても、天才で。苦

手な事がないなんて……。そんな事、信じられますか？」
「せやかて、本人が言うんやから、そうなんちゃうの？」
「人間、一つは苦手な事があるものですよ。きっと何か弱点があるはずです。何せ、あの江川先生にだってあるのですから。きっと吉川君にも……」
「しいて言うなら、ミャラちゃんやね」

まぁ、そうだけど……。それじゃあ、面白くない。もっと別に、何か驚くような弱点がないのだろうか？　僕の中で吉川君に対するライバル意識が高まっていく。何故って？　勉強では負けたくなかったのに、余裕負けしてしまったから。運動よりも勉強で負ける方が悔しさ倍増。だって、努力や苦労の量が違う。

僕が沸々と悩んでいたら、授業が始まる。いつの間にか、吉川君の机の上には、本の山。執事さんが持ってきたのだろうか？　十冊近くの辞典みたいな厚さの本が縦一列に並んでいる。それを読み始める吉川君。ノートと教科書は机の上に出ているけれど、きっと授業は耳だけ参加だろう。あなたの頭の中の構造を教えてください。問いかけたら、睨まれそうだ。

訪問者〈その2〉

刻々と過ぎる時間。なんつーか、上野がいないと静かだな。静かすぎて、眠くなる。寝ている生徒の数を数えてみよう。一、二、三、四、五、六……ヤバい、俺も眠くなってきた。

うつらうつらと頭を波打たせていたら授業が終わる。次は昼休憩。やったぁ～！　昼飯の時間だ！　そう思ったのはつかの間。不意にリョウが吉川の所へ行き、話を始める。すぐ吉川を引っ張って、俺達の所へやってくる。そして、リョウがほざきだす。

「ヨッちゃんも一緒に食事しようてな」
「ふざけないで！」とお嬢様。
「それはボクの台詞だよ」吉川が眉をしかめる。
「ふざけてへんし。わいはいつでも本気やで。それに、一人で食事なんて喉が詰まりそうやろ？」

リョウの言葉に、吉川がそっぽを向く。

「一人の方が気楽でいいよ」
「そうね。あなたの顔を見ているだけで、喉が詰まりそうだもの」
とお嬢様。
「バカ嬢なんて見ていたら、気分の悪さのあまりに、息ができなくなって、窒息死するね」

冷たい言葉を返すのは吉川だ。不意にリョウが腕を組んで、二人に発言する。

「二人共、そんな事を言うてたら。最後はミャラちゃんに電話する

で。二人が仲良くせえへんから、困ってるってな。そう言うたら、ミャラちゃん悲しむやろなぁ～」

その台詞に効果があったのか、急に静かになる二人。不満げながら、黙って了承する。そういうわけで、リョウのおせっかいにより、いつものメンバー……。上野の代わりに、吉川を加えて食堂へと向かう事になる。

食堂へ到着すると、弁当持ち以外の奴らが買い出しだ。ちなみに、お嬢様と吉川はお互いに一番離れた席に座っている。と言っても、テーブル二つを繋げた席での話。一緒に食べる事になったので、これ以上は離れられない。

さて、今日の昼食は何にするかな？　食堂をブラブラ歩いていたら、相変わらずなハルを発見する。食堂のおばちゃんと睨み合いながら、大声で魔術を唱える。

「超カツ、特々盛り飯、倍ツユ。プラス、三玉半溶け。で、よろしくお願いします！」

「こりゃあ、今日も特大だね。わかったよ、任せておきな！」

おばちゃんが魔術を理解して、食堂の奥へと引っ込む。相変わらず、凄い量を頼んでいるのだろうけど。俺にはこの魔術を解読できない。これを理解できるなんて、すげーよな、おばちゃん……。

俺は普通の醤油ラーメンを頼んで、席へと戻る。そしたら、皆は食べ始めていた。お喋りするのは恵梨と梨香。梨香は弁当、恵梨は食堂で買った和食セット。二人でおかず交換をしている。

松元は狐うどんを食べていて。リョウは俺と同様にラーメン類、とんこつラーメンのようだ。お嬢様はナポリタンスパゲッティーを食べていて、吉川は購買で売っている菓子パン……。案外に普通だな。もっと金持ち用の特別アイテムが出てくるのかと思っていたのに、期待外れだ。

しばらく食事をしていたら、ハルが帰ってくる。ハルが手に持つおぼんの上には、かなり大きな丼鉢。その中には理解不能な量のカツ丼だ。それを見て、吉川が眉をしかめる。

「それ……食べ物？」
「はい、カツ丼です」
「……」

言葉を無くす吉川に対して、ハルは嬉しそうにカツ丼を眺めている。すぐに箸を用意して、食べ始める。これだけ食べても、後で『腹減った』って言うんだから。ハルの胃袋は異常だよな。大食い大会にでも出れば優勝間違いなしだろうに。

食事を終えて、お喋りタイムだ。と言っても、吉川は喋らない。相槌を打つか、頷くか首を振るか。ほとんどはそういった反応。お嬢様にもそういう気はあるが、吉川程ではないな。せっかくだから、珍しく吉川が反応した話を述べてみる。それは、ハルの言葉から始まったこんな話。

「そういえば、吉川君はどこの高校に通っているのですか？」
「高校はとうの昔に卒業したよ。今は大学院生」
「大学院生……？　高校生じゃなかったのですか？」
「ボクは飛び級をしているから。一般人なら高校三年生だね。年は

バカ嬢よりも二つ上だよ」
「流石……ですね」

そして、ハルが落ち込んだ。吉川が凄い奴だと知れば知る程に、ハルが落ち込む。いや、お前も普通に凄いと思うぞ。どうして自分がすげーということに気づかねーんだろう？　やっぱり吉川が目立つからか？

他に吉川が口を開いた話は上野のことくらいか？　まぁ、上野の話になったら、お嬢様が暴走するから。結構、吉川は聞き役だ。上野がいる時はあんなにもお喋りになるのに、不思議で仕方がない。

そんな中、不意に梨香が食堂を後にする。しばらくして、帰ってきたら、手にはチョコレートが数種類。中身を出して、皆に配りだす。俺の所に回ってきて、箱から粒状のチョコレートを取り出そうとしたら、ミスって一つ落としてしまう。

「あっ！　しまった！」
「ちょっと、信也。もったいないじゃない」と梨香。
「わりーな」

そう言いながら、机の下を覗きこんだら。吉川の足元にチョコレートを発見だ。少し手が届かない位置にあったので、吉川に向いて口を開く。

「わりーんだけど、足元のチョコレートを拾ってくれないか？」
「ん……」

返事をして、吉川がチョコレートを拾う。そして、チョコレートを見ながら停止。どうしたんだ？　俺達が首を傾げていたら、吉川

の後ろに執事が現れる。吉川に向いて、口を開く。

「坊っちゃん。そちらは私が頂きましょう」

「いいよ……。ボクが捨てに行くから」

「……」

吉川の返事に、押し黙る執事。何やら不満げだ。そんなにチョコレートを食べたかったのか？　なんて聞けやしないけど、聞きたくなる。すぐに吉川が立ち上がって、遠くにあるゴミ箱へと足を向ける。その後ろを尾行するかのようにつけるのは執事だ。何やら妙な違和感を覚えるな。

じっと吉川の様子を窺っていたら、吉川がゴミ箱の前に辿り着く。そこで停止。不意に執事と話を始める。何の話をしているのか？　どうも吉川は執事を追い払いたいらしい。

吉川が数分を掛けて執事を説得し、食堂から追い払う。執事が立ち去った直後、素早く吉川の手が動く。何か……手に持っていた物を口に入れた。絶対に入れた。今のは、見間違いじゃない。不意にハルの声が聞こえてくる。

「吉川君……今、何かを口に持っていきました？」

「地面に落ちたチョコレートじゃねーの？」

「地面に落ちたチョコレートを？　大金持ちの吉川君が？」

「でも、俺も見たし。食ったよ、絶対に」

「……チョコレート、そんなに好きなのでしょうか？」

「さぁ？　どうなんだろう？」

そりゃあ、本人に聞いてくれ。妙にご機嫌な吉川が戻ってきて席につくが、ハルは黙ったまま問いかける事はなかった。もちろん、

俺だって聞けない。不機嫌になられると面倒だからな。こいつにはあまり係わりたくない。

訪問者〈ハル編2〉

吉川君の奇怪な行動。僕達の目の錯覚かと思いきや、翌日になり事態が明らかになる。今日はお姉ちゃんも学校へ来ていて、早朝から皆で賑やかにお喋りしていたら。吉川君がやってくる。

吉川君がお姉ちゃんに近づき、楽しそうにお喋りを始め。菊池さんがそれを妨害しようとする。普段と変わりのない世界。しばらく経ってお姉ちゃんに異変が。左右に首を傾げながら、不思議そうな表情を浮かべる。不意に吉川君に問いかける。

「ねぇ、吉川君……。何か食べてる？」
「ううん、何も」
「そう……？」

何も食べていないという吉川君だけど、微かに口が動いている。何か食べていそうな気配……。僕まで首を傾げていたら、颯爽と執事さんが現れる。吉川君に近づき、話しかける。

「坊っちゃん。少々お話が……」
「後にしてくれる？　今は忙しいから。それと、その呼び方を止め……」
「では、お口を大きく開いて下さい」
「……」

急に吉川君が警戒モード。おずおずと後退しながら、執事さんの動きに注意を向ける。その動きを見て、執事さんが眉をしかめる。

「このような場所でお話をするのも失礼かと思われますので、向こ

うで改めて……」
「嫌」
「……」

プイッとそっぽを向く吉川君に対して、ため息をつくのは執事さん。何を言うわけでもなく、急に吉川君に襲い掛かる。そして始まるのは二人の乱闘。意味を理解できない僕達は目を丸くして眺めるだけ。

それにしても、二人共に凄い争いだ。吉川君はもちろんの事。執事さん……あなた何歳ですか？　というか、人間ですか？　滅茶苦茶に素早いのですけど。もう玲さんを上回っている。下手をすると僕と互角に渡り合えるのでは？　とか考えてしまう。

不意に決着が付く。いくら天才でも、老功に勝るものなしなのか。執事さんが吉川君の腕を押さえ付けて、エンド。執事さんが少し強めに吉川君の腕を押さえると、吉川君が悲鳴を上げる。丁度そのタイミングで、吉川君の口から何かが飛び出してくる。地面に転がって行く物は小さな黒い物……。何、あれ？

すぐに吉川君が執事さんを振り払い、黒い物体に手を伸ばすけれど。既に手遅れ。執事さんが先回り、白い布巾でそれを拾い上げる。眉をしかめながら、黒い物体に目を向けて。吉川君に注意だ。

「まったく……。また妙な物を口に入れて……」
「何、それ？　ドングリ？」とリョウさん。
「さようで……」
「何でドングリなんか口に入れてるん？」
「坊っちゃんの悪癖です。幼き頃から、拾い食いの癖が酷くて。吉川家の跡取りになられるであろうお方が落ちている物を口にするな

んて……」

「えらい癖やね。それって、何でも口に入れるん？」

「全てというわけではありませんが、大体の物は……。こちらのメモが、坊っちゃんが口に入れた物のリストになっております」

執事さんが取り出したのは小さなメモノート。リョウさんが受け取り、僕達が覗き込む。ボタン、タンポポの花、パチンコ玉、ビー玉、一円玉、石ころ、小型キーホルダー……などなど。ずらりと並んだ一覧を見て、言葉を無くす僕達。

吉川君を見ると、地面に座りながら、不愉快そうに眉をしかめている。そんな吉川君を見てから、執事さんに話しかけるのはリョウさん。

「ガムでも渡しといたらあかんの？」

「坊っちゃんはお気に召した物しか口にしませんので……。私共も色々と試してはいるのですが、未だに……」

「なぁ、吉川の口がまた動いているぜ……」

と斎藤君。すぐに皆が吉川君に向き直る。吉川君は素知らぬ顔をしているけど、微かに口が動いている。僕がお姉ちゃんの背を押すと、お姉ちゃんが吉川君に近づく。

「吉川君。口に入れている物を出そうね」

「……」

お姉ちゃんが笑顔で言ったら、吉川君が口の中から物を取り出す。消しゴム……食べ物でないあたりがちょっと切ない。執事さんが吉川君から消しゴムを奪い取り、先程のドングリと共にゴミ箱にポイする。

吉川君を見ると、お姉ちゃんに頭を撫でてもらっていた。まるで子どもみたいな事をするから、可愛く思えてしまったのか。お姉ちゃんは何だか嬉しそう。吉川君の頭を撫でながら、『良い子、良い子』と言っている。

それを見ていた菊池さん、吉川君を嘲るのかと思いきやそうではない。吉川君がお姉ちゃんに可愛がられる所を目撃したので。吉川君のマネをしようと、地面に何か落ちていないか探している。もちろん、玲さんに怒られる。

お姉ちゃんに頭を撫でてもらって大人しくなる吉川君。それを見て、自分も構ってほしくて、お姉ちゃんに抱きつきながら頭を撫でてもらう菊池さん。まるでお子様ワールドだ。執事さんが積りに積もった不満を漏らす中、授業開始のチャイムが鳴り響く。

拾い食い〈その1〉

吉川の意外な悪癖が明らかになった翌日の話。学校にて、大騒動が勃発する。廊下や階段、いたる所に配置されているのは数々のプレセント。もちろん、吉川宛だろう。普通に手渡しても断られるので、地面に置いたら貰ってくれると。吉川ファンが悟ったらしい。

だけど、全てがファンの物かどうかなんてわからない。中には、悪戯で置いていそうな物もある。プレゼントっぽくない物……例えば、まんじゅう一つとか、マジ怪しい。他にも食べ物じゃない物がちらほら。吉川がどこまでの物を口にするのか、確認しようという事だろう。

それにしても、中身が見えない物って気になるよな。俺も一つ拾って開けてみたいけど、プレゼントを置いた奴に文句を言われるのも嫌だから。見て見ぬ振りだ。眉をしかめながら教室に入ったら、教室の中もてんこ盛り。もはやゴミ溜め状態だ。

珍しく教室で朝食を食べるリョウに近づき、話しかける。

「何食ってるんだ？」

「クッキーや。そこに箱ごと落ちとってん」

「それ……吉川宛じゃねーの？」

「そうなん？　誰宛てとか書いてなかったから、食べてもええもんかと思ってたわ」

「つーか、レベル吉川じゃん。落ちてるもん食うなよ」

「せやけど、なかなか旨いで。サイちゃんも食べてみい」

リョウに薦められてクッキーを口に放り込む。うん、確かに……

なかなか旨い。俺達がお喋りをしていたら、松元まで乱入だ。三人でクッキーをむさぼり食う。しばらく経って、梨香と恵梨が教室に入ってくる。二人がこちらへやってきて、梨香が口を開く。

「凄いよ。ここだけじゃなくて、他の階もプレゼントだらけ」

「図書館の前とか……特に凄かったね。吉川君が……本好きだからかな？」恵梨が続ける。

「だけど、掃除が大変そうだね。先生とか見て見ぬ振りしているし、今日の掃除係は大忙しだよ。まぁ、ご褒美もたくさん貰えそうだけど」

嬉しそうな梨香。実はこいつ……今日の掃除当番だ。何か貰えるのではと期待しているのだろう。何せ今日は宝探しだからな。そうこうしているうちに、またもや知り合いがやってくる。落ち込み気味の上野と、不機嫌なハル。それを見て、大体は想像がつく。俺が二人に話しかける。

「上野も拾い食いしたのか？」

「はい、アンパンを……」

「それでお前が叱りつけたのか？」

「だって、僕も食べたかったのに、お姉ちゃんが一人で食べるから……」

そっちかよ……。別に上野の身を案じて叱りつけたわけではないらしい。つーか、皆して拾い食いって……。俺はどう思えばいいんだ？　拾い食いが正統化されるのなら、俺だって拾いに行きたいんだけど……。でも、もしも食べ物に毒とか針とか混入されていたら、怖いよな……。やっぱり手出しはしないほうがいいか。

それから間もなくして、お嬢様が現れる。呆れた表情を浮かべな

がら、俺達の所へやってくる。

「凄い騒ぎね。バカみたい……」

「そう？　僕は楽しいよ」と上野。

「まさか、上野まで落ちている物を食べていないでしょうね？」

「え……食べたけど」

「駄目じゃない。毒が入っていたらどうするの？」

「大丈夫だよ。そんな怖い事をする人なんていないよ」

「わからないわよ。世の中には、食べ物に針を入れる人もいるんだから」

「うーん、そりゃそうだけど……」

こうして、朝から駄弁る俺達。何だかんだ言いながら、リョウが拾ったクッキーセットは全部食った。そういえば、拾い食いの王者がまだ来ていない。どうなっているのか？　皆で吉川が遅いという話をしていたら、何やら外が騒がしくなる。

やっとのことで登場した天才が凄い事になっていた。両腕を後ろに回して、紐でくくられ。口にはガムテープ。まるで拉致発生だ。隣には、いつもの執事なので、大富豪お坊ちゃん拉致事件というわけではないだろうが……。

吉川の代わりに執事が口を開く。

「皆様、おはようございます」

「何だか凄い事になっていますね」とハル。

「はい……。大変失礼ですが、坊ちゃんの身を案じて……」

執事が話をしている最中に、吉川の足が動く。力の限り執事の足

を踏みつけようとするが、綺麗に避けられた。吉川の不満がピークを超える。それにしても、無茶苦茶に不機嫌な吉川。マタタビ茶を頭にかぶった時以上に、不機嫌な顔をしている。

ガムテープを口に貼りながらも、騒ぎ散らかす吉川に対して、執事は冷静だ。大人しくして下さいと、吉川に話しかける姿は吉川よりも礼儀正しい。まぁ、やっている事は礼儀知らずだと思うけど……。

不意に上野が吉川に近づき、吉川の口に付いているガムテープを取り外す。すぐに吉川が執事に怒鳴りだす。

「何考えてるんだよ!?　ボクにこんな事をするなんて、いくら爺やでも許さないからな!」

「勝手を申して誠に恐縮ですが……。本来ならば、坊ちゃんをこのような場所へお連れすることはございません。入り口で退場です。ですが、坊ちゃんのご希望により、無理を致しまして、このような形に……」

「赤っ恥じゃないか!　早くこのロープを解けよ!」

「ですが、それを致しますと。坊っちゃんの悪癖が……」

「大体、爺やは神経質なんだ……。地面に落ちている物を口に入れただけで大袈裟な……。別に死ぬわけでもないのだし。仮にボクに何か起きたとしても、和樹（かずき）がいるじゃないか。跡継ぎはあいつで十分だよ……」

「伊吹坊っちゃん!　そのご意見は頂けません!　吉川家の将来を存じますと。大変失礼ではございますが、和樹坊ちゃんには不安の念が尽きません。その点、伊吹坊っちゃんは……」

「はいはいはいはいはい」

吉川が生返事をしながら、地面に座り寝転がる。そして一言。

「もう寝る」
「坊っちゃん！　そのような行動はお控え下さい！　吉川家の跡継……」
「あー、うるさい。うるさい」
「……」
「爺やのせいで、チョコレート拾い損ねた……。ホワイトチョコだったのに……爺やのせいで食べれなかった。全部、爺やのせいだ……。ボク、ホワイトチョコ……好きなのに」

もの凄く不満を漏らす吉川。そして、執事がため息をつく。

「では、改めまして。私が坊っちゃんのご希望の品物を揃えましょう」
「向こうに落ちてたチョコレートがいい。それ以外はダメ。同じ物でも爺やが買いに走るのはダメ」
「……」
「何や、困った子やね」

とリョウ。執事が無言で頷いている。それ以来、吉川は喋ることなく。執事が何を言っても無反応。顔も合わせない。余所を向いて、見えない振りだ。代わって、他の者が話しかけても完璧無視。相当にご機嫌が悪いらしい。

上野が話せば話すだろうが、今はお嬢様に忙しい。お嬢様が構ってくれオーラをバリバリに放つから、上野がそちらに気を取られている。こうして始まるのは授業。チャイムの音が聞こえてくる。

拾い食い〈ハル編1〉

気まずい授業。教室の後ろでは、寝そべる吉川君。イケメンで天才な財閥の坊っちゃんが、地面に寝転びながら拗ねている。もの凄く違和感が絶えない……。昨日は……いや、二日前までは冷え冷えのクールキャラかと思っていたのに。これじゃあ、幼児キャラだ。

後ろが気になって授業に集中できない僕。吉川君並に苛立ちを感じていたら、隣で椅子を引く音が。横を向くと、お姉ちゃんが立ち上がっていた。僕に向いて苦笑する。

「ちょっと……行ってくるね」
「え？　どこに？」
「ううん……まぁ……」

お姉ちゃんがヘラヘラと笑って、教室を後にする。きっと何か吉川君について対策を考えてくれるのだろう。ここはお姉ちゃんに任せよう。何せ一番の適任者だ。

お姉ちゃんの行動に半端なく反応するのは、例の二人。菊池さんと吉川君。主人が立ち去った後の愛犬の如く、お姉ちゃんが立ち去った方面を見つめている。不意に吉川君が立ち上がり、教室の扉を器用に足で開けて、出て行った。お姉ちゃんの後を追うつもりだ。

もちろん、菊池さんも追いかけようとするけれど、玲さんに止められる。というのも、最近は非常に授業をサボる率が高いから。いくら菊池さんでも勉強しなくちゃマズイ事になる。まぁ、天才の吉川君には関係ない話だろうけど。

僕のストレスも急減し、心地よい気分に浸りながら授業を受けていたら、騒がしい音が聞こえてくる。そして、扉が開かれた。その先には、お姉ちゃんと吉川君に次いで、要らぬ物が……。僕の師匠……未来さんだ。

吉川君は手に巻かれた紐を解かれて、手には購買で売っているホワイトチョコを一つ持っている。先程まではあれほど不機嫌だったのに、今は凄くご機嫌。お姉ちゃんに笑顔を向けながらお喋りだ。

そして、お姉ちゃんは両手いっぱいに食べ物などを持っている。きっと地面に落ちていた物を拾って来たのだろう。後で僕も分けてもらおう。

最後に未来さん、大きな風呂敷を背負っている。サンタクロースではなくて、まるで泥棒。まぁ、泥棒だろう。きっと未来さんも落し物をたらふく拾ったに違いない。これは全部僕の物だな。すぐにでも没収しなくちゃ。

そう思っていたら、未来さんが荷物を置いて、教室を出て行く。え？　もしかして、まだあるの？　案の定、一分もせぬ間に、先程と同じ光景が……。そして、また荷物を置いて出て行く。嘘……マジ？　こんなにあったの？　吉川君ファンの皆さんの意気込みが恐ろしい。

未来さんが何度も行き来し、教室の後ろがパーティー会場に。そして、全てが集まった後に未来さんが仕分けを始める。危険な物やいらない物はゴミ箱へポイッ。問題のない物は横に除ける。

それもしばらくして、終了する。仕事を終えた未来さんが超笑顔だ。

「よーし、これでパーティーできるよ。お菓子パーティーだね」
「正しくは拾い食いパーティーだけどね」とお姉ちゃん。
「ボクも参加したいけど……。爺やがうるさいからなぁ……」

手に持つチョコレートを食べながらため息をつく吉川君。という事は、あのチョコレートは買った物なのか。もしかしたら、お姉ちゃんが買ったのかもしれないな。きっとそうだろう。せっかくだから僕も振りかえり話に参加だ。

「大丈夫ですよ。未来さんが仕分けした後なので、どれも問題はありません。普段は役に立たない師匠ですが、鼻だけはよく利きます。特に食べ物に関しては間違いないでしょう」
「ちょっと、俺を野生動物みたいに言わないでよ」

文句を言いながら、ポテチの袋を開ける未来さん。これも拾い物だろう。僕も授業を放ったらかして、適当に袋を開けてみる。おー、モナカだ、モナカ。誰か緑茶を下さい。どこからともなく出現した執事さんと吉川君が口喧嘩をする中。僕達はお菓子をむさぼり食べながら、談話開始。途中でリョウさんと菊池さんも乱入してくる。

ダラダラとした空気の中、不意に未来さんが口を開く。

「そういえば、何か面白い事ないの？　最近の大事件とか……」
「最近の大事件ですか？　しいて言うなら、吉川君がこの学校に居ついた事でしょうか？」

「その表現は不適切だよ。ボクはこんな学校になんて興味ない……」

吉川君がホワイトチョコクッキーなる物を食べながら指摘してくる。結局の所、吉川君も拾い食いパーティーに参加している。執事さんとの長い口論の末に、今日だけは許してもらえる事になった。今日限りでおしまいだ。明日からは物が落ちていても、触れる事すら許されない。という約束だけど、吉川君がこの約束を守るとは思えない。きっと執事さんも気づいているだろう。何せ頭を押さえながら、教室を出て行ったから。クッキーを口に運ぶ吉川君に向いて僕が言う。

「あぁ、すみません。では、改めます。吉川君がお姉ちゃんに懐いた事ですね」

僕が言ったら、吉川君が赤面する。すぐに僕に向いて、不満の表情だ。僕が気づかぬ振りをしていたら、未来さんが吉川君に話しかける。

「だけど無理でしょ？　だって、ミャラちゃんは超大金持ちのお嬢様の売春相手なんでしょ？　ムリムリ。手を出したら殺されるね」

吉川君の返事を待たずに、答えるのは僕。

「もしかして、未来さん知らないのですか？　吉川君も超大金持ちのご令息ですよ。まぁ、お坊ちゃんですね、お坊ちゃん。しかも、天才で有名だそうです。運動神経はいい、頭はいい、顔もいい。となれば、もう文句のつけどころがないでしょ？　まぁ、無理に言うなら、お姉ちゃん以外には悪態を吐くことくらいでしょうか？」

「え？　そうなの？　それは初耳。っていうか、あんなネコ耳のどこに惚れる要素があるんだろう？　何でそんなにお金持ちが集まっ

てくるの？　あいつ何様？」

無駄に話で盛り上がる僕達を横目で見ながら、吉川君は黙っている。自分が非難され、愛するお姉ちゃんが非難され、吉川君のストレスゲージが急上昇中。黙ってしまったら、そろそろヤバい。不意に未来さんが話を変えてくる。

「ところで、どれくらい天才なの？　本人の意見なんてあてにならないから、ハルが答えて」

「江川先生並ですね」

「へー、それはなかなか。じゃあ俺が天才レベルを計ってあげよう。吉川君だっけ？　話が聞こえていたら、今から俺が出す問題に答えてね」

こうして、未来さん流、天才測定が始まった。未来さんが問題を出し、吉川君が答える。しかし、吉川君……一問目から停止。答えようか答えまいか考え中。結局は、暇だから答えを口にする。ちなみに、問題は中学の入試レベル。

淡々と進む問答。僕の理解できる範囲を大きく超えても、吉川君は答え続ける。うん……凄く腹立つけど、顔に出さない、出したら負けだ。じっと二人のやり取りを聞いていたら、不意に未来さんが妙な質問を出し始める。

問題内容は、魔力の基礎問題。攻撃魔法と守備魔法の平均値は？というもの。僕が手を挙げて答えたい気分になる中、吉川君が眉をしかめる。

「何の話？」

「ふーん、成る程。じゃあ、次の問題ね」

今度は別世界の話。神様の力……神力について。神力は個人の能力によって、向上するスピードが異なるか否か？　はい、異なります。一般的に、広い意味の能力を持つ方のほうが神力の向上が遅いです。って、僕が答えるわけにもいかない。吉川君が首を傾げる。

「何を言ってるの？」

「成る程。はい、測定結果を言うよ。君は普通の天才です」

「ねぇ、さっきの問題はどういう意味？」

「俺は測定をするだけだから、答えはハルにでも聞いてよ。たぶん、俺よりも詳しいし」

「嫌です。絶対に教えません。教えたら最後、僕の勝ち目がゼロになります」

僕が答え、未来さんが笑いだす。そして、僕に向いて言う。

「ハルもライバルができて良かったじゃない。ずっとトップ暮らしで飽き飽きしていたところでしょ？　ライバルは向上心を掻き立てる最高の薬だよ。これで暇な時間もあく事ないね」

「良くないです。面白くないです。お姉ちゃんには手を出さないで下さい」

「シスコンだ、シスコン。ファザコンで、シスコンなんて。もう、カゾコン（家族コンプレックス）じゃない？」

「いいじゃないですか。家族を大切にしている証拠です」

開き直る僕を見て、未来さんがお腹を抱える。ケラケラと笑い続ける未来さんに対して、吉川君は先程の問いに悩んでいる。悩んだってわからないのに、悩んでいる。話が一区切りして、未来さんがよからぬ事をほざきだす。

「じゃあ、次は度胸レベルを計ってみようか？」
「駄目ですよ。狭間に飛ばしてもいいのは、僕かハルトかニートさんくらいです。他の人には重すぎますよ。あんな空間では耐えきれません。大泣きするか、失神するか。はたまた、気が狂ってしまっては問題です」
「大丈夫だって。吉川君は天才なんだから。それに天才が泣き喚く姿なんて、なかなか見れないし」
「相変わらず、ドSな発想ですね」
「別にいいじゃん、暇なんだから。まぁ、とりあえず本人の返事によるけどね」
「仕方ないですね……。吉川君はどうしますか？　とっても怖い肝試しにチャレンジしてみますか？　まぁ、僕や未来さんがいるので、死ぬ事はありませんが……」
「肝試し？　ふーん……。まぁ、いいけど……」

愛想のない返事をする吉川君。僕や未来さんのノリを見て、そんなに怖くないものだとでも思ったのだろう。実際は、泣く子も黙らず泣き続ける程に怖い。泣かない子だって、泣くだろう。そういえば、吉川君が泣き喚く姿って想像できないな……。

僕も興味に駆られて、参加する事に。未来さんの合図にて、僕達三人だけが狭間の中へと飛んで行く。さぁ、始まった。恐怖の肝試しだ。

拾い食い〈その2〉

眠さのあまりにギブアップして、俺が机に伏せていたら。後ろから騒がしい声が聞こえてくる。振りかえると、吉川とハルに未来がいない。いつの間にか消えていた。不安げな上野の隣には、吉川を探しまくる執事だ。上野がキョロキョロと見まわしながら、口を開く。

「ハル？　未来？　吉川君？　ねぇ、三人はどこに行ったの？」
「上野がリョウと話をしている間に消えたわ。肝試しをするとか言っていたけど……」とお嬢様。
「肝試し……？　まさか……未来の奴、二人を連れて狭間に入ったの？」

狭間……どこかで聞いた事のある言葉だ。不意にこの間の奇怪なお泊まり会を思い出す。あの時に上野が言っていた、狭間の歪みがなんたらかんたら。もしや、三人はああいう異常現象が頻繁に起きるような場所へ行ったのか？　そりゃ、ご愁傷さまで。すぐに執事が上野に迫る。

「狭間とはどちらですか！？　坊ちゃんにお目にかかるためには、どちらへ伺えばよろしいのですか！？」
「む、無理だよ。僕ら『橋』でも危険な場所なんだ。一般の人なんて連れて行けないよ。それに……行ったところで道がわからない。あんな所で迷子になったら……」
「私は一向に構いません！　ですから、坊ちゃんのいらっしゃる場所をお教え下さい！」
「駄目だって！　いくら執事さんが強くても、あんな所には行かせられない」

上野が強く言いきって、黙り込む。執事は無念さを顔に出しているが、何かできるわけでもない。不意に上野が執事に向く。

「だけど、きっと大丈夫だよ……。向こうには狭間の専門家……未来がいるから。ハルだって、ハルトより魔力は劣るけど。狭間の事は熟知しているし。吉川君が皆から逸れてしまわない限り、多分大丈夫……」

少し弱気な上野の言葉を聞いて、執事は今にも死にそうな表情を浮かべている。蒼白する執事に向いて、上野が元気のない笑顔を向ける。

「僕達が慌てても仕方ないから……。落ち着いて、皆の帰りを待つ事にしようよ」

そして数時間、授業が始まり、授業が終わり。それを幾度も繰り返し、昼休みも終わりを告げる。途中、上野がスカートのポケットからボールペンを取り出し、地面に落書きを始める。まるで魔法陣。しかも、魔法陣が緑色に輝いている。蛍光ペンとかそういう物じゃなくて、ゲームとかで出てくるようなそういった雰囲気だ。

上野に質問をしてみたら、『出口を作ったの』との事。ハル達が戻ってくるための扉らしい。画期的な扉だよな。こういう扉があるのなら、一度くらいは潜りたいと思うけど。危険であるのなら、もちろん遠慮する。

教室の後ろにて、ロッカーの前に立ち、深刻そうな面持ちで腕を組

むのは執事。上野は床に敷いたレジャーシートの上に座りながら、真剣な表情を浮かべている。

お嬢様は上野にしがみ付きながら、心配そうに上野を見つめ。リョウの奴は、『シリアスになってきたで～』とかほざきながら、自席に座り真面目に授業を受けている。

五時間目が終わり休み時間、不意に上野が立ち上がる。廊下側とは反対の窓に近づき、空を見上げる。何か策を考えているのか、じっと空を見上げ続ける。お嬢様はそんな上野の背を眺めながら、心配げだ。

しばらく経ってため息をつき、上野が振りかえろうとした瞬間。どこからともなく人の声が聞こえてくる。

「楓(かえで)！」

上野の目前、魔法陣の真上。何もない空間に出現するのは吉川だ。上野の肩に手を置き、えらく混乱気味に口を開く。

「楓がどうしてっ……！？」

「あの……吉川君？　僕はミャラだよ……」上野が目を丸くしながら吉川を見上げる。

「……ミャラ……ちゃん？」

「大丈夫？　顔色……悪いよ。狭間にあてられた？」

「いや……ごめん。ボクの勘違いか……」

右手で頭を押さえながら首を振る吉川。それにしても、吉川の奴……もの凄くボロボロだ。先程まではキッチリしたお金持ちお坊ちゃまの衣装だったのに、今はズタボロ。服のいたるところが破けて

いて、泥まみれ。しかも、身体中が傷だらけで、戦場にでも行ってきたのかと思わせるような状態になっている。

すぐに執事が発狂気味に吉川に走り寄る。

「坊っちゃん!?　その傷はどうなさいましたか!?」

「あぁ……爺や」

「私という者がおりますにも関わらず、坊ちゃんをこのようなお姿に……」

「ボクは……戻ってきたのか?」

会話不成立。暴走気味の執事を余所に、吉川が上野に顔を向ける。

「ここは……?」

「ここは学校だよ。もう大丈夫。君は狭間から出られたみたいだから。そういえば、ハルと未来は?　もしかして、吉川君……一人で帰って来たの?」

「そう……か。なかなか……楽しい……肝試し……だった……よ」

吉川が話しながら、上野の方へと倒れて行く。上野が必死に吉川を支えながら、地面に座る。倒れこむ吉川の顔を覗き込むと、熟睡していた。どう考えてもお疲れみたいだ。執事が医者に連絡を入れる中、上野が眉をしかめる。

「何……これ?」

「どうかしたのか?」と俺。

「吉川君の傷口を見て……」

「何だよ?　怖いじゃねーか」

そう言いながらも、怖い物見たさで上野の指差す場所に目を向け

る。吉川の頬にある擦り傷。よく見ると、白く光っている。しばらくじっと眺めていたら、傷口が消えてしまった。どういう事だ？
俺が首を傾げていたら、上野が呟く。

「傷が治っちゃった。この白い光って、魔力？　だけど、吉川君はただの人間でしょ？　魔力を使うなんて事はできないし……。どういう事だろう？　君はどう思う？」
「いや、俺に聞くなよ。わかるわけねーだろ」
「そうだよね……。ハルが帰ってきたら、聞いてみよう。未来が帰ってきたら、地獄送りだ」

吉川の頭を撫でながら、上野がもの凄く怒っている。未来に対しての怒りだろうな。帰ってきたら、未来は死刑決定だ。まぁ、俺には関係ないけど……。ふと吉川を見ると、傷が全て癒えていた。すげー治癒力。凄過ぎて、却って不気味だ。

拾い食い〈その3〉

五分も経たぬうちに、やってくるのは吉川の主治医達。たった一人に何人掛かりか？　お前らそんなに必要ないだろ？　そう思わざるを得ない程に、人がぞろぞろとやってきた。周囲のざわめきが耳に入ったのか、不意に吉川が目を覚ます。と言っても、非常に眠たげだ。半分居眠りをしながら、医師達の診断を受けている。

そんな中、またもや人が出現だ。吉川と同様に空の空間、魔法陣の上に出現するのはハルの奴。しかも、子どもの姿で全身ズタボロ。あの……片腕がないように見えるのは俺の目の錯覚か？　右腕……肩から下が袖ごとなくなっている。それを見て、女子生徒が悲鳴を上げる。上野が蒼白しながらハルに駆けより、ハルが上野に倒れ込む。そして、一言。

「Ｇｉｖｅ　ｕｐ……」

「駄目だよ、ハル！　諦めないで！　気を強く持って！」

「ん……頑張って……みる」

ハルが頷き、目を瞑る。すると、ハルの身体が紫色のオーラで覆われた。吉川と同様に回復魔法でも使用しているのか？　じっと眺めていたら、ハルの右腕が再生していく。こいつはミミズか？　あり得ない光景ばかりを目にして、感心していたら。上野がハルを抱きしめる。

「もう……バカ。無茶しないでって言ってるのに……」

「ごめんな……さー」ハルが口だけ小さく動かす。

「……」

上野がぐったりするハルの頭を撫でていると、今度は明るい声が聞こえてくる。そちらに目を向けると未来を発見だ。こいつは怪我もなければ、衣服を汚すこともなく。先程の未来がそのまま帰ってきた形だ。未来が吉川を見て口にする。

「あれー？　吉川君、いつの間に戻ってたの？」
「死ね！　バカ未来！」

上野が落ちているお菓子の箱を一つ未来に投げつける。未来がそれをキャッチして、上野に口を開く。

「もう危ないじゃん。物を投げないでよ」
「危ないのはどっちだよ！？　お前のせいで、皆が瀕死状態じゃない！　何考えてるの！？　ハルどころか、吉川君まで連れてって！　怪我人どころか、死人が出るじゃない！」
「二人共、死んでないじゃん。擦り傷程度だよ。余裕、余裕」
「余裕じゃないよ！　ハルなんて一分前まで腕なかったよ！」
「ぐうたら生活のしすぎで、腕が落ちたんじゃない？　俺のせいじゃないね。訓練をサボるハルが悪いよ」
「未来のせいだよ！　もうバカ未来！　早く帰れよ！　二度と来るな！　顔見せるな！　口開くな！」
「あらまぁ、えらくお怒りだね。過保護にも程があるよ」

未来が呆れた声を出し、上野はもう答えない。ハルをギュッと抱きしめて、心配そうに眺めている。不意に未来が吉川に向いて、質問を始める。

「それで、吉川君はどうやって戻ってきたの？　狭間でタイムバーストが起きて、皆が散り散りになったじゃない？　その後……一人で戻るには難しかったと思うけど」

「どうやって……？　よくわからないけど……。あの後、気を失って。目覚めたら、洞窟の中にいて。しばらくは、下手に動くのも危険かと思い、誰か来るのを待っていたけど……誰も来なくて。これは無理だなと思ったから、一人で出口を探す事にしたんだ」
「それで？」

未来がハルの椅子に座りながら、楽しげに吉川を催促する。吉川がそれに答えるように話し出す。

「変に地面が光っていたから……。洞窟の中でも、周りを見ることは出来たし。歩くのには不便しなかった。妙な生き物を何度も見かけたけど、君が言っていたように無視していたら、寄ってこなかったよ。まぁ、少しちょっかいを出されたりはしたけど。擦り傷程度で済んだね」
「なかなかやるね。その後は？」
「歩いていたら、小さな掘立小屋を見つけて……。看板……といっても、朽ち果てた薄板に文字らしきものが書かれていた程度だけど。『狭間屋』って書いてあった。それを目にして、何かの店屋かと思い、中に入ったらカウンターに男が一人。店内の棚には何も置いていなくて、カウンター前の地面に人形が落ちていた。男に話しかけようとしたら、急に人形が口を開いて。『名無しがきた』って言われたね」
「まぁ、そうなるね」

未来が頷く中、吉川は話し続ける。

「不快に思ったけど……。かといって、名前を名乗るのも気味悪くて。そのまま、人形に話しかけたんだ。『出口はどこ？』って……。そしたら、笑われた」
「あいつムカつくからね。ぶち壊しても、すぐに直されるし。超不

愉快……」

「うん……。まぁ、それで……。人形は笑い続けるから、男に聞いてみた。男は『全てが出口だ。ただ、あんたは鍵を持っていない』と口にして。ボクが『鍵はどこにあるの？』って問い返した。そうしたら、『あんたには見えない』って言われた」

「うーん、確かに……。普通の人にはわからないだろうな、この気持ち……。狭間屋の主人にしては上出来な言い回しだね」

未来の呟きを待ってから、吉川が口を開く。

「仕方がないから、店を出ようとしたら。『名無しは消える、闇の彼方に』って、人形が騒ぎ出して。ボクが人形に言ったんだ。『消えない、家に帰るだけだ。鍵が見えないのなら、見えるようになるまで待てばいい』って……。それを聞いた男が、急に大声で笑い出して。ボクに何かを投げながら、こう言った。『あんたにそれをやろう』……。ボクは地面に投げ捨てられた物を見て、発作的に口に入れたくなったから、拾って口に放り込んだら。また男が笑いだして……。『九分九厘間違いだが、一つの正解ではある』って言ってきた」

「……ねぇ、何を口に入れたの？　狭間屋で食べ物なんて貰えたっけ？」

「いや……食べ物じゃなさそうだったけど。味はしなかったし。白く光る石みたいな物だったから……」

「それ見せてくれない？」

手を伸ばす未来に向いて、吉川が首を横に振る。

「無理だよ。飲み込んだから……。その店を出た後に、大きな熊のような化け物に襲われて……。その時に間違えて飲んじゃったんだ」

「え……。それ……身体に異常は出なかったの？」

「いや……別に……。あぁ、だけど、一つ気になる事があるよ。熊の化け物に襲われた時に、肩に重手を負ったはずなのに。しばらく経ったら、その傷が治っていた。妙だとは思ったけど、あの場所は常識を逸脱しているから。そういうものなのかと思って、その時はあまり気にはしなかったね。今になって不思議に思うけど……」

「自然に傷が完治するのなら、狭間は危険地帯じゃないね。むしろ、超安全地帯になるんだけど。まぁ、いいや。その後はどうしたの？」

「あぁ……えっと……。熊の化け物から逃げた後も歩き続けていたら、知った顔を見つけて……。この人も化け物かもしれないなと……。わかっていながらも、追いかけて……。その人が離れて行くから、必死になって後を追っていたら。急に世界が一変して。その人の肩に触れた時には……目の前にミャラちゃんがいたよ。いつ戻って来たのかも、よくわからないね……」

「なかなかハードスケジュールだね。まぁ、今回は上手くいったみたいだけど。あの場所で知り合いを追いかけるのはオススメしないよ。大抵は碌な事起きないから……。あの場所での知った顔は、狭間の生き物が記憶に影響されて変化している物だからね。悪戯好きや殺意を抱く物が多いし。出口を教えてくれるなんて、よっぽど気の良い生き物だったんだね」

不意に未来と吉川のやり取りを聞いていた上野が口を挟み出す。

「ねぇ……吉川君が口にした物って何なの？　危険な物？　まさか、ハルトみたいな事にはならないよね？」

今にも泣きそうな上野。未来は上野に目を合わさず、吉川を見ながら首を傾げる。

「さぁ？　九分九厘危険だけど、上手くいけば安全な物なんじゃない？　狭間屋の主人が言っていたのならそうだと思うよ。まぁ、今

のところは何も起きていないから問題ないでしょ？」
「問題あるよ！　早く調べて！　今すぐ調べて！」上野が大声で騒ぎ出す。
「あー、もうー、うるさいな。わかった、わかった。狭間屋の主人に聞いてくるよ。それで調べてから、結果を報告するね。何か起きたら、俺に電話して。あー、面倒くさい。普通は食べないでしょ？　そんな石ころなんて……」

未来が不満げな表情で吉川を見る。吉川は未来から目を逸らして、余所を向いている。妙にピリピリした空気になる。が、それを破るのが上野の膝上で眠っていた人物。ハルが飛び起き、口を開く。

「お腹空いたー！」

拾い食い〈ハル編2〉

教室の後ろにて、いつも以上に優しくしてくれるお姉ちゃん。僕の頭を撫でながら、拾い物のお菓子を食べさせてくれる。僕が甘えたモードに入っていたら、未来さんが話しかけてくる。

「それで、ハルはどこに飛ばされたの？」
「狭間の奥の方―。最深部よりもちょっと手前―」
「それで、どうしてそんなに傷だらけなの？」
「歩いていたら、百鬼夜行に出会ったの。いつもなら、通り過ぎるまで待つのだけど。今回は吉川君が孤立しちゃったから、早く探さないといけないと思って。焦っていたの。だから、突っ切っちゃえー、とか思って。無理矢理に横断しようとしたの」
「ハルにはバカタレの称号をあげるよ。よかったね」
「わーい！」

未来さんからバカタレの称号を貰った。今日から僕はバカタレだ。お姉ちゃんが、ふざけながら大喜びする僕の口にスナック菓子を放り込む。美味しいー。口をモグモグさせる僕を横目で睨みながら、隣で口を開けるのは菊池さん。すぐにお姉ちゃんが気づいて、菊池さんの口にもスナック菓子を放り込む。すると、菊池さんの不満も吹っ飛んだ。嬉しそうにお姉ちゃんにすり寄って、口をモグモグ。菊池さんって、もの凄くわかりやすい性格しているよね。

ちなみに、吉川君は家に帰ることなく、お姉ちゃんの隣に座って、僕達の話を聞いている。足を崩して、目頭を押さえながら、話を聞く姿は。どう考えても、睡魔に襲われている。もう眠くて、眠くて仕方がないのだろう。だって、現実時間は数時間だけど。向こうでは、二日近く経過しているから。特にただの人間である吉川君は居

眠りなんてしていられない。

そんなに眠いにも関わらず、話に興味を持つあたりが。流石、天才。僕なら大爆睡だ。既にこの場で眠っているだろう。そりゃあもう、三日間くらい寝ていそうだ。執事さんが吉川君に帰宅を薦めるけれど、吉川君はスルー。とにかく話を最後まで聞こうという根性。それは大した物だと思う。

不意に未来さんが口を開く。

「それにしても、百鬼夜行を突っ切るなんて。俺やハルトなら余裕だけど、ハルには難しかったでしょ？　何だかんだ言っても、百鬼夜行にはそれなりに力のある生き物が多いから」

「うん、難しかったぁ～。大人しく待っていた方が絶対に早かったの」

「だろうね」

「余裕だと思ったのに……」

「調子に乗り過ぎ。次はこんな事のないように……」

「もっと鍛えて打ちのめすの！」

僕が言ったら、誰かに頭を小突かれる。上に顔を向けると、お姉ちゃんが怖い目つきで睨んでくる。すぐに僕が首を横に振って、言い訳開始。

「ちがーう。何にもしない。次は大人しくしてる……」

「そうだよ。絶対に無茶な事はしちゃダメだからね」

「はーい……」

僕がしょぼくれていたら、吉川君の体力に限界が。お姉ちゃんのいる方向へと倒れ込む。お姉ちゃんの肩に頭を乗せて、そのままズ

ルズルズル。最後はお姉ちゃんの膝上から僕を追い払って、陣取りだ。ちょっとズルイ……。

お姉ちゃんの膝を枕にして、スヤスヤ眠る吉川君。そんな吉川君の頭を撫でながら、菊池さんの髪をいじるのはお姉ちゃん。日に日に二人の扱いが上手くなっている気がする。吉川君を眺めながら、未来さんが何かを思い出す。

「そういえば、元々は肝試しをしていたんだっけ？」

「そうですよ。だけど、吉川君って度胸ありますよね。狭間に入って、驚く事はありましたけど。結局は、泣いたり喚いたりしている所を見なかったですね」と僕。

「涙腺がないのかな？」

「ありえそうですね。どう思います？　菊池さん？」

「こいつが泣いたら、間違いなくトップ記事ね。そんな記事があるのなら、私だって読んでみたいわ」

菊池さんが吉川君をちら見しながら、発言する。じーっと吉川君の様子を窺い、不意に手を伸ばす。どう考えても、悪戯をする気配。すぐにお姉ちゃんに止められて、ちょこっと注意を受ける。

そうか……成る程。吉川君は泣かないらしい。きっとこの寝顔も超レアなのだろう。人前で寝そうなキャラには見えないもの。僕やハルトとは正反対だ。僕達なんて、常に人前で爆睡していた。睡眠時間の多さなら吉川君に勝てるだろう。かなりの自信がある。

お姉ちゃんの手は二本。菊池さんと吉川君に奪われてしまい、ちょっとつまらない気分の僕。僕がムスッとしていたら、誰かが僕の頭をポンポンしてくる。横を向くと未来さん。軽いノリで言ってくれる。

「じゃあ、俺は帰るから。後はハルに任せるよ。吉川君に何かあったらよろしくね。こっちも何か分かり次第に連絡するけど。それじゃあ、バイバ～イ」

「え？　ちょっと無責任……」

僕が話し終える前に、未来さんが去ってしまった。面白くない……。ちょっと拗ね気味の僕はとにかく落ちているお菓子をむさぼり食べる。だって、また魔力不足。たくさん補充しないと、高校生に戻れない。本当に厄介な身体だ。

拾い食い〈吉川編〉

私邸に戻り、書斎にこもる。ボクの右手には護身用のナイフ。左手の人差し指にナイフの先を軽く当てると、指先から血がにじみ出る。指を伝って、手の平まで落ちてくる。だけど、そこで停止。その頃には既に、指先の切り傷が消えている。

不思議だ……。一般常識では計り知れない奇跡。おぼろげな夢ではない。しかし、現実にしては異様過ぎる。まるで、小説だ。ノンフィクションではない作り話……。

眉をしかめながら、取り残された血を眺めていたら。背後に人の気配を感じる。聞こえてくるのは爺やの声。

「坊っちゃん、お気になさるのは結構でございますが。そのような御行為はお控え下さい」

「わかってる……」

少し指に傷を付けただけで大袈裟な……。爺やの過保護には頭が痛くなる。いつの日かノイローゼになりそうだ……。ハンカチを取り出して、血を拭きとり。爺やに話しかける。

「それで、何か用？」

「今日はお疲れでしょうから、そろそろお休みになられてはと……」

「まだ九時だよ。小学生でも起きている時間帯じゃないか」

「ですが、坊ちゃん……」

「あぁ、もう！　わかったよ！　寝ればいいんだろ？　寝れば！」

どうせ言っても聞かないんだ。ボクが眠るまで永遠に愚痴を聞か

される羽目になるのなら、さっさと眠って。夜中にでも起きてやろう。

ナイフを仕舞い、椅子から立ち上がる。書斎を後にして、寝室へ向かう。ボクの隣では爺やが黙らずに話し続けている。ボクの身の周りの事について、気になる事を次から次へと口にする。その半分はボクの態度が気に入らないという話。もっと周りに用心しろとか、吉川家の長男である自覚を持ってくれとか。ボクにはまったくと言っていい程に興味のない話だ。

爺やの話を聞き流しながら、就寝の準備を済ませる。その間も、爺やの口は止まらない。しつこい程に、色々と聞いてくる。歯は磨いたか？　なんて……。一体、ボクを何歳だと思っているのだろう？　そろそろ勘弁してほしい。

ボクの親友……フェレットのチロの部屋を覗き込むと熟睡していた。気持ちよさそうに眠るので、起こすのも可哀そうかと思い。そのままにしておく。きっとボクが夜中に起きる時に、一緒になって起きるだろう。普段の習慣だ。

ボクがベッドに入り、座っていると。明日の準備を終えた爺やが扉の前で、口を開く。

「それでは、坊ちゃん。お休みなさいませ」
「うん、お休み」

就寝の挨拶を終えて、爺やが灯りを消してくれる。いつもはそのまま、頭を下げて出て行くのだけど……。どうにも今日は様子が変

だ。扉の前で停止している。ボクが首を傾げながら、爺やに問いかける。

「どうしたの？　爺や？」

「いえ……私の目の錯覚でしょうか？」

「何が？」

「坊っちゃんのお身体がおぼろげに輝いていらっしゃるように思います……」

「へっ？」

何を言っているんだ？　思わず目を落として、自分の両手に目を向ける。えっ……？　目に映るのは異様な光景。両腕共に薄らと発光している。着ている服を含み、ボク自身が白く輝いている。

すぐにベッドから飛び降りて、鏡台の前に向かう。鏡に映る自分の姿を見て、言葉を無くす。弱い光だけど、確かに輝いている。ボクだけが背景に馴染まず浮き出ている。鏡に釘付けになるボクの耳に爺やの声が聞こえてくる。

「坊っちゃん……お身体の具合は？」

「別に問題ないけど。身体が光るなんて……。これじゃあ、幽霊だね」

「坊っちゃん、まさか……」蒼白する爺や。

「幽霊じゃない……とは言い切れないね。あの異空間で、生きていたのが不思議なくらいだから。もしかしたら、ボクは既に死んでいるのかも……」

「いえ、まさか！　坊ちゃんに限り、そのような事は決してございません！」

「だったら、青い顔をしないでよ。もしかしたら、ボクが食べてしまった石が原因かも。明日にでもミャラちゃんに相談しないと……」

「さようでございますね……」
「そういうわけで、明日も青鷺学園に行くから。別に構わないよね？」
「……」
深刻そうに悩む爺やを無視して、ベッドに戻る。布団をかぶって、寝転びながら、口を開く。
「じゃあ、お休み。また明日」
「……お休みなさいませ、坊ちゃん」
少し間をおいてから、返事が返ってきた。扉の閉まる音。爺やが出て行ったらしい。それにしても、まさか身体が光るなんて……。だけど、まぁ、良かったか。こういう事件が起きない限り、そろそろ青鷺学園へ行く事を止められそうだったから。
特に、異空間で怪我をしたのが問題だ。かすり傷ですら、大騒動なのに。あれだけ服を汚して。一時的にとはいえ、傷だらけになってしまった。それを爺やに見られたからには、外出を止められる。
あぁ……明日もミャラちゃんに会えるかな？　彼女の顔を思い出すだけで、心が躍る。一緒にいると楽しくて、彼女の全てが可愛く思えて。それに……彼女はよく似ているし。
会いたい、会いたい、会いたい……。今は何時だ？　まだ十時頃だったな……。ふと思い出す事。あの時は凄く眠かったから、おぼろげな記憶だけど……。確か、今日……ミャラちゃんに携帯電話の番号とアドレスを教えてもらった気がする。
十時って、まだ早いから……。電話しても失礼じゃないはずだ。

眠気も吹き飛んで。ベッド横にある机から、携帯電話を持ってきて。
ベッドに潜りながら、電話を掛ける。出てくれないかな？　そわそわと待っていたら、向こうから可愛らしい声が聞こえてくる。

「もしもし、上野です」

テレビ局〈その1〉

とある昼休み、皆でお昼を食べながら駄弁っていたら、今週の日曜日の話になる。松元が俺に向いて、口を開く。

「今週の日曜日に、リョウさんとテレビに出るんだぜ。しかも、生放送。羨ましいだろ？」

「どうせドジって、恥を掻くだけだろ？」

「そりゃあ、お前の事だ。俺はそんなドジなんてしない」

「わいはドジりそうや……」

なぜかリョウが暗い顔をしている。俺がリョウに問いかける。

「つーかさぁ、リョウは普段からテレビに出てるんだから。緊張する事もないだろ？」

「そんな事はないで～。やっぱり生放送は緊張するしな。わいは緊張すると、口が軽くなるから。変な事を言うてしまわんか、心配やわ～」

ヘラッと答えるリョウを横目で見ながら、松元が真顔だ。今のリョウの言葉が余りにもリアルだったので、不安を感じたのだろう。確かに、こいつは変な事を言いそうな気がする……。

俺達が駄弁っていたら、不意にお嬢様が口を開く。

「日曜日……そういえば、私も収録があったわね」

「お嬢様もテレビなん？　ちなみに、局はどこ？」

「陽光テレビ……」

「同じや！」

リョウの言葉を聞いて、お嬢様が嫌な顔をする。そんなお嬢様にリョウが言う。

「それで、内容は？」

「トーク番組よ。まぁ、最後は音楽の話に落ち着くでしょうけど」

「わいらはバラエティー番組やで。欠伸しながら話を聞いて、最後に歌を歌うねん」

「それ意味あるの？」

眉をしかめるお嬢様。リョウが話をしながら、松元を見る。

「まぁ、暇やし。その後はクイズ番組もあってな。こっちも生やて。でも、まっつんは出えへん言うし……。ちょい寂しいなぁ～」

「クイズは苦手ですから。リョウさんが頑張って下さい」と松元

「わいも苦手やて。別に遠慮せんでええと思うねんけど。まっつん……今からでも遅うないで。一緒に出えへん？」

「こればかりは許してくださいよ～」

必死になりながら首を横に振る松元。そんな中、吉川が腕を組み出す。

「日曜日……」

「まさか、あなたもなんて言いだすんじゃないでしょうね？」

「言いたくないけど、そうだよ。といっても、お前みたいに呑気にお喋りじゃなくて。経済討論になるけど……。どうしても参加してくれって、うるさくて……。その時は、ボクも気分が良かったから。つい……乗ってしまった。今になって後悔しているよ」

「あら、そうなの。じゃあ、日曜日にあなたと顔を合わせないように気をつけなきゃ」

「本当にね。せっかくの日曜日にバカ嬢の顔なんて見たら、不幸になるよ」

こうしていつも通りの睨み合い。相変わらず、こいつらは仲が悪い。この二人の仲裁役、上野を見ると昼食を食べるのに必死だった。話すら聞いていなさそうだ。まぁ、話に入ったところでそれまでなんだが……。

昼食を終え、午後の授業を終え、帰り道の話。恵梨と梨香、それに俺が加わり。三人で歩いていたら、俺の携帯にメールが来る。こんな時間にメールなんて……。一体、誰だよ？　携帯を覗き込むと、珍しく上野から。内容はこんな感じだ。

『今週の日曜日の話なんだけど。リョウと松元君に、瑠菜と吉川君がテレビに出るんだって。皆して、同じテレビ局だそうだから。応援に行こうと思うの。それで、君はどうする？』

んー、微妙だな……。まぁ、今週は暇だから、行ってもいいけど……。とりあえず、梨香と恵梨に聞いてみる。梨香は用事があるらしく、恵梨は少し考えてからという意見。うーん、テレビか……。もしかしたら、テレビに映ったり……。とか考えてしまい、ちょっと乗り気になる俺。

現状を上野に報告し、とりあえず俺は参加という形になる。上野はもちろん、ハルも参加するそうだ。まぁ、この二人なら気を遣う必要もないから。こっちも気楽だよな。なんつーか、こいつらって本当にレベルが学生だから。大人に対して、とかいう礼儀がいらない。だから、一緒に居ても楽なんだ。

テレビ局〈その2〉（前書き）

上野はデレデレ、お嬢様はヤンデレ、吉川君はクーデレ。この例え方だと、斎藤君はドラデレですね。いつもはドライなのに、超マレにデレる。

今回は本当に奇跡だー。主人公とその彼女なのに、恋愛がめったにないという中、めっずらしく恋愛っぽいです。しかしながら、斎藤君ってかなりドライだなぁ～。悪い子でもないと思うのだが、人の心境をあまり考えない辺りがまだまだお子様なのか？　今後の成長に期待。

テレビ局〈その2〉

こうして、日が経ち、日曜日になる。準備を済ませて、駅前に集合。結局は恵梨も参加する事になり。俺、恵梨、上野、ハルというメンバーになる。

上野に話を聞くと、テレビ参加の四人には話をしていないそうだ。行って驚かせてやろうという事らしいけど……。行っても、収録現場になんて、入らせてもらえないと思うのは俺の気のせいか？　まぁ、収録前に会えれば、話が変わると思うけど。

とにもかくにも一度くらいは行ってみたいテレビ局。電車に乗って、皆で駄弁る。ちなみに、ハルは子どもの姿を続けている。この前の一件で、力を使い果たして、元に戻れなくなったらしい。今は椅子に座る上野の膝上で、パズルを手に持ちながら。子どもらしく、『どうじょ～』とか言ってやがる。

それを見て、上野と恵梨の母性本能が爆発だ。異常なまでにハルを可愛がっている。俺が白い目で三人を見ていたら、ハルがパズルを俺に押しつけ、口を開く。

「どうじょ～」
「お前なぁ……」
「どーじょ～」
「どれだけ厚かましいんだよ。何だよ、これ？　パズルか？　俺はこういうのは苦手だから、自分で頑張れよ」

そう言いながら、ハルの頭をポンポンしてやると。ハルが嬉しそうに頷いた。こいつの演技力は半端ない。昨日までは、あれほどし

っかりしていたのに。今は馬鹿を見ているようだ。俺の弟妹よりも可愛らしいんだけど……。

一時間近く電車に揺られた後、駅に到着。駅を出て、十分程歩いた所に風変わりなビルを発見だ。かなり大きい上に、陽光テレビという派手な文字が目に留まる。

このテレビ局は有名だから、敷地も広そうだ。それにしても、一般人も結構出入りしているな。まぁ、入れる場所は限定されているだろうけど。少しなら見学もできるらしいし。

チケット代は上野が出してくれるそうだ。礼を言って、チケットを受け取る俺達。庭を横切り、ビルの中に入ると、すげー広い。おぉ～！　感嘆する俺と梨香の隣で、ハルが上野を見上げる。

「お姉ちゃん、これからどうするの？」

「二時にリチャードと待ち合わせなの。だから、それまでにお昼を食べて。時間があれば、少し見学をしようかと思っているんだけど。何せ一般の人でも、入れる場所があるそうだから」

「ワーイ！」

今は十二時……、一時間で飯を食って、一時間で見て回るのか……。結構、時間がギリギリだよな……。パンフレットを見る限り、全てを見るには時間が足りなさそうだ。

そういうわけで、まずは昼食。歩いていたら、社員レストランを発見する。一般人も入れるようなので、ここで昼食を食べる事に。中に入り、食べたい物のチケットを買って、給仕人を待つ。やってきた給仕人にチケットを渡して、しばらく経つと給仕人が料理を持ってきてくれる。

皆でのんびりとお喋りをしながら、昼食。俺と恵梨が食べ終わり、上野待ちになる。ハルは論外だ。何せ追加注文が止まらない。一人で、レストランの食べ物を食いつくすのではないかと思うくらいに追加注文を繰り返している。こいつの場合は、食べ終わっているという部類に入るよな？　どう考えても、これ以上は食べる必要がなさそうだ。

不意に上野が口を開く。

「先に見学をしておいでよ。僕は食べるのに時間が掛るから。待ち合わせの時間になったら、連絡するし」

「いや、でもなぁ……」変に薦められて困る俺。

「待たせるのも気が重いよ。ほら、お小遣いあげるし。せっかく二人きりなんだから、デートしてきなよ。あまりイチャイチャしないけど、君達は公式に付き合ってるんでしょ？」

上野の言葉を聞いて、俺と恵梨が顔を赤らめる。そりゃあ、付き合っているといえば、そうだけど……。だけど、最近はそんなに……。慣れちまったせいか、あまりそういうことは……。友達感覚が強くなってきていることに影響をされたのか、そういう恋愛とかが小恥ずかしいんだけど……。

俺がうじうじと考え込んでいたら、上野が万札を俺に渡してヘラヘラ笑う。

「ほらほら、斎藤君は男でしょ？　少しは恵梨達と遊んであげなよ。女の子は放っておくとすぐに拗ねちゃうよ。孤独が苦手なのかな？　瑠菜なんて一時間放っておいたら、怒るんだもの。恵梨や梨香なんて凄い方だよ。斎藤君って、結構ドライだもんね。だけど、たま

には構ってあげて。じゃないと、僕が文句を言われるんだよね。この前なんて、恋愛について、恵梨に相談されて……」

「違うのー！　違うの、違うの！　違うんだからね！　信也！」

騒ぎ立てる恵梨。皆が俺達を振りかえる。すみませんと頭を下げて、皆の注目を余所に向ける俺。こんな所で、茫然としていたら豪い目に遭いそうだ。

とにかく、上野に礼を言って。恵梨の腕を掴んで、レストランを出る。あの場所にいたら、どんどん悪化していくような気がする。俺はこういった勘はいいほうだ。できる限り、ゴタゴタは避けたいと願う。

恵梨と一緒に、局内を歩き回る。パンフレットを手に持ちながら、庭園を歩きまわり。次に、番組についての展示品を見て回り。それだけで、かなりの時間を費やしてしまう。

懐かしい番組一覧を目にした時は、思わず恵梨と盛り上がってしまった。記憶には残っているけど、いつ消えたのか覚えていないような物ばかりだ。二人でべらべらと駄弁っているうちに、一時半になる。

上野からは連絡がないので、そのままショップの中に入る。テレビ局のマスコットキャラや人気番組のグッズ……珍しい物が色々と並ぶ中、目に付くのは知り合いの顔。

やっぱりリョウのグッズは多いな……。マイナーな所、松元のグッズもあるけど。誰が買うんだよ、こんな物？　つーか、まぁ、リョウのグッズだって買う気はさらさらないけどな。何せ知り合いだし、後数分で会えるんだから。わざわざ買う必要もないだろう。

案外になかったのが、お嬢様と吉川のグッズ。テレビに出ているのだから、ありそうなものなのに一つも見当たらない。まぁ、あいつらの事だから、こういう事を断っているのだろう。あれだけの人物をテレビ局が放っておくわけないだろうし……。

そういえば、上野やハルも見当たらなかった。一度だけだとはいえ、あんなに大事を起こしたにも係わらずグッズは出ていない。こっちは本人達了承の前に、お嬢様の力によって止められていそうだ。まぁ、きっとそうだろう。

俺が一人でリョウのグッズに突っ込みを入れていたら、急に恵梨が駆けよってくる。

「信也……。私、これが欲しいな……」
「うん？　なんだよ、それ？」
「可愛いでしょ……？　陽光テレビのマスコットキャラクターのヒュー君……」
「携帯ストラップか？」
「そうだよ……。梨香の分はこっち……。色違いにするの……」
「まぁ、いいけど。これ以上、ストラップを付けたら、お前の携帯が悲鳴を上げるぞ」
「別に……いいじゃない。ストラップは多い方が華やかでしょ……？」
「使いづらくね？」
「いいの！　それよりも買ってよ……。どうせ信也はお金出さないんだから……」
「わりー、わりー。ほら、買いに行くから。それを貸してくれ。それと、後で上野に礼を言っておけよ」
「わかってるよー。はい、よろしくね……」

「はいはい」

恵梨から商品を受け取り、レジに向かう。今日の恵梨はご機嫌だな。いつものウジウジオーラが少ない。こういう恵梨を見ていると、可愛く思える。

梨香の場合はしっかりしているから、可愛いと言うか……、一緒にいて楽だ。何か男友達と一緒にいる気分になる。あぁ、それで最近は以前以上に友達感覚になってきているのか……。そう考えれば、恵梨も悪くないよな……。

買い物をしている最中に、レジ横にちょっとした物を発見する。何の気なしに手を伸ばすのは恵梨達が好きそうな首飾り。値段を見ると結構なものだ。うーん……悩んだ末に、それを店員に手渡す。

「これ……会計別で」

自腹を切るのは辛いけど……。確かに、上野の言うとおりかもしれない。最近の俺は、めっきり恋愛とかに興味がなくなっているから。恵梨達が拗ねても無理ないか……。

まぁ、これでも告白したのは俺だから、これくらい買ってやらないといけないのかもしれないな。と言っても、告白をしたのは中学一年の時だから。

冷静になって考えてみると、俺は恵梨香に恋していたのか？　可愛いとは思っていたけど、実際はどうなんだろう？　恋ってトキメクんだろ？　あの頃の俺は、トキメイていたのか？　うーん、そんな記憶はサラサラないんだけど……。

複雑な思考に落ちっていたら、店員が品物を包み終える。それを受け取り、恵梨の元へと戻る。上野の金で買った品物を手渡すと、恵梨が大喜びになりながら受け取った。それを自分の鞄に仕舞って、俺に笑顔を向ける。

「ありがとう、信也……」
「俺に礼を言われても困るけど……」
「おつかいをありがとう、信也。って意味だよ……」
「そっちかよ」

恵梨に突っ込みを入れて、ショップから離れる。どうしよう？こっちのプレゼントを渡すきっかけを失った。早く渡さないと忘れそうだ。せっかく自腹を切って、買ったにも関わらずに渡しそびれるなんて情けないよな。

テレビ局〈その3〉（前書き）

わー、恥ずかしい！　キャー、恥ずかしい！　何だかわからないが、斎藤君って妙に恥ずかしい。上野君とか見ていても、何も思わないが。何だろう？　これ、青春だろうか？　もう見てられないくらいに恥ずかしい。

テレビ局〈その3〉

そろそろ二時になるけど、上野からの連絡もまだなので、二人で放浪する事に。歩いていたら、人気の少ない展望台に辿り着く。ここなら、あれを渡せるかも……。早くプレゼントを渡してしまいたくて、そわそわする俺を余所に。恵梨が展望台からの風景を見ながら、口を開く。

「わぁ～、凄い……。このビルって、結構高いんだね……」
「そうだな。やっぱり有名なテレビ局なだけはあるよな」
「ほら、信也も見てみなよ……。下……」

恵梨がガラス張りの窓から下を覗いて硬直。そのまま青い顔をしながら、座り込む。そんな恵梨に俺が声を掛ける。

「どうしたんだ？」
「怖い……。怖くて……腰が抜けちゃた」
「だったら、窓に近づくなよ……」
「どうしよう……？　信也……手を貸して」
「お前、バカだろ？」

呆れながら、恵梨の手を引っ張る。窓から離れた途端に、恵梨が胸を撫で下ろす。

「あー、怖かった……」
「こういうのは、梨香の方が苦手かと思ってたんだけどな」
「え？　何で？」
「いや……お前は運動神経がいいから……」
「運動神経というか……気持ちの問題だよね……。梨香はきっと平

気だと……思うよ」
「そっか……」
不意に恵梨が暗い表情を浮かべる。
「梨香はいいよね……。明るくて元気で誰とでも仲良くできて……。信也もそう思うでしょ？」
「え……？　いや……どうだろう？」
「黙っていても、わかってるよ。信也が私の事を避けている事くらい……。自分でも鬱陶しいと思うもの……」
「いや、そんな事は……」
「そうだよ」
ためらう俺に向いて、恵梨が即答する。恵梨の癖に、躊躇のない答え方だ。まるで俺の気持ちを見とおすように話し出す。
「信也は面倒事とか嫌いだから……。私みたいに……おどおどしていて、人に頼るタイプは苦手でしょ？　その分、梨香はさっぱりしているから……付き合いやすいと思う。まぁ、友達みたいに付き合えるものね……。だから、私はお邪魔虫」
「……」
「いいよね、梨香は。運動神経はないけれど……。頭は良いし、性格も明るくて。良いとこ取り……。二人に別れて正解だと思うよ……。根暗で鬱陶しい気持ちがなくなるんだもの。そりゃあ、気分もいいよ……。それと違って、私は最悪……」
恵梨がため息をついて、一人で不平を言う。
「私なんて、いなくなればいいのに……」

俺から目をそむける恵梨を見て、何とも言えない気分になる。そこまで毛嫌いするつもりもなくて……。ただ面倒だから、放っておいただけなのに。恵梨が目に涙を溜めている。梨香とは違って、あまり気持ちを口にしない恵梨が……。らしくない程に愚痴を言って、俯いている。

俺が悪いのか？　頭の中で冷静に分析しようとする自分がいるが……。どうにも今は気分じゃない。首を振って、思考を止めて。恵梨に手を伸ばす。泣きそうな恵梨を抱きしめると、ふと気付く事がある。こいつはこんなに背が低かったっけ？　いや、俺の身長が伸びているのか？

こいつを最後に抱きしめたのはいつだろう？　そんな事を片隅で考えながら、恵梨に謝る。

「ごめん……」
「……」
「別に……そんなつもりじゃなかったんだ」
「……」
「……」

どうしよう？　普段から人に謝る事がないからか……。何を言えばいいのかわからない。次の謝罪の言葉が見つからない。

俺が停止していたら……。恵梨が俺の胸元で顔を上げて、俺を見つめてくる。それがもう……堪らないくらいに可愛い顔で。何せ半泣きで、上目遣い。何かを訴えるような表情に、思わず息を呑んでしまう。

ちらり、ちらり、と左右を見て。人がいないのを再確認。人がい

たなら、恵梨を抱きしめる事すらできやしないが……。いないから、恥ずかしくない……はずだ。

誰もいないな？　どこかから上野達が覗いている事もないな？　うん、よし……。恵梨の髪を少し撫でて、タイミングを計りながら顔を近付ける。恵梨は抵抗する事もなく、素直に身を任せているあたりが愛らしい。

どこまでの行動がありなのだろう？　恵梨にキスしながら考える。毎日、教室の後ろで上野やお嬢様が熱烈なキスを繰り広げているけど。ああいうのって、ありなのか？　一度くらいはやってみたいけど……。

こういう事をできるチャンスなんてあまりないしな……。とか考えながら、ちょっと大胆な行動に出てみる。以前に恵梨香とキスをした事は、何度かあるけど……。そりゃあ、もちろん軽いキス……。前はそういうので浮かれていたけど……。毎日、お嬢様と上野のキスを見せられていたら、常識だって忘れてしまう。

流石に、恵梨が驚き。抵抗しようとするけど……。それが却って可愛いから、結構無理矢理やってみる。口を離した時には、恵梨の目が虚ろ。すぐに俺にしがみついてくる。

「ふわぁ……信也……らしくない」

「文句を言うなら、お嬢様と上野に言ってくれよ。毎日、教室の後ろであいつらがあんなキスをするから悪いんだ……」

「ふぅ……ねぇ、信也。もう一回……」

「……」

恵梨の誘い顔を見て、気持ちを持っていかれる。それでなくても、

今のキスでかなりヤバいのに……。こんな顔で誘われたら、堪らない。

いつの間にか、周りを気にせずキスをしていた。知り合いに見つかったら、その時、考えよう。しかし、よく考えれば、隠す必要ないんだよな。恥ずかしいというのはあるけれど……。公式に付き合っているわけだし、悪い事じゃないはずだ。

滅茶苦茶に熱いキスを終えて、二人でベンチに座りながら、ボーっとしていたら。俺の携帯が震えだす。開いてみると、上野から。電話に出ると、先程のレストラン前に来てくれという話。

ベンチから立ち上がり、足取りがフラフラな恵梨を支えながら、レストランに向かう。あ……プレゼントを渡すの忘れてた。まぁ、いいか。後で渡せばいいだろう。

テレビ局〈ハル編1〉

レストラン前にて、黒松さんと立ち話をするのはお姉ちゃん。何やらバッチを貰っている。お姉ちゃんがそれを服の目立つ所に付ける。菊の紋章が入ったバッチ。多分、菊池家の家紋だろう。これを付けていれば、移動範囲が広がるという事だ。

僕もバッチを受け取って、服の目立つ所に付ける。もっとバッチが大きかったら盾になるのに……。なんてバカな事を考えていたら、斎藤君と恵梨さんが帰ってくる。二人共にぼんやりしているけど、どこかで居眠りでもしていたのかな？

とにかく、二人もバッチを受け取り。移動する事に。まずは菊池さんの所。菊池さんの予定は二時半から三時半。今から行ったら、少し話せるかもしれない。今は二時過ぎくらいだから、結構ギリギリになるけれど。

黒松さんの後に続く。一般人、立ち入り禁止の階に移動して。静かな廊下を歩いて行く。とある扉の前、黒松さんがノックをすると女性の声が聞こえてくる。不意に開かれる扉の前には、知らない女性。メイクを担当する人だろう。黒松さんが話をつけて、部屋に入れてもらえることになる。

部屋の中に入ると同時に、菊池さんがマッハの如く駆けてきて、お姉ちゃんにダイブ。仰向けに倒れるお姉ちゃんは後頭部を打って、鳴き声を上げる。そんなの関係なしな菊池さんが、大喜びに口を開く。

「上野！　どうしたの!?　もしかして、私に会いに来てくれたの

!?」

「みぃ～、頭痛い～」

「やっと私の気持ちが伝わったのね。じゃあ、そろそろ婚姻届に判を押して」

「僕の気持ちは永遠に瑠菜には伝わらないね。とりあえず、落ち着いてから。冷静になって話し合おうよ」

「落ち着いて、冷静になれば。結婚してくれるの？」

「僕達は女同士だから結婚できないよ」

「そんなの関係ないわ」

お姉ちゃんの抵抗もむなしく、いつも通りの展開に入る。菊池さんに半端なく襲われるお姉ちゃん。キスどころか身体中を撫でまわされる。そろそろ十八禁に入るぞという所で、僕が菊池さんを止めに掛る。

なんとか菊池さんを落ち着かせて、普通の会話ができる状態に持っていく。僕達がお喋りしていたら、時間になり。菊池さんが不満な表情を浮かべながら、撮影スタジオへと立ち去った。

僕達は菊池さんを見送り、予定通りに行動する。次は吉川君に会い、最後にリョウさんの顔を拝む予定。菊池さんには、今後の予定を告げておいた。上手くいけば、後で再会しようという話だ。

吉川君は一時から五時に収録があるらしい。今は二時半ということで、既に収録は始まっているのだけど。少しくらいなら、顔を覗かせても問題ないだろう。もちろん、話しかけたりはできないけれど。眺めるだけでも意味はある。

そういうわけで、吉川君のいるスタジオに向かう。途中で、斎藤君が口を開く。

「なぁ、俺は先にリョウ達の所へ行ってもいいか？」
「え？　何で？」とお姉ちゃん。
「いや、だって……吉川の出る番組って小難しい話なんだろ？　俺はそういうの……苦手だし……」
「そっか……。じゃあ、僕達は吉川君の様子を見てから、そっちに向かうよ。このバッチがあれば、ある程度の自由がきくそうだから。リチャードは斎藤君と一緒に行ってあげて」
「あの……私も信也と行っても……」

おずおずと手を上げる恵梨さん。お姉ちゃんが朗らかな笑顔で答える。

「もちろん。じゃあ、また後で。リチャード、二人をよろしくね」
「はい、かしこまりました」答えるのは黒松さん。
「ちゃんと後でお礼に美味しいメロンパン買っておくから。ね？」
「いえ……それは……」
「ねっ？」
「……はい、ありがとうございます」

輝く笑顔でメロンパンを薦めるお姉ちゃんに、断りの言葉を口にできない黒松さん。お姉ちゃんの言葉に頷いてしまい、黒松さんの背にメロンパンという重荷が降り注ぐ。その後、吉川君の居る場所を黒松さんから教えてもらい、三人と別れる事に。

僕とお姉ちゃんは吉川君の収録現場に直行だ。経済討論をする天才になんて興味はないけれど、守備力ゼロのお姉ちゃんを放っておくわけにはいかない。向こうがその気になれば。お姉ちゃんなんて、

いちころだろう。菊池さんのおかげで、今のお姉ちゃんは飼い猫よりも大人しい。誰に何をされても、抵抗できない生き物になっている。

お姉ちゃんを守らなくては、弟として剣を振おう。まぁ、あくまで弟としてだから。適当に力を抜いて、無理だと悟ったら助けない。時には、諦める事も肝心だ。とりあえず、お姉ちゃんが本気で助けてほしそうに叫んでいたら助けよう。襲って下さいモードに入っていたら、助けない。僕に利がない限り、助けない。どんどん思考が未来さんに似てきたな……。これじゃあ、いずれ僕も駄目になってしまうだろう。

とにかくグダグダと歩き続ける。しばらくして、吉川君のいるだろう場所に辿り着く。そっと扉を開けて、中に入ったら、怖い人に睨まれるけれど。バッチを見せたら、向こうから頭を下げてきた。釣られて、僕達も頭を下げる。

撮影現場を迂回して、お邪魔にならないようにステージに近づく。カメラに映らないよう、遠くからステージを眺める。すぐに、吉川君を発見して、お姉ちゃんの服を引っ張る。お姉ちゃんが僕を見て、僕が吉川君を指差すと。お姉ちゃんが頷き、理解を示してくれた。

ちなみに、吉川君の席は二段目の一番左側。左側って、僕達視点で左側。吉川君にしてみれば、一番右端だ。腕と足を組みながら、無表情に司会者を眺めている。皆が口々に議論を交わすけど、吉川君は喋らない。誰かに話を振られた時だけ答える形。

何だか大変そうだな、国会とか政治とか。今の僕には、まったく

関係がないから、話の内容が頭に入らずに素通りしていく。こんな調子でいくと、今度のテストは悲惨な結末に終わりそうだ。少しでもいいから、今のうちに話を頭に入れないと……。

僕が真面目に話を聞いていたら、隣でお姉ちゃんがそわそわしだす。吉川君が気づいてくれないから、つまらないらしい。フニフニフニフニと落ち着きのないお姉ちゃん。そんな気配を感じ取ったのか、吉川君が振りかえる。

今まで無表情だった、吉川君……。お姉ちゃんを見て仰天だ。目を丸くしながら停止。そんな中、急に司会者に話を振られて、我に返る。珍しく話を聞いていなかった吉川君に、再度質問を投げる司会者。吉川君が返答して、またもやステージが盛り上がる。

だけど、吉川君はそれどころじゃない。今や、議題も忘れて、全ての興味がお姉ちゃんに集中する。お姉ちゃんがニコニコ笑えば、吉川君ははにかみながらお姉ちゃんから目を逸らす。右手を口元に持ってきて、表情を読まれないように隠してしまう。そりゃあそうだろうな。だって、こんな真面目な討論の最中に、一人だけニタニタ笑えない。

まるで考えるような素振りを見せる吉川君だけど、別に考えているわけじゃない。それを見て勘違いした司会者さんが、吉川君に話しかけだす。吉川君は返答しながらも、視線がお姉ちゃんに一点集中。

不意にお姉ちゃんが両手をグーにして、招き猫みたいに『おいで、おいで』と手を動かす。それが本当に可愛らしく手を動かす。まるで小さな子猫のように、瞳を潤ませて、おねだりする。もしも、相手が菊池さんなら間違いなく飛んでくるだろう。きっと弾丸の如く

飛んでくるだろう。

だけど、今回の相手は吉川君だから、大丈夫だ。弾丸は飛んでこない。お姉ちゃんのサインを見た吉川君が、カメラに映らない死角を使って。左手の人差し指を横に振る。『今は行けない』のサイン。

吉川君の反応にショックを受けたお姉ちゃん。もの凄く寂しそうな表情を浮かべる。まるでおやつを貰えそうで貰えなかった子犬のような、しょぼんとした目で、吉川君を見つめる。しかも、そのタイミングでお姉ちゃんの尻尾が力なく垂れ下がり、地面にペタンッ……。

わざとだろってくらいに哀れな姿を見せるお姉ちゃん。まぁ、わざとだと思うけど……。だけど、なぜか。それが見事に、吉川君の笑いの壺にはまる。急にお腹を抱えて、笑い転げる吉川君。くそまじめな討論の中、一人だけ場違いな行動だ。

先程までは、冷静な口調で感情を見せず、キッチリと筋道の通った意見を述べる天才だったのに。今や、ただの一般高校生だ。大声を出しながら、笑い続ける姿は何とも幼い。

吉川君の奇怪な行動に、周りの皆は言葉を無くす。お姉ちゃんが口元を押さえながら、混乱気味に小声で騒ぐ。

「どうするの!?　収録中なのに……」
「生放送じゃないから、編集できるのー」
「あ、そっか。じゃあ、大丈夫だ」

ホッと胸を撫で下ろすお姉ちゃん。そんなお姉ちゃんに近づいてくるのは吉川君。ステージから下りて、僕達の前に立つ。お姉ちゃ

んに向いて、口を開く。

「どうしたの？　こんな所まで？」

「皆がテレビに出るって聞いたから、応援に来たんだけど……。何だかお邪魔だったみたい……。ごめんなさい……」

「謝る必要はないよ。別に重要な会議でもないんだから。皆が好きな事を言って、それでおしまい。だからって、法律が変わるわけでもないし。所詮はエンターテイメントだね」

「そんなことないよ。こういう事をお話するのって、大切な事だと思うよ。僕にはよくわからないけれど……」

「フフッ、そう？」

吉川君が楽しげに笑って、お姉ちゃんとお喋りを始める。その間も、皆は二人に注目だ。誰もが何も言わないで、ただただ二人を眺め続ける。不意に吉川君が手を上げると執事さんが現れ、吉川君と話を始める。

どうなるのかと思っていたら、吉川君がお姉ちゃんの背を押して、スタジオから出て行った。もしかしなくても、ドタキャンするつもりだろう。執事さんが監督と話をする中、誰かが僕の背を突く。振りかえると、一人の女性。

「ねぇ、あの女の子って誰なのかしら？」

「僕のお姉ちゃんです」

「吉川さんと凄く親し気ね。もしかして、二人は……」

「違いますよ。吉川君が一方的に惚れているだけです。大体、お姉ちゃんは菊池さんにも惚れられていて。ややこしいのですよ」

「菊池？　って、菊池お嬢様？」

「そうなのです。菊池さんと吉川君に惚れられた上に。あの……音楽で有名なリョウさんにはバンドに入ってくれって、勧誘されてい

て」

「あの子……何者なの？　というか、君は？　もしかして、上野進一さんと一緒にいた……」

「そうです。僕は上野ハルです。お姉ちゃんは上野ミャラ。お父さんが上野進一。上野家は呪われているのでしょうか？　最近は、のんびりとくつろぐ事もできません」

「……でも、菊池さんって、上野進一さんが好きだって噂……」

「あぁ、そうですよ。菊池さんはお父さんもお姉ちゃんも大好きです。今や二人共に、菊池さんの言いなりですけど。あまり他言は止めて下さいね」

「もちろん、もちろん……」

女性が感心しながら口を開く。まぁ、他言した所で、状況に変わりはないだろうけど。せっかくだから、僕も質問だ。情報提供したのだから、こちらにも提供してもらおう。

「それにしても、皆して停止していますね。やっぱり吉川君の反応に驚いているのですか」

「だって、吉川さんがあんなに笑うなんて、前代未聞よ。私だって何度もお会いしているけど、いつも無表情で。笑ったり、泣いたりしない人だと思っていたもの。結構、不機嫌な時はあるけど……。そんな人が、あんなに声を出して、笑うなんて思ってもみないじゃない」

「お姉ちゃんといる時は、凄く楽しそうですよ。まぁ、隣に菊池さんが入って来た時点で怒り爆発ですけど。菊池さんも吉川君もよく似ているのですよ。二人共に、嫉妬深くて。二人でお姉ちゃんの取り合いですよ。そういえば、菊池さんも余所ではツンッとしているらしいですね。いつもお姉ちゃんに集っているシーンを見ているので、忘れがちですが……。まぁ、何はともあれ。お姉ちゃんは二人にとって、熱愛の対象です」

「へ～、そうなの～」
「絶対に他言は止めて下さいよ。菊池家と吉川家に殺されますから。誰がとは言いませんが」
「うわぁ……怖い。大丈夫よ、お姉さんは口が堅い方だから」

本当かな？　こういう人って、口軽そう。きっと僕が立ち去った後に、ここにいる人達に言ってまわるのだろう。まぁ、どれだけ事態が悪化しても。菊池家と吉川家がバックにいるのだから、大丈夫だと思う。

テレビ局〈その4〉

上野達と別れて、リョウと松元のいるスタジオにきた所まではよかったんだが……。椅子に座りながら緊張する俺に向いて、リョウが口を開く。

「どないしたん？　サイちゃん？」
「どない……っていうか、何で俺がステージいるんだよ!？　俺、一般人だけど!？」
「せやかて、遠かったらお話でけへんやろ？」
「いや、別に話さなくていいから！　ってか、これ……生放送だよな？　いや、マジで下りる下りる」

ステージから降りようとする俺の腕を掴んでリョウが口を開く。

「ちょいまち！　わいも緊張してるねん！　せやから、サイちゃん。わいが変な事を言いかけたら止めてほしいねん。いつかクレジットカードの番号とか口にしそうで……」
「もう言っちゃえよ。言えば楽になるじゃん」
「発想の逆転やね。結構、ええ案やけど……。わいって、カードとかいらんのに作る性質やから、めっちゃ数が多いねん。全部を説明し終える頃には、生放送終わってまうわ」
「終わればいいじゃん。俺はしらねーよ」

さっきまでは、テレビに出られたら嬉しいな。とか思っていたけど……。いざそれが現実になると、本気で逃げ出したい気分になる。その上、ギャーギャー騒ぐ俺達を見て、無駄に司会者が話しかけてきやがる。『どちら様で？』的な話だ。もう止めてほしい。

ちなみに、恵梨はステージ下の遠くの方から、こちらの様子を窺っている。何せ家族には恵梨香が二人に別れた件を話していないので、下手に目立つような事はしたくないようだ。小恥ずかしさで喚きまわる俺に向いて、松元までが話しかけてくる。

「ところで、お前……何しにきたんだ？」

「上野が皆を応援するって言うから、見学に来たんだよ。まずは、上野達と一緒にお嬢様の所に寄って。その後、俺達はリョウに会いに。上野達は吉川に会ってから、こっちへ来るって言っていたけど……」

「何や、ミャラちゃんもおるん？　そらぁ、おもろいわ」

リョウが無駄口を叩いて、未だに逃げようとする俺を取り押さえる。そこへ投げられる質問の数々。青鶯学園について、リョウや松元、上野進一にハル。お嬢様や吉川。そういった目立つ奴らの話について。もう質問の嵐だ。ある程度、返答した後に松元を指差してやる。

「お前が答えればいいじゃんか！　何で、俺が答えてるんだよ？」

「一般人の意見の方が。俺が答えるよりも、真実味があるだろ？」

と松元。

「せやで、サイちゃん。まっつんの言う通りや」変に納得し、頷くリョウ。

「俺は質問返答機じゃねーよ。後は勝手にやってくれ。俺は下りる」

そのタイミングで、スタジオに入って来たのは上野達。なぜか吉川まで付いてきている。だけど、吉川って……まだ収録終わってないんじゃないのか？　首を傾げる俺の前で、上野と恵梨が話を始める。すぐにリョウが上野達に気づき、ステージを下りてまっしぐら。

リョウが皆の背を押しながら、ステージへと戻ってくる。つーか、恵梨まで巻き込まれている。後で梨香に怒られそうだな。そんな事を考えていたら、皆がステージの上に到着だ。リョウがディレクターに声を掛ける。

「ちょい椅子ない？　後四つ居るねんけど……」

「僕はいらないよ。地面に座るから。その方が楽だし」と上野。

「あ……私もいらないです」恵梨が遠慮がちに言う。

「僕はお姉ちゃんのお膝に座るのー」ハルが可愛らしく言って。

「ミャラちゃんがいらないのなら、ボクもいらないよ」吉川までもがほざきだす。

わらわらと地面に座るいつものメンバー。飛んでくるのは吉川の執事。吉川に向いて、いつも通りに騒ぎ出す。

「坊っちゃん！　地面に座るなど……」

「またうるさいのがきた。爺やもそろそろ坊っちゃん離れしようよ。じゃないと、ボクがストレスで死にそうだ。後、その呼び方をどうにかしてくれないと。ボクの気分が悪くなるよ。まぁ、あまり度が過ぎるようなら、ボクにだって考えがあるけど……」

「伊吹様！　大変恐縮ですが、地面に……」

「老人ホーム……」

「……」

急に執事が静かになり、黙り込む。吉川は満足げだ。嬉しそうに一人で呟く。

「良い言葉だよね。あのうるさい爺やが黙るんだから、これは魔法の言葉だよ」

「つーか、お前……収録はどうしたんだよ？」

「収録？　何それ？」
「え？　お前は確か五時まで……」
「吉川君はドタキャンしたのー。お姉ちゃんが来たから、テレビどころじゃないんだってー。だから、途中で早退なのー」

ハルが俺に向いて言う。あぁ、成る程な……。やっとのことで理解を示す俺など無視して、吉川は上野とお喋りだ。別に生放送のテレビを気にしているわけでもない。というか、むしろ興味すら持っていない。

しかしながら、メンバーが増えて、話が盛り上がる。なんというか、吉川までやってくるとはな……。しかも、皆の話を聞く限り。通常なら、吉川は議題以外の話をしないらしい。というか、こういうバラエティーに出るのが初めてだという。

俺達は慣れているので何も思わないが、他の人達は仰天している。何せ普段はあまり喋らないクールな天才が、今は黙ることなく喋っているんだ。笑ったり、驚いたり、照れたりと感情豊かにお喋りしている。しかし、相手は上野に限定されているが……。まぁ、たまにこちらを向いてもご機嫌だ。何せ今はお嬢様がいない。上野を一人占めできるのだから、吉川だってご機嫌になる。

そんな具合にお喋りしていたら、放送時間残り十五分になった頃に、乱入者が現れる。もちろん、菊池お嬢様。吉川が上野と楽しげにお喋りをする姿を見て、猛スピードで走り込んでくる。上野を抱きしめ、吉川を睨む。

「どうしてあなたがいるのよ！？　上野には近づかないで。って、何度も言ってるでしょ！」
「バカ嬢の方こそいい加減にしないと、ミャラちゃんが可哀そうだ

よ」

始まるのは二人の睨み合い。いつも通りの展開に、ため息すら出ない俺達。何も知らない人達は慌てている。乱闘でも始まると思っているのだろうか？　生放送ということもあってか、流石の上野も二人に注意をする。

「二人共、喧嘩は止めようね」

「……」

二人が睨み合いを止め、顔をそむける。だが、居座る場所は上野の隣。これはお決まりだ。ハルが上野の膝上で、上野を見上げる。

「テレビはそろそろ終わるの？」

「そろそろ終わりだね。そういえば、リョウが最後に締めをしてくれるとか……」

「あぁ、『レボリューション』を歌おうかと思ってたんけど。すっかり忘れとったわ」

上野がリョウに振りかえり、リョウが答える。それを聞いて、上野が興味を持つ。

「『レボリューション』？　いいね。あの曲は僕も好きだよ」

「それやったら、ミャラちゃんも一緒に歌ってや」

「じゃあ、マイクを順番に回そうよ。切りのいいところで区切って、隣に回すの」

「ええな。おもろそうやん。せやけど、伴奏はテープやねん。わいとまっつんしかおらんと思ってたから、楽器とか用意してへんねん」

「別に構わないよ。カラオケだと思えば、十分じゃない」

「せやな。じゃあ、そろそろいこかー。皆、ええか？」

リョウの言葉を皆が支持して、番組の締め曲が流れだす。伴奏に乗りながら、歌うのはリョウ。おー、流石はリョウだ。これだけバカでも、歌は上手い。それを再度確認していたら、途中で松元にマイクが回る。

松元も以前より断トツによくなっている。まぁ、師匠がリョウだからな。こいつも頑張ってるんだなと、ちょっと見直してしまう。

次は、俺に回ってくるがもちろん無視して、次に回す。恵梨はいらないだろうから、お嬢様にプレゼントだ。お嬢様が受け取って、上野にへばり付きながら歌を歌う。ノリノリになりながら、口を開くお嬢様の歌声は大したものだ。やっぱりお嬢様は音楽の才能があるんだな……。

そして、今度は上野に回る。最強上野が歌を歌えば、そりゃあもうビックリするくらいに素晴らしい。もちろん、俺達以外はビックリしているだろう。きっとこれより上は存在しない。

途中で、ハルが加わって。吉川までもが乱入する。こいつらはマイクなしで乱入だ。上野の歌に合わせて、ハモるように歌いだす。

吉川が上手いのは目に見えているが、ハルだってかなり上手い。上野にでも習っているのだろうか？　なかなかのものだ。吉川の様子を見たお嬢様が、吉川に対抗するために、歌いだし。調子に乗ったリョウまでもが参加する。

ただのカラオケなのに、ヤバいくらいに盛り上がり。合唱が終わると拍手喝采。司会者や他の芸能人のみならず、ディレクター達までもが拍手している。えらく盛り上がる中、最後にリョウが上野に

希う。

「なぁ、ミャラちゃん。そろそろメンバーに……」
「やー」
「そんなん言わんと」
「やーやぁ」
「一か月だけ試しで……」
「やぁーん。にゃーん。にゃにゃにゃーん」

上野がハルを抱きしめながら、頬をスリスリとハルの頭に押し付ける。お嬢様と吉川はニャンニャン言いながら嫌がる上野を見て、悦に浸っている。当分、上野はバンドに入らないな。要するに、吉川もお嬢様もバンドには入らない。

もしも、上野がリョウのグループに入ったなら。残り二名も乱入して、きっと世界最大の人気音楽グループが誕生するだろう。予想じゃなくて、確定だ。うーん、一度は見てみたいな。少しリョウを応援したくなってくる。

テレビ局〈ハル編2〉

バラエティー番組の生放送が終わり、リョウさんが次のスタジオに向かう中。皆でワラワラとリョウさんの後ろを歩いて行く。どう考えても、お邪魔なのだけど。リョウさんが何も言わないから、本当にワラワラとついて行ってる。

相変わらず、お姉ちゃんは鬼神達の仲を受け持つ係りだ。可愛い笑顔で二人を翻弄し、二人が争わないよう気を配っている。そんなお姉ちゃんに声を掛ける。

「ねぇ、お姉ちゃん。僕達はこれからどうするの？」

「えっと……どうしよう？　皆のお仕事も大体は終わっちゃったよね」

「暇やったら、わいと一緒にクイズ番組に参加してくれへん？」とリョウさん。

「ううん……。これ以上、お邪魔はできないよ。他の人達に迷惑を掛けるわけにはいかないから。僕達は他を少し見学してから、帰ろうか？」

お姉ちゃんの言葉を聞いて、リョウさんが残念そうに振る舞う。途中で、リョウさんと別れる事に。松元君はリョウさんについていくようだ。番組には参加しないけれど、遠くから様子を窺うらしい。

残された僕達は見学ツアー。斎藤君と恵梨さんが寄っていなかった場所を中心に歩きまわる。もちろん、菊池さんと吉川君もついてくるから、もの凄く目立っている。皆がヒソヒソとこちらに視線を送ってくるけど、どうしようもできない。別に悪い噂をされているわけでもないだろうから、見て見ぬ振りをしてその場を立ち去る。

僕達がうろうろしていたら、ホールのような場所に出て大きなステージが目に留まる。この場所でも撮影が行われるのだろうか？ステージの階段には立ち入り禁止の札が置いてあるけど。

一般人も歩きまわる空間。ちらほら見える屋台達。不意に菊池さんがステージへと駆けて行く。一般人立ち入り禁止にも係わらず、ステージの上に乗ってお姉ちゃんに手を振る。流石、一般人じゃないだけはある。立ち入り禁止の札なんて関係ない。

お姉ちゃんまで掛けて行き、僕達も後に続く。ステージに上がると、人々の視線を感じずにはいられない。めっちゃ見られている。何が始まるのだろう？　みたいな視線が尽きない中、思わず僕が口を開く。

「それでは、始まりました！　第一回、お姉ちゃん争奪戦！」

僕が大きく口を開いたら、皆の視線が僕に集まる。一般人以上に、ステージの上にいる人達の視線が痛い。それにも係わらず、続きを話し出す僕。とある物を取り出して、皆に見せる。

「今回の優勝賞品はこちらです。お姉ちゃんの日常写真集～」

「ちょっと、ハル！？　何を言いだすの！？　というか、これは何！？」

「僕が日頃から集めていた、お姉ちゃんの写真です。普段の生活を分かりやすくまとめてみました。熟睡シーンやお食事シーンはもちろんのこと。お着替えシーンや入浴シーンまで満載です。自慢の一品となっております」

「最近は大人しいと思っていたら、そんな事をしていたの!?　もう駄目だよ。それを僕に渡しなさい！」
「これは僕のです。優勝賞品です。お姉ちゃんにはあげません」
手を伸ばすお姉ちゃんから写真集を守りつつ、続きを口にする。
「それでは、ゲーム内容を発表しましょう。じゃじゃじゃじゃじゃ～ん。今回のゲームはジェンガ～」
「めっちゃ地味!?」斎藤君が突っ込んでくる。
「駄目ですか？」
「もうちょい派手なのにしろよ……。いくらなんでも、このステージでジェンガって問題だろ？」
「それでは、エアホッケーなどはどうでしょう？」
「あー、それならまだマシだな」
「では、エアホッケーに決定です。参加したい人は手を上げて下さい」
「はい！　はい！　参加するわ！」
必死になりながら、手を上げるのは菊池さん。吉川君は腕を組んだまま反応しない。変だな。この人が参加しないとゲームが始まらないのだけど。何せ一番のお姉ちゃんファンはこの二人だもの。僕が吉川君に話しかける。
「参加しないのですか？」
「ミャラちゃんが納得していないのに、参加なんてできないよ」
「でも、お姉ちゃん。向こうで黒松さんにエアホッケーの準備を頼んでいますよ」
「……」
僕の言葉通り。この時には、既にお姉ちゃんも諦めている。それ

どころか、黒松さんにエアホッケーの準備を頼んでいる。結構、乗り気だ。お姉ちゃんの様子を見て、吉川君がおずおずと参加を希望する。

あー、良かった。これでゲームが始まりそうだ。エアホッケーの準備が整い。その頃には、遠くからでもゲームの進行具合がわかるように、カメラまで用意されて。かなり本格的になってきた。

っていうか、どう考えても本職の人達が紛れているあたりがなんともいえない。もしかしたら、これ……本当にテレビに流れるかも。ちょっと期待を抱きつつ、僕は司会者モードに入る。

見物人もごった返し、今や一つの大イベント。そんな中、始まるのは二人の戦い。菊池さんＶＳ吉川君。お姉ちゃんは優勝賞品を手に持ちながら、ニコニコと見学だ。楽しげに二人を見守っている。

二人の武器はマレットだ。マレットを使い、パックを跳ね返し、相手のゴールに狙いを定める。戦いの舞台はエアホッケー専用のテーブル。もちろん、特別に広いわけでもなく。一般にゲームセンターなどで使われているようなテーブルだ。

ヤル気満タンの菊池さんに対して、吉川君は躊躇気味。本心を言えば、お姉ちゃんの写真集なんて、喉から手が出る程に欲しいだろう。だけど、その気持ちを理性で抑えている。というのも、変に本気を出して、お姉ちゃんに引かれるのを恐れているからだ。それがない菊池さんは、ある意味で最強だと思う。

かと言って、吉川君が弱いわけでも、手を抜いているわけでもない。とりあえず、真面目。本気ではないにしろ、真面目に勝ちを狙っている。それは一つ言いかえれば、菊池さんに勝ち目がないとい

うこと。

ゲームが始まり、数秒も経たぬうちに、吉川君がゴールを決める。ムッと膨れる菊池さんの方面のテーブルの下から、パックが出てくる。続いて、二回戦。始まる間もなく、吉川君が点数を入れる。ちなみに、十点を先に取った方の勝ちなのだけど。このままじゃあ、五分も持たないな……。

司会者として難しい所、観客を喜ばせるにはどうしたらよいのだろう？　結構真面目に悩んでいたら、お隣から声が聞こえてくる。声の主は、恵梨さんだ。お姉ちゃんの手元にある写真集を覗き込みながら、顔を赤らめ、騒ぎ出す。

「上野さーん！　この写真集、ヤバいよー！」
「そうなの？」
「だって、これ見て……。これじゃあ、アダルト写真ですよ……」
「言われてみれば、そうかな？」
「えっと……恥ずかしくないのですか？」
「だって、もっと恥ずかしい写真を瑠菜に撮られる事があるから……」
「え……？　これよりも恥ずかしいって……」
「例えばね……」

お姉ちゃんが羞恥心の欠片もなく、もの凄い事を口にする。もうビックリなくらいにエロい話だ。周りの人達も聞き耳を立てずにはいられないだろう。そのタイミングで、パックがゴールに吸い込まれる。点数を入れたのは菊池さん。大喜びな菊池さんに対して、吉川君はテーブルに目を向け震えている。すぐに顔を上げ、炎上しながら菊池さんに怒鳴る。

「お前、ミャラちゃんに何してるんだよ!?」
「何って、楽しい事よ。別にいいでしょ？　契約なんだから……」
「契約だからって……」
「上野だって、納得しているのよ。それとも何？　羨ましいの？　フフッ、天才でも嫉妬するのね。こんな事で嫉妬だなんて、破廉恥な人」
「お前に言われたくない！」

吉川君がテーブルの下から出てきたパックを、テーブルに叩きつけてゲーム再開。先程までは冷静だった吉川君が変に熱くなっている。現在の点数は、吉川君が5点、菊池さんが1点。菊池さんに挽回の余地はあるのだろうか？

試合の事なんて気にしていない組がまたもや妙な事を話し出す。不意に口を出したのは、斎藤君。

「なぁ、どれだけヤバい写真なんだ？」
「信也は見ちゃダメ……」斎藤君を睨むのは恵梨さん。
「そんなにやべーのかよ。却って気になるじゃん」
「絶対に見ちゃダメ……」
「いや、まぁ、別にいいけどよ……」

お姉ちゃんに興味のない斎藤君はあっさりと諦める。お姉ちゃんが写真集を眺める中、写真集のとあるページから一枚の紙が滑り落ちる。地面に落ちた紙を拾ったのは斎藤君。その紙を見て、口を開く。

「何だ、こりゃ？　なになに……？　お姉ちゃん貸出券……？」
「ちょっと、信也……。それは何……？」

恵梨さんが斎藤君の持つ紙を取り上げる。そのまま朗読開始。

「丸一日、お姉ちゃんを貸し出します。お喋りに相談、デートに仕事。何でも使用可能です。お姉ちゃんが力の限り努力してくれます。夜這いもオーケー。お姉ちゃんを犯したい人にはもってこいの券です……」

「おい、ハル。これって使えんの？」と斎藤君。

「はい、もちろん。これは賞品のオマケです」

僕が言った直後に、パックがゴールに落ちる音。吉川君がまたもや点数を入れられている。今度は僕に向いて怒鳴りだす。

「君はミャラちゃんの家族じゃないのか！？」

「別にいいじゃないですか。お姉ちゃんも納得しているのですから」と僕。

「え？　僕、初耳だけど……」

小声で口を挟むお姉ちゃんを無視して、斎藤君が吉川君に爆弾発言だ。

「良かったじゃん。勝ったら、上野とデートできるんだぜ。お前らにしてみりゃ、最高だよな」

「……」黙り込む吉川君。

「安心してください！　夜這いもオーケーですから！」僕が自慢げに言ってのける。

「誰がっ！？」

吉川君が突っ込みを入れて、菊池さんがパックを吉川君のゴールに入れる。吉川君はどうにもこういう話に弱いみたいだ。何だか良い具合にバランスが取れてきた。しばらくは壮絶な戦いが続き、最

終決戦に近づく。吉川君が九点、菊池さんが七点の時の話だ。

調子が出てきた菊池さんが上手い具合にゴールを決める。丁度その頃に、妙なかおりが鼻をかすめる。気のせいかと思い、気にもしなかったけれど。それが後に起きる事件の発端となる。

九対八、菊池さんがやや不利ではあるが、先が読めない展開だ。結構、皆が本気で応援している。僕も司会を忘れて、観衆の一味になっている。さて、どちらが勝つかな？　と思った矢先に、菊池さんが得点を入れる。

吉川君……優勝賞品に対して、躊躇しているのか？　それとも、単にお疲れなだけか？　もうどちらにも後がない状況。ワクワクとしていたら、最後の戦いが始まった。吉川君がサーブを放ち、菊池さんが迎え撃つ。

最後はそれなりに長い試合になり、なかなか見ごたえのある戦いになった。スピンやカーブ、跳ね返りなどテクニックで攻める吉川君に対して。分かりやすいくらいに直線的なのは菊池さん。

終わりは突然にやってくる。吉川君のスピンを上手く跳ね返した菊池さん。その勢いで、パックが壁に当たり、跳ね返る。それがさらに跳ね返り、吉川君の元へと飛んで行く。気を抜いていたのか、吉川君が反応しきれずにゴール。寄って、菊池さんの勝利だ。

菊池さんが大喜びにはしゃぎ回る。天才にしては反応が鈍かったなと、微かに頭に思いながらも、結果を発表する僕。そんな中、吉川君がしゃがみ込む。悔しさで泣いているのだろうか？　なんて思ったのもつかの間、またもや妙なかおりが漂う。

吉川君の異変を感じ取ったお姉ちゃんが、吉川君に近づいた直後。思わぬ事態だ。吉川君から、ただならぬ魔力が放出される。あのにおいは吉川君の魔力漏れによるものだったのか!?　危険を感じ取った僕が、大声で皆に注意を投げかける。

「危険です！　吉川君から離れて下さい！」

僕が言った直後に、吉川君の周り……半径二メートル辺りに半球状の真っ白な壁が出現だ。吉川君の前後左右に上を含んだ半球……下はどうなっているんだろう？　もしかしたら、見えない場所で同様の事が起きているのかもしれない。

とにもかくにも、吉川君は半球の中心にいる形。というか、お姉ちゃんも中に入っちゃった。皆が驚き、半球から退く中。僕は警戒を怠らない。

数分間の沈黙が続き、それを破るのは執事さん。どこからともなく現れて、半球に近づく。

「坊っちゃん！」
「それに触っちゃダメです！」

執事さんが半球に触れた瞬間、跳ね返されるように飛んで行った。まぁ、あの執事さんだから死にはしないだろう。予想通りに、すぐに立ち直る執事さんに向いて、僕が説明する。

「これは高濃度のバリアーです。中が見えない程ですから、かなりの物です。下手に近づくと、怪我をしますよ」
「坊っちゃんー！」
「だから、近づかないでって……。まぁ、あなたなら死なないでし

ょうから、別に構いませんけど。普通の人は近づいちゃダメですよ。それにしても、こんなに高濃度のバリアーなんて見た事がありません。吉川君が張っているのでしょうが……。だとすれば、例の石が関係しているのでしょうね。さて、困りました……」

「坊っちゃんー！」

「あなたうるさい上に、鬱陶しいです。少しは静かにしてください」

諦めの悪い執事さんに注意して、携帯電話を取り出す。

「とにかく、わかる人に来てもらいましょう。未来さんが妥当でしょうか？」

一人で喋って、一人で電話する。だって、誰もが反応してくれない。静まりかえる、この空間。場違いなのは執事さんだけ。それにしても、お姉ちゃん……中に入っちゃったけど、大丈夫なのかな？

テレビ局〈吉川編〉

頭が痛い……。気分が悪い……。地面に膝をつきながら、俯き、喘いでいたら。誰かの声が聞こえてくる。

「吉川君？　大丈夫？」

返事ができない。目眩がする。顔を上げる事も出来ない。反応のないボクに近づいてくる人が言う。

「気分が悪いの……？」

ボクの前に誰かが座り込む。ゆっくりと手を伸ばして、ボクを抱きしめ、背をさすってくれる。すると、少し楽になる……。ボクもその人を抱きしめて、気分の悪さをなんとか誤魔化す。そんなボクに、その人が声を掛けてくる。

「大丈夫だよ。しばらくの我慢だからね……」
「怖い……」
「大丈夫だよ。一人じゃないからね……」
「うん……」

気持ちが悪い……。身体の中で、何かがうごめく気配。ボクの中に何かがいる。それが何なのかわからなくて、不可解が恐怖心を駆り立てる。冷や汗が止まらない。呼吸するのもままならなくて、身中が熱くなる。

そんな中、耳元で聞こえてくるのは静かな歌声。昔からある、聞きなれた子守唄。誰かの優しい歌声を聞いていたら、いくぶん気分

が楽になる。次第に、悪心も治まりを見せ、頭痛や目眩も引いていく。

体調が回復し、落ち着きを見せ始めた頃。ボクが周りを見回すと、真っ白な世界。目の前には、心配そうなミャラちゃんの姿。ミャラちゃんがボクに言う。

「気分はどう？　かなり落ち着いたように見えるけど……」
「うん……。ありがとう。もう大丈夫だから……」
「そう……？　無理はしないで。気分が悪かったら、僕に言ってね」
「うん……」

軽く頷いて、周りを見る。地面は変わらないけれど、他が真っ白だ。上も横も後ろも……どうなっているのだろう？　ボクがミャラちゃんに問いかける。

「ねぇ、ミャラちゃん……。これって……何だろう？」
「うーんっと……僕が見る限り。吉川君がバリアーを張っているんじゃないかと思うんだけど……」
「バリアー……」
「無意識なら、コントロールをする方法を覚えないと。このままじゃあ、周りの人達が危険だし。吉川君だって、不便でしょ？　魔力のコントロールは頭を使うって、聞いた事があるけど……」
「頭を……」

魔力のコントロール……。頭って、頭のどこだろう……？　目を瞑り、模索してみる。普段使わない場所だろうか？　そもそも、どういう意味の使うだろう？　考えるという行動とは別なのか？

いろいろと手探りで試してみる。混乱するボクの隣では、楽しそ

うなミャラちゃん。模索をするのなら、一人で試したいけれど。ミャラちゃんも外に出られないみたいだし、そういうわけにもいかないか。

嬉しいような、恥ずかしいような状況で、ミャラちゃんが口を開く。

「ゆっくりでいいから。慌てないで、考えて。僕には教えられないから……。役に立てなくて、ごめんね」

「いや、そんなことないよ……。ミャラちゃんがいてくれると、凄く心強いから」

「そうかな？　フフッ、そんな事を言われたら。嬉しいや」

照れ笑いを浮かべるミャラちゃんを見て、思わずこちらまで赤くなる。ミャラちゃんって、本当に可愛く笑うから。目を合わせるだけで、恥ずかしい。

しばらく時間を掛けて、試行錯誤していたら、何となく感じを掴めてくる。こうすれば、身体が白く輝いて……。こうして魔力を使用するのなら、多分こうすれば……。そこで変なスイッチを押してしまう。

あ、マズイ。と思った時には既に手遅れ。急に身体が軽くなって、水が体内に流れ込むような感覚を覚える。ミャラちゃんが不安げにボクを見上げる中、ボクの背後から鳥が羽ばたくような音が聞こえてくる。ボクよりも早く、ミャラちゃんが反応する。

「わぁ……綺麗」

「へっ！？　何が……」

後ろを振り向いたら、ボクの背に真っ白な翼。白鳥よりも白い。淡く輝く翼が二つ。何をどう間違えたら、こうなるのだろう？　天使じゃないのだから、止めてほしい。赤面するボクを余所に。ミャラちゃんが喜びながら、翼の一つに手を伸ばす。

「わぁ、凄い。魔力で作ったの？」

「え……？　いや、そんなつもりは……」

戸惑うボクの翼を撫で始めるミャラちゃん。両手を使って、ペタペタと右翼を触りだす。ミャラちゃんに翼を触られると……。妙に身体が火照ってきて、何とも言えない快感に溺れる。ボクが小さく丸まりながら、両腕で自分の身体を抱えていたら。突然、ゾッとするような刺激が身中に走る。思わず、声が出てしまう。

「ふわぁっ！？　やぁ！　あ……あぁ……」

「ん～、味はしないのか。美味しそうなのになぁ～」

ミャラちゃん……ボクの翼を食べようとしている。噛まないけれど、舐めたり、口でくわえたり。そんな事をされるなんて思ってもみなかった……。味見を止めないミャラちゃんに声を掛ける。

「ミャラちゃん……。それ……止めてぇ……」

「ふぇ？　わ、わー……ごめんなさい。美味しそうだったから、つい……」

ミャラちゃんが、やっとのことでボクに気付いてくれる。味見を止めて、ボクの前に回り込む。顔を真っ赤にしながら、ボクに話しかける。

「ご、ごめんなさい。もしかして、僕のネコ耳みたいに敏感だった

？」

「そう……みたい」

「そ、そんなつもりじゃなかったの」

必死に謝るミャラちゃんが視界に入る……。それにしても、身体が熱い。急に眠気が押し寄せてくる。先程までの疲れも溜まっていたのか……。ボクがうつらうつらしていたら、不意にミャラちゃんが手を伸ばしてくる。ボクを抱きしめながら、頭を撫でてくれる。

「吉川君、お疲れみたいだね。少し休んでから、また考えようよ。僕も急いでいないから、今はお休み」

テレビ局〈ハル編3〉

未来さん待ちです。遅いなぁ～。と思っていたら、のろまな師匠がやってくる。欠伸をしながら、ステージに出現するのは未来さん。僕が駆けより、未来さんの後頭部にドロップキックを入れた後。未来さんに状況説明だ。

「吉川君が高濃度のバリアーを張っちゃいました。お姉ちゃんはバリアーの中です。どうすればいいのですか？」

「何なの、こいつ！？　人の頭を思いっきり蹴った後に言う台詞がそれなの？　酷くない？　ねぇ、これってかなり酷くない？」

「それと、吉川君が食べた石について、何かわかった事はないのですか？　どうせ原因はそれなのでしょ？　さっさと教えてください。余りにじれったい事をしていると、読者も不愉快な気分になります」

「うわぁ、何あれ？　特大アイスクリーム？　凄いね、食べ放題だ」

「お前ら、会話しろよ」

最後は斎藤君に怒られる。未来さんが生返事をしながら、アイスクリームに目を向け話し出す。

「色々と調べて、結果は出ているけど。ちょっと時間がなくて来られなかったんだよね。今、説明するにも本人がアイスクリームの中だし。まぁ、一言で言うなら。この後、アイスクリームの中から無事に出て来られたら。今後、命に問題はないよ」

「出てこられなかったら？」と僕。

「そりゃあ、死んでるでしょ。説明いらずで、俺的には楽だね」

未来さんがきっぱりと言ってのける。この言葉、執事さんの耳に入らなくて正解だ。未だに、バリアーを突き破ろうとする執事さん

は気づいちゃいない。気付いた直後に、えらい大騒ぎになるだろう。想像するだけで、鬱陶しい。誰よりも呑気な未来さんが、またもや欠伸をしながら話し出す。

「まぁ、のんびり待とうよ。どうせこんなに強固なバリアーじゃあ、そう簡単には壊れないんだから。本人が魔力の使い方をマスターするまでは、放置プレイだね」

「本当に人事ですね」

「だって、異常が起きているのはあの子でしょ？　そりゃあ、その辺りに落ちている一般人なら、心配するけど。狭間を突っ切って、一人で脱出した能力なしの人間だよ。そんな天才が、こんな事で、コロッと逝くとも思えないんだけど」

「それは言えてますね。何だか焦りがなくなりました。それでは、ゆっくりと待ちましょう」

僕が言うと、未来さんが頷く。ついでに、ぼそりと小声で呟く。

「どちらかと言えば、心配なのはあいつだよね……」

「え？　誰です？」

「……あの中にいるもう一人」

「お姉ちゃんですか？　まぁ、確かに心配ですが。あんなに吉川君にベタベタしていたら、後でえらい目に遭いそうですよね」

「……」

答えてくれない未来さん。ボーっとしたまま、真っ白なバリアーを眺めている。不意に目を瞑り、目頭を押さえる。

「ねみぃ……」

「もう少し耐えて下さい」

こうして、十数分が経過する。そろそろ皆が状況に慣れだした頃、不意にバリアーに異変が起きる。一瞬、強く輝いた後に。ゆっくりとバリアーが薄れていく。少しバリアー内が見え始め、お姉ちゃんと吉川君の姿が目に留まる。

二人が手を握り合い、お喋りをしている。傍から見ると、ラブラブカップル。菊池さんがそれに気づいて、超お怒りになりながら。バリアーの間近まで行って、怒鳴りだす。向こうに声が通ったのか、二人が菊池さんに目を向ける。

お姉ちゃんが吉川君から手を離し、菊池さんに向いて笑顔で手を振りだす。すぐに菊池さんに笑顔が戻り、嬉しげに手を振りかえす。それを見ていた、吉川君はスッと二人から目を逸らして、つまらなそうな表情を浮かべる。

そしたら今度は、バリアーが真っ白に。先程と同様に、強固バリアーへと逆戻りだ。これはどう考えても、吉川君がわざとバリアーを張っているとしか思えない。きっと、既に魔力のコントロールは理解しているだろう。だけど、菊池さんにお姉ちゃんを近づけたくない。だから、こういう事をする。

飽きずに怒り出す菊池さんを眺めながら、僕が考える事は別の話。何か今……吉川君の背中に白い物が付いていた。あれは何？　変な生き物？　僕が首を傾げながら、未来さんに問いかける。

「未来さん。吉川君の背に付いていた物って……何ですか？」

「うーん、もう一体化しちゃったみたいだね。これじゃあ、切り離しはできないな」

「あの……危険な物ですか？」
「いや、危険というか……。『姫様』の世界では、そういう人達もいるから、問題はないと思うけど。こうなったら、切り離しはできないよ。まぁ、普通はこれで成功になるんだろうけど……」
「吉川君が食べた物って、『姫様』の世界の物なのですか？」
「まぁね、そうみたい」
「何なのです？」

眉をしかめる僕の前で、バリアーが透け始める。バリアー内に目を向けると、吉川君がお姉ちゃんを抱きしめながら、菊池さんの方を見てブイサイン。明らかに嫌がらせだ。菊池さんに背を向けるお姉ちゃんは何も気づいていないのか、吉川君を抱きしめながら、何かを囁いている。吉川君の応援でもしているのだろう。

ギャーギャーと騒ぎ出す菊池さん。その隣では、吉川君の無事を確認して涙する執事さん。騒がしい外を見ながら、吉川君はバリアーを消そうとしない。ほんの少しだけ残して、お姉ちゃんとイチャイチャしている。

僕が気になるのは、吉川君の背にある物。バリアーが薄くなり、ハッキリと目に映るようになった。だけど、あれって……翼に見える。白くて大きな翼が二つ。何て言うか、吉川君だからまったく違和感ないけれど。人によっては最悪だよね。僕の背に翼が生える所を想像すると、最高に恥ずかしいし、似合っていない。僕は何もなしで、空飛ぶのが一番だ。

一人で妄想する僕の隣では、未来さんが呆けている。しばらく経過し、あまりのじれったさに耐えきれなくなったのか。未来さんが緑色に輝く剣を取り出しながら、バリアーに近づく。剣の峰を使って、バリアーをぶち壊す。

「そろそろ話を進めようよ」
「あぁ、君に聞きたい事があるんだけど。これはどうにかならないの？」

吉川君が言った直後、背にある翼がバサバサと羽をうつ。わぁあ、凄い。何だか凄く幻想的だ。僕がちょろちょろと吉川君に近づく中、マッハで駆けて行くのは菊池さん。吉川君からお姉ちゃんをはぎ取って、プンプンと怒りだす。

お姉ちゃんを取られた吉川君は不満顔になるけれど、まずは未来さんの返事を待つ。何せ菊池さんとの争いを始めたら、話が進まないもの。未来さんが嫌気を感じて、帰ってしまったら。吉川君の翼は消えない。

未来さんが御返答だ。

「まだ慣れていないからね。慣れれば、落ち着かせることもできるよ。まぁ、君なら一日程度あれば十分じゃない？」
「そう……」答えるのは吉川君。
「じゃあ、生きて帰ってきた事だし。お祝いに調査結果を報告するよ」
「あぁ……頼むよ」

吉川君が言い、未来さんが頷く。そして、話が始まる。

「まず、君が食べてしまった物について。あれはね。『姫様』の世界にある物で、かなりレアな物なの。というのも、幻獣の卵なんだよね。何度か発見はされているけど、ほとんどが紛失していて。ハッキリとした事はわかっていないんだ。ただ、紛失する前に、大体

は白い生き物が目撃されているんだよね」
「……」
「あの世界で白い生き物と言えば、それはおそらく幻獣の類。だから、幻獣の卵だと言われているの。そこまでは理解できる？」
「うん……」

吉川君が軽く頷く。話を素直に受け止めてもらい、ご機嫌になった未来さんが続きを口にする。

「次に、君が幻獣の卵を食べてしまった事について。幻獣っていうのは、珍しい分、魔力の高い生き物が多い。そういった高い魔力の生き物を、弱い魔力の生き物が口にした場合。大体は、口に入れた直後にショック死する。まぁ、十人食べて九人は死ぬね。ただ、お互いの魔力の種類が合致した場合、上手くいけば死なずに済む事がある。といっても、死ぬ場合もあるよ。それは運だね」
「……」腕を組みながら真面目に話を聞きだす吉川君。
「さて、ここで君が食べた物は、あくまで卵だ。卵って事は、いずれ孵る。消化とかされないの？　って質問もあるだろうけど、物が物だからね。そういう事はないよ」
「孵る……？　まさか……」

蒼白する吉川君。そりゃ怖い。自分が食べた卵が、お腹の中で孵るって……。非常に怖い。想像するだけでも怖いのだから、吉川君自身はもの凄くビビっているだろう。未来さんが笑顔で説明する。

「そうそう、さっき孵ったね。まぁ、君も知っての通り。幻獣の卵に限らず、普通の獣や魔物でも。卵が孵る瞬間は、食べた人に負担が掛るそうだから。もの凄く辛いらしいの。これで死ぬ人も多いから。今の君は奇跡で生きているとしか思えないね。大したものだよ」
「その生き物は、僕の身体から……」

「分離は出来ないよ。まぁ、少し前まではできたかもしれないけれど。君が混ぜちゃったからね。幻獣と自分の魔力を一体化しちゃったから。君の背にある翼が語っているでしょ？　でも、安心して。もう苦しむ事もないし、死ぬ恐れもないよ」

「……」

「そうそう、話は変わるんだけど。余所の話でね。実は世の中には獣術師と呼ばれる人達がいて。君みたいに、卵を食べて、身体の中で孵して。生まれた獣や魔物を思い通りに操る人達がいるんだよね。そうすれば、普通は懐かない生き物でも、非常に懐いてくれるから。親みたいなものだものね。だから、あながち間違いじゃないの。君のした行動は」

「……」

「ただ、幻獣の卵ってのが問題だったわけ。幻獣の卵で成功した例は、伝説が一つだね。長ったらしいから人の名前は忘れたけど、幻獣の卵を食べて、上手くいった話。その人の中で、孵ったのは白い虎。ある戦争の時に、その白虎に乗って、戦場に出向き。たった一人で、千もの敵兵をなぎ倒したとか。まぁ、所詮は伝説だから。どこまで本当かわからないけれど」

「じゃあ……ボクの中で孵った生き物は何？」

眉をしかめる吉川君に、未来さんがヘラヘラ顔を向ける。

「以前の治癒力と、今の翼を見る限り。大体は想像が付いているよ。多分、ペガサスじゃないかな？　向こうで、ペガサスは癒しの女神と呼ばれているらしいから。まぁ、人嫌いで滅多に人前には出てこないけど。ペガサスの羽が非常に高値で売買されているよ。ほとんどの怪我や病気が治療できるんだって。他にも、夜中にペガサスが家に来て、病弱な子どもに触れたら健康になったとか。そういう話もあるみたいだし。もしかしたら、君にもそういう力が備わっているかも。試しに病人や怪我人を探して、触れてみなよ。まぁ、ただ

振れても意味ないだろうけど。魔力を使用しての治療になるだろうね」

「それはまた……ファンタジーだね」

「もっと慣れれば、魔力を使って、体内の生き物を外へ出力できるようになるらしいよ。さっきの伝説もそうだよね。といっても、その生き物にとっては、家も親も君になるから。出力をした生き物から逃げる事はできないよ。向こうも必死になって追いかけてくるし。君は君で生き物から離れ過ぎると落ち着かない気分になるだろうね。まぁ、基本的に凄く懐いてくれるそうだから、可愛いものだよ。獣術師の中には、超過保護になる人もいるそうだから。元々は、戦いの道具として、使われていたみたいだけど……。まぁ、今でもそっちが主流かな？」

「そう……」

深刻そうに腕を組む吉川君。不意に腕組を止めて、開き直る。

「ま、いっか」

「すっげー軽いノリだな……」驚くのは斎藤君。

「だって、考えても仕方ないよ。こういう時は、決然たる態度が必要だね」

「いや、そうかもしれねーけど……。すげーよ、お前……」

呆れ返る斎藤君を目にしながら、思わず僕も頷いてしまう。もっとうじうじ悩むのかと思っていたら。思いのほか、さっぱりしている。吉川君が未来さんに礼を言って、菊池さんと喧嘩を始める。お姉ちゃんはいつも通りに二人の仲裁係りだ。

気が付けば、未来さんが消えていた。今日は非常に眠そうだったから、帰ってお休みするのだろう。まぁ、何はともあれ、吉川君の命に別状はないらしいから。良かったということにしておこう。

テレビ局〈その5〉

何だか騒がしい一日になったな……。帰り道。行きと同様、最寄り駅までは皆で向かい。その後、上野達と別れた後。家に向かって足を進める。隣を歩く恵梨は楽しげだ。それにしても、めっちゃ疲れた。明日、学校があると考えるだけで億劫だ。俺が眠気に襲われていたら、不意に恵梨が話しかけてくる。

「今日は楽しかったね……」
「え？　あぁ……どちらかと言えば、騒がしかったな」
「でも、楽しかったよ……」
「まぁ、色々と見学できたし、面白かったな」

そこで話が途切れる。ふとプレゼントの事を思い出して、鞄から例の物を取り出す。それを恵梨に押し付けて、口を開く。

「そうそう、これ」
「え……？　何、これ……？」
「んー、何て事もないけど……」
「私が貰っていいの……？」
「まぁ、別に梨香に渡してもいいけど。せっかくお前がいるんだからな。それに今のうちに渡さないと忘れちまいそうだし……」

恵梨が首を傾げながら、袋を受け取る。中の物を取り出し、包みを開ける。首飾りを目にして、はしゃぎだす。

「わぁ、可愛い！　どうしたの、これ！？」
「携帯ストラップを買う時に、一緒に買ったんだよ。と言っても、俺の自腹だけどな。上野にばっか奢らせるわけにもいかないだろ？

もちろん、携帯ストラップを買った釣りは上野に返したからな。釣りは貰って、俺の財布から金出したとか。そんなせこいマネはしてないぞ」

「へっ……？　じゃあ、これは本当に信也が買ってくれたの……？」

「買ったって言ってるじゃん。でも、一つしか買えなかったけど……。金なかったし」

何ともぎこちない空気に、恥ずかしさが増していく。せっかく格好をつけても、数が足りてないんだよな……。梨香の分はなしだけど、あいつ怒るかな？　俺が気を病んでいたら、恵梨がとんでもない程に可愛い笑顔を向けてくる。

うっ……何か言われるのか？　思わず、硬直してしまう俺。恵梨は笑顔を絶やすことなく、俺を見つめてくる。しかし、何かを言うわけでもない。単に俺の顔を眺めるだけ。そんな状況に我慢できず、俺が恵梨に話しかける。

「な、何だよ？　言いたい事があるのなら言えよ」

「フフフフッ……」

「そんなにニコニコ笑いながら、俺を見んな」

「だって、嬉しくて……。信也がプレゼントをくれるなんて、思ってもみなかったから……。いつもは『俺は関係ない』って……。欲しい物があっても、自分で買えって……。それなのに……」

「あー、もう！　別にいいじゃんか！　大体、上野が変な事を言うから……」

「別に怒ってないんだから……。すごーく嬉しいだけ」

「あー、くだらね。くだらねー、くだらねー。たかがプレゼントに大袈裟なんだよ。ほらもう、それをさっさと仕舞えよ。梨香には内緒だからな」

「えへへへへへ……」

恵梨が嬉しそうな顔をしながら、首飾りの封を開ける。タグを取って、自分の首に付け、俺に問いかけてくる。

「似合ってる……？」

「……似合ってる」

超小声で言ってやる。すると、恵梨が俺に顔を近付けて。甘えるような表情で、もう一度問いかけてくる。

「似合ってる～？」

「似合ってる！　似合ってる！　もう、何なんだよ。お前は？」

俺は恵梨から目を逸らしながら、答える。恵梨は相変わらずな笑顔で話し続ける。

「信也は照れ屋さんだね……」

「うっせーよ。もうこの話は終わりだ。別の話しよーぜ、別の話」

「信也、こっち向いて……」

「何だよ？　しつけーぞ……」

俺が振り返った先には、恵梨の顔。俺達の唇が触れ合う。顔を離して、恵梨がお礼を言ってくる。

「ありがとう、信也」

「……」

これでもかという程に、赤面する俺。右手で自分の目を覆い隠して、首を横に振る。

「……っ」
「何か言ってよ……。どういたしまして、とか……。ね？」
「そういやぁ、見たいテレビがあったんだ。じゃあ、また明日な。夜道は気をつけろよ。バイバイ、さよなら。俺、先に行くからー」
そう言って、恵梨の顔を見ずにダッシュで帰路を走る。どうせそろそろ別れなきゃいけないんだ。少しくらい早くても問題ないだろ。
走って、走って、走って。こんなに走るのは久しぶりじゃないかと思う程に走って、止まった頃には息が切れ切れ。右手で顔を扇ぎながら、一人で呟く。
「あっつ～。もう秋も終わる季節なのに。あいつといると、あつさで死にそうだ……」

余所見

テレビ局に行った日の翌日の話。珍しく吉川が来ていない中、一時間目の授業が始まる。刻々と過ぎる時間。授業が順調に進んでいると、廊下から騒がしい声が聞こえてくる。不意に、教室に入ってくるのは吉川と執事。吉川の背にあった翼は消えている。未来が言っていたように、消し方を理解したらしい。

えらく不機嫌な表情を浮かべる吉川の後ろでは、執事が耳障りな程に騒いでいる。よくはわからないが、医者がどうたらこうたらといった話だ。その様子から察するに、吉川が体調不良にあるようだ。

執事を無視しながら、腕組をする吉川。執事がうるさくて、授業が聞こえない。そんな中、鼻にかすめるのは焼け焦げたような臭い。何か……焦げくさくね？　どこかで火事でも起きているのか、と思っていると、ついに吉川が打ち切れる。

バッと背中から、例の翼を出して。感情的に怒り出す吉川。

「うるさいな！　今は授業中だよ！　いい加減にしなよ！」
「坊っちゃんこそ、少しはご自分のお身体を……」
「うるさい！　あっちへ行けって、言ってるだろ！」

吉川が怒鳴り散らして、未だにお子様なハルの教科書をひったくり、それを執事に投げつける。ショックを受けるハルを無視して、筆箱まで取り上げ、同様に投げつける。執事はうまい具合に、それらをキャッチして、ロッカーの上に並べていく。

最後は、吉川がそっぽを向いてしまう。執事がため息をつき、と

にかく体調が悪ければ、すぐに医者だと言い張って。その場を立ち去る。不満げな吉川は膨れながら、窓の外を睨んでいる。背に付いている翼は消えない。あれ？　消し方を理解したんじゃなかったのか？

ハルがブツブツと文句を言いながら、空を舞っていた教科書達を連れ戻しに行く。それらを自分の机の上に戻した後、上野の服を引っ張る。吉川を頼む、という合図だろう。上野が頷いて、立ち上がり、吉川に近づく。

「吉川君……。どうしたの？」

「……」

黙り込む吉川。不意に上野に振りかえる。途端、二人を包み込む例のホワイトバリアー。吉川は便利な能力を手に入れたらしい。今度はお嬢様が怒りだし、何も知らない生徒達が色々と喋り出す。吉川の翼や特殊能力の話は、テレビにも出回っていないから。仰天している奴も少なくない。まぁ、噂程度は流れていたようだが……。

数分後に、バリアーが薄れて消え去る。そこには地面に座りながら、上野を抱きしめる吉川と。同様に地面に座りながら、右手で吉川の頭を撫でる上野。吉川の背にある翼は消えていた。本人が消したのだろう。上野が苦笑しながら、口を開く。

「そっか……それでビックリしちゃったんだね、吉川君。だから、あんなに執事さんに怒っちゃったんだね。だけど、無事で良かった。今度からは、横着しちゃダメだよ」

「……うん」

「よしよし、もう大丈夫だからね」

上野の言葉に、頷く吉川。話の内容が気になったのか、ハルが上野に問いかける。

「吉川君は何をしたの？」

「え？　あぁ……、今日ね。空を飛びながら、登校しようとしたんだって。空を飛ぶと、思った以上に速く動けるらしいから」

「まぁ、魔力を使用するからね」

「それで、ついでに本を読みながら、飛んでいたらしいの。そうしたら……」

上野が言葉を区切って、吉川の背中を撫で始める。

「間違って、電線に触れて、感電しちゃったんだって。本に集中していて、前を見ていなかったんだよね？」

教室中に静寂が訪れる。上野が一人で話を続ける。

「でも、無事で良かった。感電なんて、一つ間違えれば死んじゃうもの。怖いよね……」

直後、広がるのは爆笑の渦。お嬢様はもちろんの事、ハルやリョウまで笑っている。お嬢様が腹を抱えながら、笑い転げる中。リョウが口を開く。

「ヨッちゃん、漫画みたいやなぁ～」

「わかりますよ、わかります。ハルトも初めはそうでした。調子に乗って、走り回ったあげくに、車に跳ねられたり。電線にも引っ掛かった事があります。まぁ、ハルトの場合は、走るのが得意だったので。車に跳ねられる率の方が高かったですけど」

ハルが懐かしむように語りだし、お嬢様が吉川に向いてせせら笑う。

「電線に引っ掛かるなんて、鳩よりもおバカさんね」

「……」

吉川は答えない。自分でも理解しているのか、上野を抱きしめたまま停止している。ここから盛り上がるのは、感電の話。気がつきゃ、授業が終わっていた。そういえば、このクラスだけ非常に授業が遅れているようだけど……。最後はどうするつもりだろう？

実験〈ハル編〉

一つ気になる事がある。どうでもいいと言えば、どうでもいいけれど。妙に気になるから、実験を試みよう。

今は休み時間。必死になりながら、間違い探しをするお姉ちゃん。その両隣には、いつもの二人だ。今は喧嘩もせずに落ち着いている。そんな静寂を破るアイテムが僕の手の中に眠っている。

それを取り出して、吉川君に近づく。僕が手に持っているのは、お姉ちゃんと菊池さんの超お熱いキスシーンの写真。吉川君の服を引っ張ると、吉川君が眉をしかめながら問いかけてくる。

「何……？」

「これについて、ご感想を下さい」

写真を見せる。そしたら、吉川君からブラックオーラが。直後、吉川君の背に広がるのは白い翼。そんな事など気にもせずに、吉川君が菊池さんに写真を見せながら怒鳴りだす。

その後、長い喧嘩が始まって。しばらくは、放置しておく。かなり時間が経過して、二人の間が落ち着いた頃。別の休み時間にての話。吉川君が翼を仕舞い、吉川君の怒りが収まっている事を確認した後に、吉川君に近づく。

今度の写真は、お姉ちゃんのエロっぽい入浴写真。吉川君の服を引っ張ると、なぜか睨まれる。

「今度は何？」

「この写真について、どう思われますか？　ご感想を頂きたくて」

僕が写真を押しつけたら、吉川君が写真を目にして炎上する。直後、吉川君の背に翼が出現だ。うん、成る程。写真を見ながら、硬直する吉川君の隣で、検証結果を報告する。

「吉川君の翼は感情が高まった時に、制御ができなくなるのですね。感情が魔力に影響を与えるとは……。成る程、一つ勉強になりました」

「この写真……」

「あぁ、欲しければあげますよ。情報提供代です」

「いや、それは……」

「いらないのなら、返して下さい。後で、菊池さんに売り付けますから」

「それは駄目だ！」

「じゃあ、貰って下さいよ」

「いや、そういうわけには……」

「どっちですか？　ハッキリしない人ですね。男だったら、貰っておけばいいじゃないですか。どうしても紳士を気取りたかったら、後で燃やせばいいのですよ。僕は今の検証結果を元に、新たな魔力構成について考えたいのです。それじゃあ、それの処分は任せましたよ」

うろたえる吉川君を無視して、自分の席につく。新たな魔力の形について考えながら、片隅で吉川君について考える。きっとあの写真、持って帰って、捨てやしないだろう。もしも、僕が吉川君なら捨てない。絶対に捨てるものか。

ふと吉川君に目を向けると、お姉ちゃんと楽しげにお喋りをしていた。だけど、ちょっとぎこちない。この人って、本当にわかりや

すいよね。お姉ちゃんの事についてなら、菊池さんと同レベルだ。

心理探検〈その1〉（前書き）

未来はネタ提供係である。

心理探検〈その1〉

くだらない日々が過ぎ去る中。毎度の如く、上野が事件を引き起こす。というのも、お金欲しさに、バイトを探し。そのバイト先で、ヤクザ共に襲われ掛けたそうだ。

俺達は授業があったため、出られなかったが。それを神速の如く、助けに行ったのは吉川。その日は、学校に戻ることなく。翌日に二人で登校してきた。何やら、よくわからないが。一夜で上野とえらく親密になったらしい。二人の話を耳にして、お嬢様は不機嫌だ。が、上野が無事だったので、超暴走まではしなかった。

その日から、上野は吉川の家でバイトをする事になり。忙しい毎日を送っている。何せ、週に二日はお嬢様の所へ寝泊まり。他の二日は吉川の所でバイト……しかも、泊まり込み。こんな生活、俺なら絶対にお断りだ。疲労困憊で精神的にも疲れるだろう。それなのに、上野は平気どころか、むしろ溌剌とした表情で日々を過ごしている。

そんなある日、放課後の教室での話。夕暮れ時に係わらず、いつものメンバーで駄弁っていたら。急に未来が現れる。そして、ハルに一言だ。

「ねぇ、面白い物を作ったんだけど。これ、見てよ。ほら」
「何ですか？　これは？　パソコンですか？」
「違うよ。これは『心底暴露君一号』だよ」
「名前からして、ろくな物ではありませんね」

「そんなことないし。かなり良い物だよ。特に人との新密度を上げるにはもってこいの代物。どう？　遊んでみる？」
「いえ、結構です」

キッパリと答えるハルの隣で、吉川とリョウが口出しをする。

「面白そうだね」
「わいも仲間に入れてや～」
「二対一で、賛成側の勝ち。さぁ、プレイしてみたい人は、この中に入って」

未来が話をしながら、パソコンっぽい機械をポチポチと捜査したら。地面の一部が光り出す。光る地面に、すぐに飛びこむリョウを見ながら。吉川が未来に問いかける。

「ところで、対象者は？」
「中に入った人だよ。それにしても、君は楽でいいね。勝手に解決してくれるから、説明いらずだもの。後は皆に言っておいて。どうせミャラちゃんも連れて行くんでしょ？」
「当たり前だよ。ミャラちゃんがいないんじゃあ、意味がないもの」

そう言って、吉川が上野を誘いに行く。上野が来れば、お嬢様も来て。それを見たハルが諦め、参加して。リョウが恵梨と梨香まで参加させると、その反動で俺まで参加。松元だけは用があるからと、帰ってしまう。

参加しないのは、護衛達。黒松や玲。もちろん、吉川の執事なんて参加するわけがない。黒松が参加しない事に対して、上野は残念がっていたが。人数的にもかなり多いので、諦めがついたようだ。

未来は外から管理をするらしい。言わば、不参加者と類似した立場だ。皆が枠に入った事を確認してから、未来が口を開く。

「じゃあ、行くよ。枠から出ないでね。それでは、当てっこゲームスタート」

「え？　僕達は何をすれば……」

上野の質問が無視されて、辺り一面が揺らぎだす。不参加者達が消えさり、教室まで消えうせる。ここはどこだ？　ぐるりと一周見回すが、身に覚えのない場所だ。

見た感じ、女子の部屋。しかも、中心辺りで。丁度、半分に別れている。右と左は左右対称。部屋にしては、結滞だな……。俺が首を傾げていたら、吉川が一人で話し出す。

「ここは、このメンバー内の誰かの心の中だよ。今から始まるのは、各個人の心中を覗くという遊び。普段では知れない情報が手に入るかもね」

「おい、未来！　俺をここから出してくれー！」と騒ぎ回るのは俺。

「今更、あの人に頼んでも無理だよ。頼むのなら、始まる前に言わなくちゃ。あの人は不親切だから、チャンスは一度しかくれないよ」

吉川が言った直後、目の前にパソコンの画面が映る。そこには不満げな未来の顔。

「何か言った？　吉川君？」

「事実を言ったまでだよ。それとも、逃がしてくれるの？」

「無理だよ」

「ほらね」

吉川が俺に振りかえる。今度は俺が不満を吐き出す。

「何で先に説明してくれないんだよ！？」

「何でって……。吉川君はわかっていたみたいだから、皆に説明をしてくれるとばかりに……」

「ここは誰のスピリットかな？　ほら、ゲームなんだから。斎藤君も楽しみなよ」

未来の言葉を遮って、吉川が前向きな意見だ。今日の吉川はご機嫌もご機嫌。何せ上野から、この間のお詫びと謝罪。プラス、誕生日も追加されて。プレゼントを貰っていた。中身はブックカバーと本のしおり……。それほど高価でもない代物にも係わらず、吉川は有頂天。上野からのプレゼントは宝石よりも価値あるらしい。

ちなみに、お嬢様もプレゼントを貰っていた。誕生日には早いが、吉川にプレゼントをしたので。お嬢様にもプレゼントをしておかないと拗ねてしまう事を理解していたのだろう。こちらは可愛らしい髪留めセット。もちろん、お嬢様も有頂天になる。

そういうわけで、有頂天な天才に何を言っても無視されるだろう。俺は不安を抱えたまま、このゲームに参加するしかないのか……。あー、頼むから俺の心とか見たくない。自分で言うのも変だけど、すげー見たくない。別に嫌らしい事を考えているわけではないけど。もしも……という事があったら、もう最悪だ。

頭を抱える俺の前で、恵梨と梨香が騒ぎ出す。恵梨が部屋の左に寄って、口を開く。

「ここは……私の心ね」

「こっちは私ね。凄い！　やっぱり私達は正反対なんだ！」

梨香が右に行って、辺りを見回す。成る程、ここは二人の心中か。それなら、納得がいく。正反対の部屋を合わせて、恵梨香の心。何と言うか……そのまんまだな。素人でもわかりやすい心中だ。

不意に梨香が恵梨の心を眺めながら、口を開く。

「ねぇ、恵梨。そっちの机の上にある物は何？」

「え……？　机の上……？」

恵梨が振り返る先には、俺がプレゼントしたはずの首飾り。綺麗な箱に入って、飾られている。だけど、そこまでする程に立派な物でもないんだけど……。何せ俺が買えるレベルなのだから、実際の価格は三千円くらいだ。俺にしてみれば、高価だが……豪華な箱に入れる程ではない。

それにしても、やべー……。梨香にはプレゼントしていないから、心中にもないのだろう。今から買いに行くわけにもいかないし。それ以上に、金がない。

俺の財布は小銭だけだ。当分はそういった物は買えないだろう。くそっ……これならキーホルダーを二つ買った方が良かったかもしれない。あの時はつい……衝動買いをしてしまい……。

気まずさに耐えきれず、二人から視線を逸らしていたら。恵梨が何とか言い訳をする。

「えっと……この間、知り合いに貰ったの……」

「知り合い？　誰？」

「えーっと……梨香もよく知っている人……」

「えぇ？　誰なの？　そんな物をくれる知り合いなんていたっけ？」
「いるよ、いる……。梨香にしてみれば……ちょっと意外かも……」
「えー！？　誰なの！？　教えてよ、恵梨！」
「さぁ、次は誰！？　そろそろ次の人のへ行こうよ！」

恵梨が梨香から目を逸らし、液晶画面……未来に話し掛ける。俺は気恥ずかしさに、二人から離れて行く。お嬢様は首を傾げ、リョウは梨香の如く必死になりながら考えている。お前が考えてもしかたないだろ？

他のメンバー……上野にハル、吉川、未来は俺の行動を見て悟ったらしい。不意に吉川が俺の耳元で囁いてくれる。

「確かに、予想を裏切るね」
「うるせーよ。金持ちお坊ちゃまは黙ってろ」

牙をむいたところで勝てやしないが、余計な口出しは止めてほしい。マジで止めてほしい。梨香にでもバレてみろ。後がこえーよ。俺がドキドキしていたら、辺りの風景が揺らぎだす。景色が変われば少し安心だ。さっさと次の話へ飛んでくれ。

心理探検〈その2〉

次の景色……。ここは……何だ？　何かの施設か？　部屋の中心にピアノが一台。窓の外からは人々が騒ぐ声が聞こえてくる。部屋を見まわし、上野が首を傾げる。

「ここはどこだろう？　誰か知っている？」

「わかるで～。ここはわいの家や」

自慢げに語るリョウ。不意に吉川が問いかける。

「君は……孤児だったの？」

「ビックリな質問やな。ヨッちゃん……何でわかったん？」

リョウが仰天する中、吉川が壁に指を差す。そちらを見ると、子どもが描いただろう絵が一枚。たくさんの子どもがピアノを囲んで、楽しそうに笑っている。これで孤児だと認知できるだろうか？　俺には無理だ。

リョウがヘラヘラと笑いながら、話し出す。

「わいは物心が付いた頃から、『ひまわり園』って所で暮らしとってな。家族の多さが自慢やったわ。毎日の如く、園の子達に自慢しとったで。でも、よう考えたら、園の子達も同じ数だけ家族がいるねんな……」

笑っていいのか、ダメなのか……。微妙な話をするリョウが、そのまま口を動かす。

「それで、わいの一番のお気に部屋がここやねん。この部屋で木下先生っていう……女の先生がピアノを弾いてくれてな。わいは必死になって、歌ってたわ。他のスケジュールがあっても、それを無視してピアノにしがみついとったのを覚えてるで。木下先生は苦笑いしとったなぁ～」

「そうなんだ……。知らなかった……」と上野。

「そうやねん。この頃から、ミュージシャンを目指しとってん。絶対に有名になってやるって、意気込んでたで～。今にして思えば、わいの夢は叶ってんな。ミャラちゃんもグループに入ってくれるそうやし……」

「そんな事を言った覚えはないよ」

情に飲まれることなく上野がお断り宣言だ。不意にハルが口を開く。

「窓の外は豪い騒ぎですね」

「あれはライブ中やね。今のわいがいるのも、昔のこの部屋があるから。ってことやろうね。あー、皆は元気にしてるやろうか？　久しぶりに園に帰ってみよかな？」

「久しぶりって、余り帰らないのですか？」と梨香。

「そうやねん。寄付とかは毎日するねんけど、余り帰らへんねん」

「どれくらい帰ってないんだ？　一年とか？」と俺。

「園に立ち寄らんと、今日で……三日目くらいやね。ホンマは毎日帰りたいねんけど。二、三日に一回くらいしか……」

リョウが答えている最中にも係わらず、俺が未来に口を開く。

「次行くぞ。次」

風景が変化し、次は誰だ？　教会のような部屋。っていうか、教会じゃねーの？　誰の心中だよ？　眉をしかめる俺の隣でリョウが話し出す。

「豪い清楚な精神やね。誰やの？　ほら、手を上げて～」

手を上げる奴はいない……。が、反応を示す奴がいた。吉川だ。吉川が無表情に口を開く。

「ボク……だね」

「あなたの胸中なんて気味が悪いわ。早く次に行きましょう」とお嬢様。

「うるさいな。だったら、お前だけ先に行ってなよ」

「嫌よ。私は上野と一緒に移動するの」

こうして始まるのは、吉川とお嬢様の争い。それを止める事もなく、ハルが上野に問いかける。

「ねぇ、お姉ちゃん……。あの人……」

ハルが指差す所、部屋の奥に女神像。微笑んでいるのは、今の上野によく似た人物。だが……上野とは少し違う。誰だろうか？　上野がハルの頭を撫でる。

「あれはね……伊吹の大切な人。僕が話してもいいのかどうか……」

「うん……。じゃあ、吉川君に聞いてみる」

ハルが吉川に近づいて、同じ質問だ。

「あの……あれは誰ですか？」
「あぁ……。ボクの彼女……だった人。色々と事情があって……亡くなったんだよ」
「え……。もしかして、お姉ちゃんと一緒……？」
「ミャラちゃんも恋人を亡くしているそうだね。理由は異なるけど、結果は同じだよ」
「す、すみません……。変な質問をして……」
「別に構わないよ。こうなる事は想像できたし。ゲームを薦めたのはボクだから」

吉川とハルが駄弁る中、お嬢様は大人しくなっていた。心配そうに吉川の様子を窺っている。あれだけ喧嘩をしていても、どこかこいつらは仲がいい。いや、仲は悪いんだが、妙に気の合う所がある。不意にリョウが恐ろしい行動に出ようとする。

「要するに、ヨッちゃんは昔の彼女の事が忘れられへんねんな。よっしゃ！　わいが、あの女神像を壊してきたるわ。そしたら、少しは前向きになれるやろ？」
「止めろ！　お前は何を考えているんだよ！？」

女神像に近づこうとするリョウを吉川が押さえ込む。上野がすぐに未来に言う。

「次の人！　早く、お願い！」
「はいはい、了解だよ」

さて、次は誰なのか？　そう思っていたら、辺り一面が真っ暗だ。何もない、真の闇。こんなにどす黒い心中を抱えている奴は誰だ？

俺じゃない、俺じゃないからな。お嬢様が上野にしがみ付きながら、不安げな声を出す。

「これは……？」
「真っ暗だね。エラーかな？」
「いや……そうじゃないね」

深刻そうな表情で答えるのは未来。未来が目を向ける先にはハルの背中。もしかして……こいつか？　案の定、ハルが無表情に振り返る。

「ここは僕の……心ですね」
「ハル君……ブラックやね」

リョウが口を出す中、ハルが首を横に振る。

「違いますよ。正しくは、心がないのです。僕は元々……お札ですから。所詮は作り物……という事でしょう。人や動物のような生き物ではない。これを見て、ハッキリとしました」

子どもの姿でとんでもない事を言う奴だ。妙に落ち込んだ空気が辺りを包み込む。ハルは元気がない。まぁ、そりゃそうだろう。これで元気があったら、凄すぎる。不意に上野がハルに近づいて、ハルを抱き上げる。

「ハル、大丈夫だよ。心配しないで。ハルにはまだ……心がないのかもしれないけれど。人の二倍も三倍も経験を積んでいくうちに、きっとハルだけの心ができるから。ピノキオだって、初めは木の人形だったけど、最後は人間になったでしょ？　だから、安心していいよ」

「お姉ちゃん……」

ハルが目に涙を溜めて、上野にすがりつく。上野が優しくハルの背を撫でると、ハルが本気で泣き出した。未来が空笑顔を作りながら、口を開く。

「つ、次に行こうか？　次は誰かな～？」

心理探検〈その3〉

辺りが変化する。すぐに蒼白するのは俺。笑いそうになるくらいに分かりやすい光景を見て、思わず顔を両手で覆う。うわぁー、恥ずかしい。耳に入るのは上野の騒ぎ声。

「うわぁ！　誰!?　センスあり過ぎ！」

上野が喜ぶのも無理ないだろう。辺り一面が、ゲームの世界。あっちでは、あのゲーム。こっちでは、このゲーム。等身大のキャラクター人形が辺り一面にはびこっている。ゲーム機もちらほら。ゲーム好きには流行るだろうが。知らない奴が見たら、ただのオタクだ。

俺の隣で、リョウと吉川の会話が聞こえてくる。

「分かりやすいなぁ～。サイちゃん」
「うわぁ～、ボクは付いて行けないね」
「わいは結構行けるで。エロゲー専門やけど」
「何だか……ミャラちゃん。凄くはしゃいでいるね」
「そりゃあ、親がプログラマーやからね。ミャラちゃんはゲーム大好きやよ。サイちゃんとよくゲームの話をしてるやん。ヨッちゃんはゲームとかせえへんの?」
「ボクは……しないね。テレビゲームとかは一度もした事がないよ」
「一回してみい。案外にハマるよ」
「そんなに面白いの?」
「正直に言って、物によっては中毒性があるね。これはやった者にしかわからんわ～。ミャラちゃんにオススメとか聞いたらええねん。めっちゃ喜びながら、教えてくれると思うで」

「そう……。今度にでも聞いてみるよ」

二人の会話を聞きながら、首を左右に振って立ち上がる。未来に近づき、口を開く。

「次……。次に行ってくれ」

「駄目！　これが終わってから！」

遠くでゲームをプレイする上野が口を挟む。未来が俺に口を開く。

「だそうだよ」

「おい、上野。そのゲームを始めたら、後数十分は掛るだろ？　早く次へ行こうぜ」

「信也！　助けて！　これどうすればいいの！？」

振りかえる先には、梨香……。こいつまでゲームをしている。おいおい……。俺が近づき、操作方法を教えると喜びながらプレイし始めた。だから、次へ行こうぜ……。って、誰も聞いていないし……。ため息をつく俺の元へ歩いてくるのは、恵梨。

「良かったね……。大人気だよ……」

「良くねーよ。恥ずいし……。早く次へ行ってくれー」

俺が喚き散らす中、ここで凄く時間が取られる。なかなかゲームを止めないメンバーに、呆れ返るのは俺自身。俺以上に、こいつらの方がオタクじゃないか……。俺の心はオタクでも、ここまで酷くないぞ。

最後なんて、吉川とお嬢様がコントローラーを手に持ち。各自で異なるゲームを始めたら、話を聞かなくなる。二人共に、ゲームに

釘付け。次へ行くぞと言っても聞いてくれない。『これが終わってから』という答えだけが返ってくる始末。

切りがないから、未来に無理を言って、次へと進ませる。辺りの風景が揺らぎだし、吉川とお嬢様が騒ぎ出す。まだプレイ中だったから、続きをプレイしたいのだろうが。そうはさせるか。お前らは金持ちなんだから、後で各自ゲームを買ってくれ。

風景が変わり、一安心だ。不平を述べる奴らを無視して、辺りを見回す。大きな屋敷の入り口……。屋敷への道は一本で、遠くの方は見えなくなっている。夜ではないが、薄暗い空模様。ここは……。お嬢様が口を開く。

「私ね……」
「魔女の館だね」

即答するのは吉川。お嬢様が吉川を睨みつける中、リョウが館に指を差す。

「ほな、そろそろ入ろか？　立ち話も何やし」
「お前の家じゃねーんだぞ」と俺。
「まぁ、ええやん。はよ入ろうや」

リョウが遠慮の欠片も持たずに、ズカズカと一人で館に近づく。勝手に扉を開けて、中に入る。そして、リョウの姿が見えなくなる。っていうか……誰も付いて行ってないんだけど。何せ、ここはお嬢様の心中だろ？　何か……館に入った途端に、呪われそうで怖ぇーよ。

しばらくは、リョウ待ちだ。リョウに何か起きれば次へ行こう。リョウを放って次へ行こう。そんな悪意を抱えながら待ち構えていたら、急に肩を叩かれる。思わず、悲鳴を上げる俺。皆が仰天しながら俺を見て、俺は逃げ腰で後ろを振り返る。俺の後ろには……リョウ？

え……？　リョウは今……館へ入って行ったよな？　混乱する俺の前でリョウが口を開く。

「マジビビるわぁ～。せっかく驚かせようと思ったのに。サイちゃんの声で、こっちがビビったで。あー、心臓止まるかと思ったわ」
「な、何でリョウがいるんだよ？　お前、館に……」
「いや、館に入ったら。遠くの方に館が見えてな。近づいたら、あら不思議って奴や」
「ふ～ん」

吉川が話を聞いて、何かを理解する。不意にお嬢様に目を向け、問いかける。

「もしかして、まだ……？」
「……うん」
「ボクは別に構わないけど。黙っているのは、身体に毒だよ。精神にまで響いているじゃないか。早い所、話をしてみるんだね」
「わかっているわよ……」

しょんぼりとお嬢様が呟く。お嬢様の様子を見て、上野は心配げだ。お嬢様に近づいて、優しい声を投げかける。

「瑠菜……。どうしたの？　何か悩み事？　よかったら……僕が話

を聞くよ」
「うん……。また……後にするわ」
「そう……。いつでも相談してね……」

上野がお嬢様の頭を撫でると、お嬢様が上野にしがみ付く。上野の周りの人口密度が高くなっていく。先程からハルもベッタリ、お嬢様もベッタリ。まるで磁石のように上野には人が寄ってくる。

リョウが館の永続ループで遊ぶ中、次へと移動だ。残りは確か……。辺り一面が揺らぎだし、次に現れた風景は絶景。見渡す限りの桜花爛漫（おうからんまん）。わーお、お花見ができそうだ。俺の心を読むように、未来が騒ぎ出す。

「お花見だ、お花見だ！　こんな季節にお花見だよ！」
「うわぁ～、素敵」と梨香。
「何だか……凄く綺麗……」

恵梨が感動しながら、桜を見上げている。皆が騒ぎ回る中、上野が一人で悟りだす。

「あぁ……ここが僕の……」

その後、皆してお花見を開始だ。各自好き好きに別れて、桜を観賞する。俺と恵梨、梨香、リョウに、未来。が溜まりに溜まって、皆で駄弁る。不意に未来が口を開く。

「冬にお花見なんて、風流だよね～」
「本当になぁ～。それにしても、満開やね。あ～、ここにシートを

敷いて。食べ物があれば、完璧やねんけどなぁ～」とリョウ。
「それなら、用意しようか？　こっちから送ってあげるよ」
「マジかよ！？　本格花見ができるのか？」

俺が言ったら、未来が頷く。頷くと言っても、画面の中でだ。すぐにリョウが他のメンバーに声を掛けに行くが、他は他で楽しんでいるらしい。もしも、暇なら遊びに来るように、話だけはしておいたそうだ。

それから、しばらく時が経ち、未来がレジャーシートとお菓子や弁当を送ってくれる。わーお、妙に盛り上がってきた。不意に未来が今更な話をする。

「俺、参加できないじゃ～ん！」
「未来さんは……こちらへ来られないのですか？」と恵梨。
「行けない事もないけど……。俺が行ったら。何か起きた時に対処できる人がいないからね……。管理人は外にいるほうが何かと便利なんだよ」
「ミラッチ可哀そうになぁ～。しゃ～ないから、ミラッチの分も楽しんどくわ。後でいっぱい花見の話を聞かせたるで」とリョウ。
「それって、ただの嫌がらせじゃ～ん」

未来がケラケラ笑いだす。参加できないと言っておきながら、何気にご機嫌だ。何せ未来の手にはポテチとコーラ。こいつの大好物だと聞いている。だから、えらくご機嫌なのだろう。

それから、始まる花見パーティー。アルコールはもちろんなしだが、それでも大いにもりあがる。リョウが歌を歌って、未来から送ってもらったトランプなどで遊んで。花見っつーか……ただのパーティーになってきた。

心理探検〈吉川編〉（前書き）

何だか……無駄にイチャイチャしている。

バカ嬢はハル君と話をしていたから、今のミャラちゃんは一人で歩いている。腕を後ろで組みながら、楽しげに桜を見上げる仕草が愛らしい。ボクが彼女に見惚れていると、不意に彼女が振り返る。

「あれ……？　伊吹、どうしたの？　皆とお花見しなくていいの？　向こうは賑やかだよ」

「ミャラちゃんこそ……行かなくてもいいの？」

「僕はもう少し散歩しようかな？　だって、ここは……僕の心の中だから」

「そう……。ねぇ、ボクもご一緒していいかな？」

「うん、もちろん。お話をする相手がいると楽しいし」

彼女がボクに笑顔を向ける。あぁ……何て可愛いのだろう。高鳴る鼓動を押さえ込み、なるべく冷静を装うボク。感情的になると、また翼が出現してしまう。あれは本当に厄介だ。恥ずかしくて堪らない。

彼女の隣に並んで、話をしながら、観桜する。と言っても、ボクは殆ど花見なんてしていない。どちらかと言えば、彼女ばかりを見ている……。彼女は桜を眺めているから、ボクの視線には気づいていないだろう。ボクが彼女に話し掛ける。

「それにしても、綺麗だね」

「え……？　う、う～ん……。自分の心の中だから……。そういう事を言われると、素直に返事できないや」彼女がはにかみながら、ボクに向く。

「そうかな？　だけど、本当に綺麗だから。自信を持っていいと思

うよ」
「そ、そう……？　じゃあ……うん。綺麗だね」
遠慮勝ちに答える彼女に、ボクが素直な意見を述べる。
「ミャラちゃんは姿も可愛いけれど、心も綺麗なんだね」
すると、彼女の表情に変化が。真っ赤な顔をして、今度は首を横に振り始める。
「お、大袈裟だよ。もう、恥ずかしい事を言わないで」
「そんな事ないと思うけど……」
「伊吹なんて、教会だよ。凄く清らかな紳士様だね」
彼女の言葉を聞いて、ボクまで炎上してしまう。翼の制御もできず、赤っ恥全開だ。そんなボクを見て、彼女が笑いだす。ボクが翼を落ち着かせようとしていると、彼女が翼に手を伸ばす。
彼女の手が翼に触れた瞬間、全身に耐え様のない快感が駆け巡る。思わず、ボクの口から恥ずかしい声が漏れてしまう。すぐに仕返しをしてやろうと思い、悪戯好きの彼女に向いたら。遥か遠く。桜の木の後ろに隠れながら、こちらの様子を窺っていた。
そこから始まる追いかけっこ。結構、本気で逃げる彼女を、手加減しながら追いかける。逃げ惑う彼女は子どものように興奮している。隙を見つけては、ボクの翼に悪戯をしようと手を伸ばしてくる。そんな彼女がとても可愛くて、わざわざ隙を作っては、彼女の攻撃を待ち構える。
数分で彼女の体力が尽きて。桜木を背にして、二人で地面に座り

込む。ボクの隣で彼女が口を開く。

「あー、面白かった」

「ミャラちゃんは悪戯好きだよね。ボクの翼を見ると、すぐに触ろうとするもの」

「伊吹の翼は暖かくて触り心地が良いの。凄くスベスベしているの」

「そんな事を言っていると、ミャラちゃんのネコ耳をこねくりまわすよ」

「ネコ耳なんて触られたら。気持ち良過ぎて、眠っちゃうよ。帰りの荷物が増えるかも」

「ボクは一向に構わないよ。ミャラちゃんは軽いから」

「フフフッ……。もしも、僕をお持ち帰りしたら。夜中に僕が伊吹の翼をフニフニするね。きっと次の日は寝不足だよ」

「それは困るなぁ～」

二人で笑いながら、話を進める。途中で会話が尽きて、静かな時を過ごす。何も会話しなくても、彼女が隣にいると考えるだけで、心が安らぐ。不意に、彼女が口を開く。

「ねぇ、伊吹……知ってる？」

「何？」

「桜の下には死体が埋まっているんだって……」

「ミャラちゃん……怖い事を言うね」

返事を聞いて、彼女が微笑を浮かべる。そして、ゆっくりと語りだす。

「死体……というのは言い過ぎだけど。少し気持ちがわかるの。ここは僕の心の中だから……。よく考えると、そうだなって、納得できるんだよね」

「そう……。話してくれる？」
「うん……。僕はね……幼い頃、両親から冷たく扱われていて。中学で恋人に出会うまでは……本当に一人だったの。だから、この地面はそれまでの辛い過去が埋まっているのかな……って。あの時期は無駄じゃなかったと考えると嬉しいの。この桜の栄養になっているという事は、無駄じゃないよね？」
「もちろん。不用な扱いをするなんて、とんでもないよ。辛い時期を乗り越えた、ミャラちゃんにしか分からない事かもしれないけれど。決して、無駄ではないよ。その日があって、今のミャラちゃんがいるのだからね」

ボクが言うと、彼女がボクの肩に頭を乗せる。少し泣きそうな声で話し続ける。

「伊吹は優しいね。ちょっと……感動しちゃった」
「ミャラちゃん程じゃないと思うけど……」
「フフフッ、またまた。お世辞も上手いし」
「お世辞じゃないよ。ボクは本当の事を言っているの」
「フフフッ、じゃあ……続きを聞いて」
「うん、話して」

ボクの言葉に、彼女が微かに頷く。そして、小声で話し出す。

「桜の木を植えてくれたのは、きっと……恋人。桜の木は地面の栄養を使って、ぐんぐん育ってね。恋人が一生懸命に育ててくれたの。だけど、途中で亡くなってしまって。育てる人がいなくなって……。その頃は、大吹雪だっただろうな。この桜達が持ち堪えてくれてよかった」
「そうだね」
「その後、ハルが来ると同時に、ボクの心にも春が来たの。暖かく

なったから……桜が咲いて。桜が咲いたら、人が……皆が集まってきて。それがまた嬉しくて楽しくて。更に桜が元気に咲いて……。こんなにも幸せなのは、皆のおかげなんだな……って、凄く感謝しているの」

「そう……。だけど、ミャラちゃんもよく……寒い冬を乗り越えたね。それは本当に……辛かったでしょ？」

何の気なしに話したら、急に彼女が泣き始める。口元を両手で覆って、ポロポロと涙を落とす彼女。ボクは彼女の様子を見て、慌てふためく。不安げに彼女の涙を指で拭って、口を開く。

「ご、ごめん……。泣かすつもりはなかったんだ。傷ついたのなら、謝るよ……」

「ち……違うの。い、いきなり伊吹が思いもよらない事を言うから……。その言葉に……驚いちゃって。心に響く……って言うのかな？」

「感極まって……涙が出ちゃったの？」

「うん……」

小さく頷きながら、両手を使って涙を拭きとる彼女の姿に。思わず、手を伸ばしてしまう。

「おいで……」

と言って、彼女を強く抱きしめる。すると、彼女が涙声で躊躇いだす。

「そ、そんな事しないで……。涙が止まらなくなっちゃう」

「大丈夫だよ。いっぱい泣いてもいいから」

「い、伊吹の服が濡れちゃうよ……」

「構わないよ。ほら、背中をさすってあげる」
「も、もう……わざとでしょ……？」

彼女が不平を述べながら、ボクにしがみ付いて、泣き続ける。あぁ……可愛過ぎて堪らない。ボクの中で蓄積される彼女への思い。もう気持ちを押さえ込む余裕がなくなってきた。どうしてこんなにも可愛いのだろう？　これは一種の罪じゃないのか？

しばらくして、落ち着きを取り戻した彼女がボクの胸元で顔を上げる。目元を真っ赤にしながら、静かに微笑む。

「それにしても、伊吹はたまに驚くような事を言うよね。どうして、そんなにも心に響く言葉が出てくるの？」
「それはきっと……ボクも同じだったから。ミャラちゃんに出会うまでは……。楓を失った悲しみで、塞ぎ込んじゃって。毎日が辛くて、苦しくて。本を読むことで、現実から逃避して。生きているのか、死んでいるのか……」
「うん……。その気持ちは……よくわかる。暗闇よりも怖い世界。本当のどん底。息をするのも……苦しいよね」
「まさにそう……。人と話をする事を嫌って、人を避けて。こうやって、誰かと気持ちを語り合える日が来るなんて、考えもしなかった」
「そっか……。それなら、最近の伊吹は前向きだね。そういえば、初めの頃よりも話しやすくなったって、リョウが言っていたよ。僕はよく知らないけれど……。初めて会った頃は、もっと……ピリピリしていて、よそよそしかったけど。今は穏やかになったって」
「そ……そうだったかな？」

あの野郎、彼女に余計な事を吹き込みやがって……。不満を感じながらも、片隅では別の思考。だけど、確かに……そうかもしれな

い。彼女に係わる上で、仕方なしに他の生徒とも係わって。そうしているうちに、話せる人が増えたな……。

そうか……彼女以外の人と向き合う態度も好転しているのか。彼女ばかりを見つめていたから、まったく気付かなかった。無意識のうちに、心も態度も前向きになっていたんだな。これも彼女のおかげだ……。

ボクがぼんやりと黙想していたら、不意に彼女がボクの胸に顔を埋める。そして、甘えるような口ぶりで話し出す。

「ねぇ……伊吹」
「な……何？　どうか……した？」

彼女の雰囲気に魅了されて、爆音を立てるボクの心臓。同時に飛び出すのはいつもの翼。また悪戯されるのかと思ったけれど、そういう事はなく。別の方向から、攻めてくる彼女。ボクの胸元に顔を摺り寄せて、猫なで声で話し出す。

「あのね……。せっかくだから、お話聞いて」
「な、な、何の……話？」
「ちょっと……話しづらいお話」
「えっ！？」

いや……まさか……。それなら……どうしよう？　いや……もちろん、ボクは嬉しい。もの凄く嬉しいけど……。彼女はそれでいいのだろうか？　高鳴る心臓を押さえる事もできず、ボクが炎上していたら。彼女が勿体ぶりながら、口を開く。

「この状態のまま……お話してもいい？」

「も……もちろんだけど……」
「あのね……怖いの」
「え……？　怖い……？」首を傾げるボク。
「うん……。だから、ボクを強く抱きしめて。痛いくらいに抱きしめて」
「う、うん……」

彼女に言われた通りに行動する。何だか結滞だな。そう思っていたら、彼女が思いもよらぬ言葉を口にする。

「今から話す事は……僕が幼い頃に体験したお話。両親から受けていた待遇。何て言うのかな……虐待というと言葉が悪いけど……。嫌になったら……教えてね。ちょっと……人が聞いたら、気分を悪くするかもしれないから。僕も……最後まで話せる自信がないし。思い出すのは怖いの。だから、抱きしめて」
「うん、わかったよ。だけど……」
「話さなくてもいいのにね……。でも、話をしたいの。昔の思い出と向き合いたいの。怖い物見たさかな……？　自分から口で話そうと思ったのは、これで二回目……。一回目は以前の恋人に……。その後、ちょっとした事故で……瑠菜に少し話をしたけど、これ以上心配は掛けたくないから。伊吹なら……伊吹は何だか頼れるから。少しだけ……甘えさせて」
「うん、いいよ。ゆっくり話して。急がずに、無理をしないで。話せる事だけでいいから」
「うん……。ありがとう」

彼女が頷き、話を始める。ポツリポツリと言葉を区切りながら、ゆっくりと口にする内容は惨たらしい物。実際にそのような事が起こりえるのだろうかと、疑ってしまいそうなくらいに酷い話だ。途中で何度も体調を崩しながら、それでも必死に訴える彼女を強く抱

きしめる。

聞いているだけで、背筋が寒くなるような話。彼女はこんなにも辛い過去を背負っていたのか……。普段から幸せそうに笑顔が尽きない人だから、まさかこれほどの虐げを受けていたなんて考えもしなかった。長い話を終えた後、彼女が笑みを浮かべて、ボクから離れる。遠くで振り返り、ボクに微笑む。

「ありがとう。話をしたら、楽になるものだね。暗い話ばかりだったから……。伊吹は聞いていても、面白くなかったでしょ？」

「そんな事は……」

一本の桜木に近づき、彼女が桜木に手を当てる。

「この桜達……いつまで咲き続けるのかな？　できれば、これからもずっと……咲き続けてほしいな」

桜を見上げながら、何とも寂しげな表情を浮かべる彼女。そんな彼女の姿を見て、発作的に危機感を覚える。このままでは彼女はいずれボクの前から立ち去るだろうという危機感。彼女は一言もそのような事を話していないし、素振りも見せない。だけど、なぜか……ボクの直感がそう告げる。

大切な人が離れて行くという事の恐ろしさを知っているボクだから。一度、思い込むと、最悪の状況までを想像して。押さえ込めない程の、焦燥感が身体の中を駆け巡る。直後、頭の線がキレて、身体が反射的に反応する。

桜木に両手を当てて、花を見上げる彼女の背後に近づく。振りかえる彼女。ボクの様子を見て、首を傾げる。ボクを見上げながら、

少し不安げに話しかけてくる。

「伊吹……？　どうしたの？　顔色が悪いよ……。やっぱり僕の話が耳に痛かった？」

「……」

ボクは返事をすることなく、彼女の肩に手を置いて。彼女の顔に自分の顔を近付ける。触れ合う唇。止めようのない気持ち。ボクがバカ嬢のように、非常識なキスを始めたら。彼女が抵抗しようとする。そんな彼女の両腕を桜木に押さえつけて、嫌がる彼女に無理矢理にキスを続ける。

しばらくして、彼女が無抵抗になり、ボクに身を委ねだす。ボクの頭の中が白くなり、激情する思いを行動に移す。快楽に溺れるボク。愛しい彼女はボクの言いなり。あぁ、可愛い。可愛過ぎて、冷静ではいられない。

燃えるようなキスを繰り広げた後、気持ちが余って。右手で彼女の細い両手首を押さえ込み、左手を彼女の身体に伸ばしたら、流石に注意される。

「やぁ、駄目……。それは……駄目だよ」

「少しだけ……」

「む……向こうに皆がいるんだよ……。ダ……メ……」

抗する彼女がいじらしくて、話を聞かずに身体を撫で回したら。彼女がいたいけな声を上げる。その声を聞くと、高ぶる感情が激化し。自分ではどうしようもない程に、気持ちが荒れ狂う。

虚ろな感覚。駄目だとわかっていても、手が勝手に動いてしまう。

可憐な彼女は恥ずかしげな表情で、息絶え絶えに、ボクの名前を呼び続ける。止めないと……これ以上、手を出すのは。

頭の片隅に残っていた良識を引きずり出して、動きを止める。ボクの前では、腕を押さえ込まれて動けない彼女。顔を赤らめながら、目を細め。今にも泣きそうになりながら、必死に呼吸を整えている。ネコ耳はペタンと倒れて、尻尾は身体に密着している。

そんな彼女を見て、ふと思い出すのは、この間の出来事……。彼女がバイト先で柄の悪い男共に襲われた事件。あの時も、ネコ耳を倒して、尻尾を身体に密着させていた。脅えた時の彼女の防御姿勢なのだろうか？

冷静にならずとも、わかること。今、ボクがしている事は……あいつらがしていた事と同じだ。暴力で彼女を押さえ込んで、言いなりにさせようとしている。酷い話だ……。

急に熱気が冷めてしまい、次に感じるのは罪悪感と恐怖心。罪悪感は、自分が起こした行動について、彼女に詫びる気持ち。恐怖心は、今後……彼女に嫌われるだろうという予測から生じる物。

彼女の両手首を自由にして、代わりに彼女を抱きしめる。そして、何とか今の気持ちを口にする。

「ごめんなさい……」
「伊吹？　どうしたの？」
「お願いだから、嫌わないで……」
「嫌いじゃないよ。僕は伊吹の事……嫌いじゃないよ。それより、何か悩みでもあるの？　お話聞くから……ね？」

彼女は優しいから……酷い事をしても、怒らない。こんなボクの行動をそのまま受け止めてくれる。ボクが彼女から少し身体を離したら、彼女の心配げな表情が目に映る。

「伊吹……？　泣いているの……？」

泣いている……？　彼女の言葉を聞いて、指で目元を擦る。すると、指に水滴が付着する。あぁ……本当だ。人前でも涙は流れ落ちる物なのか……。楓が亡くなってしまった後に、一人で落ち込んでいた事はあるけれど。それ以外で、涙を流すなんて……前代未聞だ。

感情が爆発した事により、今のボクは放心状態。そんなボクに向かって、彼女が手を伸ばしてくる。ボクの涙を指で拭き取って、優しい言葉を投げかける。

「落ち着いた？」
「うん……」
「大丈夫？」
「うん……」

彼女の言葉に、ゆっくりと頷く。もう……話してしまおう。黙っていたら、発展しない。話したところで、発展しないだろうけれど。それでも、ボクの気持ちが本物だと知って欲しい。告白する事を決意したら、止め処なく涙がこぼれ落ちる。指で拭うのも面倒なので、そのまま彼女に口を開く。

「ねぇ、ミャラちゃん……」
「どうしたの？」
「ボクね……」
「うん……」

彼女がじっとボクを見上げる。ネコ耳をピンッと立てて、一言も聞き逃さないように。真剣にボクの話を聞こうとしてくれている。先程の脅えた表情は、もう見えない。今は……ボクよりも頼もしい。ボクがゆっくりと、それでもハッキリと気持ちを告げる。

「ボク……君に恋しているんだ」

「へ……？」

「好きで好きで堪らなくて。君を見ているだけで、幸せで。もちろん、君がボクの事をそういう風に見ていないのは知っている。知っているけれど……それでも、ボクは君の事が大好きなんだ。本当に……気持ちが制御できない程に……恋しているんだ」

「えっと……」

「返事はいいよ……。だけど、ボクは……君の事をそういう目で見ている。それだけでも覚えておいて。君はボクの事をただの友達と見ているだろうけど……。ボクはそうじゃないんだ……」

「……」

「ごめんね……。こんな話をして」

「いや……その……」

赤面しながら、混乱する彼女。それはそうだろう。彼女はボクの恋心に気づいていなかったし。仮に、気づいていたとしても、もっと軽い物だと考えていただろうから。両手を弄びながら、戸惑う彼女の額にキスをする。硬直してしまう彼女に背を向けて、この場を立ち去る。

心理探検〈その4〉

お花見もそろそろ終わりにしないと、今の時間は午後六時半。ここは昼のように明るいが、外はもう真っ暗だろう。皆が空気を読み出して、後片づけに掛かり始める。

そういえば、不参加組はどうしたのだろう？　そんな事を考えていると、リョウが俺に向いて口を開く。

「サイちゃん、残りのメンバーを呼んできて。そろそろ帰るよってにな」
「ほーい」

返事をして、不参加組を探しに行く事に。

桜が舞い散る中、早足でメンバーの名前を呼んでいたら。不意に返事が返ってくる。上野の声だろう。そちらに行くと、上野とハルにお嬢様。ハルとお嬢様は何やら元気がない。上野が苦笑しながら、俺に言う。

「ちょっとね……。色々とあったの……」
「色々じゃわかんねーよ」
「フフッ、そうだね……」
「まぁ、別にいいけどよ。それより、そろそろ帰るって。向こうに集合な」
「うん、わざわざありがとう」
「どいたま。じゃあ、後は吉川か……」

「え……？　伊吹は皆の所に行ったんじゃないの？」
「いや、来てないぜ」
「え……。じゃあ、どこに？」

上野と俺が押し黙り、そこから始まるのは吉川の捜索。あいつ…どこに行ったんだよ。面倒を掛けやがって。名前を呼んで、走り回って。最終的に、皆で捜索をしていたら。すげー所で発見される。

吉川の奴……大きな桜の木の枝の上に座って熟睡していた。こんな所にいちゃあ、わかるわけない。こいつを発見した未来は大した奴だ。何とか吉川を無理矢理に起こして、皆で元の教室に戻る。

うわーお、外は真っ暗。もう夜じゃん！　急に疲労を感じて、眠くなる俺の周りでは皆がお喋りしながら帰宅の準備。未来が皆に、『どうだった？　面白かった？』と聞きまわる中、慌しく教室に入ってくるのは吉川の執事。

蒼白気味の執事が眠そうなお坊ちゃまに近づき、耳元で何かを囁く。直後、吉川の眠気が吹っ飛んで。豪く真顔で執事とひそひそ話を始める。そして、吉川が皆に言う。

「ボクは急用ができたから、先に帰らせてもらうよ」

立ち去ろうとする吉川。その腕を掴んだのは、意外な人物。お嬢様だ……。何か物言いたげに、吉川を見つめる。お嬢様の心の内を悟ったのだろう。吉川が話を聞く前に、返事を返す。

「大丈夫だ、心配ない。ボクを誰だと思っている？」
「だけど……」
「何が起きようとも、問題ないよ。そんな気はさらさらないから」

「うん……」

不安げなお嬢様が吉川から手を離す。俺達を見ずに、颯爽と立ち去る吉川と執事。一体、何事なのか？　リョウがお嬢様に問いかける。

「なぁ、ヨッちゃんどうしたん？」

「……」

答えないお嬢様。不意に上野に振りかえる。

「ねぇ、上野。今日は私の所に来て」

「えぇ！？　急に言われても……。今日は家族で食事に行くつもりなんだけど……」

「お願い！　今日は……今日は先取り！　今度の分を今日使うから」

「そ、そんな事を言われても……」

「お願い、お願いだから……」

お嬢様が泣きそうな顔で訴える。上野は動揺しながら、困り顔だ。すぐにハルに目を向ける。

「ねぇ、ハル……食事は今度でもいい？」

「ん……んんっ……。わかった……。お母さんに言っておくー……」

「ごめんね。また予約を取るから」

「ふぇい……」

ちょっと納得がいかなさそうなハルから目を逸らし、上野がお嬢様を見る。

「わかったよ。瑠菜……。今日はそっちで泊まらせてもらうから」

「うん……。ありがとう」
「それじゃあ、そろそろ帰ろうか。もう七時になるし……」
皆が頷き、解散だ。各自、いつも通りに帰り始める。

心理探検〈梨香編〉

ベッドに寝転び、思いに耽る。

あのネックレス……恵梨は誤魔化していたけれど。私にはわかる。

きっと信也がプレゼントしたんだ。

だから、ハッキリ言えなかった。

恵梨はプレゼントした人の名を口にする事ができなかった。

信也は恵梨に気があるのかな？

どうして、私には何もなしなんだろう？

沸々と胸の奥から熱い炎が込み上げてくる。

どうして、あの子が？

運動神経は認めるけど、馬鹿で気が弱い自分。

信也はああいうタイプが苦手なはず。

それなのに、どうしてあの子だけプレゼントを貰っているの？

考えれば考える程に、苛立ちが募る。

止めよう……。考えないほうがいい。

頭を振って、別の事を考えるけれど。

やっぱり最後に行きつく先はどれも暗い思想。

あの子は嫌い……。

自分自身なのだけど、見ていて腹が立つ。

あの子は嫌い……。

それなのに、どうして信也はあの子を構うの？

いっその事……いなくなってしまえばいいのに。

黒い水が身体の中を走り回る。

吐きそうになる程に、気分が悪い。

あの子がいなくなれば……私が本物。

私が……真実。

クリスマス〈その1〉（前書き）

長い話をすっ飛ばす斎藤君。
こんなに短くまとめるなんて、むしろすげーよ。

クリスマス〈その1〉

皆の心の中を見物した日……その日から、吉川が学校に来なくなる。そして、数日後、吉川の両親が事故死した事が明らかになり。上野が吉川の家に向かう。

俺達は深く係わる事なく、二人が無事である事を祈るだけだ。無理矢理に押しかけたって、迷惑なだけだし。その上、両親が揃って事故死なんて……慰めの言葉も見当たらない。気まずい空気は苦手だから、後は上野に任せよう。

俺達が日常を過ごしていたら、上野が帰ってきて状況を説明してくれる。えらく複雑な話だった。難しい事を説明するのは、面倒だから。一言で口にすれば、三角関係か？　とにかく、吉川とその元カノ、更に吉川の弟が絡んでゴタゴタ話。

上野が言うには、事件は落ち着いたとの事だ。なら、大丈夫だろう。と思っていたら、いきなりの話が飛び出す。吉川がイギリスの祖母の元に行くらしい。一時的な訪問ではなくて、そちらで祖母と一緒に暮らすそうだ。

俺達は重要なテストがあるので、見送りもできずに。ここも全て上野に任せる。まぁ、俺達が行ったところで、吉川が喜ぶとは思えないし。上野さえいれば、あいつも納得するだろう。

と言っても、流石に上野だけでは余りにも寂しいので、とりあえずハルも付いて行くとのこと。っていうか、リョウもついていけばいいんじゃねーの？　とか思うけど、あいつがいたら、却って厄介か……。下手な事は口にしないほうがいいな。

こうしてイケメン天才お坊ちゃまがいなくなった。いきなり現れて、気づけばもういない。まるで、嵐のような奴だったな……。しかし、短期間であいつがしでかした出来事はかなり偉大だ。

なにせ上野の心を射止めたんだ。未来が教室に超ドエロビデオを持ってきたので、間違いないだろう。ミャラと吉川のイチャイチャビデオだ。しかも、吉川の奴は上野が男である事に当初から気づいていたらしく。空港では、見送りの前日に男の姿に戻ってしまった上野に、キスして去って行ったらしい。

その後の生活も飛びぬけて、ややこしい。イギリスへ行った吉川だが……。どうにも向こうで、ペガサスを出力できるようになったらしく……。しかも、そいつが可愛らしいミャラ似の幼女。ミャラだけじゃない、吉川にも似ている。未来の話によると、吉川の一番好む姿で現れてしまったらしくて。まるで、ミャラと吉川の子どもみたいなペガサスになっている。名前はツバサだそうだけど……。

おかげ様で、上野とお嬢様が大騒ぎして。教室中が大変に賑やかになっていた。まぁ、吉川がいなくなり落ち込んでいた上野が元気になったんだから、これで良かったのだろう。第三者である俺は、とにかく笑って済むなら、何でもいいという考えだ。

それから数日経過し、以前の日常が戻ってくる。上野は男に戻ったので、授業は受けずに。黒松とオセロで遊び続け、休み時間にはお嬢様とイチャイチャして。吉川がいなかった頃の懐かしい生活風景だ。

そんな風景も瞬く間に終わりを告げる。別に悪い事件が起きたわけではなく、冬休みに入ったからだ。学校とはしばらくお別れ。各自、のどかに年末を送ろうという事になる。

そして、クリスマスの前日。イブの日に、電話が掛ってくる。相手はリョウ。内容は、クリスマスに一人で寂しく部屋にこもるくらいだったら、皆で集まろう。というもの……。彼女なしの負け組の集まりみたいな話に聞こえるが……。俺は彼女……いるからな。

まぁ、別段に用事もなかったのでオーケーと言っておいた。集合は明日。学校の前にて、早朝九時に集合。そんなに早くから何をするのか？　面倒くさいなと思いながらも、早めに就寝する。

目が覚めると、今日はクリスマス。約束の時間に学校前に行くと、皆が集まっていた。メンバーは俺、恵梨、梨香。上野とお嬢様に、ハル。リョウに松元。皆の顔を眺めた後に、俺が口を開く。

「それで、これからどうするんだよ？」

「前に、ライブの打ち合わせをする時。でっかいビルに行ったやん？　あのビルの一階から三階でクリスマスパーティーがあるねん。まぁ、パーティー言うても。クリスマスっぽく飾り付けされた中に、いろんな店屋があるってだけやねんけど。毎年、それなりにおもろいから。わいも参加してんねん。そこに行こかって、話や」

「じゃあ、全部、リョウの奢りな」

「ええよ、ええよ。今回はカードが使えるやさかい、なんぼでも奢ったろ」

調子のいい返事をするリョウ。それなら、マジで奢ってもらおう。

遠慮なんてしない。相手がリョウなら尚更だ。以前なら遠慮していただろうけど、このキャラを理解すると。遠慮なんてする気がなくなる。

電車に乗って、皆で移動。駅を降り、歩いて行くと懐かしい風景だ。今回は喫茶店に寄らずに、ビルへと直行する。

目に入るビルの姿は以前と違って、クリスマスモード。妙に賑やかなビルの外見を眺めながら、中へと足を向ける。ビル内も同様にクリスマスの装飾がされ、人々が賑やかに買い物をしていた。

辺りを一瞥した後に、上野が口を開く。

「何だか賑やかだね。思っていた以上に、人が多いや」

「じゃあ、端から順に見て回りますか？」と松元。

「あ、ここにパンフレットがあるよ。右回りで行くなら……。まずは小物屋さんね」

梨香が言って、皆で動き出す。オシャレな小物屋の中に入り、好き好きに駄弁りながら商品を眺め出す。それにしても、値が張るなぁ……。クリスマスシーズンの上に、こんなに立派なビルの中だからか。俺には手が出せないレベルだ。

まぁ、基本的に欲しい物がないから関係ないのだが……。リョウや松元も同様らしい。商品を見ながら話はするが、買う気はないようだ。俺も二人の話に入り、商品を眺めていたら。不意に声が聞こえてくる。振りかえる先には、上野だ。商品の髪ゴムを手に取りながら、楽しげに口を開く。

「瑠菜に似合うのはどれかな～？」

「上野が選んで」答えるのは非常に嬉しげなお嬢様。
「こ・れ・か・な？　う～ん、良い感じ。あ、こっちにも良いのがあるな」

お嬢様の髪に髪ゴムを近付けながら、具合を調べる上野。傍から見ると、超ラブラブカップルに見える。吉川がいなくなった分、お嬢様に依存しだしたのか。最近の上野はお嬢様にベタベタだ。

更にその隣では、高校生バージョンのハルが真剣になりながら商品を選んでいる。こちらも上野達と同様に髪ゴムを見ているようだが……。ハルが使うわけではないだろうし、誰かにプレゼントするつもりだろうか？　ハルに近づき、声を掛けてみる。

「誰宛てのプレゼントだ？」
「え？　あぁ、僕の彼女ですよ。エアさんと言って、とても優秀な学者さんなのですけど。いつもお金がないためか、ファッションセンスには弱いのです。だから、たまには可愛い格好をさせてあげないと。せっかくの女の子なのに、可哀そうでしょ？」
「ええっと……お前の彼女なんて想像できない」
「失礼ですね。僕は彼女なしに見えますか？」
「いや、そういう意味じゃなくて……。お金とファッションセンスのない学者って……どんな奴だよ？」

滅茶苦茶に根暗な奴か？　ハルの話を聞く限りで想像すると。センスのない眼鏡をしていて、陰気臭い感じのイメージになってしまう。だけど、そのイメージでハルと組み合わせると、妙な違和感を覚える。

首を傾げる俺の前で、ハルが携帯を取り出し。写真を見せてくれる。それを見て、俺が騒ぎ出す。

「可愛いじゃん！　めっちゃ可愛いじゃん！」
「当たり前ですよ。僕の彼女ですよ」
「いや……もっと根暗そうな奴かと思っていたら。すげーメイド服が似合いそう……」
「エアさんもお父さんと同じく、ネコ耳が付いていますからね」
「えらくリアルだけど……。これは付け耳……だよな？」
「いえ、生まれつきだそうです。僕の所では、そういう方がちらほらいるのですよ。でも、却って可愛いでしょ？　学者で、ネコ耳で、白衣で、主語が『僕』なので。皆がサイコーだって、褒めてくれるのです」
「そらぁ……オタク層に人気だろうな」
「ただ……心配性なのが玉に瑕です。まぁ、家に帰らない僕が悪いのですけど。気を良くして帰った途端に、怒りの形相で現れるのは止めてほしいですね。心臓に悪いですし。足がすくんで、家に帰りたくなくなってしまいます」
「へー、大変なんだな……」

俺達が駄弁っていたら、皆の声が聞こえてくる。もう買い物を終えたらしい。すぐにハルも品物を選んで、レジに向かう。それから皆で次の店に足を向ける。ゲーム屋とかはないのか？　とか考える俺は場違いなのだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7048p/

彼女のカ・タ・チ☆

2011年12月14日01時53分発行